史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅴ

— 第40・41次発掘調査 —

2020
鳥取市教育委員会

鳥取市文化財調査報告書　第30集
史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅴ
二〇二〇　鳥取市教育委員会

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平
発掘調査報告書Ⅴ

― 第40・41次発掘調査 ―

2020

鳥取市教育委員会

序

鳥取市の中心市街地にそびえる久松山に所在する鳥取城跡は、鳥取藩32万石の政庁として栄えた面影を今に伝える貴重な史跡であり、先人たちの努力により、今日までその様相が伝えられてきました。

文化財は、地域の財産として後世に伝えるため保護・保存に努め積極的な活動を図って行かなければなりません。鳥取市では、現在『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画』を策定し、関係各機関・専門家の指導を得て長期的な保存修理事業に取り組んでいます。今回の報告は、その一環である大手登城路復元整備計画に基づき、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成28・29年度に実施した史跡鳥取城跡第40・41次発掘調査の記録です。

本報告書が、私たち郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

令和２年３月

鳥取市教育委員会

教育長　尾　室　高　志

例　言

1　本書は、鳥取市東町２丁目・円護寺・栗谷町・百谷・小西谷に所在する国指定史跡鳥取城跡附太閤ヶ平において実施した、国庫補助事業「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平復元保存修理事業」に伴う発掘調査報告書である。
2　本書は、平成28・29年度に実施した鳥取城保存修理事業に伴う発掘調査報告書である。
3　本書で報告する発掘調査は、鳥取城跡復元整備計画に伴い、鳥取市教育委員会文化財課が実施した。
4　遺構写真及び遺物写真は、調査担当者が撮影した。
5　検出遺構の三次元測量・図化・オルソ図作成については、株式会社四航コンサルタントに委託した。
6　本書の執筆は、鳥取市教育委員会文化財課が行った。
7　本書で使用した標高は、東京湾平均海面高を基とし、方位は、日本測地系座標Ⅴ系の座標北を用いた。
8　出土遺物ならびに図面類は、鳥取市教育委員会文化財課で保管している。
9　本報告書において使用する地形図は、鳥取市作成の「鳥取市都市計画図」を使用し、史跡指定地範囲については鳥取市教育委員会作成の地形図を使用した。
10　発掘調査及び出土品の整理に際しては、下記の機関ならびに個人からご指導・ご教示をいただいた。記して深甚の謝意を表する。

文化庁記念物課、鳥取県教育委員会、鳥取県立博物館、鳥取市歴史博物館、鳥取市埋蔵文化財センター、
北垣聰一郎、田中哲雄、麓和善、浅川滋男、中橋文夫、谷本進、大嶋陽一、神谷佳友、
鳥取県立鳥取西高等学校、(公)鳥取市公園・スポーツ施設協会(順不同、敬称略)

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の経緯と目的

1　整備に至る経緯……1
2　調査体制……2
3　指定の詳細……3
4　保存整備計画の概要……4
（1）事業の目的……4
（2）事業の方針……4
5　大手登城路復元整備計画の概要……4
（1）経緯……4
（2）大手登城路の現状……4
（3）復元整備の目的……6
（4）復元整備の基本方針……6
6　鳥取城跡における石垣保存修理事業……6
7　既往の発掘調査……10
8　発掘調査報告書について……14

第Ⅱ章　立地と環境

1　位置と地形……15
2　歴史……15
（1）土造りの鳥取城と太閤ヶ平(中世鳥取城)……15
①沿革……15
②羽柴秀吉の鳥取侵攻……16
③秀吉本陣の構造……18
（2）石造りの鳥取城(近世城郭)……18
①関ケ原の合戦以前……18
②17世紀……19
③18世紀……20
④19世紀……21
（3）近代以降の鳥取城……21
3　鳥取城の姿……23

第Ⅲ章　調査の方法

1　調査区の設定……27
（1）第40次発掘調査……27
（2）第41次発掘調査……29
2　名称及び出土遺物について……29
3　基本層序……30

第Ⅳ章　調査結果

第40次発掘調査
1　概要……35
第41次発掘調査
1　概要……37
2　石垣修理……38
3　発掘調査……38
①区
（1）斜面……38
①斜面……38
②中央石垣……38
③遺物……38
（2）①区トレンチ 1(Tr 1)……49
①土層……49
②遺物……53
（3）①区トレンチ 2(Tr 2)……54
①土層……54
②トレンチ2内石垣……54
③遺物……56
（4）①区馬場……56
①馬場面……56
②馬場溝……56
③馬場内桶……59
④遺物……61
②区
（1）幕末期路盤面……63
①路盤面……63
②遺物……63
③区
（1）第40次発掘調査第2調査区遺構面検出中 73
①掘削中出土遺物……73
②石垣上出土遺物……73
（2）第40次発掘調査第2調査区トレンチ……73
①遺構……73
②遺物……73
（3）第41次発掘調査③区遺構面検出中……77
①遺物……77
（4）大溝……79
①遺構……79

②遺物 …… 86
（5）桝および大溝吐水部 …… 120
①遺構 …… 120
②土層堆積状況 …… 120
③遺物 …… 120
（6）瓦廃棄孔 …… 142
（7）溝状遺構 …… 142
（8）旧桝・旧溝 …… 142
①概要 …… 142
②旧溝 …… 143
③旧桝 …… 143
④遺物 …… 147
（9）番所 …… 147
①概要 …… 147
②幕末期の番所 …… 153
③旧番所１ …… 153
④旧番所２ …… 153
⑤遺物 …… 153
（10）堀沿い石垣 …… 158

第Ⅴ章　まとめ

1　復元整備範囲の歴史的変遷 …… 169
2　馬場の成り立ち …… 173
3　番所及び大溝の変遷 …… 175
（1）幕末期番所 …… 175
（2）旧番所と旧桝、旧溝 …… 179
4　瓦について …… 179

挿　図　目　次

第１図　史跡鳥取城跡附太閤ヶ平史跡指定範囲図 …… 3
第２図　復元整備イメージと現況写真図 …… 5
第３図　石垣修復箇所 …… 9
第４図　既往の発掘調査位置（第41次調査まで）13
第５図　太閤ヶ平周辺縄張り図 …… 16
第６図　因幡鳥取城籠城布陣図 …… 17
第７図　鳥取城攻め陣城分布図 …… 17
第８図　外神砦縄張り図 …… 18
第９図　因州鳥取之城之図（部分）…… 19
第10図　因幡国鳥取絵図（部分）…… 19
第11図　鳥取城下之図（部分）…… 19
第12図　鳥取城修覆願絵図 …… 20
第13図　鳥取城修覆願絵図（部分）…… 20
第14図　大手登城路周辺調査位置図 …… 28
第15図①　調査区全体平面図 …… 31・32
第15図②　調査区オルソ図 …… 33・34
第16図　第40・41次発掘調査範囲図 …… 36
第17図　①区平面実測図 …… 39・40
第18図　①区平面オルソ図 …… 41・42
第19図　石垣斜面立面図 …… 43・44
第20図　①区斜面出土遺物実測図１ …… 45
第21図　②斜面出土遺物実測図２ …… 46
第22図　①区斜面出土遺物実測図３ …… 47
第23図　①区斜面出土遺物実測図４ …… 48
第24図　①区斜面出土遺物実測図５ …… 49
第25図　①区トレンチ１・２土層断面図 …… 50
第26図　①区トレンチ１出土遺物実測図１ …… 51
第27図　①区トレンチ１出土遺物実測図２ …… 52
第28図　①区トレンチ１出土遺物実測図３ …… 53
第29図　中央石垣下土層図 …… 54
第30図　①区トレンチ２出土遺物実測図 …… 55
第31図　馬場溝平面・立面図 …… 57
第32図　馬場溝平面・立面オルソ図 …… 58
第33図　馬場内桶平面・土層図 …… 59
第34図　馬場出土遺物実測図１ …… 60
第35図　馬場出土遺物実測図２ …… 61
第36図　馬場出土遺物実測図３ …… 62
第37図　②区平面・オルソ図 …… 64
第38図　②区出土遺物実測図１ …… 65
第39図　②区出土遺物実測図２ …… 66
第40図　②区出土遺物実測図３ …… 67
第41図　②区出土遺物実測図４ …… 68
第42図　②区出土遺物実測図５ …… 69

第43図　②区出土遺物実測図６……70
第44図　②区出土遺物実測図７……71
第45図　②区出土遺物実測図８……72
第46図　③区平面実測図……74
第47図　③区平面オルソ図……75
第48図　第40次調査第２調査区掘削中出土遺物実測図……76
第49図　第40次調査第２調査区石垣上出土遺物実測図……77
第50図　第40次調査第２調査区トレンチ平面・土層・出土遺物実測図……77
第51図　③区掘削中出土遺物実測図１……78
第52図　③区掘削中出土遺物実測図……79
第53図　大溝１平面・立面実測図……80
第54図　大溝１平面・立面オルソ図……81
第55図　大溝２平面・立面実測図……82
第56図　大溝２平面・立面オルソ図……83
第57図　大溝３平面・立面実測図……84
第58図　大溝３平面・立面オルソ図……85
第59図　大溝３・大腰掛周辺土層図……86
第60図　大溝出土遺物実測図１……87
第61図　大溝出土遺物実測図２……88
第62図　大溝出土遺物実測図３……89
第63図　大溝出土遺物実測図４……90
第64図　大溝出土遺物実測図５……91
第65図　大溝出土遺物実測図６……92
第66図　大溝出土遺物実測図７……93
第67図　大溝出土遺物実測図８……94
第68図　大溝出土遺物実測図９……95
第69図　大溝出土遺物実測図10……96
第70図　大溝出土遺物実測図11……97
第71図　大溝出土遺物実測図12……98
第72図　大溝出土遺物実測図13……99
第73図　大溝出土遺物実測図14……100
第74図　大溝出土遺物実測図15……101
第75図　大溝出土遺物実測図16……102
第76図　大溝出土遺物実測図17……103
第77図　大溝出土遺物実測図18……104
第78図　大溝出土遺物実測図19……105
第79図　大溝出土遺物実測図20……106
第80図　大溝出土遺物実測図21……107
第81図　大溝出土遺物実測図22……108
第82図　大溝出土遺物実測図23……109
第83図　大溝出土遺物実測図24……110
第84図　大溝出土遺物実測図25……111
第85図　大溝出土遺物実測図26……112
第86図　大溝出土遺物実測図27……113
第87図　大溝出土遺物実測図28……114
第88図　大溝出土遺物実測図29……115
第89図　大溝出土遺物実測図30……116
第90図　大溝出土遺物実測図31……117
第91図　大溝出土遺物実測図32……118
第92図　大溝出土遺物実測図33……119
第93図　桝平面・立面実測図……121
第94図　桝平面・立面オルソ図……122
第95図　桝土層断面図・堆積状況……123
第96図　桝出土遺物実測図１……124
第97図　桝出土遺物実測図２……125
第98図　桝出土遺物実測図３……126
第99図　桝出土遺物実測図４……127
第100図　桝出土遺物実測図５……128
第101図　桝出土遺物実測図６……129
第102図　桝出土遺物実測図７……130
第103図　桝出土遺物実測図８……131
第104図　桝出土遺物実測図９……132
第105図　桝出土遺物実測図10……133
第106図　桝出土遺物実測図11……134
第107図　桝出土遺物実測図12……135
第108図　桝出土遺物実測図13……136
第109図　桝出土遺物実測図14……137
第110図　桝出土遺物実測図15……138
第111図　桝出土遺物実測図16……139
第112図　桝出土遺物実測図17……140
第113図　桝出土遺物実測図18……141
第114図　瓦廃棄穴・溝状遺構出土遺物実測図　142
第115図　旧桝・旧溝平面・立面実測図……144
第116図　旧桝・旧溝平面・立面オルソ図……145
第117図　大溝旧流路平面・立面実測・オルソ図……146
第118図　旧溝・旧桝土層断面図……147
第119図　旧溝・旧桝出土遺物実測図１……148
第120図　旧溝・旧桝出土遺物実測図２……149
第121図　番所周辺平面図……150
第122図　番所平面オルソ図……151

第123図 番所推定位置……152
第124図 番所周辺出土遺物実測図1……154
第125図 番所周辺出土遺物実測図2……155
第126図 番所周辺出土遺物実測図3……156
第127図 番所周辺出土遺物実測図4……157
第128図 番所周辺出土遺物実測図5……158
第129図 堀沿い石垣立面図・オルソ図1……159
第130図 堀沿い石垣立面図・オルソ図2……160
第131図 遺物計測方法……168
第132図 因州鳥取之城之図(部分)……170
第133図 因幡国鳥取絵図(部分)……170
第134図 因幡国鳥取城廻絵図(部分)……170
第135図 鳥取城下之図(部分)……170
第136図 鳥取城破損御修覆願絵図(部分)……170
第137図 鳥取城修覆願絵図(部分)……170
第138図 登城路変遷図……171
第139図 馬場周辺土層堆積状況……174
第140図 馬場周辺状況……175
第141図 御番所周辺状況……176
第142図 西坂下御門脇番所の状況……176
第143図 番所推定位置1(幕末期番所)……177
第144図 番所推定位置2(旧番所)……178
第145図 瓦一覧1……181
第146図 瓦一覧2……182
第147図 瓦一覧3……183
第148図 瓦一覧4……184
第149図 瓦一覧5……185
第150図 瓦一覧6……186
第151図 瓦一覧7……187
第152図 瓦一覧8……188
第153図 瓦一覧9……189
第154図 瓦一覧10……190
第155図 瓦一覧11……191

図 版 目 次

図版1
①区全景(南西から)
①区全景(北西から)
①区全景(南東から)
①区トレンチ1全景(北西から)
図版2
①区トレンチ1上層土層(北西から)
①区トレンチ1中層土層(北西から)
①区トレンチ1下層土層(北西から)
①区トレンチ2全景(南西から)
①区トレンチ2全景(西から)
①区トレンチ2土層(北西から)
①区トレンチ2石垣(南から)
図版3
②区全景(北から)
①区馬場内桶(北西から)
①区馬場溝(北西から)
②区全景(南西から)
図版4
大溝1・2全景(西から)
大溝2東側側壁1(西から)
大溝2東側側壁2(西から)
大溝2西側側壁(東から)
図版5
大溝分岐2(北から)
大溝3南東側壁1(北西から)
大溝3南東側壁2(北西から)
大溝3北西側壁1(南東から)
大溝3北西側壁および旧桝吐水部(南東から)
大溝3北西側壁3および分岐2(南から)
大溝3全景(北東から)
図版6
桝全景(北から)
桝北東側壁および取水部(南西から)
桝南東側壁(北西から)
桝南西側壁および吐水部(北東から)
桝内堆積状況(北西から)

図版7

吐水部石垣内暗渠蓋石検出状況1（南から）
吐水部石垣内暗渠蓋石検出状況2（北から）
吐水部石垣内暗渠出口付近1（南西から）
吐水部石垣内暗渠出口付近2（南西から）

図版8

大溝全景（南西から）
旧桝・旧溝全景（南東から）

図版9

旧桝内巻石垣（南東から）
旧溝全景（北西から）
旧桝内巻石垣および取水部（南西から）
旧桝内堆積状況（北西から）

図版10

旧桝内堆積状況（北東から）
旧溝蓋石検出状況（南西から）
旧溝北東側壁1（南西から）
旧溝北東石垣2（南西から）
旧溝南西側壁1（北東から）
旧溝南西側壁2（北東から）
旧桝南東側壁（北西から）
旧桝南西側壁（北東から）

図版11

③区全景1（東から）
③区全景2（北から）

図版12

番所雨落ち状遺構（北西から）
番所雨落ち状遺構土層断面（南東から）
番所礎石抜き跡（北東から）
番所前瓦溝および旧番所石列（北西から）
番人小屋前瓦溝（北東から）

図版13

旧番所全景（北西から）
旧番所全景（北東から）

図版14

旧番所北東側石列1（北東から）
旧番所北東側石列2（北東から）
番所北西側石列（北西から）
旧番所北西側石列（北西から）
旧番所オルソ図

図版15

第20図7　第20図8・9・10　第20図11・15
第21図21　第26図50　第26図55　第26図57
第30図75

図版16

第30図79　第38図122　第40図151　第41図156
第41図161　第41図164　第42図170　第42図176

図版17

第43図193　第43図195　第43図197　第43図198
第60図258　第60図263　第60図264　第96図369

図版18

第97図383　第97図384　第97図387　第98図396
第98図397　第98図398　第99図404　第100図405

図版19

第124図517　第79図325　第80図327
第81図335・336　第85図347　第110図478
第86図350　第88図352　第87図351
第86図350　第89図355　第88図353

図版20

第51図251　第64図279　第68図290　第79図326
第82図338・339　第90図357　第90図358
第91図359　第120図509～512

表　目　次

表1　方針の概要……4
表2　保存修理・整備箇所一覧1……7
表3　保存修理・整備箇所一覧2……8
表4　鳥取城跡発掘調査一覧……11
表5　城下町遺跡発掘調査一覧……12
表6　調査報告書番号対照表……14
表7　鳥取城跡関連年表1……25
表8　鳥取城跡関連年表2……26
表9　遺物観察表1（土器・陶磁器）……161
表10　遺物観察表2（土器・陶磁器）……162
表11　遺物観察表3（土器・陶磁器）……163
表12　遺物観察表4（瓦）……164
表13　遺物観察表5（瓦）……165
表14　遺物観察表6（瓦・金属製品）……166
表15　遺物観察表7（木製品・石製品・土製品・その他）……167
表16　瓦一覧使用資料……192

写　真　目　次

写真1　久松山遠景……15
写真2　楯蔵下段石垣……19
写真3　石黒火事とみられる火災跡（第34次調査）……20
写真4　太鼓御門前切石積石垣……20
写真5　解体中の鳥取城（明治8～12年）……21
写真6　鳥取大地震で崩壊した太鼓御門石垣…21
写真7　二ノ丸三階櫓石垣修理（昭和36年）……21
写真8　久松公園のにぎわい（昭和38年）……21
写真9　擬宝珠橋復元工事……22
写真10　完成した擬宝珠橋……22
写真11　進行中の復元工事……22
写真12　二ノ丸（左から三階櫓、走櫓、菱櫓）…23
写真13　中ノ御門（手前）と太鼓御門（奥）……23
写真14　二ノ丸遠景……23
写真15　擬宝珠橋三階櫓……24
写真16　現在の姿……24
写真17　調査前の状況（2014）……29
写真18　調査区基本層序……30
写真19　調査区周辺古写真（明治12年）……56
写真20　桶検出状況（第39次調査）……59
写真21　土層堆積状況……77
写真22　土層堆積状況……86
写真23　土層堆積状況……86
写真24　土層堆積状況……123
写真25　嵩上げされた中ノ御門櫓門……171
写真26　火事後の積み替え……172
写真27　城内唯一の切石積み石垣……172
写真28　残存する土塀（写真27の石垣上）……172
写真29　嵩上げされた太鼓御門……173

第Ⅰ章　調査の経緯と目的

1　整備に至る経緯

「鳥取城跡附太閤ヶ平」は、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡であること、城跡の構成が、山城的形式を残す山上ノ丸と、中腹の砦群等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に評価され、昭和32年(1957)に国史跡として指定を受けたが、城跡景観を構成する石垣は昭和18年(1943)に発生した鳥取大地震(震度6、死者1,210名)で崩落・崩壊が相次ぎ、戦後復興や昭和27年(1952)に市街地の多くを失った鳥取大火の影響もあり、荒廃した状況であった。そのため、指定から２年後の昭和34年(1959)から石垣の保存修理事業が開始され、まずは、城の象徴であった三階櫓が建っていた二ノ丸石垣から修理が開始された。1970年代に入ると城跡公園として、山上・山下の補修や看板設置などの環境整備が進み、昭和47年(1972)には久松山整備審議会が設置され、堀の浚渫や石垣の修理が実施された。山中の遊歩道設置や湯所を発とし山頂へ至るロープウェイが営業していたのもこの頃であり、観光開発が活発な時期であった。1980年代になると、昭和59年(1984)には『保存管理計画』が策定され、城跡としてだけではなく、山林や自然を含めた山全体でのあり方が検討された。

昭和34年(1959)以来、間断なく続く石垣修理であったが、公園整備の側面が強く、遺構としての取り扱いはそれほどなされることはなかった。また、石垣修理に伴い実施された昭和55・56年(1980・81)の二ノ丸跡の調査以外、発掘調査が実施されることもなく、幾度となく挙がっては消えていた復元計画であったが、昭和60年(1985)のわかとり国体開催へ向け再び高まったものの、二ノ丸三階櫓復元の要望に対しても遺構調査を基とした具体的な復元検討を行うことはできず、実現には至らなかった。

平成に入ると、天球丸などでの大規模な石垣修理に合わせて発掘調査事例も増え、城の実態が徐々にではあるが明らかとなりはじめた。平成16年(2004)には９市町村の合併により新鳥取市が誕生すると、翌平成17年(2005)には具体的な鳥取城復元事業として形を成すこととなった。市民と専門家からなる検討委員会を設置して整備計画の検討を行い、パブリックコメントを基として『史跡鳥取城跡附太閤ケ平保存整備基本計画』が策定されることとなった。翌平成18年(2006)には『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』が策定され、鳥取城跡の保存整備と調査研究が長期計画として決定された。計画では、現在不明瞭になっている近世城郭部分の全体プランの顕在化を大きなテーマとしており、可能な範囲での建造物復元等も含め、江戸時代末期の姿を顕在化するための整備を短・中・長期の３段階、合計30年計画で進めることとしている。

整備対象の第１段階として位置づけられたのが城のメインルートにあたる「大手登城路」である。この範囲については、古写真・絵図面の存在に加え、遺構の保存状態が比較的良好と考えられることから、復元許可の要件を満たす可能性が高く、また、城の正面玄関という立地条件は、顕在化による集客効果も見込めるため、建造物を含む復元整備を視野に入れた整備計画が策定されることとなった。それまで、大手登城路部分は、鳥取県立鳥取西高等学校の主導線となっていたが、建築後40年が経過した校舎は耐震化工事が計画されていたことから、これに併せ鳥取市から鳥取県へ賃貸借されていた土地のうち、史跡整備に必要な範囲を使用範囲から除外し、大手登城路の整備を高等学校の改築と一体的に行うこととしている。なお、鳥取城跡内には、他にも、鳥取県立博物館が所在するほか、明治40年(1907)建築の仁風閣が現存しているが、現在の計画では、これらの併存を当面許容しつつ、史跡の価値を向上するための整備を実施することとしている。

2　調査体制

発掘調査及び報告書作成時の組織体制等は以下の通りである。

調査区の所在地はすべて鳥取県鳥取市東町２丁目地内である。

発掘調査

第40次発掘調査

期間：平成28年(2016) 7月11日～12月12日　　調査面積：808㎡

教育長　木下法広

文化財課	課長　冨田恵子
	参事兼保存整備係長　中道秀俊
	課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文
鳥取城整備推進係	主任　中島　泉
	主任兼文化財専門員　細田隆博
保存整備係	主幹兼文化財専門員　加川　崇
	主任兼文化財専門員　坂田邦彦(調査担当)
	主事　石谷純子

第41次発掘調査

期間：平成29年(2017) 6月12日～11月9日　　調査面積：610㎡

教育長　尾室高志

文化財課	課長　冨田恵子
	参事兼保存整備係長　中道秀俊
	課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文
鳥取城整備推進係	主任兼文化財専門員　細田隆博
	技師　岡垣頼和
保存整備係	主幹　中島　泉
	主幹兼文化財専門員　加川　崇
	主任兼文化財専門員　坂田邦彦(調査担当)

報告書作成

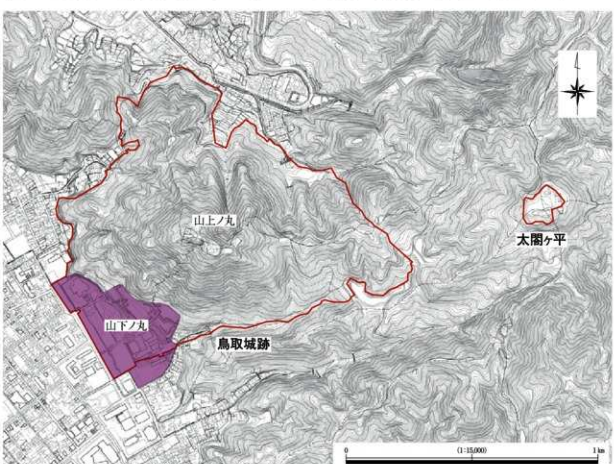
平成31/令和元年度(2019)

教育長　尾室高志

文化財課	教育委員会事務局次長兼文化財課長兼保存整備係長(～7月)　冨田恵子
	教育委員会事務局次長兼文化財課長(8月～)　冨田恵子
	参事兼保存整備係長(8月～)　佐々木敏彦
	課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員　佐々木孝文
鳥取城整備推進係	主任兼文化財専門員　細田隆博
	技師　岡垣頼和
保存整備係	主査　松原雅彦
	主幹兼文化財専門員　加川　崇
	主任兼文化財専門員　坂田邦彦(報告担当)

3　指定の詳細

指定名称　国指定史跡　鳥取城跡附太閤ヶ平（とっとりじょうあとつけたりたいこうがなる）
地　　番　鳥取市東町２丁目、円護寺、栗谷、百谷、小西谷
指 定 日　昭和32年（1957）12月18日
　　昭和62年（1987）８月10日追加指定
指定面積　968.324㎡
　昭和32年（1957）12月18日　東町地内を中心とした668.663㎡を指定
　　久松山の南面（東町２丁目）と太閤ヶ平（東町２丁目・栗谷・百谷・小西谷）の２ヶ所を指定
　昭和62年（1987）８月10日　円護寺領299.661㎡を追加指定
　　久松山北面（円護寺）を追加し、山全体が指定地となる
指定理由
　指定書によると、織豊時代から近世徳川時代に移行する転換期の歴史に深い関係を持つ史跡である点、城跡の構成が、山城的形式を残す山上ノ丸と中腹の砦群等の古い城跡遺構に対し、近世的城郭形式を残す山下ノ丸を中心とする新しい城跡遺構が新旧重層して併存すること等が学術的に評価される点が認められ、指定に至ったとされる。
　石垣化される以前、久松山上にあったとされる城館としての中世鳥取城と、それを攻めた羽柴秀吉の巨大な本陣が置かれた隣山の帝釈山頂とその陣城群、城郭として石垣化した近世鳥取城が同山系に重複し、その遺構の多くが現存することは稀であり、場内の石垣にみられる多様な年代観を併せ、中世から幕末へと続く様々な鳥取城の姿が一堂に会することが「城郭の博物館」と評される所以である。



第１図　史跡鳥取城跡附太閤ヶ平史跡指定範囲

4　保存整備計画の概要

（1）事業の目的

鳥取城跡は、戦国時代の山城を起源とし、鳥取藩32万石という国内有数の大藩の居城として江戸時代を通じて存続した点から、我が国における城郭の発達史を概観できる史跡である。鳥取市は、昭和32年(1957)の国史跡指定以後、鳥取城跡の保存管理に努めてきたが、近年の都市環境等の変化により、鳥取城跡が果たしてきた役割が見失われがちとなっている現状がある。そのため、今後より一層、国指定史跡としての鳥取城跡の本質的価値を広く国民に発信し、更に魅力あるものとして、後世に引き継ぐことを目的に、平成17年度(2005)に『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』を策定した。

（2）事業の方針

鳥取城跡の本質的価値は、①所在地としての久松山の自然環境、②太閤ヶ平を含む中世城郭群、③藩主の居城としての近世城郭という異質な要素が重層的に存在しているところにある。これらの要素がもつ特質を調和させ、その価値を一層引き出し、適切に保存・管理を行い、整備・活用を図るため、下記の項目に分けて事業の方針とする。

表1　方針の概要

区　分	方　　針
久松山自然環境	自然植生を調査し、城郭史跡として遺跡の保存を優先することを前提に、身近な都市緑地である久松山の自然環境を適正に維持管理し、良好な緑地保全を図る。
中世城郭	史跡内の遺構分布調査を実施し、調査研究をもとにその価値を明瞭化する保存整備方針を個別にまとめる。
近世城郭	現在の城跡景観を決定づけている近世鳥取城については、その特性と歴史的重要性を可視的に理解できるように、縄張りをはじめ全体構想を明瞭化するための整備を行う。 江戸時代を通じて藩主の居城として改変を繰り返したことから整備年代は幕末に設定する。 建造物は、遺構・絵図文献及び写真等の検討により、復元検討を満たすもののうち、整備効果の高いものから段階的に行う。 ①城の骨格を明瞭化するため、大手登城路の復元的整備を段階的に行う。 ②象徴的存在であった二ノ丸の三階櫓・菱櫓・走櫓等については、調査研究を継続し、復元を検討する。
既存施設	仁風閣（国重要文化財）は、その価値を損なう移築は困難であるため、城跡と併存させる。 その他の施設（県立鳥取西高等学校・県立博物館）は、当面史跡整備と整合性を図りつつ併存させるが、将来的に移転を含めて「あり方」を検討する。

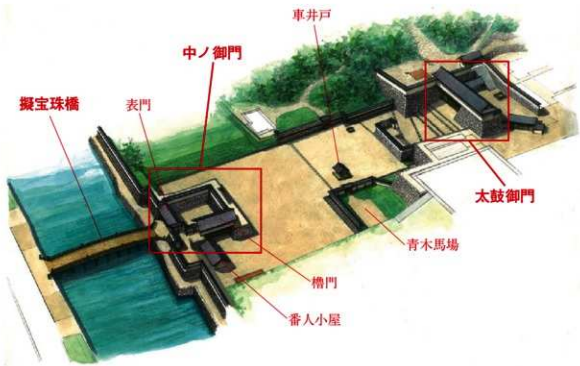
5　大手登城路復元整備計画の概要

（1）経　緯

平成17年度(2005)鳥取市は『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』を策定し、長期的整備の構想を明確にした。平成18年度(2006)には、『基本計画』の構成に基づき、その第1段階と位置付けた大手登城路復元整備の実現にむけて、具体的な内容と方針を定め、『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』を策定した。

（2）大手登城路の現状

大手登城路は、内堀の中央に架かる擬宝珠橋を渡り、城の中枢へ至るルートで、近世鳥取城の正面にあたるシンボルゾーンであった。しかし、現在は、かつての擬宝珠橋は歴史性を無視したコンクリート橋に変わり、桝形石垣の一部が撤去され、県立高校の通用道となっている。このため、史跡内における裏道的な作業用通路と誤解する市民も多く、史跡としての本質的価値を著しく損なっている。



第２図　復元整備イメージと現況写真

（3）復元整備の目的

大手登城路復元整備は、城の正面観を回復し、近世鳥取城の骨格を顕在化するものである。その中で特に建造物の復元は、鳥取城跡の理解を深め、その価値と魅力を大きく向上させるだけでなく、市民の歴史や景観に対する意識を呼び覚ますことが可能となる。また、この整備は、当面共存する県立高校が与える城郭景観への負荷を軽減できる。さらに県立高校の生徒に、単に城跡に所在する学校施設で学ぶという意識ではなく、より価値が明確になった史跡鳥取城跡内で学ぶという意識を定着させ、生徒の文化財愛護の意識高揚も図ることができる。

（4）復元整備の基本方針

大手登城路復元整備における基本方針は、『保存管理計画』（昭和59年度(1984)策定）、『保存整備基本計画』（平成17年度(2005)策定）等と整合を図るものとする。建造物の復元にあたっては、遺構の保護を大前提とする。また、十分な調査研究を行い、近世鳥取城の正面観を回復する史実性の高い整備を行うものとする。復元の時代設定は、江戸時代を通じて藩主の居城として増改築を繰り返した鳥取城の特性から幕末（城としての最終段階）とする。

6　鳥取城跡における石垣保存修理事業

鳥取城跡は、明治12年(1879)に城内の象徴的な建物が取り壊されたものの、城跡景観を規定する石垣は良好に残されていた。しかし、昭和18年(1943)の鳥取大震災の影響で多くの箇所で崩落した。中でも、山頂部の天守台の石垣や、山麓部の内、二ノ丸三階櫓台及び二ノ丸走櫓跡の石垣崩落は、甚大なものであった。昭和33年の調査記録をみると、城内の石垣崩落は、16ヶ所、石垣の孕み出しなどが見られる半壊は８ヶ所に及んでいる。しかし、戦時下であった当時、石垣は修理されることはなかった。しかも、地震から復興した市街地を、昭和27年(1852)、大火が襲い、ようやく荒廃した石垣の修理が始まるのは、昭和32年(1957)の国史跡指定以降、昭和34年度(1959)からのことである。

一方で、鳥取城跡における石垣保存修理事業は、昭和25年の文化財保護法制定以降の国庫補助事業下で行われたものとしては、最初期の事例にあたる。そのため国内における石垣修理の代表的な実践の場を提供してきた。例えば、昭和55年度(1980)には、我が国で初めて石垣の写真測量による立面図の作成が行われた。また、平成初年の天球丸石垣修理は、後に国内の石垣修理を牽引することとなる特別史跡肥前名護屋城跡（佐賀県唐津市）山里口の石垣修理の手本となった。

さて、石垣の本質的価値は、「歴史の証拠」及び「安定した構造体」としての価値がある。鳥取城跡での石垣保存修理事業は、平成17年度(2005)に文化庁が示した『史跡等整備の手引き』を参考に見直しを行い、文化庁がとりまとめつつあった『石垣整備のてびき』を念頭に、平成23年度(2011)前後で異なる。それ以前は、「安定した構造体」としての価値に重きを置き、一方、それ以降は、「安定した構造体」と同等に「歴史の証拠」としての価値に重きを置いた石垣修理を実施している。

平成23年度(2011)以前の石垣修理は、主に鳥取大地震で崩落した部分の復元や、地震の影響で大きく孕み出した部分の解体修理の時代である。石積みそれ自体の工法そのものは、伝統工法に基づく一方で、石垣の外形に真実性を求め、安定した構造体としての修理が実施された。例えば、解体した石材が不健全な場合に加え、設計規格に満たない在来石は、大規模に新石材に取り換えて復旧を行うという手法が取られた。また、立体的な拡張痕跡の勾配変化点がある場合、その部位が構造的欠陥であるとして、修理時は一つの石垣面として復旧した事例もある。これらの時期の修理範囲は、鳥取大地震の影響を受けた主に山麓の石垣の内、二ノ丸や天球丸及びその下段の楯蔵、太鼓御門北側を中心にした部分である。

一方で、平成23年度(2011)以降の石垣修理は、解体修理ありきではなく、石垣の延命的措置を含めた多様な石垣修理を実践している。非解体石垣修理としては、石垣面及びその周辺の樹木伐採、排水路の回復、落石防御ネット設置及び定点観測、間詰石補修、補強石垣の設置、基盤地面の補強を実施している。

このうち、補強石垣の設置として実施したのが、天球丸巻石垣の復元であった。天球丸の巻石垣は、鳥取城跡で球面ないし曲面を持つ「巻石垣」と呼ばれる特徴的な補強石垣の中でも、城内最大のものである。これは、平成６～８年度に内包される石垣の解体修理のため、最小限の発掘調査と写真測量ののち取り外されていたものを、平成23年度(2011)に復元したもので、この復元は、国内唯一の形態である補強石垣を明示する目的もあったが、内包される部分にオリジナルの石垣が存在し、それらの耐震性を高める為に設置したという側面もあった。

やむを得ず解体修理せざるを得ない場合は、修理後も一見して修理の状況がわからないように修理することを目指している。在来石そのものを文化財として扱い、原則再加工を施さないことや、解体修理面積に対して原則１割未満の新石材交換率に抑えることを目標に掲げるなどの方針で修理を実施している。これらの理念で修理を行った個所は、二ノ丸表御門向かいの天球丸腰石垣及び現在復元整備が進む大手登城路内の石垣である。

鳥取城跡の石垣修理は、山麓において概ね鳥取大地震で崩落した以前の姿を取り戻しつつある。一方で、山頂部の天守台を中心した石垣は、被災当時のままである。鳥取城跡は、被災後70年以上の時を経てもなお、鳥取大地震からの復興を果たしておらず、今後とも継続した取り組みが必要である。

表２　保存修理・整備箇所一覧１

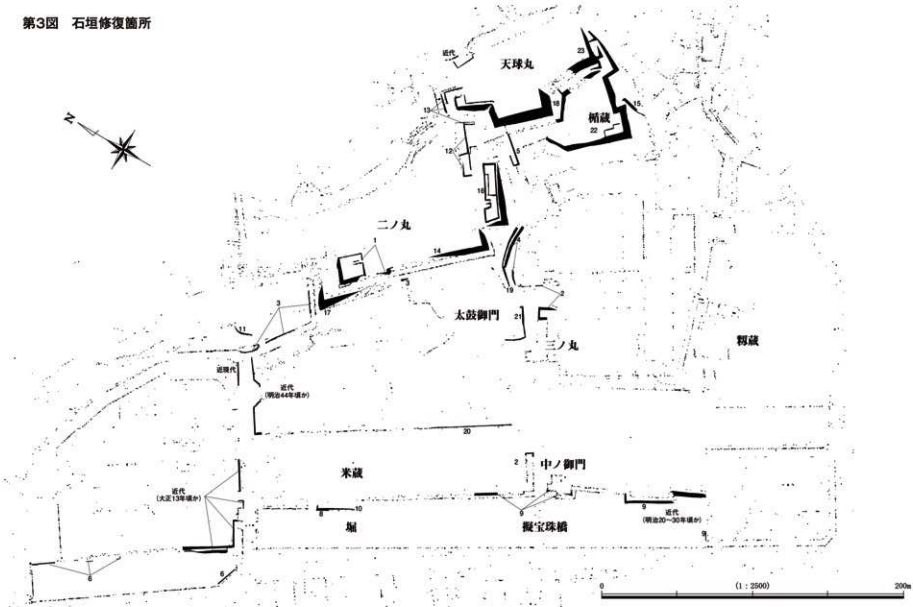
番号	年	度	補助事業箇所　（備考）
	1957	昭和32	国史跡指定
1	1959	昭和34	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
1	1960	昭和35	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
1	1961	昭和36	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
1	1962	昭和37	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
1	1963	昭和38	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
2			この頃、鳥取大地震で崩れた高校通学路沿いの石垣修理
1	1964	昭和39	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
1	1965	昭和40	二ノ丸三階櫓周辺石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
3	1967	昭和42	西坂下御門周辺石垣修理(公園整備)、二ノ丸石段積替・側溝修理・擬木柵設置
4	1968	昭和43	環境整備(天球丸側溝修理・説明版・標柱設置)、西高等学校芝田記念館裏石垣修理
	1969	昭和44	環境整備(山上ノ丸石段通路柵・山下ノ丸石段側溝整備等)
5	1970	昭和45	坂口御門石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
5	1971	昭和46	坂口御門石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)、宝隆院庭園整備
6	1972	昭和47	宝隆院庭園整備、内堀石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
7	1972	昭和47	山上ノ丸本丸(災害復旧・コンクリート壁養生と新規石積)
8	1973	昭和48	内堀石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
9	1974	昭和49	内堀石垣修理(解体修理・近代石積補修)
	1975	昭和50	米蔵跡整備(民家・動物舎移転補償)
	1976	昭和51	米蔵跡整備(遺構表示)
10	1976	昭和51	内堀石垣修理(天端石補足)
11	1976	昭和51	西坂下御門上石垣修理(災害復旧、崩落部分の復元)
	1977	昭和52	米蔵跡整備(遺構表示)
12	1978	昭和53	二ノ丸大渡櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
13	1979	昭和54	天球丸表御門石垣修理(解体修理)
14	1979	昭和54	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
14	1980	昭和55	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
14	1981	昭和56	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
15	1981	昭和56	楯蔵下段石垣修理(災害復旧、崩落部分補強)

表３　保存修理・整備箇所一覧２

番号	年　度		補　助　事　業　箇　所　（備　考）
14	1982	昭和57	二ノ丸走櫓石垣修理(崩落部分の復元・解体修理)
16	1983	昭和58	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)、史跡図化
16	1984	昭和59	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)、『保存管理計画』策定
16	1985	昭和60	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)
16	1986	昭和61	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)
16	1987	昭和62	二ノ丸菱櫓石垣修理(解体修理)
	1987	昭和62	史跡追加指定、史跡指定地境界杭設置、史跡図化追加
17	1988	昭和63	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
17	1989	平成１	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
18	1989	平成１	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
17	1990	平成２	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
18	1990	平成２	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
19	1990	平成２	二ノ丸走櫓下階段脇(崩落部分の復元、解体修理)
	1990	平成２	史跡指定地境界杭設置、史跡図化追加
17	1991	平成３	二ノ丸三階櫓下段(解体修理)
18	1991	平成３	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
18	1992	平成４	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
18	1993	平成５	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
18	1994	平成６	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
18	1995	平成７	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
18	1996	平成８	天球丸石垣修理Ⅰ期(解体修理)
20	1997	平成９	扇邸跡石垣(解体修理)、山下ノ丸平面図作成
21	1998	平成10	太鼓御門北石垣(崩落部分の復元・解体修理)
21	1999	平成11	太鼓御門北石垣(崩落部分の復元・解体修理)
22	2000	平成12	櫓蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
22	2001	平成13	櫓蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
22	2002	平成14	櫓蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
22	2003	平成15	櫓蔵石垣(崩落部分の復元・解体修理)
23	2004	平成16	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)
23	2005	平成17	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)、『保存整備基本計画』策定
23	2006	平成18	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)、『保存整備実施計画』策定
23	2007	平成19	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)、『鳥取城調査研究年報』刊行
23	2008	平成20	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理)
23	2009	平成21	天球丸石垣修理Ⅱ期(解体修理、天球丸遺構復元)
23	2010	平成22	天球丸石垣修理Ⅱ期(巻石垣復元)
23	2011	平成23	天球丸石垣修理Ⅱ期(巻石垣復元)
24	2012	平成24	櫓蔵園地整備、櫓蔵下段石垣(間詰石補修、ネット張り)
25	2013	平成25	天球丸排水工事
26	2013	平成25	天球丸腰石垣修復工事(解体修理、～平成27年まで)
27	2014	平成26	天球丸腰石垣修復工事(解体修理)、排水路整備
28	2015	平成27	天球丸腰石垣修復工事(解体修理)、排水路整備、掘宝珠橋復元工事開始
29	2016	平成28	内堀等石垣修理工事(解体修理)、掘宝珠橋復元工事
30	2017	平成29	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)、掘宝珠橋復元工事
30	2018	平成30	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)
30	2019	平成31/令和１	中ノ御門石垣修理工事(解体修理)

※太平洋戦争終戦直後、失業者対策として修復等を実施した箇所があると伝わるが詳細は不明
※昭和38年(1963)頃、単独事業として中ノ御門～太鼓御門周辺で鳥取大地震崩落石垣の修復

第3図　石垣修復箇所


N
天球丸
櫓蔵
二ノ丸
太鼓御門
三ノ丸
鞘蔵
中ノ御門
米蔵
堀
握宝珠橋
近代
近代
(明治44年頃か)
近代
(大正13年頃か)
近代
(明治20～30年頃か)
(1：2500)
0
200m

7　既往の発掘調査

昭和55年(1980)の二ノ丸走櫓石垣修理工事に伴い初めて実施された発掘調査は、近年の城跡整備に伴い調査例が増加し、令和１年(2019)現在で50次を数える。また、近年城下町遺跡の調査も増加しつつあり、試掘調査が中心であるため面積こそ小さいものが多いが、13次を数え、当時の姿の一端が明らかとなり始めた。調査期間や位置は表４・５、第４図の通りである。

昭和18年(1943)９月10日に発生し、千人を超える死者を出した鳥取大地震により市内は壊滅的な被害を受け、鳥取城においては各所で石垣の崩落することとなり、昭和32年(1957)の国史跡指定の２年後に開始された石垣修理は現在まで続く。災害からの復興に始まり、昭和40年代に入ると、ロープウェイ建設や堀の浚渫などが行われるが、山上・山下ともに公園の一部としての整備であり、発掘調査が実施されることはなかった。初めての発掘調査が実施されたのは、昭和55年(1980)のことであり、二ノ丸走櫓石垣修理工事に際して、その上部に位置する二ノ丸御殿部分を対象としたものであった。調査では櫓礎石が絵図面通りに検出され、瓦等の遺物も多く出土した。しかし、その後しばらく発掘調査は実施されず、本格的に開始されるのは平成に入ってのことで、平成２年(1990)天球丸石垣の大規模解体修理工事に伴う天球丸曲輪の調査に続いて楯蔵や太鼓御門周辺でも実施された。

これらはいずれも石垣修理工事に伴う発掘調査であったが、2000年代に入ると三ノ丸に位置する鳥取県立鳥取西高等学校の改築問題や、鳥取城跡保存整備計画策定により、学校周辺での発掘調査例が増加、さらに近年では、鳥取城復元整備計画の本格化に伴い、大手登城路沿いでの発掘調査が増加し、平成26年(2014)からは大規模な全面調査へと移行した。復元整備計画に伴う大手登城路周辺で実施した発掘調査範囲については第13図の通りである。

大手登城路復元整備計画では、城の正面入口から本丸である三ノ丸へ至る間に位置する主要施設である擬宝珠橋・中ノ御門・太鼓御門という３つの建物復元を目的とし、付随する番人小屋、車井戸等の周辺施設と登城路面を旧状に復することを目的としている。しかし、復元をめざす部分の総面積は広大であり、現状そのすべてを同時に調査対象とすることは、隣接する鳥取県立鳥取西高等学校運営上からも不可能であるため、鳥取城保存整備検討委員会での検討の結果、まずは建物等の構造物が存在していた範囲の調査を先行し、登城路部分については、後に一括して行うこととなった。平成21年(2009)の第21次調査と平成22年(2010)の第26次調査では中ノ御門の第１の門である表門、同年度の第27次調査では中ノ御門の第２の門である櫓門、平成23年(2011)の第28次調査では大手橋である擬宝珠橋の調査を実施し、城の入口部分の姿が明らかとなり、調査成果を平成25年(2013)３月に『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書』として刊行した。

このような状況の下実施された平成26年(2014)より翌年に掛けて実施した第34次発掘調査は、大手登城路周辺における初めての大規模調査である。それまでの発掘調査は、部分的なトレンチ調査が大半であったが、平成27年(2015)には借地となっていた鳥取県立鳥取西高等学校用地の一部(グラウンドの一部)が鳥取市に返還されたことにより全面調査が実施可能となったためである。全面調査に際しては、過去に調査を実施した部分も含め、改めてその全体を顕わにして再検討を行うこととしている。以降平成27年(2015)に実施した第39次発掘調査、平成28年(2016)の第40次発掘調査、平成29年(2017)の第41次発掘調査などの全面調査を山側の太鼓御門側へ向かい毎年実施し、平成30年(2018)太鼓御門の発掘調査では門の全容が明らかとなった。現在復元予定範囲のうち８割程度の発掘調査を完了、その成果は『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳとして４冊刊行した。平成30年度(2018)には最初の復元工事となる擬宝珠橋の再建が成った。今後未調査部分の調査を行い、復元整備へむけたデータの収集をを進めていく予定である。

表4　鳥取城跡発掘調査一覧

次数	調査位置	調査期間	面積(㎡)	調査原因	報告書
1	二ノ丸走櫓跡	1980年(昭和55)11/14～12/24	250	二ノ丸走櫓石垣修復工事に伴う調査	1
2	二ノ丸走櫓跡	1981年(昭和56)5/26～7/27	130	二ノ丸走櫓石垣修復工事に伴う調査	1
3	天球丸跡	1990年(平成2)5/1～7/31	320	石垣の保存修理に伴う調査	2
4	天球丸跡	1991年(平成3)8/1～12/20	530	石垣の保存修理に伴う調査	2
5	天球丸跡	1995年(平成7)10/1～12/12	164	天球丸の復元整備に伴う調査	3
6	太鼓御門跡	1997年(平成9)8/1～1998/2/28	170	復元修理に伴う調査	4
7	中ノ御門跡	1998年(平成10)10/20～1999/2/28	135	復元修理に伴う調査	5
8	楯蔵跡	2000年(平成12)10/2～2001/3/23	340	石垣の保存修理に伴う調査	6
9	櫓蔵跡周辺試掘	2003年(平成15)7/22～9/30	80	鳥取西高校整備移転計画に伴う調査	7
10	天球丸跡	2005年(平成17)6/15～12/27	73.6	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
11	三ノ丸跡試掘	2005年(平成17)8/22～10/26	40	鳥取西高校整備計画に係る調査	8
12	中ノ御門周辺試掘	2006年(平成18)10/30～2007/1/29	100.6	鳥取西高校改築に係る調査	9
13	天球丸跡	2006年(平成18)10/30～11/2	15	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
14	天球丸跡試掘	2007年(平成19)6/28～7/31	9.1	天球丸石垣の保存修理に伴う調査	未
15	太鼓御門周辺試掘	2007年(平成19)7/21～11/7	53.4	鳥取西高校改築に伴う調査	9
16	三ノ丸跡試掘	2008年(平成20)5/7～5/27	21.4	鳥取西高校改築に伴う調査	10
17	天球丸跡	2008年(平成20)7/16～8/8	10.1	天球丸整備に伴う調査	未
18	太鼓御門跡	2008年(平成20)7/20～11/21	110	大手登城路復元整備計画に伴う調査	11
19	楯蔵跡	2008年(平成20)10/31～12/2	22.9	楯蔵跡周辺整備に伴う調査	未
20	櫓蔵跡	2009年(平成21)4/1～2010/3/12	2,771.7	鳥取西高校改築に伴う調査	12
21	中ノ御門跡	2009年(平成21)7/1～8/31	60.3	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
22	太鼓御門跡周辺	2009年(平成21)9/8～10/1	35.0	大手登城路復元整備計画に伴う調査	15
23	天球丸跡	2009年(平成21)12/2～12/10	35.0	天球丸整備に伴う調査	未
	太閤ヶ平試掘	2009年(平成21)12/14～12/17	12.1	無線基地局整備	13
24	堀端試掘	2010年(平成22)1/25～1/29	10.5	バス待合所設置に伴う調査	13
25	楯蔵跡周辺	2010年(平成22)2/22～3/26	69.2	楯蔵跡周辺整備に伴う調査	未
26	中ノ御門跡	2010年(平成22)7/1～8/31	59.5	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
27	中ノ御門跡	2010年(平成22)11/1～2011/2/25	76.7	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
28	擬宝珠橋跡	2011年(平成23)10/5～2012/3/30	480	大手登城路復元整備計画に伴う調査	14
29	天球丸跡・八幡宮跡	2012年(平成24)6/3～9/27	200	天球丸整備に伴う調査	未
30	①②中ノ御門周辺 ③登城路④太鼓御門	2012年(平成24)6/28～10/1	425	大手登城路復元整備計画に伴う調査	15
31	登城路周辺	2013年(平成25)7/23～11/2	306	大手登城路復元整備計画に伴う調査	20
32	天球丸跡	2013年(平成25)8/9～2014/1/31	96	天球丸腰石垣修理に伴う調査	未
33	内堀石垣	2013年(平成25)2/4～3/28	72	内堀石垣破損部分確認調査	未
34	中ノ御門跡	2014年(平成26)7/22～2015/3/27	1,860	大手登城路復元整備計画に伴う調査	18
35	櫓蔵曲輪試掘	2014年(平成26)4/8～4/21	15.3	鳥取西高校改築に伴う調査	19
36	櫓蔵曲輪試掘	2014年(平成26)7/29	4.2	鳥取西高校改築に伴う調査	19
37	三ノ丸跡試掘	2014年(平成26)10/7～10/16	12	鳥取西高校改築に伴う調査	19
38	堀端試掘	2015年(平成27)1/6～1/7	8.3	道路整備に伴う調査	19
39	大手登城路跡	2015年(平成27)7/14～12/7	960	大手登城路復元整備計画に伴う調査	20
40	大手登城路跡	2016年(平成28)7/11～12/12	808	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告
41	大手登城路跡	2017年(平成29)6/12～12/20	610	大手登城路復元整備計画に伴う調査	本報告

表５　城下町遺跡発掘調査一覧

次数	調査位置	調査期間	面積(㎡)	調査原因	報告書
1	裏番所・大西家屋敷跡試掘	2009年(平成21)12/７～12/14(Tr１～３) 2010年(平成22)９/９～９/17(Tr４)	19.9	駐車場整備	13
2	薬研堀跡試掘	2012年(平成24)６/11～10/10	179.3	建物建設	16
3	薬研堀跡	2013年(平成25)４/16～12/６	2,070	赤十字病院新病棟等増改築	17
4	御会所跡等試掘	2014年(平成26)２/10～２/14	11.6	鳥取西高校改築	19
5	試掘	2014年(平成26)２/27～３/12	54	鳥取西高校改築	19
6	御勘定所・御会所跡試掘	2017年(平成29)12/１～12/７		管理設	未

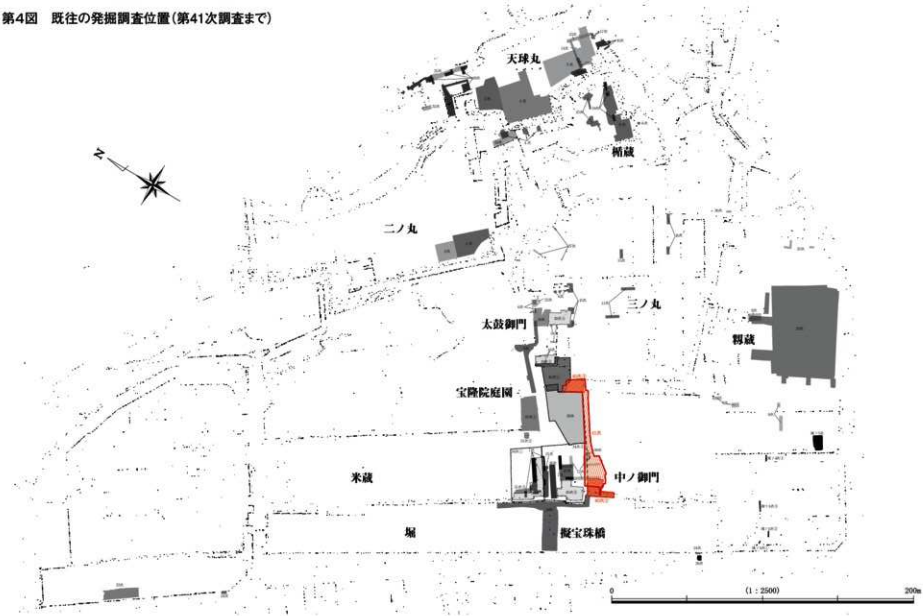
掲載報告書

1　鳥取市教育委員会1981『里仁１号墳発掘調査報告書・鳥取城二ノ丸走櫓跡』
（鳥取市教育委員会1987『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』に再録）
2　鳥取市教育委員会1992『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　天球丸発掘調査概報告書』（３に再録）
3　鳥取市教育委員会1997『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　天球丸保存整備事業報告書』
4　鳥取市教育委員会1998『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　太鼓御門発掘調査報告書』
5　鳥取市教育委員会1999『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　中ノ御門発掘調査報告書』
6　鳥取市教育委員会2001『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平　楯蔵跡発掘調査報告書』
7　鳥取市教育委員会2004「鳥取城関連遺跡」『平成15(2003)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
8　鳥取市教育委員会2006「鳥取城三ノ丸跡」『平成17(2005)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
9　鳥取市教育委員会2008「鳥取城跡」『平成19(2007)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
10　鳥取市教育委員会2009「鳥取城跡」『平成20(2008)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
11　鳥取市教育委員会2009『平成20(2008)年度　史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書』
12　財団法人鳥取市文化財団2011『鳥取城跡楯蔵跡』（第20次調査）
13　鳥取市教育委員会2011「鳥取城下町関連遺跡」「太閤ヶ平」「鳥取城跡第24次調査」
『平成22(2010)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
14　鳥取市教育委員会2013『鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書』－第21・26・27・28次発掘調査－
15　鳥取市教育委員会2014『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅱ』－第22・30次発掘調査－
16　鳥取市教育委員会2013「鳥取城下町遺跡」『平成24(2012)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
17　公益財団法人　鳥取市文化財団2015『鳥取城下町遺跡』（第３次調査）
18　鳥取市教育委員会2016『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ』－第34次発掘調査－
19　鳥取市教育委員会2017「鳥取城跡（第35～38次）」「鳥取城下町遺跡（第４・５次）」
『平成28(2016)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
20　鳥取市教育委員会2018『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅳ』－第31・39・40次発掘調査－

関連報告書

鳥取市教育委員会1985『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存管理計画策定報告書』
鳥取市教育委員会1987『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』
鳥取市教育委員会2005『史跡鳥取城跡保存整備基本計画』
鳥取市教育委員会2006『史跡鳥取城跡保存整備実施計画』
鳥取市教育委員会2008～2019『鳥取城調査研究年報』第１～12号
鳥取市教育委員会2013『資料でみる鳥取城(近代編)』

第4図　既往の発掘調査位置（第41次調査まで）



8　発掘調査報告書について

平成30年(2018)刊行の調査報告書より、合併時点まで遡り表６の通り「鳥取市文化財調査報告書　第○集」と再び通し番号を付すこととした。平成16年(2004)の大合併以前、９つの旧市町村ではそれぞれ文化財調査報告書が刊行され、青谷町、気高町、鹿野町、福部村、国府町、河原町、用瀬町、佐治村ではそれぞれ通し番号が付されていたものの、旧鳥取市については、その初期においては番号が付けられ、第32集までは確認できるが、以降の報告書には表記が無く、合併後も未記載のままであった。これにより、整理作業や説明の際に混乱を生じたことから、合併時に遡り通し番号を付すこととした。このため、鳥取市教育委員会発行の報告書には昭和期に刊行した旧番号「鳥取市文化財報告書○」と、第25集以降に記載のある新番号「鳥取市文化財調査報告書　第○集」との２種類が存在する。

表６　調査報告書番号対照表

集	書　名	副書名	発行日
1	緑山４号墳発掘調査報告書		2004年(平成16)12月24日
2	平成16(2004)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2005年(平成17)３月15日
3	内海中寺ノ谷遺跡	県営内海中地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2005年(平成17)３月15日
4	鳥取市内遺跡発掘調査報告書	上原遺跡・山宮阿弥陀森遺跡	2005年(平成17)３月19日
5	鳥取市内遺跡発掘調査報告書	善田僾示ヶ崎遺跡等	2005年(平成17)３月
6	平成17(2005)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2006年(平成18)３月23日
7	平成18(2006)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2007年(平成19)３月23日
8	大坪イカウ松遺跡(第２冊)	県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2007年(平成19)３月
9	史跡栃本廃寺跡発掘調査報告書		2008年(平成20)３月26日
10	平成19(2007)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2008年(平成20)３月26日
11	大坪大縄手遺跡(第２冊)	県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2009年(平成21)３月
12	平成20(2008)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2009年(平成21)３月26日
13	平成20(2008)年度史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書		2009年(平成21)３月
14	平成21(2009)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2010年(平成22)３月26日
15	平成22(2010)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2011年(平成23)３月24日
16	平成24(2012)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2013年(平成25)３月28日
17	史跡栃本廃寺跡環境整備報告書		2013年(平成25)３月29日
18	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書	第21・26・27・28次発掘調査	2013年(平成25)３月29日
19	平成25(2013)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2014年(平成26)３月
20	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅱ	第22・30次発掘調査	2014年(平成26)３月28日
21	平成27(2015)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2016年(平成28)３月30日
22	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ	第34次発掘調査	2016年(平成28)３月
23	平成28(2016)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2017年(平成29)３月
24	平成29(2017)年度亀井茲矩墓調査報告書		2017年(平成29)10月
25	鳥取市倭文６号墳出土遺物の研究	出土品再整理報告書	2018年(平成30)３月23日
26	平成29(2017)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		2018年(平成30)３月31日
27	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅳ	第31・39・40次発掘調査	2018年(平成30)３月31日
28	福田家住宅調査報告書		2018年(平成30)３月31日
29	平成31/令和１(2019)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		令和２年(2020)３月31日
30	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅴ	第40・41次発掘調査	令和２年(2020)３月31日
※集は「鳥取市文化財調査報告　第○集」の略、　第25集以降には記載あり			

第Ⅱ章　立地と環境

1　位置と地形

鳥取県東部に位置する鳥取市は、平成16年(2004)11月１日に実施された８町村(青谷町・気高町・国府町・河原町・佐治村・鹿野町・福部村・用瀬町)との合併により、面積765.31㎢、人口20万人(令和元年(2019)現在18.7万人)を要する県庁所在地となった。市の中心域である鳥取平野は、中国山地に水源を持つ千代川及びその支流によって形成された沖積平野であり、鳥取城は、扇状に広がった鳥取市街地背後、平野の東北端にそびえる久松山(標高263m)に占地する。久松山は中世代末の花崗岩からなる孤立峰で、山頂は鮮新世火山岩類の玄武岩が覆う。この鳥取平野は、かつての因幡国に所在し、山陰諸国を貫く東西交通と、山陽地方とを結ぶ南北交通との結節点にあたる交通の要衝の地であった。鳥取城はまさにその平野を掌握する場所に立地し、久松山上からは、鳥取平野の大部分を見渡すことができ、千代川の河口や西の伯耆、東の但馬へ続く海岸線なども望むことができる。鳥取城を扇の要として鳥取市街地が広がるのも、その起源が鳥取城下町であることを如実に示している。

久松山は南西面とその背面が急峻な地形である。一方、北西は標高100m付近で尾根伝いに丸山方面の山塊と繋がり、他方、東側に横たわる山塊とは標高150m付近で尾根伝いに繋がっている。久松山麓の西面はかつて日本海へと注ぐ袋川の旧河川が蛇行して、低湿地を形成していたと言われ、鳥取の城下町は惣構の開削などで低湿地帯を克服しながら形成された。また、古代の中心地であった国府周辺へと続く古道が山麓を通っていたと考えられ、久松山麓は古くから河川交通と陸上交通の要衝であったと言われている。

2　歴史

鳥取城呼ばれる城は、２種類存在しており、１つは織田信長の武将であった羽柴秀吉による中国攻めの中、天正８・９年(1580・81)の２度にわたり実施された鳥取侵攻の頃、久松山頂に存在したとされる中世城館としての城と、もう１つは、その後久松山裾を中心に整備された石垣を持つ近世城郭としての城とであり、前者を「土造りの鳥取城」、後者を「石造りの鳥取城」として区別している。中世から近世への変遷過程が同山中にみられることが鳥取城の特殊性と言える。

写真１　久松山遠景

(１) 土造りの鳥取城と太閤ヶ平(中世鳥取城)

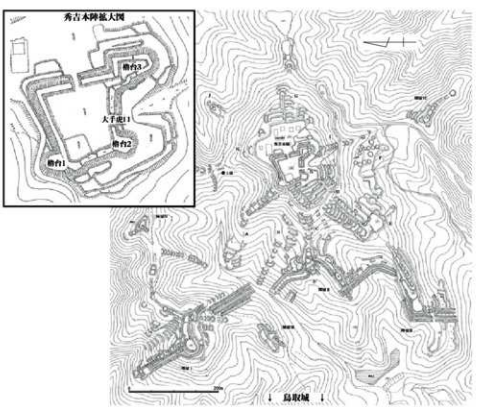
①沿革

土造りの鳥取城の起源は明確ではないが天文年間(16世紀中頃)に遡るとされる。鳥取城の所在する因幡は、西の伯耆、東の但馬と共に南北朝期以来、代々山名一族が守護職を継承してきた。勢力拡大を図る出雲尼子氏の支配下にあった因幡屋形山名誠通は、惣領家である但馬守護山名祐豊と支配権を巡り鋭く対立し、鳥取城はその過程で戦略的拠点として誕生したと考えられている。まもなく因幡山名氏は滅亡し、以後因幡国内は、かつて因幡山名氏の本拠であった湖山池湖畔の布施天神山城を中心に但馬山名氏による支配が進められる。一方、鳥取城は天神山城の出城としての役割を負っていたが、永禄６年(1563)城番として置かれた武田高信が主家である因幡守護山名豊数に対して反旗を翻す。豊数は鳥取城

を攻め、城にほど近い湯所での激しい戦闘の後、敗れることとなる。離反の背後には山除東部地域へと支配を強めていた毛利氏の影響があったとみられる。翌年には山名一族の惣領である但馬守護山名祐豊が因幡へ侵攻、鳥取城下へ迫るも高信の前に敗北する。その後両者は毛利氏の仲介にて和睦、山名軍は但馬へ引き上げたことで伯耆に続き、因幡地域もまた毛利氏の支配下に置かれることとなった。永禄９年(1566)毛利元就により月山富田城は落とされ、尼子義久は降伏したが、重臣であった山中幸盛を中心とした尼子の残党は再起を計り、尼子勝久を立てて蜂起、但馬守護山名祐豊の後ろ盾を得て出雲・伯耆で合戦を繰り広げ、攻勢に出るも、次第に毛利軍に押し戻され元亀２年(1571)頃までに一掃されてしまう。これら尼子勢力と結んだ最後の因幡守護山名豊国は、武田高信を鳥取城から退けることに成功、天正元年(1573)因幡の本拠を守護所のある天神山城から鳥取城へ遷したが、直後に毛利氏の調略により尼子と決別、鳥取城は再び毛利氏の支配下に置かれることとなった。

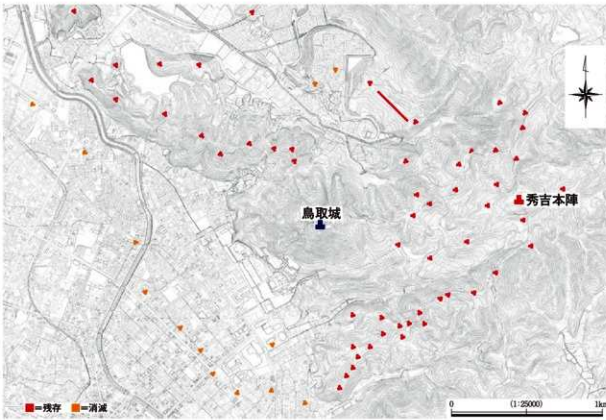
②羽柴秀吉の鳥取侵攻〔第６・７図〕

中国地方全体に勢力を広げつつあった毛利に対し、天下統一を目指す織田信長は覇権を因幡に接する但馬や播磨に拡大、鳥取城はその２大勢力の最前線に立たされることとなった。天正８年(1580)信長に命を受けた羽柴秀吉が因幡に侵攻する(第１次侵攻)。同時に弟の秀長は但馬へ侵攻、山名祐豊の居城出石城は陥落し、山名氏は没落する。秀吉の巧みな戦略の前に山名豊国は降伏を余儀なくなされたが、秀吉が姫路に帰陣すると俄かに情勢が変わる。毛利勢力が因幡まで勢力を盛り返すと、豊国の決定を不服とする重臣たちは山名豊国を追放し、代わって石見国福光城より迎えた毛利方武将の吉川経家を城主とし、再び秀吉に徹底抗戦し因幡国内を奪還する道を選ぶ。天正９年(1581)再び因幡へ侵攻した秀吉は、周辺の山々に大陣城群を巡らせ、鳥取城を厳重に包囲した(第２次侵攻)。鳥取城を取り囲む包囲網は海上・平野部・周辺の山々等あらゆる場所に及び、配置された陣城群の数は70ヶ所以上を数える。鳥取の「渇え殺し」と呼ばれるこの兵糧攻め作戦で、城兵はおよそ４ヶ月の間、飢餓状態で奮戦したものの経家の自決をもって降伏・開城した。播磨三木城攻めの「干殺し」・備中高松城「水攻め」とともに秀吉自慢の戦となったこの攻防戦の痕跡は山中にほぼ完存する。



第５図　太閤ヶ平周辺縄張り図

第６図　因幡鳥取城籠城布陣図　鳥取市歴史博物館



第７図　鳥取城攻め陣城分布図

③秀吉本陣の構造〔第５図〕

標高263mの久松山頂に占地する鳥取城に対し、秀吉は直線距離で東へ僅か1.3km程にある標高252mの本陣山山頂部に巨大な本陣を造営した。鳥取城は後に近世城郭として整備されたため、当時の様子を知ることはできないが、本陣及び周辺陣城群は明瞭な形で残存する。本陣は標高５mにも達する土塁と堀に囲繞された平面台形状を呈しており、内寸50m、堀を含めた外法は100mにも達する巨大な区画である。虎口は２ヶ所あり南虎口が大手、東虎口が搦手となりいずれも土橋を用いた平入り虎口である。幅3.5m、高さ1.8m、長さ6.2mの東虎口に対し、南虎口は幅６m、高さ２m、長さ8.5mを測り、前面には幅10mを超える大手道が南側へと続き、道を挟む両側には小形の帯曲輪が階段状に連続する。鳥取城を望む土塁の南西・北西隅部には櫓台１・２とした11m四方の突出部を持つ。櫓台３とした内寸幅16m、長さ31m程の突出部が南東隅部にもあり、内部は３段に区画され、土塁に囲われた窪地状であることから、半地下式構造を持つ櫓の存在が推定される。櫓台１・２の前面、鳥取城側に向けて帯曲輪が隙間なく８段程度造られており、大手道を挟む曲輪と連続しながら本陣部分の守りをより強固なものとしていたことが分かる。さらに西側、本陣との比高差100mほどの谷底にかけて曲輪群が造られる。谷底ではこの曲輪群に直交する形で堀が２～３条並列して掘られており、竪堀として両側に延びた後、横堀となって続き、その総延長は700～800mにも達する。堀の途中の尾根上には陣城を配して守りを固め、北端より谷を隔てた対面には数百mにもなる大土塁へと接続する。これら一連の大防衛ラインからも、秀吉側の周到さや圧倒的な兵站差を伺うことができる。信長の武将としての秀吉陣としては最大であるとともに、土造りの城としては最高潮にあったといわれるが、一方で、一城郭を攻めるためのものとしてはあまりにも規格外であることから、対鳥取城だけの目的で造営されたのではなく、日本海側における毛利氏との一大決戦に備えたもので、信長を迎え入れるための陣であったと考えられている。

（２）石造りの鳥取城（近世城郭）

①関ヶ原の合戦以前

石垣を持つ城郭整備は秀吉の鳥取侵攻後に城代として入った宮部継潤に始まり息子・長煕の代まで続いたとされる。後に五奉行となる有力武将であった継潤は、天正17年(1589)に至り豊臣秀吉から正式に知行を宛がわれ、因幡国７郡の内、４郡の５万石(但馬の一部を含む)を受領、名実ともに鳥取城主となった。子の長煕は慶長５年(1600)関ヶ原の合戦で西軍に属し改易となったため、その業績は不明な部分が多いが、宮部継潤父子は因幡における織豊政権の最重要拠点として、それまでの自然地形を利用した土造りの中世城郭から、石造りの織豊系城郭へと発展させ、現在の鳥取城の土台を造ったとみられる。

近世に行われた度重なる整備により改変を受けているため、旧来の姿を伺うことは困難であるが、山上に残る登り石垣や山下の楯蔵下段石垣などは、当時の面影を僅かに伝えている。

第８図　外神砦縄張り図

『外神砦脇の登り石垣』〔第８図〕

中世城館期を含む初期鳥取城における山上へと至る大手道は、現在の久松山南(正)面ではなく、東側にあったと考えられる。山上部の曲輪は東側を意識した構造となっており、織豊系城郭化が進むと尾根端部には外神砦と呼ばれる石垣造りの外桝形虎口が築かれる。急峻な斜面上に築かれた、大手口とみられるこの桝形からは南北方向へとそれぞれ石垣が伸びており、南側については斜面を30m程上昇しながら登り石垣を形成する。倭城に多様されるこの石積み技法は、朝鮮出兵に参戦した長煕が持ち込んだ可能性が高い。

『楯蔵下段石垣』〔写真２〕

多くの石垣が近代の改変を受ける中、後世の改変が行われていない数少ない石垣である。上段部分を含む山下の石垣中でも一見して様相が異なっており、その築造年代は山上部の外神砦同様16世紀代へと遡るとみられる。石垣勾配は比較的緩やかであり、角部の石積みをみると算木積みが未発達である点や、花崗岩質石材使用が基本である中、安山岩質を多様する点などの古相石垣に共通の特徴が残る。

②17世紀〔第９～11図〕

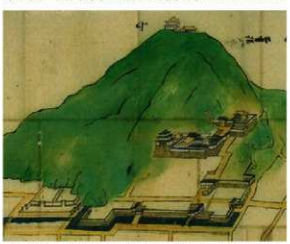
関ヶ原合戦で西軍についた宮部氏はその後没落、鳥取城は因幡地域で唯一東軍についた鹿野城主亀井茲矩に攻め落とされると、翌慶長６年(1601)因幡７郡内の４郡、６万石の知行を得て入城したのが池田長吉である。徳川政権は樹立されたが、大坂城には豊臣家が健在で豊臣恩顧の大名に対する支配強化のため、徳川家康は厚遇する池田家を西国境に配置したとも言われる。この時、姫路城に池田輝政、岡山城に忠継(輝政の次男)が入り、鳥取城には長吉(輝政の弟)ここに西国境の瀬戸内から日本海を縦断する徳川政権の拠点城郭網が構築され、鳥取城はその一翼を担った。

長吉は堀等の城郭部とともに城下も整備し、鳥取城の基礎を造ったとされるが、具体的な記録や遺構を確認することはできない。当時を描いた絵図は概略である第９図などが僅かに伝わるのみであり、詳細は不明である。なお、江戸時代の地誌を根拠に、これまで鳥取城の現存遺構のほとんどは池田長吉が構築したと信じられてきたが根拠となる『因幡民談記』(17世紀後半成立)には、局所的な普請の様子を詳述してあるが、現存遺構のほとんどを長吉が構築したという記載はない。

息子の長幸期の元和３年(1617)に備中松山城へと移封となり、交代で入ったのが姫路藩主池田光政である。光政入封に伴い小大名に分割統治されていた因幡と伯耆は統合され、現在の鳥取県域とほぼ同じ鳥取藩が誕生、検討の後、藩都を鳥取と定めた。しかし、姫路42万石から32万石へ減封されての入封と言えど、それまで６万石の居城であった鳥取城ではあまりにも手狭であり、大勢の家臣を養うための城郭・城下の大規模な整備が実施された。当時を描いた『因幡国鳥取絵図』(第10図)には、当時、最新鋭

写真２　楯蔵下段石垣

第９図　因州鳥取之城之図(部分)岡山大学付属図書館



第10図　因幡国鳥取絵図(部分)岡山大学付属図書館

第11図　鳥取城下之図(部分)鳥取県立博物館

第12図　鳥取城修覆願絵図　鳥取県立博物館

写真３　石黒火事とみられる火災跡（第34次調査）

写真４　太鼓御門前切石積石垣

第13図　鳥取城修覆願絵図（部分）　鳥取県立博物館

であった層塔型と想定される白亜の三階櫓が描かれるなどしている。天球丸の形態などは現在と異なっているものの、二ノ丸などと合わせ、幕末へと続く城郭の骨格部分の大半は、この時期に構築されたと考えられる。

幕府は寛永９年(1632)に池田光仲が３歳で岡山藩主を継ぐと幼少を理由に鳥取藩の光政との「御国替え」を命じた。光仲以降移封はなく、その家系が藩主を継ぐこととなり、ここに光仲を藩祖とする鳥取池田家が成立する。半世紀を越えるその治世の間に、光政期より続く城郭整備は進み、骨格部分の大半が整ったとみられるが、17世紀半ば以前を描いたとされる『鳥取城下之図』（第11図）をみると、内堀より内側部分に家臣団屋敷が多く確認できることからも、敷地不足の状況は引き続いているようであり、17世紀後半にかけて、徐々に堀外への移転が進む。元禄５年(1692)には久松山頂にあった天守が落雷により焼失する。檜皮葺等、瓦葺以外の屋根で描かれたこの建物は、その後再建されることはなく、以降、山下二ノ丸の三階櫓が天守代用施設として広く認識されるようになる。

③18世紀〔第12図、写真３〕

城郭が大きく転換期を迎えるのは３代藩主池田吉泰の治世である。吉泰は本丸を二ノ丸から中ノ丸（現三ノ丸）へと移転させるための大改築を実施、享保３年(1718)に完成した。しかし、享保５年(1720)４月１日、近世最大の火事と言われる石黒火事により山上ノ丸を含め、城内はほぼ灰燼に帰すこととなった。被害は建物だけでなく、翌年幕府へ提出された鳥取城修覆願絵図（第11図）からは、城内各所で石垣が崩壊している様子が分かる。火事の痕跡は発掘調査で度々確認されており、厚く堆積した焼土や赤変した石垣からも火事の大きさを知ることができる。大手門である中ノ御門の一部については当年中に再建されるが、その他の建物については期間を要し、三ノ丸と大手橋である擬宝珠橋は３年後、天守相当建物である二ノ丸三階櫓に至っては15年後のことであった。この再建工事に併せ各所で改変が進み、三ノ丸は堀側へ拡張されて現在の形となり、大手登城路も太鼓御門を抜けるルートへ変更された。また、中ノ御門から太鼓御門に至る大手登城路周辺では路面の嵩上げを確認した。これは焼けた旧面を

覆い隠すように土盛をし、新たな登城路を造るもので、最も厚い太鼓御門下では80cmを測り地盤高が上がるため、門高や石垣高は相対的に低くなる。さらに19世紀の初めにかけては、度重なる城下の大火事や大洪水、疫病や飢饉が流行する時期でもあり、大規模な城郭整備が再び実施されるのは19世紀の半ばから幕末期にかけてである。

④19世紀〔写真４、第13図〕

19世紀の半ばになると、本丸を三ノ丸から二ノ丸へ戻す動きが起こり、嘉永２年(1849)完成で敷地を北西方向へ拡張、石黒火事以来の御殿群の再建となったが、居住空間として不向きであると言う理由から、僅か数か月で放棄され、本丸機能は再び三ノ丸へ戻ることとなった。また、嘉永３年(1850)太鼓御門下手の登城路沿いに城内唯一の切石積みの石垣が構築される(写真４)。地震による崩落の修理として積まれたもので、人目に付きやすい部分をより丁寧に仕上げている様子が分かる。

城内最後の大整備は文久２年(1862)完成の三ノ丸大造成がある。南東側へ大拡張を行い、御宝蔵の移転、登城路の変更により、三ノ丸内の敷地面積を広げている。再び活性化した整備であったが程なくして幕末を迎えることとなる。

（３）近代以降の鳥取城〔写真５～８〕

近代に入ると、明治元年(1868)には大手橋である擬宝珠橋の架け替えが行われ、最後の太鼓橋となった。以降、城郭としての建物新築はなく、城は明治２年(1869)には政庁となるも、２年後の廃藩置県により国有化、所管は藩主から兵部省へと移管され、城郭機能は失われる。明治６年(1873)の所謂「廃城令」においては存城とされたものの、陸軍省の査定により兵営として利用できない大部分の建物(櫓門等を含む71棟)は明治８年(1875)に解体された。残った建物は改修され分遣隊の兵営として利用されるが、西南戦争の終結により隊は撤収、建物は売却されることとなり、明治12年(1879)には象徴的な建物であった二ノ丸三階櫓をもってすべての解体が完了したとされる。

その後、明治22年(1889)現在の鳥取西高等学校の前身となる尋常中学校が移転開学するが、この頃には桝形石垣奥壁部分が解体され、橋から一直線の進入路及びグラウンドが整備されたとみられる。時を

写真５　解体中の鳥取城(明治８～12年)

写真６　鳥取大地震で崩壊した太鼓御門石垣

写真７　二ノ丸三階櫓石垣修理(昭和36年)

写真８　久松公園のにぎわい(昭和38年)

写真9　擬宝珠橋復元工事

写真10　完成した擬宝珠橋

写真11　進行中の復元工事

同じくして城跡の旧藩主への払下げが認められ、再び池田家の所有となった。城内に学校は存在するも校地以外への立ち入りは認められてはいなかった。池田家出資のもと明治40年(1907)には皇太子の山陰巡幸に際しての宿泊施設として扇御殿跡に仁風閣(重要文化財)が建設され、大正期に入り大正12年(1923)には、折下吉延の設計により久松遊園地(現久松公園)として整備、公開された。また、市民の強い要望を受け、昭和４年(1929)には久松山の全山開放されることとなった。私財を投じて城跡整備が進められたが、昭和18年(1943)に発生した鳥取大地震では千人を超える死者が出ることとなり、城内各所で石垣が崩壊した。翌年には震災一周年の復興記念事業として、古跡の保存を条件に久松山が池田家より鳥取市へ寄贈された。

戦後になると昭和32年(1957)には国史跡となり、城郭の保護が図られると、次いで地震にて崩落した石垣の修理を開始、二ノ丸三階櫓下石垣に始まった工事は50年以上を経た現在まで毎年実施されている。園地には、動物舎が置かれ永らく動物公園として親しまれており、一部民地も存在したため住宅や売店などもみられた。昭和30年代になると木造橋は老朽化のため通行禁止となり、昭和38年(1963)には高校の新築と併せ現コンクリート橋へと架け替る。また、この工事と並行して実施されたのが桝形石垣の修理である。明治期に解体された桝形石垣奥壁のうち新造されていた端部が鳥取大震災により崩壊したもので、再度積み直しが行われ現在の形となった。昭和40年代に入ると堀の浚渫や堀沿いの石垣修理が実施され、昭和50年代に入ると公園内の民家や動物舎の移転が完了し、現在の公園へと整備された。

戦後幾度となく持ち上がった、鳥取城復元計画であったが本格的な計画策定に至ることはなかったが、平成17年(2005)に史跡鳥取城跡保存整備基本計画、翌年の実施計画でついに形となった。以降復元へ向けたデータ収集を目的とした試掘調査が開始され、第28次発掘調査からは本格的な前面調査へと移行、現在は復元工事として進行中である。

平成30年(2018)には、復元整備の第一段として擬宝珠橋の整備が完了し、一般共用が開始され、令和元年度(2019)現在は、中ノ御門表門の復元工事を実施中である。

3　鳥取城の姿

解体以前に撮影され、今に残る古写真は現在７点が確認されている。明治６年(1873)の所謂「廃城令」で存城とされ、明治８年(1875)には71棟の建物が不要とに分別され解体払い下げされた。三ノ丸(本丸)の建物は明治10年(1877)に改修を受け、姫路からの分遣隊の営所となるも翌年には廃止、明治12年(1879)には残存していた二ノ丸三階櫓などの建物すべてが解体撤去された。古写真は、撮影技師のいなかった鳥取において、明治12年(1879)に姫路の写真屋へ見習いに出ていた喜多村勘四郎を呼び戻して撮影されたとされる。建物の多くが存在していない写真12・14・15がその時写されたものと考えられるが、写真13については、中ノ御門・太鼓御門ともに残存し、鑓頭、佩刀する人物が写ることから、明治４年(1871)の散髪脱刀令以前へ遡る可能性があり、喜多村とは別の撮影とみられる。

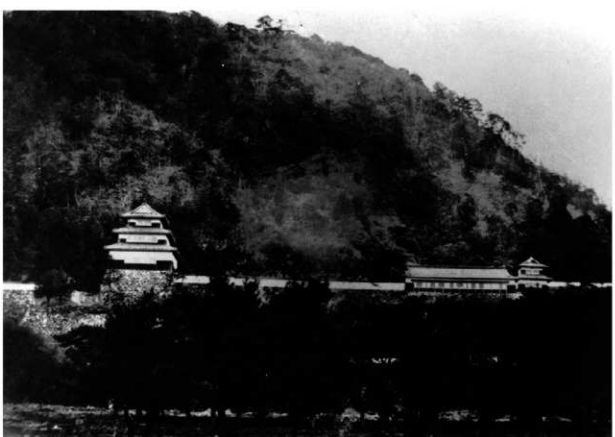


写真12　二ノ丸(左から三階櫓、走櫓、菱櫓)

写真13　中ノ御門(手前)と太鼓御門(奥)

写真14　二ノ丸遠景

写真15　擬宝珠橋三階櫓

写真16　現在の姿

表7　鳥取城跡関連年表1

西暦	元号	出　　来　　事
1545	天文14	久松山に出城が築かれたとされる(それ以前より中世山城として存在か)
1562	永禄5	城番であった武田高信が久松山を拠点として、因幡守護の山名氏に反逆
1573	天正1	武田高信を退けた因幡守護山名豊国が、布施天神山城から鳥取城に守護所を移転
1580	天正8	羽柴秀吉の第1次鳥取侵攻、城主山名豊国降伏、後に豊国追放され毛利方が鳥取城を再奪還
1581	天正9	羽柴秀吉の第2次鳥取侵攻、兵糧攻めの末、毛利方降伏、城主吉川経家切腹
1581	天正9	秀吉の武将、宮部継潤(後に5万石)が城主となり、近世城郭へと改修開始
1600	慶長5	関ケ原の戦いで西軍に付いた宮部氏は没落、池田長吉が6万石で城主となる
1617	元和3	池田光政による因幡・伯耆の両国支配。鳥取を32万石の藩都に選定、鳥取城を居城とする
1619	元和5	城と城下町の大拡張工事着手
1621	元和7	擬宝珠橋が創建
1632	寛永9	池田光仲が城主となる(鳥取池田家の成立)、やがて鳥取城下に水道施設が整備される
1678	延宝6	擬宝珠橋架け替え
1692	元禄5	山上ノ丸の天守が落雷により焼失、以後再建されず
1694	元禄7	擬宝珠橋架け替え
1715	正徳5	擬宝珠橋架け替え
1718	享保3	中ノ丸が拡張され、藩主(城主)の居所が移る。以後、中ノ丸を二ノ丸(後に三ノ丸)と呼称する
1720	享保5	4月1日城下の大火(石黒火事)により、城内ほぼ全焼、 中ノ御門表門は同年再建
1721	享保6	大手登城路、三ノ丸を中心に再建工事開始、2年後に完成
1722	享保7	堀浚渫
1723	享保8	擬宝珠橋再建される、三ノ丸普請完成
1724	享保9	中ノ御門渡り櫓再建
1726	享保11	南御門再建
1728	享保13	石黒火事で被災した二ノ丸三階櫓石垣の修理完了
1729	享保14	袋川洪水、大手橋の内まで浸水
1733	享保18	内堀浚渫
1735	享保20	二ノ丸の三階櫓、走櫓は再建されるが、御殿は再建されず
1749	寛延2	擬宝珠橋架け替え
1774	安永3	擬宝珠橋架け替え
1800	寛政12	内堀浚渫
1802	享和2	内堀浚渫
1803	享和3	擬宝珠橋架け替え
1807	文化4	この頃、天球丸の巻石垣が築かれる
1825	文政8	幕府より屋根瓦への葵文使用を許可される
1843	天保14	二ノ丸走櫓など焼失
1846	弘化3	二ノ丸の御殿、菱櫓、表御門など再建され、一時的に藩主の居所が三ノ丸から二ノ丸へ移る
1849	嘉永2	二ノ丸を西方へ拡張
1850	嘉永3	大手登城路沿いに城内唯一の切石積み石垣構築
1858	安政5	三ノ丸の南側に穀蔵が建設、城域が拡張する
1861	文久1	三ノ丸を東側へ大拡張

表８　鳥取城跡関連年表２

西暦	元号	出　　来　　事
1863	文久３	扇御殿、宝隆院庭園(現存)が造営
1867	慶応３	西坂下御門(現・復元門)が創建
1868	明治１	擬宝珠橋架け替え
1871	明治４	廃藩置県後、兵部省の管轄となり、政庁の機能が城外に移転
1873	明治６	廃城令で軍事上の必要性が認められた鳥取城は、存城となり、陸軍省の所管となる
1875	明治８	陸軍省によって不要な71棟の建物が解体撤去
1877	明治10	姫路歩兵隊の分遣隊派遣が決定、兵舎として三ノ丸御殿等を転用
1879	明治12	西南戦争終結後、治安安定により分遣隊の撤退が決定 大型建造物(二ノ丸三階櫓等)を撤去。城内の解体撤去完了
1884	明治17	陸軍、城内井戸へ木樋を設置し取水する
1889	明治22	陸軍から中学校用地として三ノ丸が鳥取県へ無償貸与され、尋常中学校が移転開学
1890	明治23	陸軍から旧藩主鳥取池田家へ城跡の払い下げ
1907	明治40	扇御殿跡に仁風閣が建つ
1912	明治45	二ノ丸、天球丸で山陰鉄道開通式協賛会開催
1923	大正12	久松遊園地開設。翌年、城代屋敷跡に鳥取公設運動場が開設
1936	昭和11	久松山全山が市民に開放される、鳥取城復興期成会が結成
1943	昭和18	鳥取大地震により城内各所で石垣崩落。運動場は仮設避難小屋群となる
1944	昭和19	城跡が旧藩主池田家より鳥取市へ寄贈される
1945	昭和20	占領軍が入る
1954	昭和29	鳥取県が史跡鳥取城跡を文化財として仮指定
1957	昭和32	鳥取城跡、太閤ヶ平とともに国史跡に指定
1959	昭和34	鳥取大地震により被災した石垣の修理工事開始
1969	昭和44	久松ロープウェイ開業、昭和50年(1975)まで営業
1985	昭和60	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存管理計画策定
1987	昭和62	久松山北側(円護寺)が追加史跡指定
2005	平成17	史跡鳥取城跡保存整備基本計画策定
2006	平成18	史跡鳥取城跡保存整備実施計画策定
2018	平成30	擬宝珠橋復元工事完了、一般共用開始

第Ⅲ章　調査の方法

1　調査区の設定

調査期間及び面積は、第40次発掘調査は平成28年(2016)７月11日から12月12日までの808㎡、第41次は平成29年(2017)６月12日から12月20日までの610㎡である。調査前の周辺状況は写真17の空中写真に写る通り、第40次第２調査区および第41次調査区は鳥取県立鳥取西高等学校グラウンド、第40次第３調査区はグラウンドを見下ろす、コンクリート製スタンド部分にあたる。調査にあたっては、コンクリート構造物や、近現代グラウンド造成土をバックホーにて除去し、以下は人力掘削とし、完掘後は三次元測量とオルソ図撮影を行った。41次を数えるこれまでの発掘調査数のうち復元整備を目指す大手登城路及び周辺で実施した調査の範囲については第14図に示す通りであり、第31・39・40次調査については既調査済範囲を含めた全面調査である。第27次調査以降の本調査については三次元測量を行い、調査毎にこれらを合成し一体化したものが、第15図の調査区平面図とオルソ図である。

調査地点は異なるものの互いに隣接しており、調査年度を跨いでいても一連の遺構である場合については、遺物と併せ一括して報告を行う。

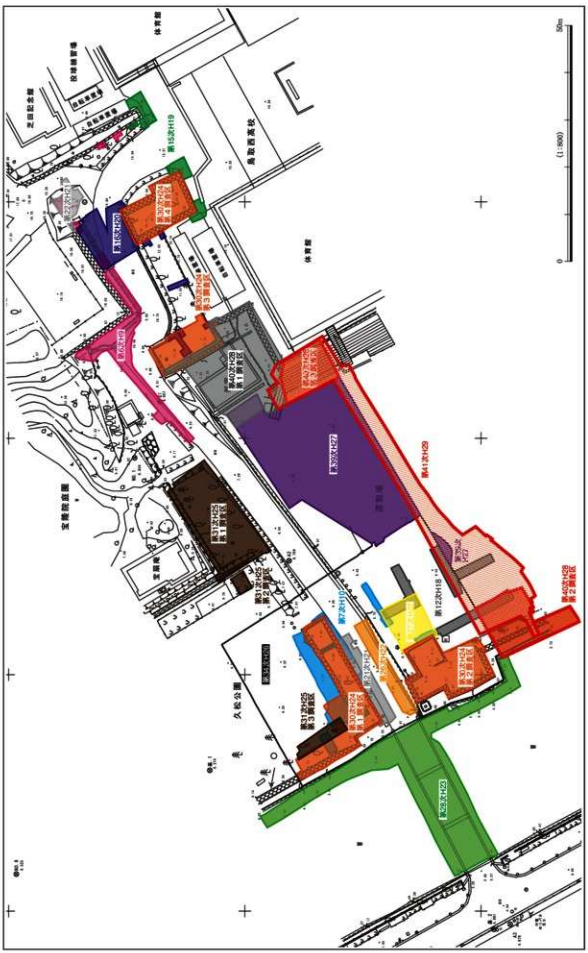
（１）第40次発掘調査

調査期間は平成28年(2016)７月11日から12月12日調査面積は808㎡。第１～３の３つの調査区に分かれており、第１・２調査区は発掘調査を行い、第３調査区については翌年の発掘調査へ向けた準備を行ったのみである。

第１調査区は、第39次調査区の北東辺より北東方向の三ノ丸下段の端部となる切石積石垣までの長さ18m、北西側のコンクリート水路から南東側の三ノ丸石垣までの幅16mの範囲を対象として設定したもので、平成30年(2018)に刊行した『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅳ』にて報告済である。

第２調査区は、これまでの調査にて検出されていた主要排水路である「大溝」の下流に設定した。大溝は城の城上層部より続く一連の排水路であり、調査により顕わとなって以来、常時通水する排水路として機能を回復し、降雨時にはかなりの水が集中することとなったが、下流部分については復元整備範囲外の学校グラウンド内となるため、連続してして掘削することはできず、末端付近で辛うじて検出できた中ノ御門側へ直交して伸びる小型の分水路内へ250㎜配管を埋設し排水を行った。しかし、この管では大雨の際に排水能力を超えてしまい整備後の排水経路問題の解決には至らず、抜本的な対策が求められた。このことから、絵図面を検討すると、天保15年(1844)に描かれた『鳥府久松山鳥取城積間図』には、大溝の延長上の下流付近に堀へ通じる「水溜」が描かれいることが分かった。大溝自体は、どの絵図にも見られないため暗渠と考えられるが、この水溜と接続する一連のものであると想定し、これらを一体的に検出し、調査後は溝内に管を設置、水溜部分を会所とし堀へ排水することを目指した。水溜を含む大溝下流部分は、学校グラウンド内にあるため、高校側と協議し、学校運営に支障の無いよう最低限の範囲とすることとし、当年は水溜部分の確認を行い、翌年度以降に接続水路部分の調査を実施する予定とし、南東側へ幅９m、長さ８mの第２調査区を設定した。しかし、絵図の想定位置を超え、調査範囲内で水溜を発見することはできず、さらに３m南東側へ調査区を拡張してようやく検出へ至った。また、その形状も絵図にある縦長のものとは対照的に横長であった。現場作業終了後は、次年度以降の史跡整備の埋め戻しへ備え、埋蔵文化財保護シートで遺構を養生した。

第３調査区は、高等学校講堂下の斜面部分にあたり、グラウンドを見下ろすコンクリート製のスタンドが階段状に敷設されていた。翌年に発掘調査を実施予定であったため、当年はその準備段階として重機を用いてスタンドを除去、その下層にあった近代面の掃除に留めた。その際、近代層に包含された、



第14図　大手登城路周辺調査位置図

近世遺物の出土をみたが、これらについては、第41次発掘調査出土分と併せて報告する。

（2）第41次発掘調査

調査期間は、平成29年(2017)６月12日から12月20日、調査面積は、610㎡である。昨年度撤去したコンクリート製スタンド下の斜面部分と史跡整備範囲際のグラウンド内の発掘調査である。後者について、史跡整備に合わせた学校グラウンド整備では、天場面を現状より嵩上げし、境界にはＬ字のコンクリート擁壁を置く設計となったため、設置部分を調査するもので、併せて、検出済みの大溝の延長上、昨年度検出した水溜までを完全に検出して排水管を設置することを目指した。グラウンド側へ４m、大溝から水溜までは、溝に沿うように斜め方向に調査区を設定した。しかし、調査を開始すると、大溝は直進しておらず、45度ほどの角度を付け緩やかに屈折してしていることが判明、調査区外のグラウンド下へ伸びることから、学校との協議を行い、３mほど調査区を拡張することで、流路の全容が明らかとなった。流路に対し横方向に長い水溜は、学校グラウンドとの取り合い上、全体の三分の一程は未検出の状態で残地していたが、雨量の増加によりこの部分が崩落したため、調査区を拡張し、全体を検出することとなった。

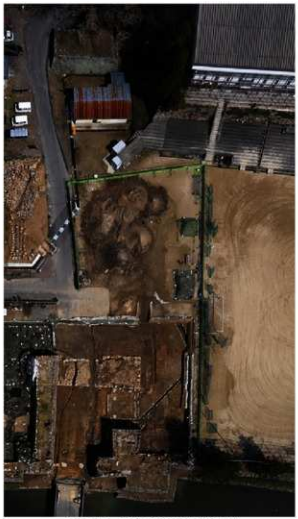


写真17　調査前の状況(2014)

調査終了後は溝内に管、水溜内に会所を設置、城上層より流れ落ちる水を堀へ排水することが可能となった。スタンド下部分は、今後の整備に備え、遺構保護のための不織布を敷き、その上から埋蔵文化財保護シートを重ねて保護し、それ以外については、学校グラウンドとなる範囲であるため、遺構面に保護のための不織布を敷き、上部に保護砂を敷き埋め戻しを行った。

2　名称及び出土遺物について

近世当時擬宝珠橋を渡ると正面には城の正門にあたる中ノ御門表門があり、ここを抜け桝形石垣内へ歩を進めると緩やかに上昇する傾斜路が続く。これを進み正面の桝形石垣奥壁前で右折すると、眼前に迫るのが中ノ御門の内門となる櫓門である。石垣間に立つ、この２階建ての門を抜けた先はいよいよ城内であり、さらに登城路を進むと、坂道へと繋がり、外桝形石垣を通ると、本丸入口の主要な門である太鼓御門に至る。左右石垣間に跨るこの渡櫓門は一階部分が門、二階部分には時を知らせる太鼓が置かれたことにその名が由来し、これらを通った先、現在の鳥取西高等学校のある場所が、本丸となる三ノ丸である。

鳥取城の正門にあたる"中ノ御門"とはこの両門の総称であるが、文献上にもそれぞれの門自体に正式な呼称がなく、便宜上、堀に面した正面の門を"表門"、内門を"櫓門"と呼称していることから、調査・報告に際してもこの名称を使用した。

調査で出土した遺物の多くは瓦であり、次いで陶磁器類などが挙げられる。出土遺物の大半を占める瓦・陶磁器類であるが、いずれも細かく割れた破片ばかりであり、接合が可能なものは少なく、接合で

きたものを含めても残存率は全体の２分の１以下と非常に小さい。今回報告する遺物は、その中でも図化し得た遺物であり、土器類については径を復元できるものを、瓦については瓦当面を有するもの及び全形が分かるものを選定したものの、出土量全体と比較すると僅かな数に留まる。なお、掲載遺物の計測方法については第131図の通りである。

3　基本層序

基本的な層序は、現代(グラウンド)造成層・近代造成層・近世層の３層で構成される。地表面にあたる現グラウンド面の標高は北東側のスタンド下で6.8m、南西側(写真18)で6.5mと堀側へ向かい緩やかに傾斜する。層位の上半を占める黄橙色系の真砂土は学校グラウンドの整地層であり、厚さ５～10cmの単位で幾層も重なりあう。所謂グラウンド土であるこの黄色い土は、現校舎が完成した昭和38年(1963)の写真にはすでに確認できる。戦前の学校写真をみると、当初、堀側石垣天端より数石分下にあったグラウンド面は、嵩上げを繰り返した結果、現在では石垣よりも高く位置する。幕末期面より最大100cm以上も嵩上げされたグラウンド面は、調査後の学校整備にてさらに嵩上げされ、現在の標高は7.0m付近にある。

このグラウンド土の下には褐色系の近代造成層がみられる。固く締まったこの層は20～30cm程度の厚みがあり、近世遺物を多く含むことから、近代でも比較的古い時期の層と考えられる。これらを除去した標高6.0m(北東側)～5.3m(南西側)には黄色系の砂礫を主体とする近世層が広がる。検出した近世面は幕末期面であり、他調査地点同様、近世期に度々再整地が行われ、次第に路面が嵩上げされていることを確認した。

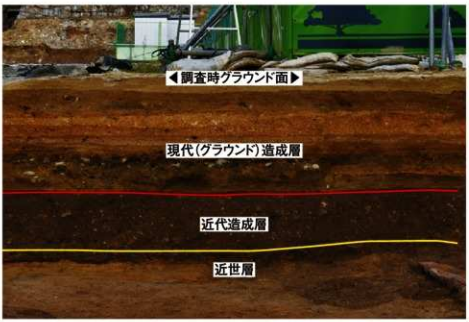
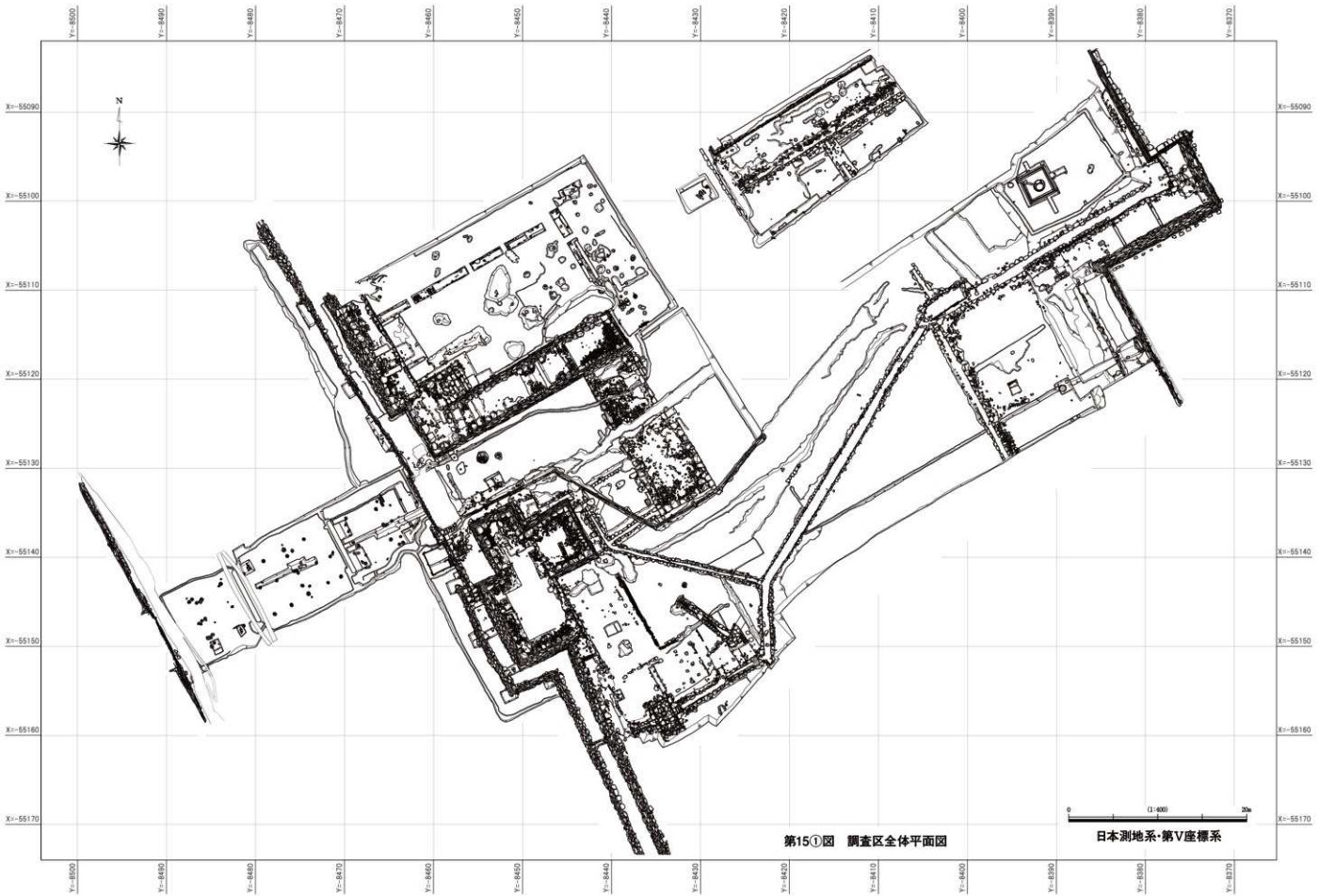
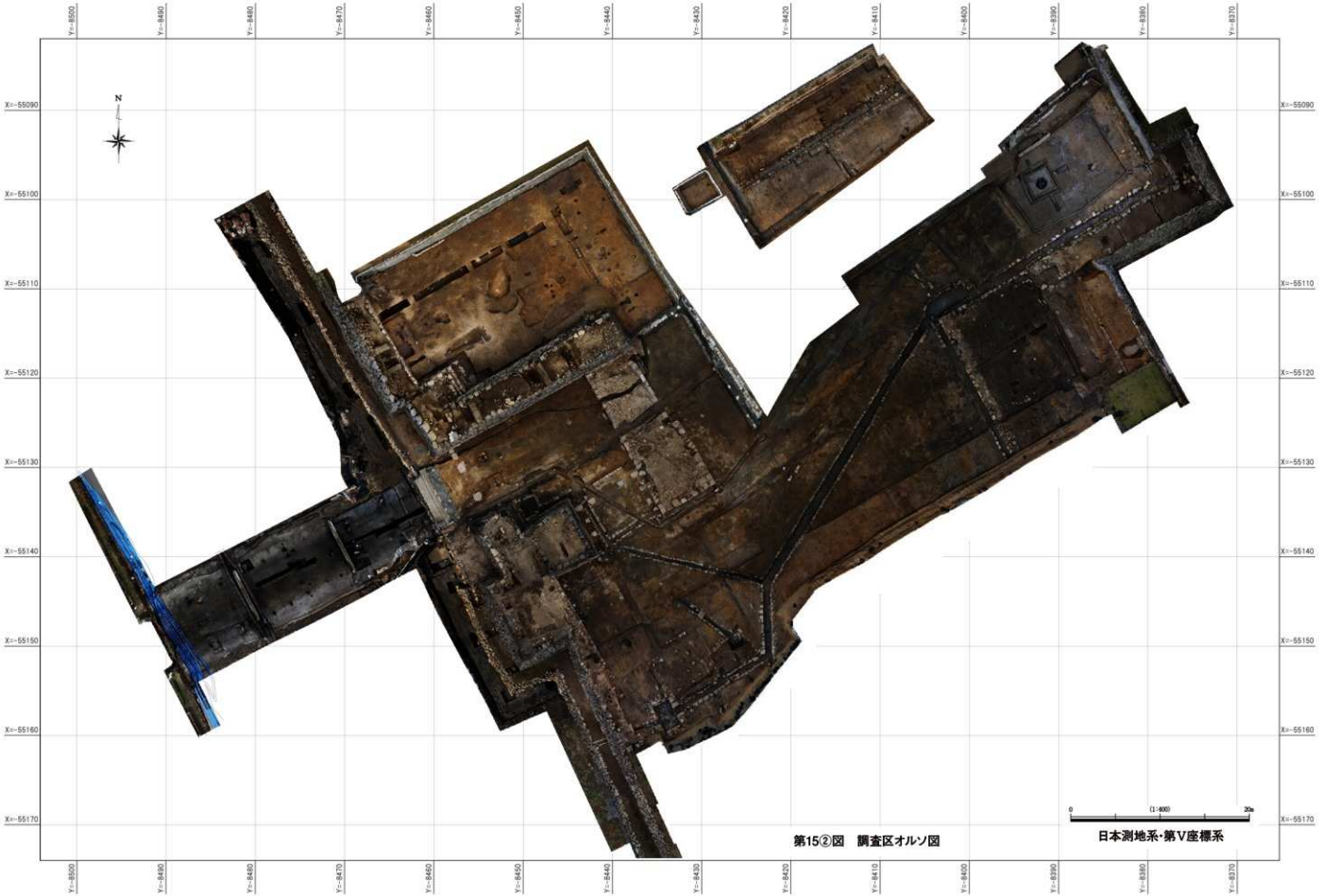


写真18　調査区基本層序



第15①図　調査区全体平面図



第15②図　調査区オルソ図

第Ⅳ章　調査結果

第40次発掘調査

1　概要

平成28年(2016)に実施した第40次発掘調査は第１～３調査区で構成され、第１調査区については平成29年(2018)に刊行した史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅳにて報告済みである。第２・３調査区は翌年に本格的な発掘調査(第41次発掘調査)が行われることとなっていたため、詳細については次項でまとめて報告する。

調査区は、中ノ御門を抜けた先、本丸下段の広場部分に位置し、久松山へ向かい大手登城路の右側部分にあたり、南ノ御門からも繋がるこの曲輪には、供者が控える大腰掛や番人小屋などが置かれ、参勤交代の出発、帰城の際には隊列が並ぶ空間ではあるが、曲輪自体に呼称はない。

第１調査区付近は城中枢とを区画する下乗石の内側にあたり、参勤交代時の儀礼を行う場所でもあったことで知られ、調査の結果、残念ながら近代に水溜を作るための大規模掘削が行われたため、調査対象であった幕末期路面は失われていたが、御用井であった「車井戸」の地中部を検出した。

第２調査区は、堀側の石垣沿いに設定した幅12×長さ８mの調査区である。復元整備範囲外の高等学校グラウンド内にあり、第39次調査までに確認した主要排水路である「大溝」の末端部分、絵図に残る「水溜」の確認を目的とした。暗渠であったとみられる大溝は絵図には描かれないが、開渠とみられる水溜は絵図に残ることから、この水溜を流末の会所と想定し、検出に努めた。整備計画の段階から排水処理の問題が挙がっており、当初近現代の撹乱部分を利用しての管理設も想定していたが、予想最大降水量に耐え得るかが課題となっていたところ、大溝発見により、大型管を設置できる空間を確保できる見通しがついたことから、今回この水溜を検出し、再び会所として利用し堀への排水することを計画した。しかし、想定位置はグラウンド内にあることから、高等学校と協議、利用頻度が下がる秋以降に着手することとなった。重機を用い、表土部分となる現グラウンド整地層を除去し、下層は人力にて掘り下げを行った。絵図からの大まかな想定では、グラウンド側へ５～６mほど進んだ位置での検出を想定し、９mの位置までを調査対象としたが、全容把握には至らず、範囲内で検出できたのは水溜の一部とみられる石列のみであったため、高等学校と再協議し、範囲をさらに３mほど南東方向へ拡張した。結果、石列は水溜(報告では桝)の側壁であることが判明するも、その位置は想定より大きく離れており、またその形態は絵図にある堀に対し縦長ではなく、横長であることが判明した。また、大溝沿いでは建物跡とみられる石列や礎石も検出した。水溜は大溝の延長線上に位置することから、この間の大溝は翌年に調査することとした。

第３調査区は、三ノ丸の下方、石垣沿いの斜面部に設定した幅14×長さ８mの調査区である。それまでこの位置にはグラウンドを見下ろすコンクリート製のスタンドが設置されていたが、復元整備に合わせその範囲部分を中心に撤去した。斜面部分は絵図中にもみられ、青木馬場の一部として利用されいることから、現在露出する三ノ丸石垣は、下段となる広場部分までは露出しておらず、元々土盛があったと想定していた。重機にてコンクリートを破砕し撤去すると下部より近代物を含む近代旧表土が現れ、一部にはそのさらに下層にある、黄褐色の砂礫面が見えたことから、この層が遺構面である可能性が高いと想定した。本格的な発掘調査が翌年に予定されており、当年度はスタンド部分の撤去が主目的であったため、これ以上の掘削は行わなかった。

第２・３調査区ではそれぞれコンテナ数箱程度の量の遺物を表採・検出したが、こちらについても第41次発掘調査分と併せて報告する。

第16図　第40・41次発掘調査範囲図

第41次発掘調査

1　概要

三ノ丸下段に広がる広場部分、復元整備範囲の南東辺全体に跨り設定した調査区で、調査期間は、2017年(平成29)６月12日から11月９日、調査面積は、610㎡である。大きく３つに分かれており北側より順に①第40次発掘調査第３調査区である昨年度撤去したコンクリート製スタンド下の斜面部分および平地の馬場部分、②大溝を除く史跡整備境界にあたるグラウンド下部、③第40次発掘調査第２調査区で検出した水溜(桝)から②の境界に至る拡張部分の発掘調査である。大溝については、②から③区を跨ぐが、後者の項で報告する。鳥取城では、近世期の間に度重なる地盤の嵩上げが確認されており、近世初頭と幕末との遺構面には最大１m近い開きがみられるが、復元を目指すのは幕末期の姿であり、国指定史跡であることから、基本的には下層を掘り下げることはなく、必要が生じた場合、最小限度のトレンチ調査としている。

①の範囲について、前年度に行ったスタンド撤去時に遺構面らしき黄褐色の砂礫層が一部に見えていたため、全てを人力掘削とした。また、斜面部と石垣との関係を見るために２ヶ所にトレンチ(Tr１・２)を設定し、Tr１については、平地部分まで延長した。調査終了後は、トレンチ部分は埋め戻しを行った上で、全面に遺構保護のための不織布を敷き、その上から埋蔵文化財保護シートを重ねた。他地点では、不織布の上に真砂を用いた保護層を敷くが、当該地は急斜面部であることから、現時点での真砂敷きは叶わず、シート養生として今後の整備に備えることとした。平地部分に下りると、馬場を区画するための石垣と溝の続きを検出したが、上面はかなり掘削されたとみられ、本来の馬場面を検出することはできなかった。

②の範囲について、史跡整備に合わせた学校グラウンド整備では、天端面を現状よりさらに嵩上げして新たなグラウンド面を造ることとする一方、復元整備面は現況より掘り下がる位置にあることから、境界付近は壁ができてしまい、この段差解消のためにL字のコンクリート擁壁を並べる設計となった。このため、設置部分についてグラウンド側へ向い幅４mほど拡張して調査した。調査に先立ち、重機にて上層にある現代のグラウンド造成土部分を除去、近代造成土以下は人力にて掘り下げを行った。近世当時は広場となる空間部分であったため、個別の遺構はみられなかった。調査終了後は、遺構面に保護のための不織布を敷き、その上に真砂による20㎝の保護層を設けてから擁壁を設置した。

③の範囲について、検出済みの大溝の延長上、昨年度検出した水溜までを完全に検出して排水管を設置することを目指し、溝に沿うように斜め方向に調査区を設定した(第16図赤線)。②同様、調査に先立ち、重機にて上層にある現代のグラウンド造成土部分を除去、近代造成土以下は人力にて掘り下げを行った。しかし、調査を開始すると、大溝は直進しておらず、45度ほどの角度を付け緩やかに屈折してしていることが判明、調査区外のグラウンド下へ伸びることから、学校との協議を行い、３mほど調査区を拡張することで、流路の全容が明らかとなった。流路に対し横方向に長い水溜は、学校グラウンドとの取り合い上、南東側の三分の一程は未検出の状態で残地していたが、雨量の増加によりこの部分が崩落したため、調査区を拡張し、全体を検出することとなった。また、遺構面を精査中、石垣とみられる石列一部を確認したため、トレンチを設定し掘り下げ行ったところ、ある時期に埋め立てられた、本来の流路と桝、およびそこから分岐する水路であることが判明した。復元整備対象とはならない古い遺構ではあるが、特に重要と判断されたため、個別に調査を行った。調査終了後は、溝内に管、水溜内に会所を設置、立坑を新たなグラウンド面へ伸ばした。これにより、城上層より流れ落ちながら大溝へ集約された水を近世当時と同様のルートで堀へ排水することが可能となった。この拡張部分については、学校グラウンドとなる範囲であるため、排水管と会所を設置後には、遺構面に保護のための不織布を敷き、上部に保護砂を敷き埋め戻しを行った。

2　石垣修理

堀への排水は可能となったが、水溜の下流にあたる石垣の暗渠部分は一部が塞がっており、水路として完全には機能していなかった。これは、以前暗渠部の直上に木が植えられていたことに起因するとみられ、伸びた根により、水路が破壊され、石垣は若干孕みが出ていた。この部分の石垣をみると、暗渠部を中心としてV字に積み直しの痕跡が残ることから、暗渠は石垣構築当初からのものではなく、後に改修あるいは新設されたことが分かる。このため、調査終了後には、暗渠の機能回復を目的とした、石垣解体修理を行うこととなり、V字の積み直しラインまでを解体した。解体の結果暗渠部は、蓋石として板状に切り出した緑色凝灰岩(グリーンタフ)を乗せて造られており、その蓋石が割れ内部に土が流入していた。第94図中、石垣内部のオルソ図は、この石垣修理工事の際に測量されたものである。

3　発掘調査

①区

（1）斜面〔第17～19図、図版1・2〕

①斜面

三ノ丸下から馬場の平坦部までの斜面部の調査面積は約185㎡である。第40次発掘調査にて重機を用いコンクリート製スタンドを除去すると、直下には黒褐色の近現代層を確認し、第41次発掘調査にてこれらの土を除去した。斜面部の最も上、三ノ丸下段石垣沿いには、近代以降、通路として利用され、石垣角付近には下へと降りる階段が設けられていたこともあり、黒褐色土は、上部では30㎝を超えて厚くみられるも、斜面部は15㎝程度の被覆であった。これらを除去すると、黄褐色を呈す、砂礫土を固めた旧斜面が現れる。斜面の途中、三ノ丸下段石垣より3.5mの地点にはこれらと並行する石列も確認したが、石列の前面は大規模な削平を受けていた。斜面部と石垣の構築状況を確認するためにトレンチを2つ(Tr 1・2)を設定した。両トレンチともに、調査中の記録的集中豪雨により壁面が大きく崩落したことにより、測量図と断面写真とに違いがある。

以降、便宜上、中間の石垣より上を斜面上段、下を斜面下段と記述する。

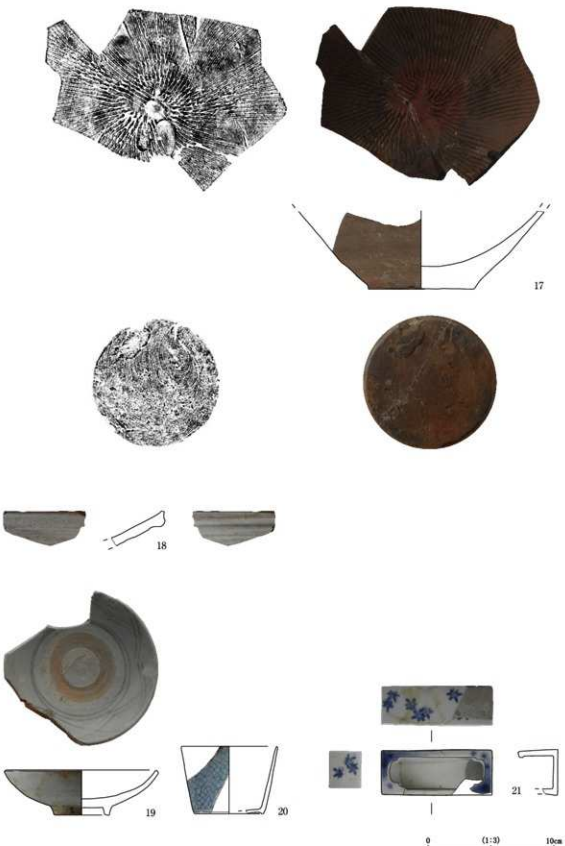
②中央石垣

三ノ丸下段石垣裾から南西(前面)側へ2.7mの位置に併行する形で並ぶ。トレンチ調査から明らかなとおり、本来は少なくとも2～3段程度を積む石垣であったが、上部は解体され最下段のみが残存する。石材の幅は70㎝程度を中心に、最大100㎝程までがみられ、向かって右側は調査区外より続き、左側はトレンチ2付近まで続くもその先はなく、背後の石垣へ折れて続くこともない。上段がないため全容は不明であるものの三ノ丸下段石垣の石積みに似た印象を受ける。石垣の底は、背後の三ノ丸下段石垣底とほぼ同じか僅かに高い標高7.5m付近にあり、トレンチ2の調査より、三ノ丸下段石垣内へ続く平坦面上を整地し石垣を積む。背面に裏栗石もみられるが、この最下段の背面のみである。

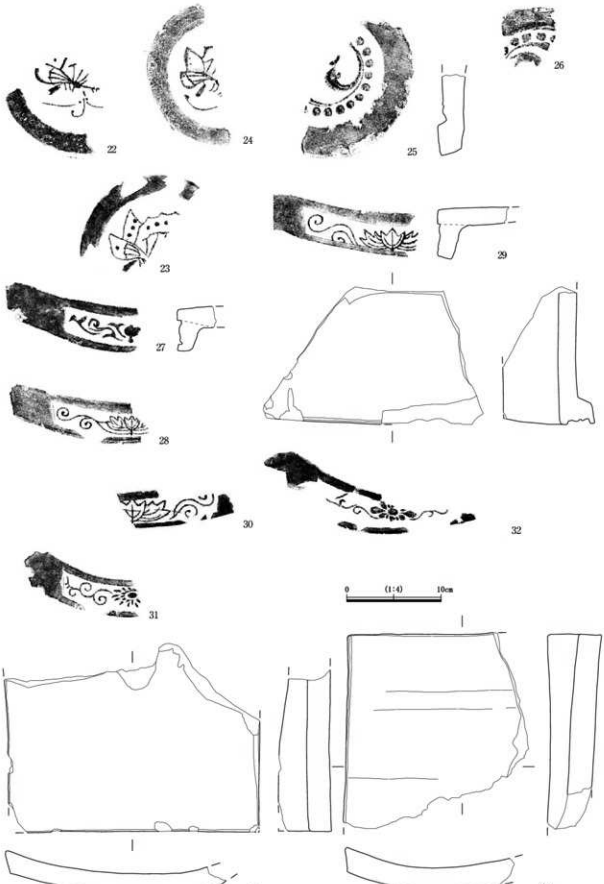
③遺物〔第20～24図〕

両トレンチ以外出土の遺物を扱う。基本的にはスタンド設置に関係する掘削土中に含まれる遺物であり、一部は近代初頭と考えられる焼土層より出土した。1～5は陶器碗、1は肥前の刷毛目碗、2は在地、因久山焼の碗で高台付近に「因久山」の刻印は幕末期五代目のもの。3・4は19世紀代代の在地系とみられ、4はきめの細かい胎土を用いる。5は肥前の刷毛目碗、6は19世紀代の在地の灯明皿でよく見られる赤褐色ではなく、暗褐色の鉄泥を内外に塗る。7は陶胎施釉、8～10は肥前の灰釉皿で、8・9は砂目跡、10は胎土目跡がみられ、11・12は焼塩壺、13～16はその蓋であるが直接合致はしない。いずれも関西系とみられ11の外面には枠で囲われた刻印があるが、内部の文字を読み取ることはできず、蓋の内面には布目が残る。17は肥前擂鉢で底部糸切り、18は肥前灰釉皿、斜面出土であるが、19図オルソ図の左下、Tr 2付近の標高6.5mに広がる焼土中より出土したもので、Tr 2の19層上面付近、土色が大きく変わるところに位置する。19～21は磁器、19は肥前系の皿で見込みは蛇の目釉剥ぎで、在地産の

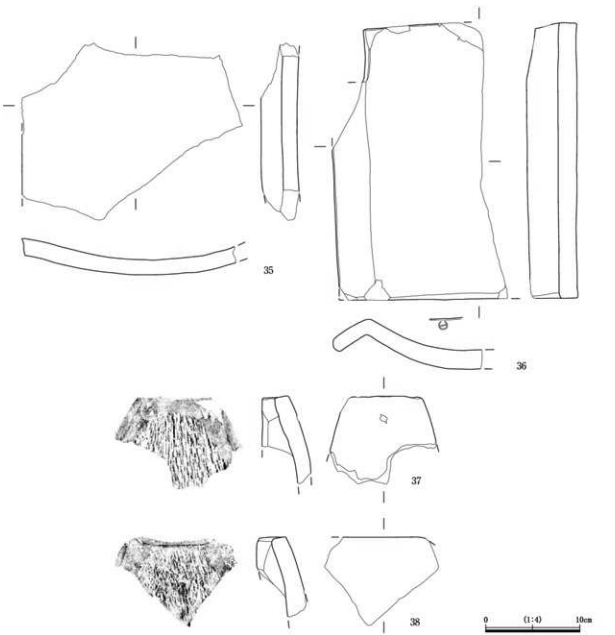
第20図　①区斜面出土遺物実測図1



第21図　②斜面出土遺物実測図2



第22図　①区斜面出土遺物実測図3

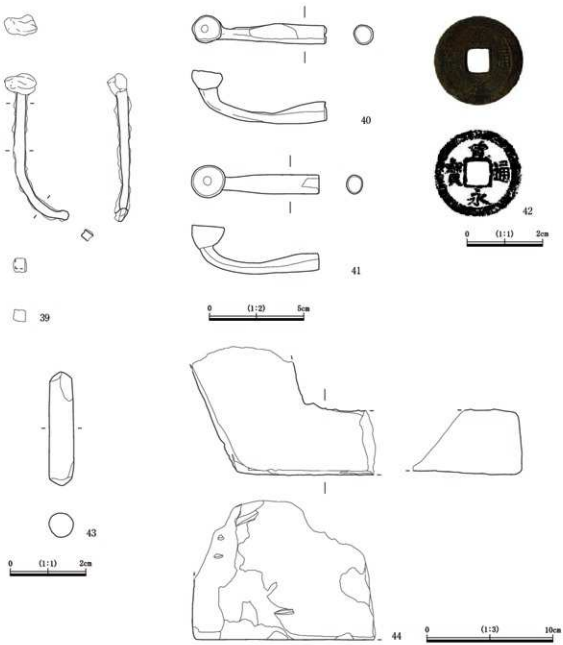


第23図　①区斜面出土遺物実測図4

可能性もある。20は肥前系猪口、外面は氷裂文、21は角型の筆洗いか。

22～38は瓦、22～26は軒丸瓦、いずれも17世紀代のもので、22・23は蝶４型、24は蝶６型か、向かって右を向く形の蝶、25は巴16型、巴文で巴頭が時計回りに巻き込み、珠文は22個と推定される。26は珠文が17個となる巴13型か。27～32は軒桟瓦、軒丸瓦とは異なり、18世紀後半代以降のものが多く、28～30上向き三葉文、31は右軒桟瓦の花文、32は右軒桟瓦の花文で唐草の形態は幕末期にみられる小振りなものである。33は平瓦、33は幅27cmを計り、両者とも厚みがある、35も平瓦とみられるも薄手、36は右桟瓦で弧が深く、小口には○に『一』を入れた刻印を押す。類似品として㊀となるものは、幕末に近い時期に多く見られるが、㊀はみられない。37・38は輪違いの棟込め瓦で、38の方が若干幅広となる。

39は頭巻釘、40・41は煙管、42は寛永通宝、43は棒状石製品、直径６㎜、長さ３㎝の円柱の両端が尖るピン状を呈し、用途不明ながら城内各所から多数発見される。44は柱根巻石、緑色凝灰岩を加工した、土塀支えの柱の根腐れ防止のために、根元に巻き付ける石で、コの字形を対面して使用するものが城内



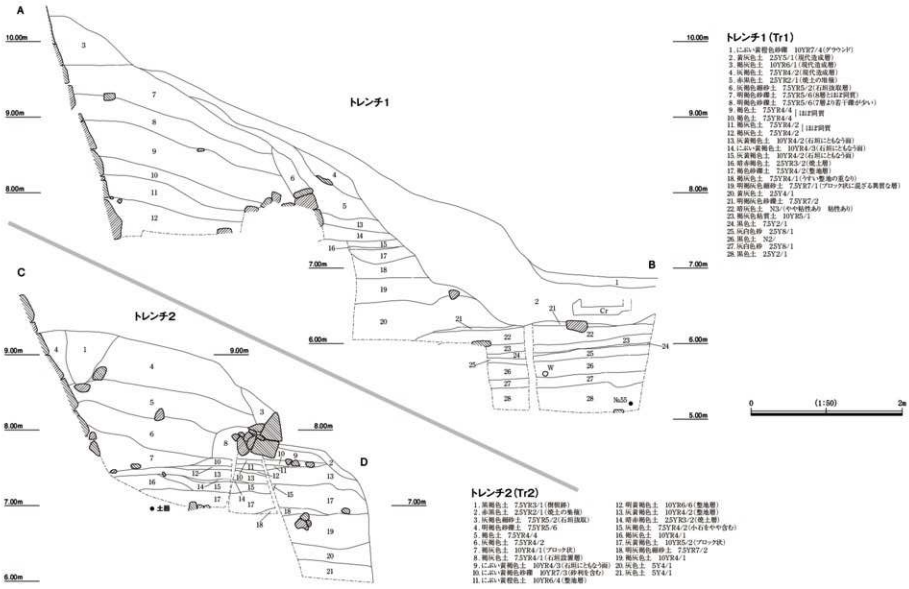
第24図　①区斜面出土遺物実測図5

では一般的であるが、これは六角形か。

（2）①区トレンチ1（Tr 1）

①土層〔第25図〕

三ノ丸下段石垣の斜面から、馬場となる平坦面まで設定した長さ8mのトレンチである。平坦部分については、壁面が脆いため、掘削後すぐに埋め戻しを行った。斜面上段1～4層は近現代の造成層、5層は、焼土の堆積層で、6層の石垣抜き取り後に堆積するも、近世遺物ばかりを包含することから、近代初頭の層とみられる。幕末面の直上に焼土層が乗る例は広く散見され、廃城時の焼却処分の痕跡であろうか。7～10層は、黄褐色系の所謂真砂土で、均質な層である。ほぼ同質なことからも、行程差程度で同時に積まれた層であろう。11・12層もまた同質であるが、色調が異なるため別としたが、上層と一連の層とみられる。三ノ丸下段石垣の底は標高7.4mにあり、7～12層は石垣と接する形で傾斜をつけて積まれることから、石垣構築後に斜面を作ることを目的として造られたと考えられる。石垣をみると



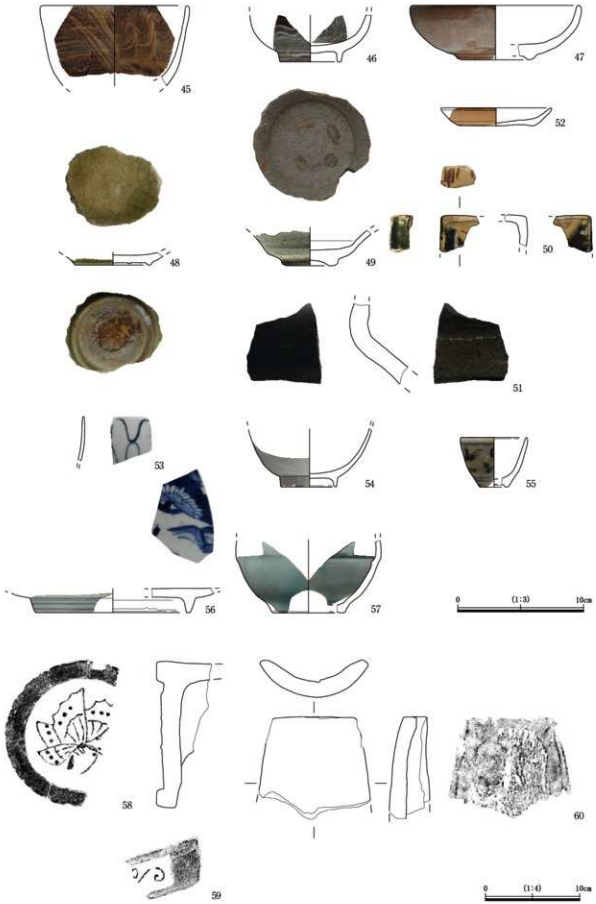
トレンチ1 (Tr1)

1. にぶい黄橙色砂礫　10YR7/4(グラウンド)
2. 黄灰色土　2.5Y5/1(現代造成層)
3. 暗灰色土　10YR6/1(現代造成層)
4. 灰褐色土　7.5Y R4/2(現代造成層)
5. 赤褐色土　2.5YR2/1(焼土の堆積)
6. 灰褐色細砂土　7.5YR5/2(石混旧耕層)
7. 明褐色砂礫土　7.5YR5/6(6層より粗砂質)
8. 明褐色砂礫土　7.5YR5/6(7層より若干礫が少い)
9. 褐色土　7.5YR4/4　(旧表層)
10. 褐色土　7.5YR4/4
11. 暗灰色土　7.5YR4/2　(旧表層)
12. 暗灰色土　7.5YR4/2
13. 灰黄褐色土　10YR4/2(石混にぶい5/6層)
14. にぶい黄褐色土　10YR4/3(石混にぶい5/6層)
15. 灰黄褐色土　10YR4/2(石混にぶい5/6層)
16. 暗赤褐色土　2.5YR3/2(焼土層)
17. 褐色砂礫土　7.5YR4/2(2層亜層)
18. 暗灰色土　7.5YR4/1(やや整地の底なり)
19. 明褐灰色細砂土　7.5YR7/1(ブロック状に混ざる黄褐な層)
20. 黒灰色土　2.5Y4/1
21. 明褐灰色砂礫土　7.5YR7/2
22. 暗灰色土　N3/(やや粘性あり　粘性あり)
23. 暗灰色粘質土　10Y R5/1
24. 黒色土　7.5Y2/1
25. 灰白色砂　2.5Y8/1
26. 黒色土　N2/
27. 灰白色砂　2.5Y8/1
28. 黒色土　2.5Y2/1

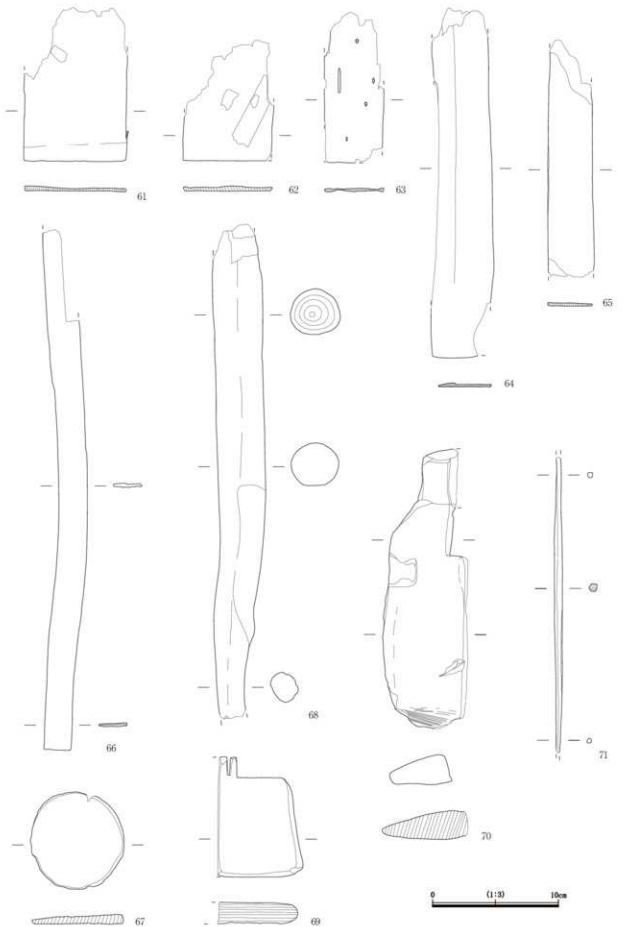
トレンチ2(Tr2)

1. 黒褐色土　7.5YR3/1(撹乱層)
2. 赤褐色土　2.5YR2/1(焼土の集積)
3. 灰褐色細砂土　7.5YR5/2(石混旧耕層)
4. 明褐色砂礫土　7.5YR5/6
5. 褐色土　7.5YR4/4
6. 灰褐色土　7.5YR4/2
7. 暗灰色土　10YR4/1(ブロック状)
8. 暗灰色土　7.5YR4/1(石混遺構層)
9. にぶい黄褐色土　10YR4/3(石混にぶい5/6層)
10. にぶい黄褐色砂礫　10YR7/3(砂利を含む)
11. にぶい黄橙色土　10YR6/4(整地層)
12. 明黄褐色土　10YR6/6(整地層)
13. 灰黄褐色土　10YR4/2(整地層)
14. 暗赤褐色土　2.5YR3/2(焼土層)
15. 灰褐色土　7.5YR4/2(小石をやや含む)
16. 暗灰色土　10YR4/1
17. 灰黄褐色土　10YR5/2(ブロック状)
18. 明灰褐色細砂土　7.5YR7/2
19. 褐灰色土　10YR4/1
20. 灰色土　5Y4/1
21. 灰色土　5Y4/1

第25図　①区トレンチ1・2土層断面図

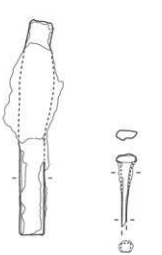


第26図　①区トレンチ1出土遺物実測図1



第27図　①区トレンチ1出土遺物実測図2

標高8.3m付近の石材中央に、矢穴とは言えないものの小さな凹みがみられる。3層を除き、1.7mほど埋没したこの石垣は、石材の表面に風化の痕跡がなく、土を掘り込んでの石垣設置や石垣裾に繋がる生活面もみられないことから、当初より埋め殺されるための石垣であった可能性が高い。この石垣の前面3.5m(石垣裾間2.7m)にある石列は、調査の結果、天端面が揃わず、背面70cmにわたり裏栗石を持つことからも、上部を解体された石垣であることが判明した。三ノ丸下段石垣裾と近い7.6m付近より積まれた石は、抜き取り跡である6層をみると、本来は標高8.6m付近までは続く高さ1m程度の石垣とみられるが、その高さまで裏栗石は確認できない。13・14層はこの前面石垣に伴う層とみられるが、15層以下は様子が異なり砂礫を用いた整地層である17層の上面にあたる16層は、標高7.3m付近に広がる焼土面であり、これらを覆う形で15層が乗る。18層は薄い整地が重なる層、19層は地山由来の砂礫や軟岩で構成された層で、白色系を呈しやや異質である。地山由来とみられる土を用いた16～19層に対し、20層以下は様子が大きく異なり、黒色を呈する。20層については、40cmもの厚みがあることから、上層と関連する可能性があるが、21層以下は、異なる単位の層という印象を受ける。石垣側へ向い緩やかに傾斜をつけるこれらの層は、間に21・25・27層のように灰白色の砂層や23層である粘土層を挟みながら互層状に重なる。最下層の28層には、木製品や木片が多く含まれており、廃棄層の様相を呈する。



第28図　①区トレンチ1出土遺物実測図3

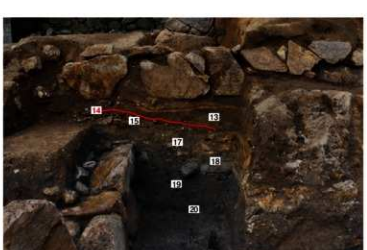
②遺物〔第26～28図〕

45～51は陶器、45・46は肥前の刷毛目碗、47は肥前皿、48は瀬戸・美濃の皿、49は肥前の灰釉皿で見込みには砂目跡を残す。50は織部の向付、小片ながら、城内初の出土である。51は備前甕の頸部付近、52は土師皿。53～57は磁器、53・54肥前の碗で53の外面は網目文、55の小坏は貿易陶磁であろうか、56も肥前の皿、57は肥前の青磁で段を持つ、鉢とはしたものの器形ははっきりとしない。58～60は瓦、58は軒丸瓦で蝶4型、59の軒平瓦の型は判然とせず、60は輪違いの棟込瓦。

61～71は木製品、61～66は屋根材の一部とみられる薄板、67は直径約7.5cmの円形で蓋物の一部か、68は杭の一部で、先端を尖らせる。69は用途不明、中央付近で折れているとみられ、上部の突起部には切れ込みを持つ。70は鍬か、中央付近で折れ、上部には柄を通す穴があり、下部には擦痕が残る。71は箸。

72は板状銅製品、長方形状を呈し、長さ11.4cm、幅1.3cmを測る。73は鉄釘。

これらの出土地点をみると斜面上層、石垣を埋めたてる盛土中の遺物は、52が8～9層、53・59が9層、56・57が9～10層、60が7～10層といずれも黄褐色土からの出土である。その他、図化には至らない小片をみても、7～12層の斜面上段の盛土中には、備前陶器や肥前磁器、京焼風陶器など17世紀いっぱいの遺物が出土する。一方、中央石垣前面の斜面下段では、石垣に伴う14層より45・46・54・58などがみられる。出土数は多くないが、肥前陶磁器など17世紀台の遺物である。その下、19層からは図化には至らないものの、擂鉢などの備前陶器がみられ、大きく色調の変わる、大規模な盛土でである20層からは47・49の肥前陶器や木製品61・62・63・65・66が出土した。さらに下層、別の単位の堆積とみられる21層以下では様子が変わり、磁器の割合が低くなり、25層より出土した48の瀬戸・美濃陶器の他、備前陶器片などが見られる。最下層である28層からは土師皿片に加え51の備前甕、55の磁器小坏、67～69・71の木製品が出土した。石垣前面の出土遺物をみると、14層／19・20層／25・28層とでは時期差があると考えられる。



豪雨崩落前の状況
第25図トレンチ２と対応
14層は焼土層

第29図　中央石垣下土層図

（３）①区トレンチ２（Tr ２）

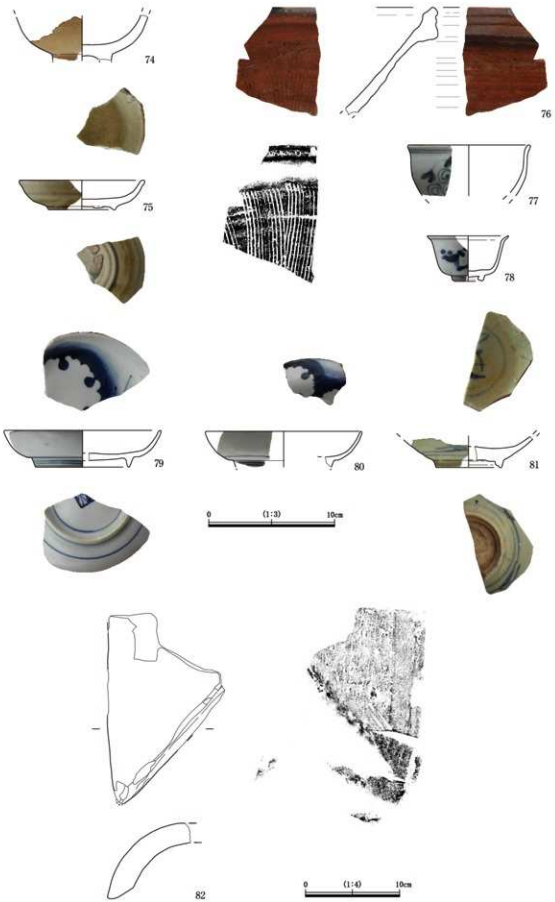
①土層〔第25図〕

三ノ丸下段石垣角の斜面部に設定した長さ５mのトレンチである。土の堆積状況はトレンチ１と基本的に同じであり、地表にあった近現代造成土を除去した後に掘削を開始した。１層は樹根痕、２層は焼土堆積層、３層は石垣抜き取り跡である。斜面上段の４～７層は石垣を埋め立てる層で４～６は真砂のような黄褐色系、７層は同質ながら灰色を呈し、全体で斜面を形成する。これら盛土の最高点は9.3mにあるが、先述の通り、４層上には近代以降通路が設置されていたため、本来の高さを失っている可能性がある。石垣は、トレンチ壁面付近での最深部は標高7.9m付近にあり、その下に根石を持つが、角石では標高7.5m付近にある。８層は前面石垣設置に伴う層で、石垣の裏には奥行40cmほどに亘って裏栗石が入る４層の石垣抜け跡から、本来はもう数段の石が乗っていたとみられるも、裏栗石は無く、９層は石垣に伴う路盤面とみられる。

トレンチ１とは違い、前面石垣前だけではなく、石垣直下も掘り下げを行ったところ、10層以下で上層とは異なる堆積を確認することができた。標高7.6mを上面とする10層は、細かい砂利を含む水平堆積、11・12層は一連の層とみられ、黄褐色の砂礫を薄く重ねた層で、城内では路盤面としてよくみられるかたちとなる。13層は、三ノ丸下段石垣内部から続く整地層で、前面へ向い厚みを増し、直下の標高7.3～7.4m付近にある14層は、焼土面である。17層は、地山由来とみられる砂礫や軟岩がブロック状に混ざり合う大規模な整地層で、18層もまた同様の砂層である。13－14層、17－18層の関係は、トレンチ１の15－16層、18－19層と同じである。19層以下は、色調が大きく変わり灰色系の土となる。

②トレンチ２内石垣〔第29図〕

トレンチ２内、中央石垣前面で石垣と直交する位置に長さ４mに亘り検出した。かつてこの場所にあったマツの巨木やスタンド設置に伴い、かなりの撹乱を受けているが、最下段を中心に確認した。標高6.0m付近を底として積まれるも僅か２段、標高7.0m付近までしか無く、上面に平坦面などがないため、本来は上段があったとみられる。平面を見ると中央石垣と一体に見えるが、実際は50～60cmの差があるため元は別の石垣である。トレンチ２の断面図の最下層、標高6.2m付近にある21層がこの石垣に伴う面とみられる。石垣の上部を見ると、地山由来の土がブロック状に混ざりあう大規模な整地層である17層が完全に覆っており、さらにその上は中央石垣下までの間、トレンチ２から同じ層が続くことから、奥については石垣を埋め立てた後に中央石垣が積まれ、手前には数石積み足し絵図にある折れて続



第30図　①区トレンチ2出土遺物実測図

く馬場内石垣を形成していた可能性も考えられる。

③遺物〔第30図〕

74は肥前の京焼風陶器の碗、75は瀬戸・美濃陶器皿、76は備前擂鉢で摺目は11条単位、77は肥前磁器碗、78肥前磁器小坏、ともに端部は反っており、17世紀前半代か、79・80は別個体、17世紀後半代の肥前磁器皿で、波を描き、前者の高台内には「塩」とみられる文字を描く。81は貿易陶磁。82は隅丸瓦で、丸瓦を斜めに切り小口を埋める。

出土遺物の内、斜面上段からは６層より82、７層より74・76、７層付近より55が出土し、この他にも備前陶器などもある。上層の４～６層の黄褐色土内にはトレンチ１同様17世紀代いっぱいの遺物片がみられる。また石垣裏栗石層である８層あるいは直下の10層付近より79が出土した。下方をみると、18層より54、最下層の21より75が出土した。18層がある19層直上では、当トレンチ近くで第21図の18も出土しており、17世紀前半代の遺物が多くみられる。

写真19　調査区周辺古写真（明治12年）

（４）①区馬場〔第17・18図、図版３〕

①馬場面

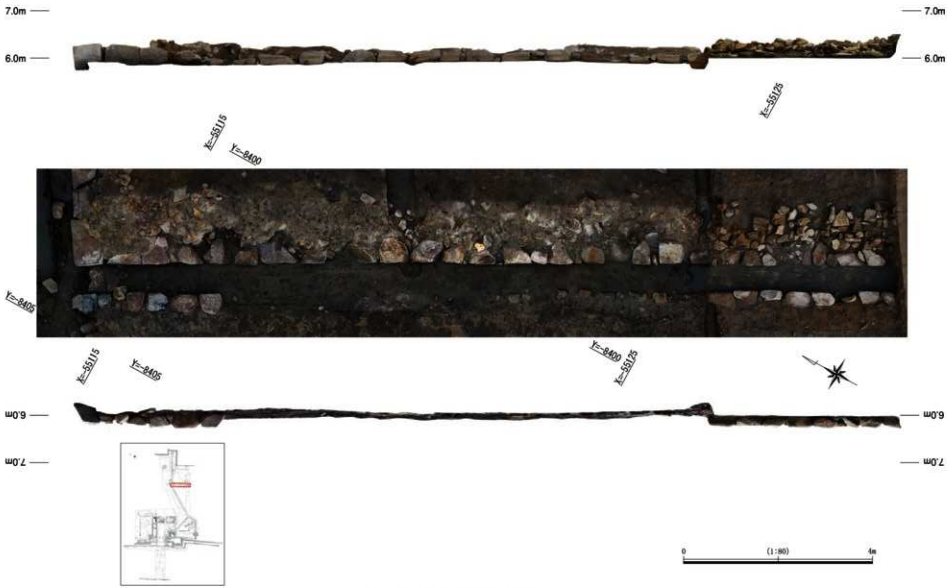
調査面積は、馬場溝外側の石列までを含め約200㎡である。平面については、第39次発掘調査にてその大部分を検出しており、その時の近世面検出レベルが標高6.2～6.3mであるのに対し、今回の標高は6.4m前後と、10cm程度高い位置での確認であった。これは、近代以降の掘削が北西側ほど深くは及ばなかったことによる。第33図の土層図をみると、３層以下の近世層の直上に１・２層の現代のグラウンド整地土が乗り、基本層序で挙げたような近代造成層が間に挟まらない状況にある。

馬場内の表土は、馬場外の黄褐色の砂礫系のものとは異なり、粘性の強い黒色土を基本としている。斜面部のトレンチ１の断面（第25図）を見ても、撹乱を受けていない標高6.2mの20層以下には砂層と黒色土層とが交互に見られ、下層へ向い似たような堆積であるが、上層については、トレンチ２の17層のように三ノ丸下段石垣内部へ続く層があることから、石垣構築以降に成立した馬場は、現地表より高所にあったとみられるが、大規模な削平により残存しない。

②馬場溝〔第31・32図〕

馬場溝は、馬場を区画するための溝で、北西辺を縦方向に城上層より続く大型排水路である大溝に対し、直交する形で続く。大溝の会所となる桝内に西角をもつ馬場は、長さ１mを超える角石をはじめ、両辺とも角に向かい大型の石材を用いている。今回の検出分を合わせ角石からの総延長は17.5m、内寸は50cmである。対面する石列でも内側の方が比較的大きく、背面には幅１m程度の裏栗石がみられることからも、本来はある程度の高さを持つ石垣であったとみられるが、上部は解体され、最下段の１石のみが残存する。対面側については、石を積み重ねず裏栗石も持たない石列は、角石より数石は大型のものを用いるも、その続きは抜去されたようで、根石とみられる下支えの小型石が僅かに残存するのみであったが、今回の調査範囲では良好に残存していた。表面が平らな石材を並べたもので、裏栗石は見られず、上面の標高は約6.2mである。写真19の古写真をみると、石垣は３段以上とみられ、その上に板張りの土塀を廻し、内部には巨木が茂る空間であることがわかり、溝の外側には堀のような区画がみられるも、性格は不明である。石垣の高さからみても、内側にあった幕末期馬場面は、6.4mの検出標高

第31図　馬場溝平面・立面図



第32図　馬場溝平面・立面オルソ図

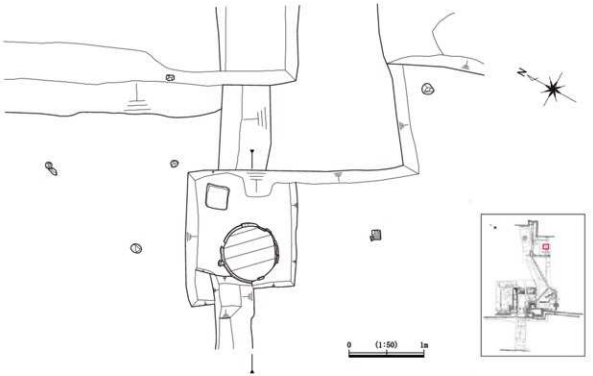


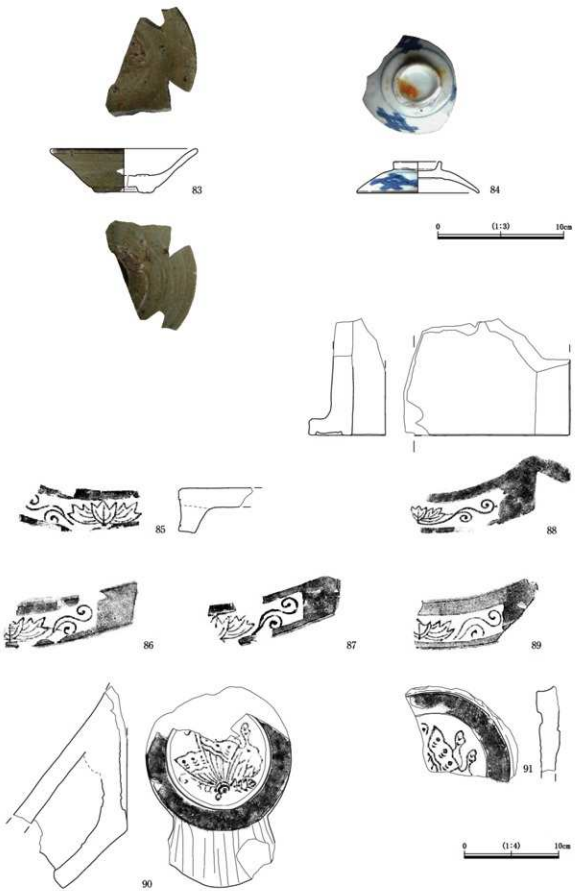
写真20　桶検出状況(第39次調査)

第33図　馬場内桶平面・土層図

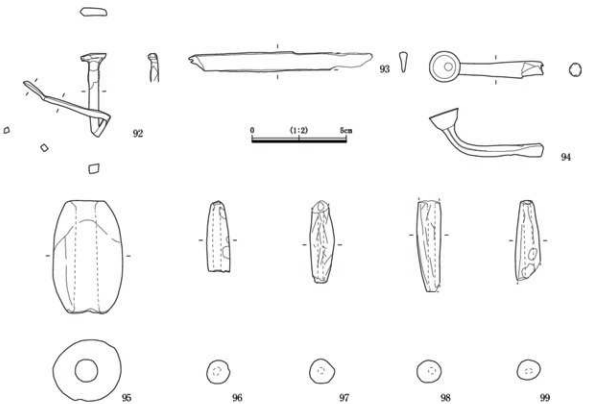
よりかなり高所にあった可能性が高いと考えられる。廃城による城解体後、旧制中学校として開校する際、中ノ御門桝形石垣も解体され、周辺地盤との平行化が進められているため、馬場石垣も解体され、内部の残った地盤の高まりは削り取られたとも考えられる。本来の馬場面については、第Ⅴ章２で検討することとする。

③馬場内桶〔第33図、図版３〕

調査区の東隅、史跡整備境界付近にて、第39次発掘調査の際に検出していたが、今回その全容が明らかとなった。直径80cm、底径75cm、深さ20cm程度の残存であり、外面には僅かながら箍が残る。検出時に馬場の飼馬桶を想定して桶と称したが、樽の可能性も十分考えられるが、上部の大半を欠くため判別はできない。土層をみると、３層以下の旧層の直上に１・２層の現代グラウンド土が直接覆っており、間に近代面がみられないことから、グラウンド整備に伴う掘削も行われているようである。桶は、７・８層を掘り込み、底部を据えており、これらの層の上面、標高6.4m付近を境にして上部を失っており、４層中に折れた部材が散在する。ブロック土で構成される３層を隣接地にある第25図トレンチ１土層の18層と、４・７層はトレンチ19・20層と対応するとみられる。桶が機能停止した後に３・４層の整地が



第34図　馬場出土遺物実測図1



第35図　馬場出土遺物実測図2

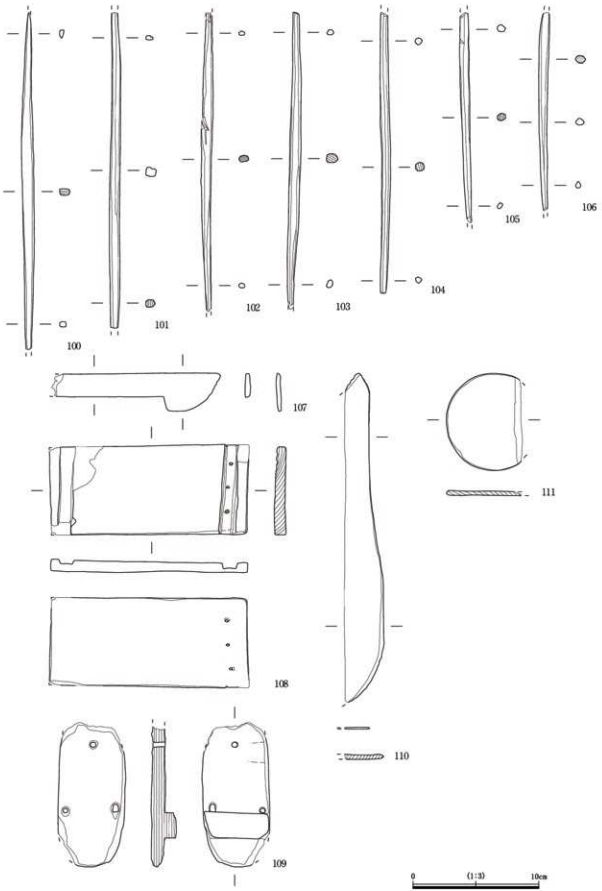
行われたようである。桶の脇、８層上の標高6.3mには30㎝四方の平らな石がある。礎石のようにもみえるが性格は不明である。また周辺には杭とみられる木製品が７本（１本は角材）確認した。現地表より若干頂部を出すが、旧層のものか、後世のものかは判断がつかない。

④遺物〔第34・35・36図〕

出土遺物は83～111、馬場内では、地表部となる黒褐色層から、92・93・100～111、石垣裏栗石付近より90、桶内より94・95、馬場外では馬場溝より84・86・87・91、その他83・85・88・96～99は掘り下げ中および撹乱内からの出土である。

83は肥前陶器皿で見込みは砂目跡、84は肥前磁器蓋で、コンニャク印判の井桁文を三方に押す。85～89は上向き三葉文の軒桟瓦で、85～87は平50型の右軒桟、88は左軒桟の平40型、89も左軒桟の平51型、90・91はともに蝶14型、90は鳥衾瓦で91は鬼瓦。92は頭巻釘、93は刀子状の鉄製品、94は煙管で雁首には稜がある。95～99は土錘、95は大型で全長5.9㎝を測る。100～106は箸、107・110はヘラ状の木製品、108は箱状で幅6.1㎝、長さ10.8㎝、切込み内には孔がみられる。109の下駄は現存長11.4㎝と小型である。

この他にも馬場内より出土した小片をみても17世紀前半代の肥前・備前の陶器が多くみられ、磁器は目立たないことから、現地表下の土は、馬場造成用のものではなく、もう１段階古い層であると推定される。



第36図　馬場出土遺物実測図3

②区〔第37図、図版３〕

（１）幕末期路盤面

①路盤面

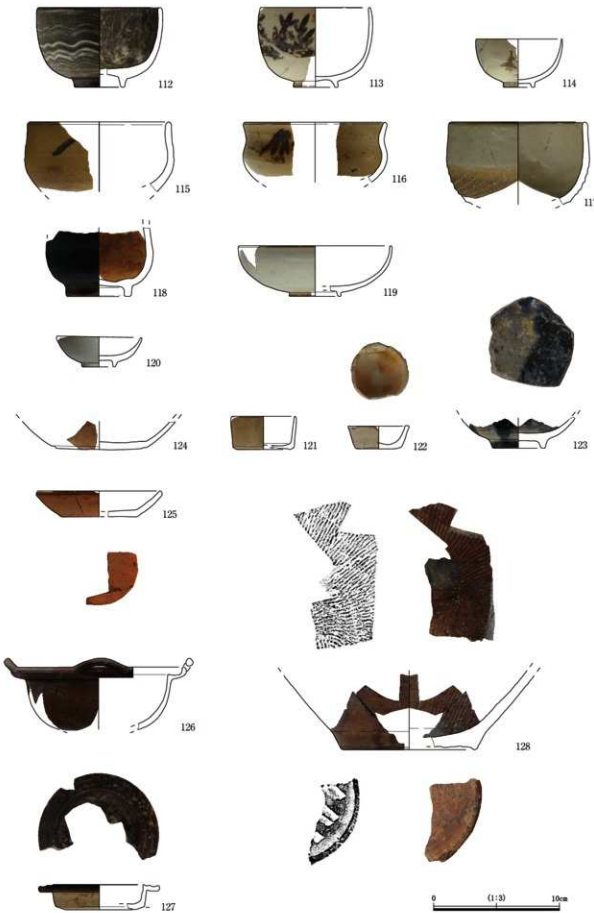
馬場溝の外側から大溝の南東側一帯の調査面積は140㎡を測る。元々、建物等のない空間であり、調査でも個別の遺構は検出されなかった。第39次発掘調査の際に掘った調査区際の溝を挟んで遺構面に段差が付き、本調査区側が10～15cm、三ノ丸側へ向い緩やかに傾斜をつけて上昇する。これは、近代以降の削平が及んでいないためと考えられる。

発掘調査にて検出したのは、旧路盤面である。黄褐色系の砂礫土を基本とする土を敷いたもので、馬場溝付近での標高は6.2m、そこから14mほど堀側へ進んだ地点の標高は5.9m、さらに14mほど進んみ大溝が二手に分岐する地点の標高は5.8mであり、緩やかに下降する。上面は全体的には平坦であるが、途中には凹凸が多数みられることから、後世の削平をある程度受けているとみられる。この路盤面で特徴的なのは大溝の分岐点付近でみられる溝蓋設置のための面の傾斜である。大溝石垣の後方をみると分岐直前では50～60m、分岐後は150cmの範囲で路盤面が降下する。石垣の上面との高低差は20～30cmあることからここに溝に蓋を設置したとみられる。大溝は、下流の桝とそこから伸びる直線部分以外は絵図に描かれず、石垣の天端の石も平らであることや、大手登城路に位置することから、これまでも暗渠であったと想定されていた。しかし、溝の対岸をみると、③区である番所側は上面削平をそれほど受けていないとみられるものの、同様の落ち込みは確認できないという問題点も残る。

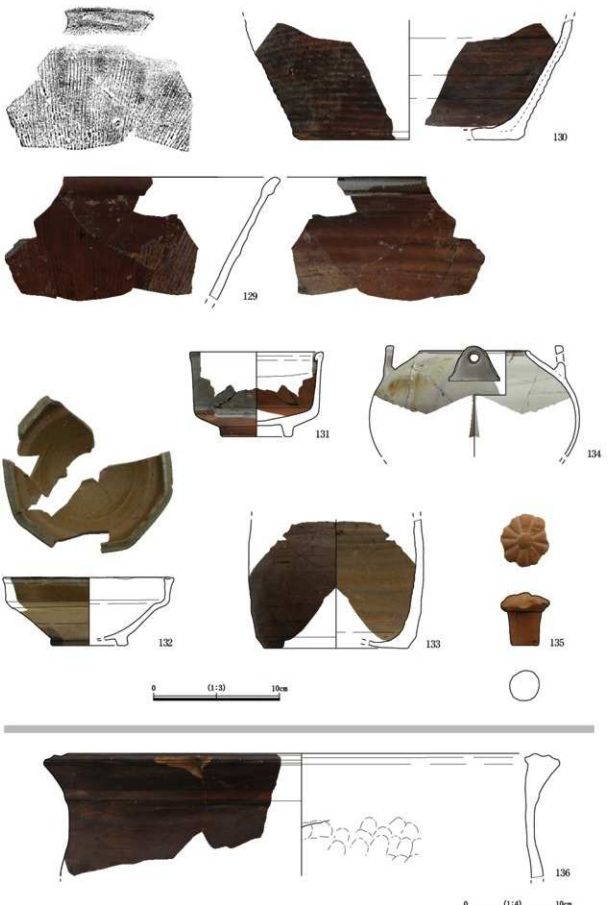
②遺物〔第38～45図〕

181以外は幕末路盤面上からの出土である。基本的には路面上に散乱した形で検出され、灯明皿のようにある程度まとまって見つかるものもあった。大手登城路となる調査区付近において、城機能時にこれだけの遺物が散乱していたとは考えられず、近代初頭頃の城廃城にともなう廃棄物とみられる。112～151は陶器、112～115は肥前碗、112は刷毛目、他は鉄絵、117は産地不明、外面下部には櫛描き状の装飾を施す。118は内面露胎のため火入れか、119・120は肥前系、121は小坏、若干碁笥底状の底部を持ち、内外に釉を掛ける。122は、内面のみに釉がみられる。口縁部は剥落したような状態で、窯道具の可能性も残る。123は産地不明、内外ともに被熱を受けているか、126は在地の土鍋、127は在地の落し蓋、素焼きのものが多いが外面に釉を掛ける。128・129は須佐擂鉢、高台内にはカンナ痕が残る。130は越前系の捏鉢、131は肥前の火入れ、口縁部を僅かに折り返す。132は在地の八角鉢、133は在地系の壺か、134は在地の土瓶、135は土製、断面円形の栓とみられ、平面形は10弁の菊状である。136は復元口径54.6cmを測る越前系の甕、内外に鉄泥を塗る。137～150は在地の灯明皿、近接した範囲に密集して出土した。直径８～10cm程度と大きさにはバラつきがみられ、内外ともに鉄泥を塗るのが基本である。137～139は上皿で口縁部付近に焦げがみられる。140～150は下皿で、受部に三方の切れ込みを持つ。赤褐色鉄泥が一般的であるが、144・150のように黒いものもみられる。151は在地の急須、瓶状の胴部に注口を取り付けたもので外面の黒色釉が口より流れ込み、内面下半に釉が掛かる。152～197は肥前磁器、152～176は碗、154は内外に菊花を描き、155は厚めの器壁に簡略化した四方襷を持ち、高台内には角青、156は腰広東碗、外面に寿字文、高台内に角青を描く、163は外面に蛸唐草文、見込みには環状松竹梅文、164は内外とも色絵を施す。165は端反碗、166・169・170はいずれも口縁内面を釉剥ぎすることから、本来は蓋付、169は外面に松皮剣菱文を持つ小碗で、170は外面雪輪文の上に色絵を施す。173～176は筒形碗で、173はやや大型で外面は瑞雲文、177～180は蓋、177・180はつまみが付き、178・179はともに外面に梵字文、見込みには太極文がみられる。181～183は白磁の紅皿、外面の文様は型押しである。184～188は皿、184輪花皿、内面は松竹梅文、187・188は内面に交差する薄を描き、見込みの五弁化は簡略化される。189は蓋付鉢、190～192は猪口、193・194は脚付火入れ、195は仏飯器、196は瓶、197は油壺、198は在地陶器の灰吹き。

第37図　②区平面・オルソ図



第38図　②区出土遺物実測図1



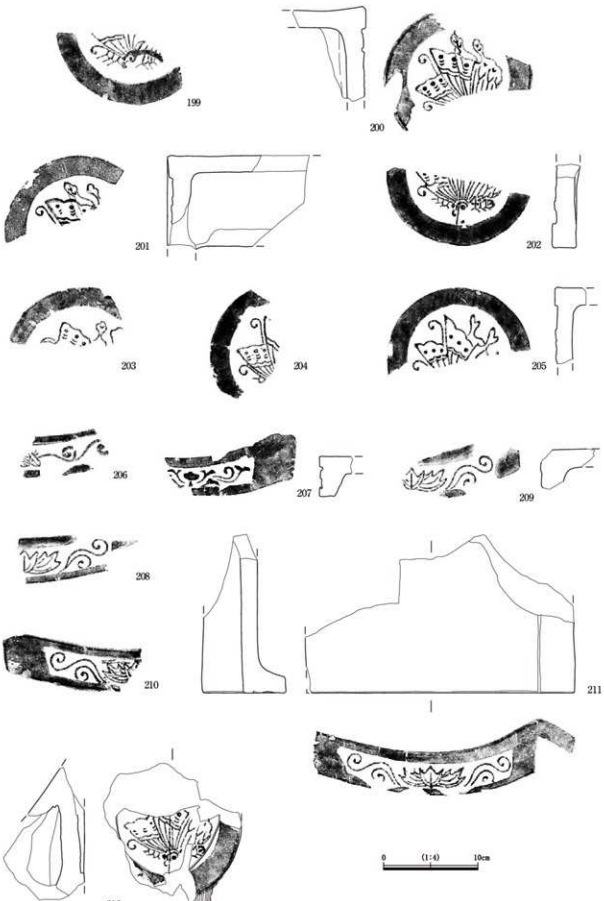
第39図　②区出土遺物実測図2

第40図　②区出土遺物実測図3

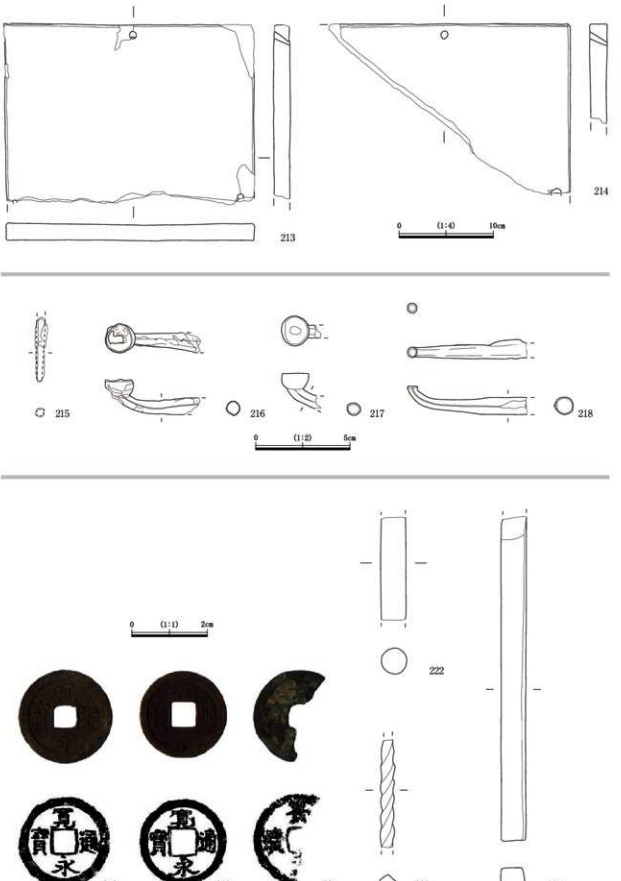
第41図　②区出土遺物実測図4

第42図　②区出土遺物実測図5

第43図　②区出土遺物実測図6



第44図　②区出土遺物実測図7



第45図　②区出土遺物実測図8

199からは瓦、199は螺８型、200～204は螺14型、205は螺11型の軒丸瓦、206は出土例の少ない平３型の軒平瓦で、中央は桐文、207は平24型の左軒桟瓦、208は平50型の右軒桟瓦、209～211は左軒桟瓦、212は螺14型の鳥衾瓦。213・214はともに板瓦か。213は幅26.5cmを測り、平らな平面の３方に釘孔がみられるも、桟はみられず、目板側に特徴的な水切りの溝も確認できない。215～218は銅製品、215は釘の先端部、216～218は煙管。219～220は銅銭「寛永通宝」、221は「景〇〇宝」、222～224は石製品、222は直径７㎜の円柱状、223は螺旋状に加工され、224は１辺７㎜の断面角型を呈す、いずれも用途不明である。

③区〔第46・47図〕

大溝の分岐点付近より南東側、堀側の石垣まで続く調査区の面積は285㎡を測る。大溝の流路を明らかにし、復元時の排水管および会所を設置することを目的とした。第40次発掘調査第２調査区の際、中ノ御門側から桝の半分程度の範囲までを検出していたが、今回は改めて同範囲を対象とした。このことから第40次発掘調査第２調査区での出土遺物も今回の報告とまとめることとし、第40次・第41次と分けて扱うが、桝内出土分については、同遺構であり、接合する個体も数多く見られたことから合わせて報告する。

（１）第40次発掘調査第２調査区遺構面検出中

①掘削中出土遺物〔第48図〕

第15図の基本層序のとおりの堆積である。出土遺物は主に、幕末期路盤面の上、近代造成中の下方にみられる焼土中で検出された。225は陶器鉢で外面に鉄絵、肥前産を在地で写したものか。226は在地の灯明皿で内面に櫛描きをして釉を掛ける。227・228は肥前系青磁、227は灰吹き、外面に凹凸を付け内面は露胎、228は筒形碗、229は皿で高台は露胎、見込みは蛇の目釉剥ぎ。230は螺６型の軒丸瓦、螺は向かって右を向く。231は平２型の桐文軒平瓦、232は平70型の花文右軒桟瓦で側区に六角形内に大を入れる刻印を押す。233は煙管、234は銅銭「寛永通宝」、235は石臼。

②石垣上出土遺物〔第49図〕

大溝の流末、桝から石垣内を通り吐水部へ向かう辺りの石垣上でより出土したが、石垣に伴うものではなく表土中に含まれていた。236は肥前磁器碗、被熱し赤変する。237は在地の陶器蓋、かえりはみられず、外面には梅文をイッチン描きする、238は在地の陶器皿、239は銅銭「寛永通宝」。

（２）第40次発掘調査第２調査区トレンチ

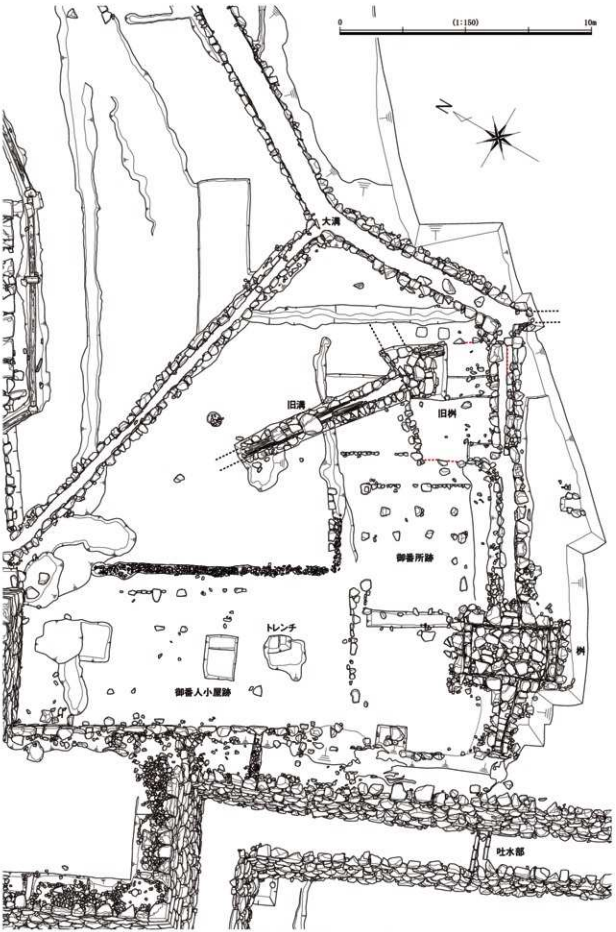
①遺構〔第50図〕

御番人小屋跡周辺では、中ノ御門石垣側から連続して、３ヶ所に大型の現代撹乱が存在する。照明等や暗渠桝設置のための掘削であり、今回もその並びにあたる。おそらく重機によるとみられる幅1.5mほどの不定形の掘り込みは、標高5.35m付近にある遺構面より60cm程度下まで及んでいたことから、この撹乱の一部を利用し、トレンチとして壁面精査を行い、土層の堆積状況の確認に努めた。従ってトレンチとは呼ぶものの、平面形は不定形である。

土層をみると、近代層である１層の下には、幕末路盤とみられる２層である砂層がある。トレンチ周辺においては、砂礫ではなく、敷砂が広範囲に確認されるのが特徴的である。砂層下には、それぞれある段階の面と考えられる３・４層の整地層が続き、その下、標高4.7m付近を上面として砂層である５層が広がる。この層を境にして土質が大きく変わり下層は粘土層となる。７層は焼土を含む粘質土層、８・９層を挟み、標高4.35m付近を上面とする10層は砂層であり、最下層の11層は木片等を含む粘質土層となる。

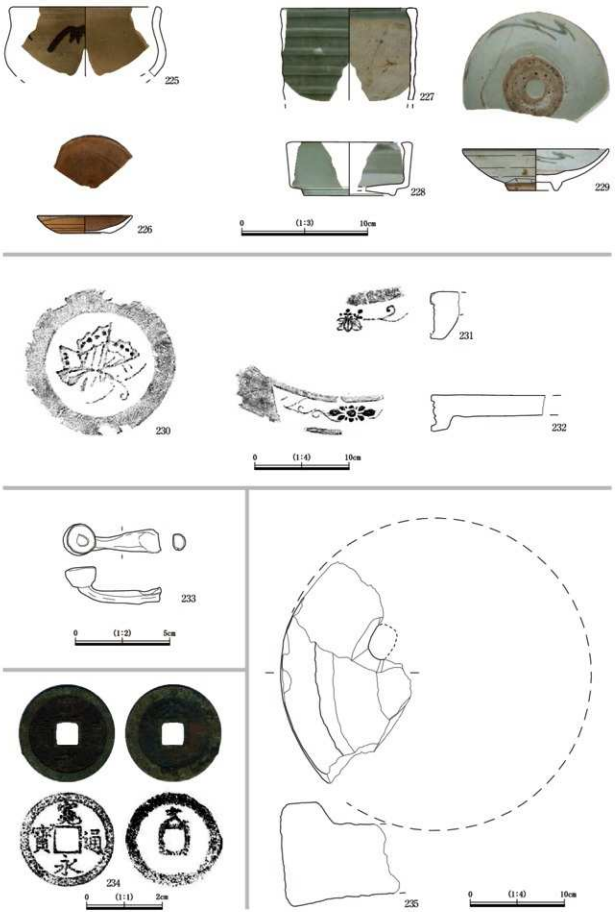
②遺物〔第50図〕

６層中より240の磁器碗を検出した、貿易陶磁であるが、産地は不明である。

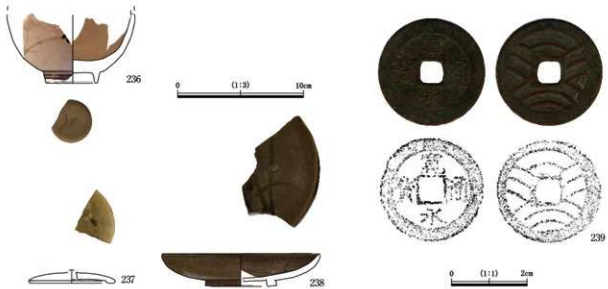


第46図　③区平面実測図

第47図　③区平面オルソ図



第48図　第40次調査第2調査区掘削中出土遺物実測図



第49図　第40次調査第2調査区石垣上出土遺物実測図

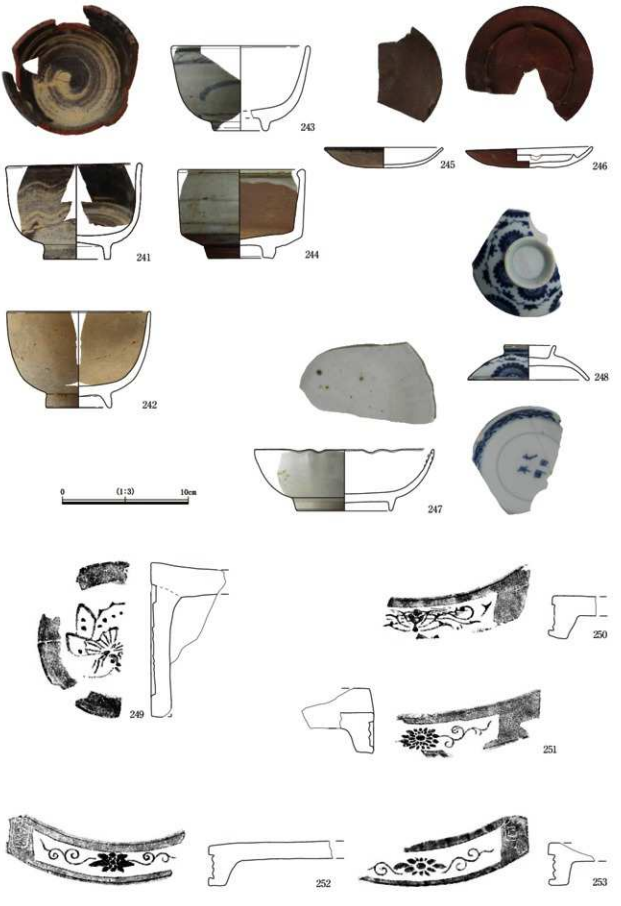
写真21　土層堆積状況

第50図　第40次調査第2調査区トレンチ平面・土層・出土遺物実測図

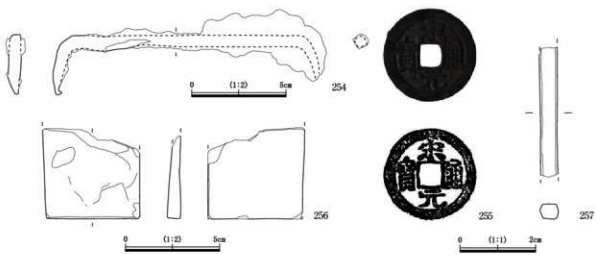
（3）第41次発掘調査③区遺構面検出中

①遺物〔第51・52図〕

現代グラウンド層を除去した下、近代造成層中を中心として出土した。241～243は肥前碗、241は刷毛目碗で赤色の胎土、244は肥前火入れで内面露胎、245は灯明皿の上皿で口縁部には焦げがみられ、246は下皿で、内外に鉄泥を塗る。247は肥前磁器輪花皿、248は瀬戸・美濃磁器蓋で見込みに「大明年制」を描く。249は蝶２型の軒丸瓦、250は左軒桟瓦の平28型で側区に㊥の刻印、251は出土例が少ない平62型の軒平瓦、252は平66型の右軒桟瓦で側区に「文亥」の刻印、253は平72型の左軒桟瓦で側区に「天巳」の刻印。254は鏡で長さ14.4cm、255は宋銭「宋元通宝」、256は温石、幅5.1cmで赤変する。257は不明石製品で断面は六角形に近い。



第51図　③区掘削中出土遺物実測図1



第52図　③区掘削中出土遺物実測図

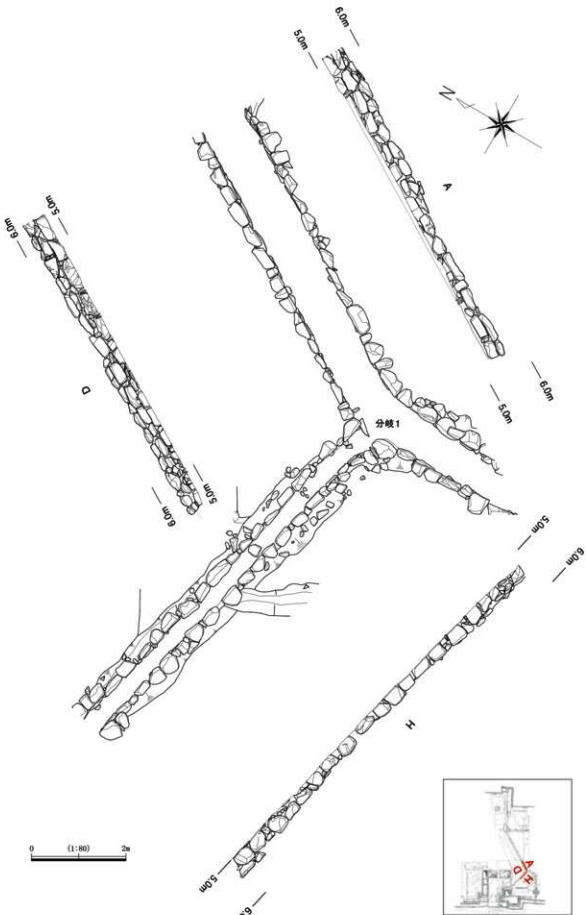
（4）大溝

①遺構〔第53～59図、図版4・5〕

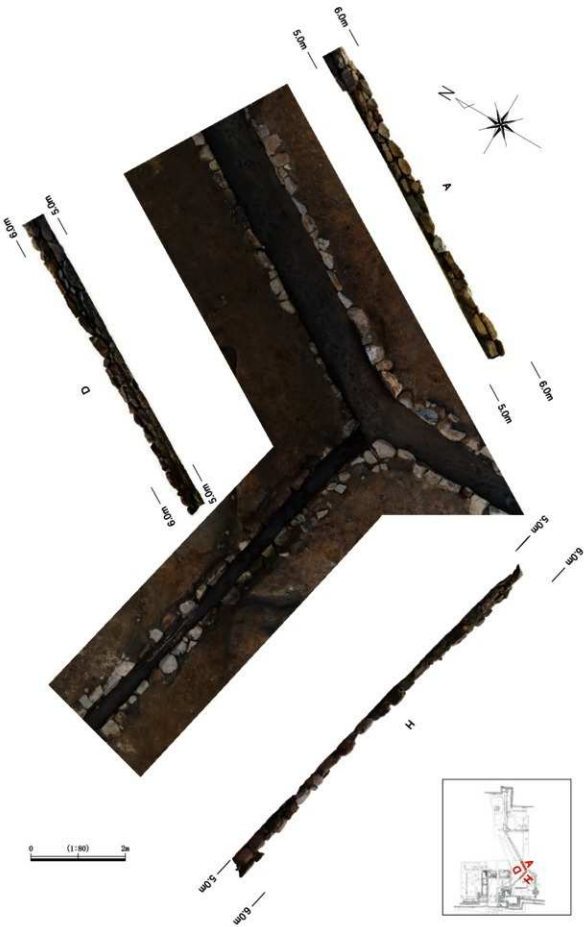
城の高所より流れ落ちた水は三ノ丸を通り、暗渠より吐水され、滝壺状遺構を介し、この三ノ丸下段へ進み、馬場西角の外側にある桝へ集まる。会所桝から先は幅1mを超える大型排水路である大溝となり堀側へと続く。大溝は、絵図には描かれないことから暗渠であったとみられ、堀に対し垂直ではなく、30度ほどの傾斜をつける。これまでの調査により、深さ60～70cm、3段程度の石垣が積まれるも最下段の石が比較的大きく、上面に横目地が通ることから、一段積みの時期を経て、後に上段が積み足された可能性があることが想定されている。調査前の検討では、第40次発掘調査で検出された堀側の石組桝の位置が、大溝の延長線上にあるため、溝もこのまま延伸するものと考えていたが、調査開始後、流路が大きく曲がることが判明したことから、調査範囲を変更し、今回その全容が明らかとなった。

調査の結果、大溝には2ヶ所に分岐点（分岐1・2）があり、そこを境に流路が屈折することが明らかとなった。本報告では、この分岐で大溝を三分割し、第51・52図、第53・54図、第55・56図としてそれぞれ掲載した。まず、大溝1とした区間について、暗渠の始まり、馬場溝との合流部から分岐1までの距離は34.7m、溝底の標高は前者が5.7m、後者が5.2m、勾配1.4％程度で緩やかに下る。分岐1についてはこれまでの調査により明らかとなっていたもので、分岐した溝は、幅30cm、深さ30～40cmを測り、中ノ御門へ下り、両門内を抜け堀へ排水される。分岐1から中ノ御門櫓門背面の溝までの距離は17.6m、溝底の標高は前者が5.2m、後者が4.9m、勾配率は1.7％である。以前の検討では、大溝からのオーバーフロー分をこの小溝へ流すと想定していたが、調査の結果、溝底に段差は認められず、止水用の堰なども確認できなかった。分岐1までの大溝石垣を左右で比較すると、違いがみられ、登城路側となる西側の石垣は基本的に3段積みとなり、最下段の石垣の下半は溝底に埋まったままであるが、東側については、分岐1より4.8m付近までは3段積みであるが、下流へ向い2段積みとなり、下段の石は溝底が洗掘されて底部まで剥き出しとなる。石垣の上面標高に左右差はないため、高さに違いが認められることとなり、これは（8）旧桝・旧溝で報告するが、大溝の流路変更による改修痕跡とみられ、築造当初直進していた溝を曲げる際、西側をより広範囲に積み直したためであろう。

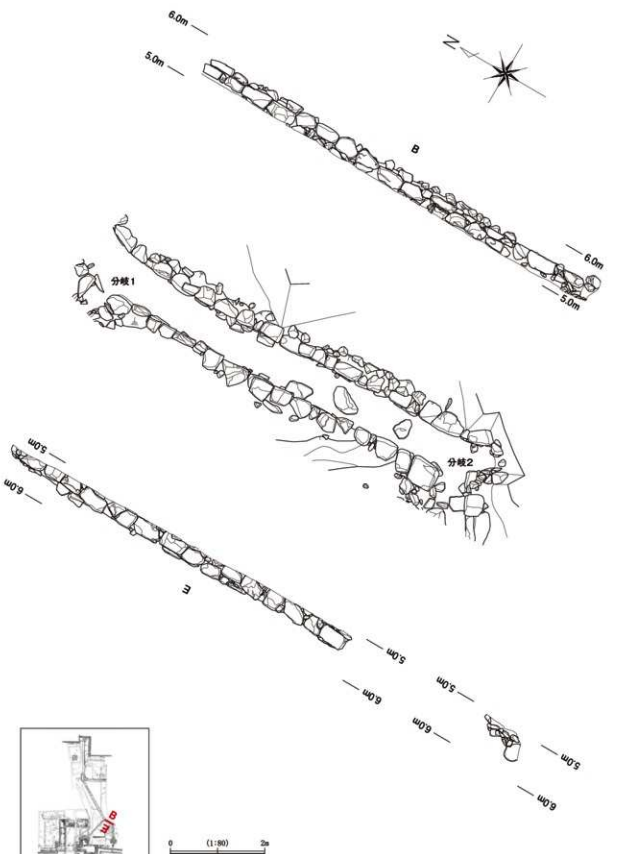
大溝2の区間について、分岐1から分岐2の距離は溝中央で8.5m、分岐1で123°、分岐2では120°と210°の角度を付けて曲がる。溝底の標高は、分岐1が5.2m、分岐2が5.1m、勾配は1.25％と緩い。石垣の上面標高は、分岐1付近で5.6m、分岐2で5.4m、両側とも同じであるが、石垣は西側は凡そ1段であるのに対し、東側は2段となる。東側の中央付近には蓋を乗せた際の間詰めであろうか、小型の石



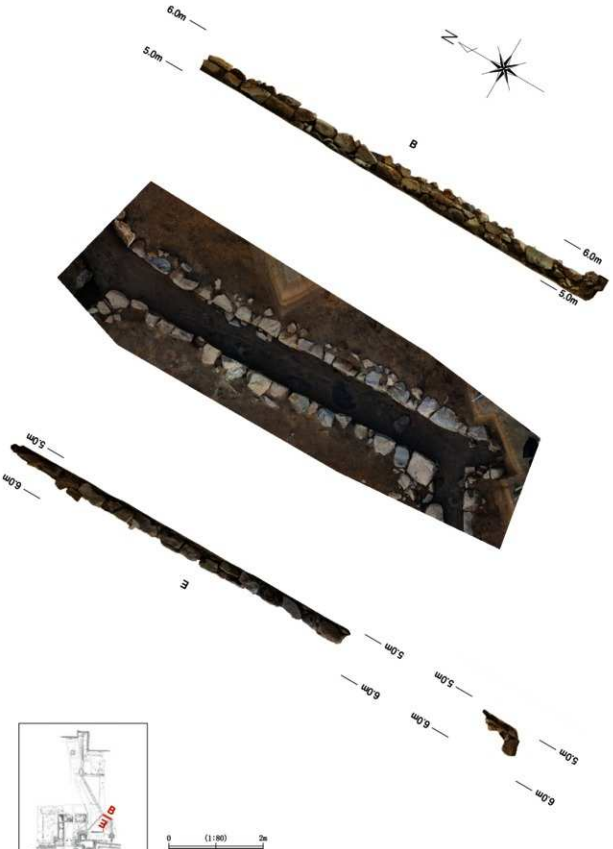
第53図　大溝1平面・立面実測図



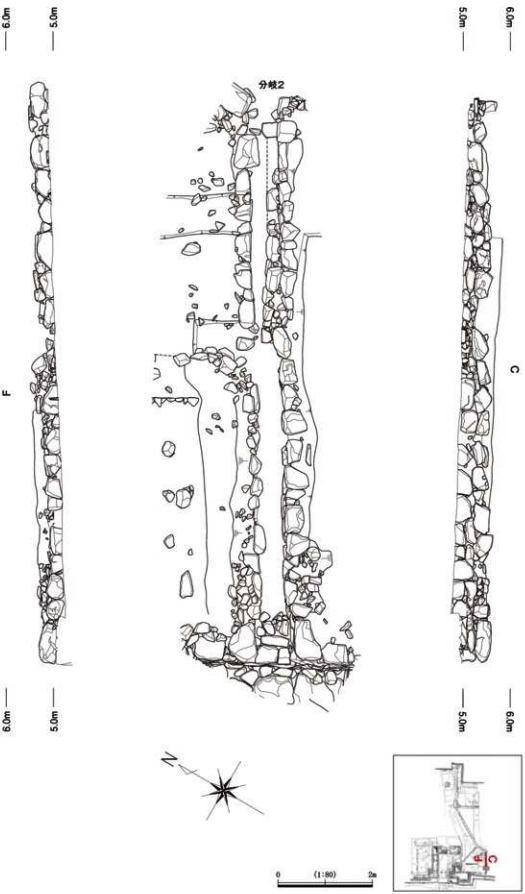
第54図　大溝1平面・立面オルソ図



第55図　大溝2平面・立面実測図



第56図　大溝2平面・立面オルソ図



第57図　大溝3平面・立面実測図

第58図　大溝３平面・立面オルソ図

写真22　土層堆積状況

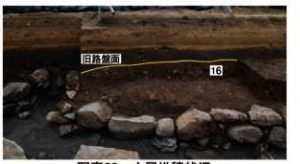


写真23　土層堆積状況

第59図　大溝3・大腰掛周辺土層図

がみられる。溝底は硬化しており、途中には上面が平らな石材が検出されるも、敷石として並ぶものでも、段差が付くものでもなく性格は不明である。分岐２より先、グラウンド側へ伸びる溝は調査範囲が狭いためどちらに向かい勾配が付くのかは不明である。西側石垣の分岐間距離は丁度８mとなる。第53・54図をみると分岐後の西側（堀側）の石垣の天端高は5.7mと高くなる。溝３区の南東側一帯で地盤が高いことからも溝で区画された一帯は、生活面が一段高い位置にあったこととが想定される。

大溝３の区間については、分岐２から桝までの距離は12m、溝底の標高は分岐２で5.1m、桝際の石上で4.9m、桝より１mの区間には側壁、裏栗石を兼ねたとみられる敷石を確認した。この区間の石垣はこれまでとは様子が異なり、両側で高さが異なり、また、積み方も粗く、一部上段を失っているようである。北西側の石垣をみると溝２区間からの延長とみられる比較的大型の石材が１段並ぶ。途中、分岐２より５mほどの地点では、１mほど石垣のない部分もみられる。石抜きにあったとみらるが、ここは、旧桝の出口にあたる場所である。南東側をみると背後の地盤が標高5.7mに広がるのに対し、石垣の天端はそれよりも低く、横目地も通らないことから上段を失っているとみられる。しかし、本来の標高を復元したとしても、標高5.3～5.4mに広がる北西側の地盤面との差は40cm以上の段差がつくことからも１段高くなっていたようであり、この場合暗渠とは考えられず絵図の通り、開渠であったと考えるのが妥当である。

②遺物〔第60～92図〕

遺物の大半は大溝３とした部分に集中していた。特に瓦の出土量は夥しく、一時期に大量投棄されたものと考えられる。

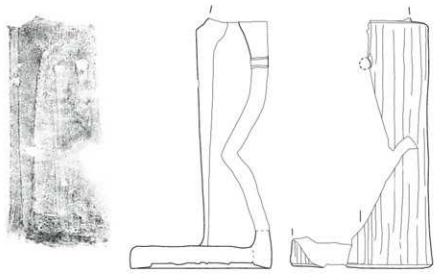
258～264は陶器。258は在地産の碗。259・260は在地産の落し蓋で後者にはつまみが残る。261は瀬戸・美濃産とみられ口縁下に印花文が並ぶ、262は在地産の鉢で高台内に墨書がみられるも読みとれない。263は越前系、264は備前の壺。265～271は磁器。265・266は瀬戸・美濃産の碗、267も同様か。268は皿、器壁が厚く発色が悪いことから、在地産か、269・270は肥前の蓋で後者には色絵が施される。271は肥前の段重で外面には色絵がみられる。

272～361は瓦。272～283は軒丸瓦、272・273は蝶11型、273は全長29.8cm、内蔵きが顕著である。274は陽刻の蝶15型、275は蝶20型、276～283まではすべて蝶23型、最後の蝶文とみられ、形態は抽象的と

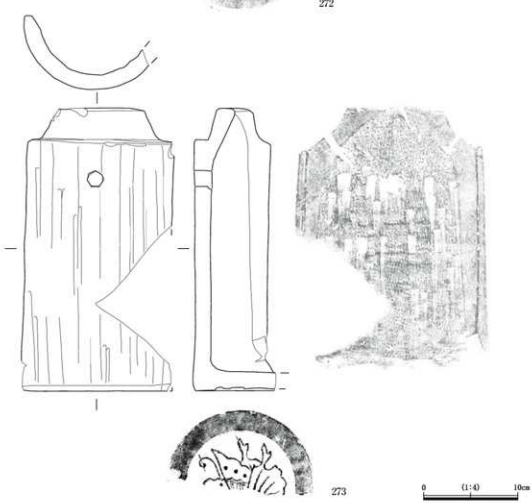
第60図　大溝出土遺物実測図1

第61図　大溝出土遺物実測図2

なり、加えて出土分については笵傷が全体に進んだものばかりである。279は全長29.7cmで細い内蔵きが若干残り、283以外は眼がはっきりとしない。284～309は丸瓦、284の外面調には縦方向に調整痕跡が残り、頂部には「文寅」の刻印、285は完形に近く、全長28.9cm、幅15.6cm、287も完形に近く、全長27.5cm、幅14.8cm、外面中央付近には㊥の刻印、内面は細筋の内蔵き、288は全長29.2cm、幅16.3cm、289の内面には細筋の内蔵き、290はほぼ完形で、全長29.1cm、幅15.4cm、外面の磨きは整然と並ぶ。291は全長31.8cmとやや長めで、孔を穿ち、幅1.2cm程度の内蔵きの痕跡が明瞭に確認できる。292は全長28.7cm、幅16.2cm、外面中央に「作」の刻印を持ち、細筋の内蔵き、293は幅15.3cm、内面を見ると、内蔵きの先端が横一線に並ぶ。同様のものが散見される。294もほぼ完形、全長29.2cm、幅15.5cm、295の外面には「文酉」、296には「作」の刻印、298の内面内蔵きの上端も横方向に揃う。299は全長28.6cm、幅15.8cm、細筋の内蔵きが多く並ぶ。301は全長28.2cm、幅15.4cm、302は全長28.9cm、幅16.2cm、外面中央には「作」の刻印、内蔵きの上端は横並びとなる。303は全長28.9cm、幅15.8cm、304は全長28.2cm、幅15.4cm、玉縁の長さが短いのが特徴的、305は全長28.3、幅15.9cm、306は細筋の内蔵きであるが、上端が横並びとなる。307は今回出土数は少ない孔を穿つ種類。309は外面に「文寅」、310は全長24.8cm、砲弾状の先端を平らにした形態で、稀に出土する使用方法は不明。311～337は軒平或いは軒桟瓦。311は左軒桟瓦、側区に❖の刻印があり、中心飾りがないものの平15型か。312・313は平29型とみられ、遺存しないものの右桟



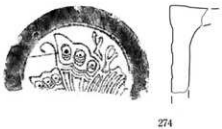
272

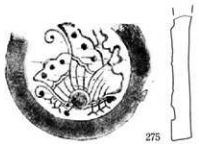


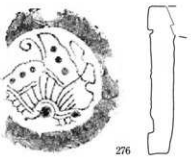
273

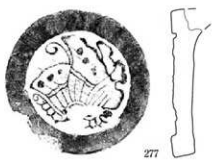
0　(1:4)　10cm

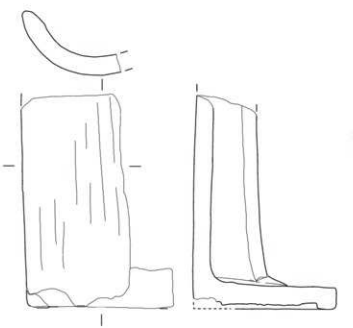
第62図　大溝出土遺物実測図3


274


275


276

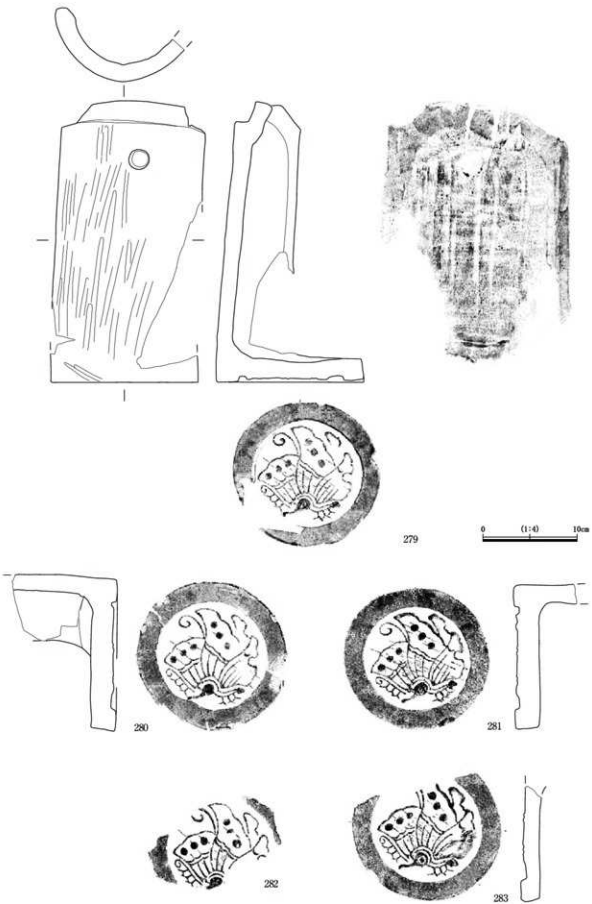

277



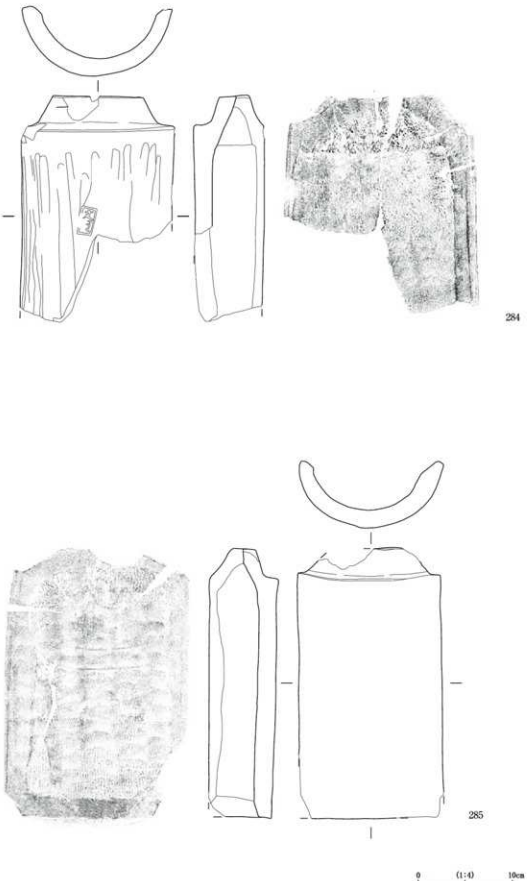
278

0　(1:4)　10cm

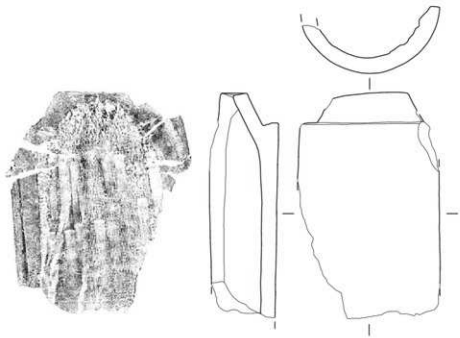
第63図　大溝出土遺物実測図4

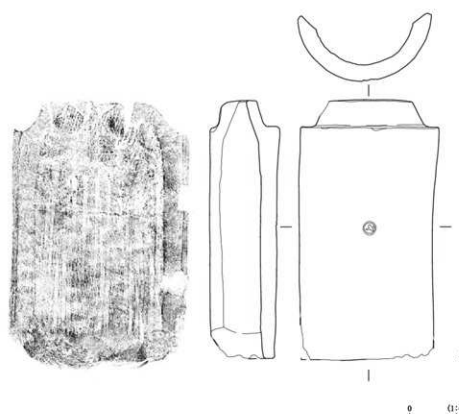


第64図　大溝出土遺物実測図5

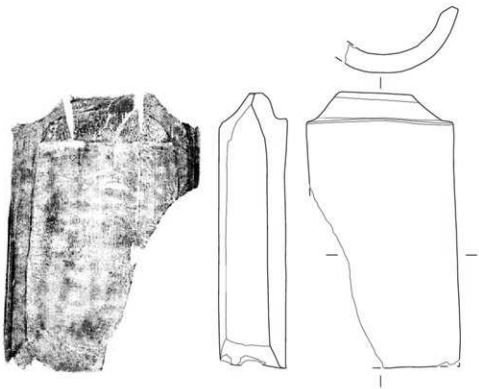


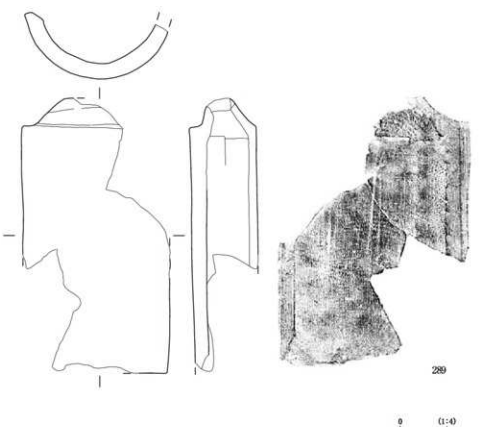
第65図　大溝出土遺物実測図6



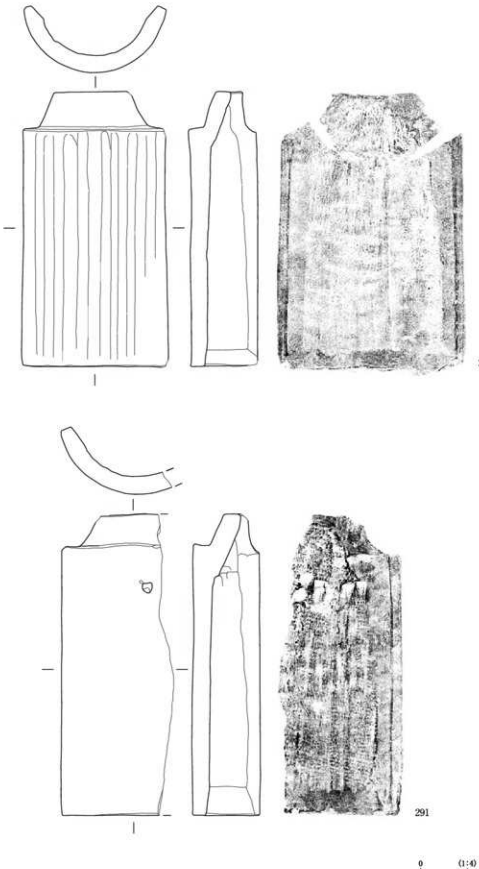


第66図　大溝出土遺物実測図7

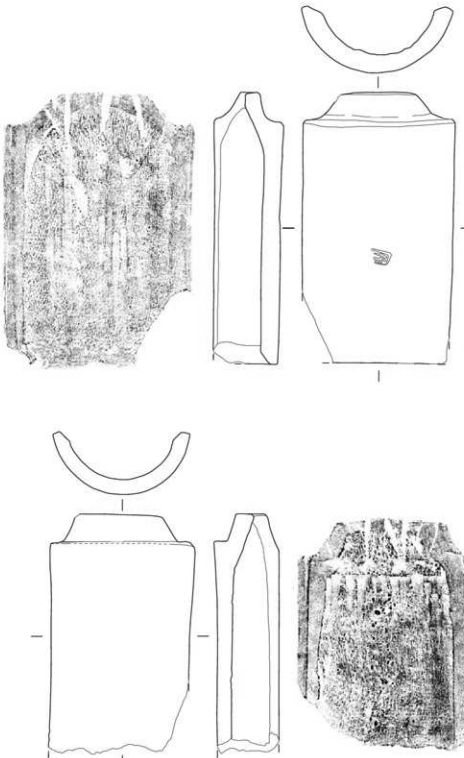




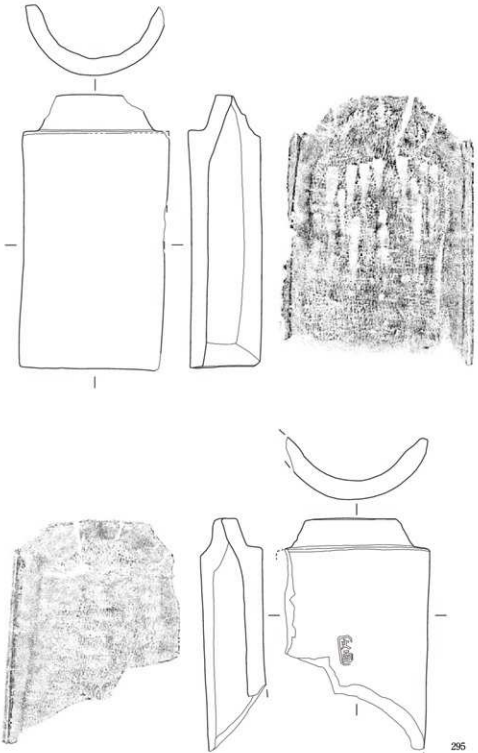
第67図　大溝出土遺物実測図8



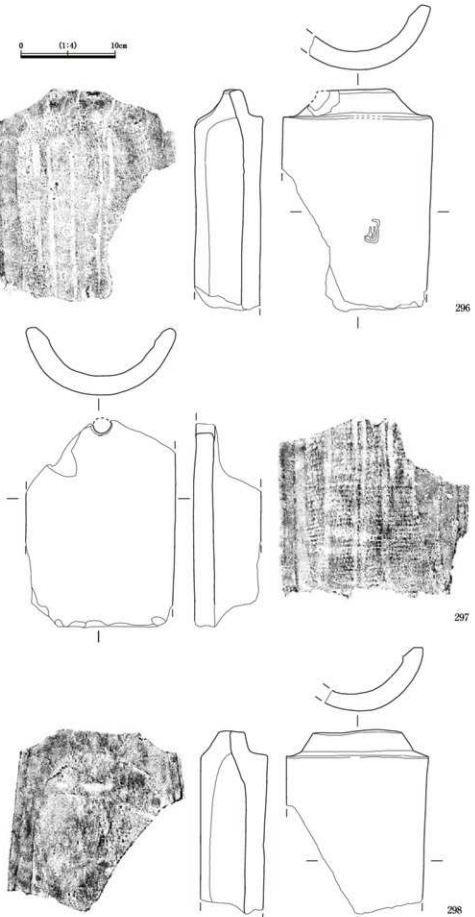
第68図　大溝出土遺物実測図9



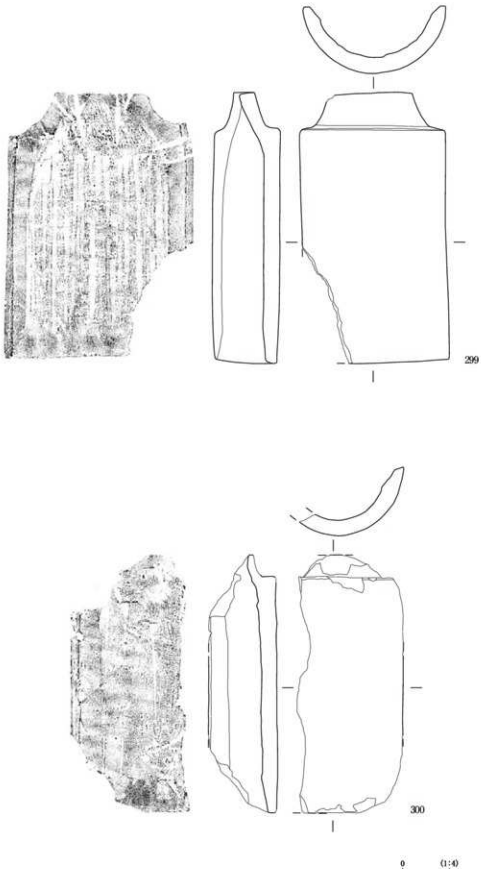
第69図　大溝出土遺物実測図10



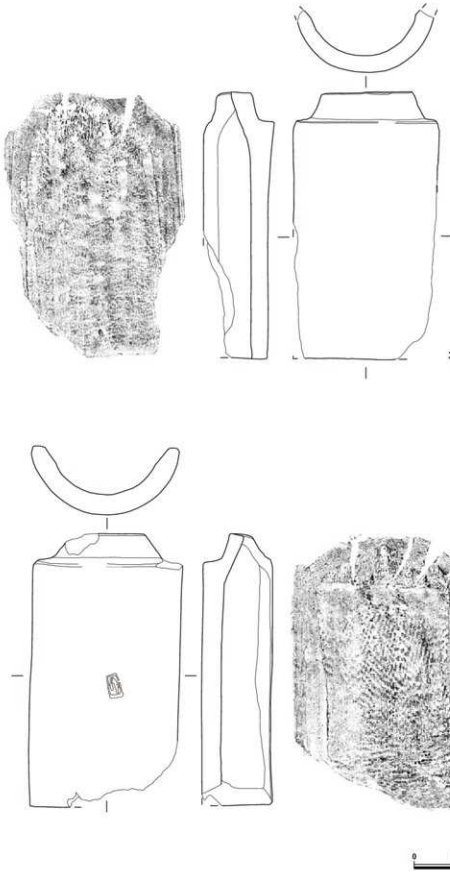
第70図　大溝出土遺物実測図11



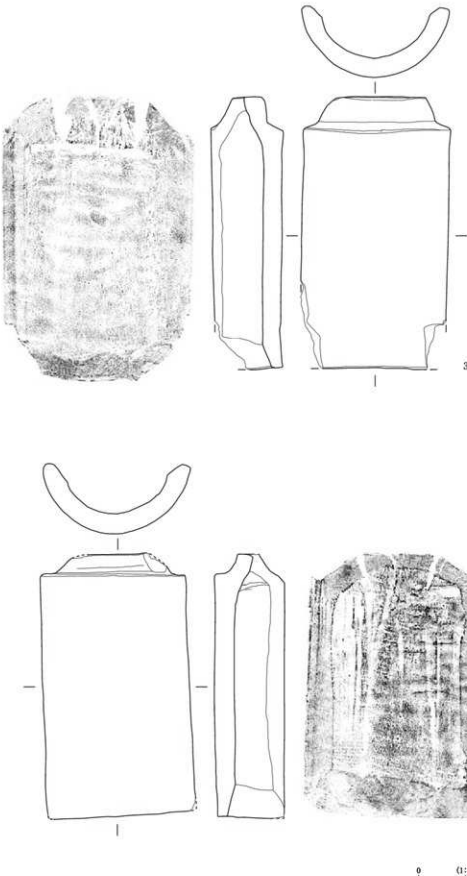
第71図　大溝出土遺物実測図12



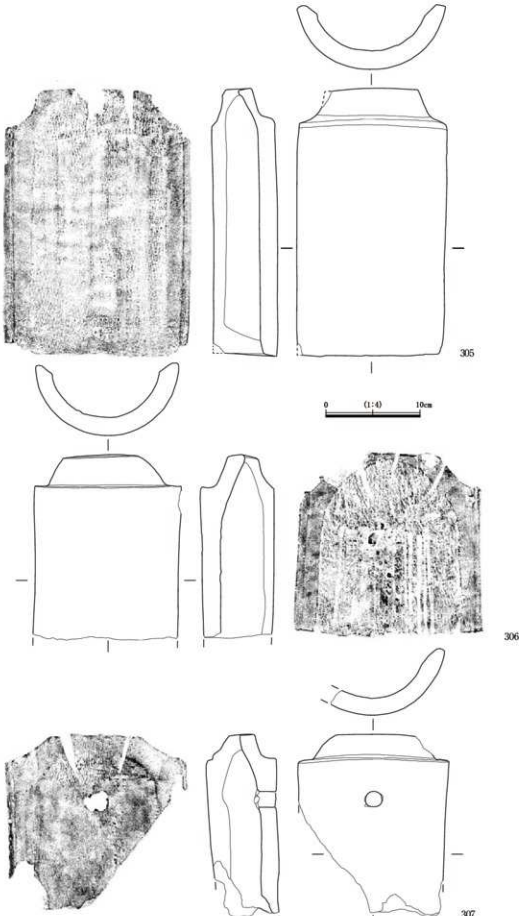
第72図　大溝出土遺物実測図13



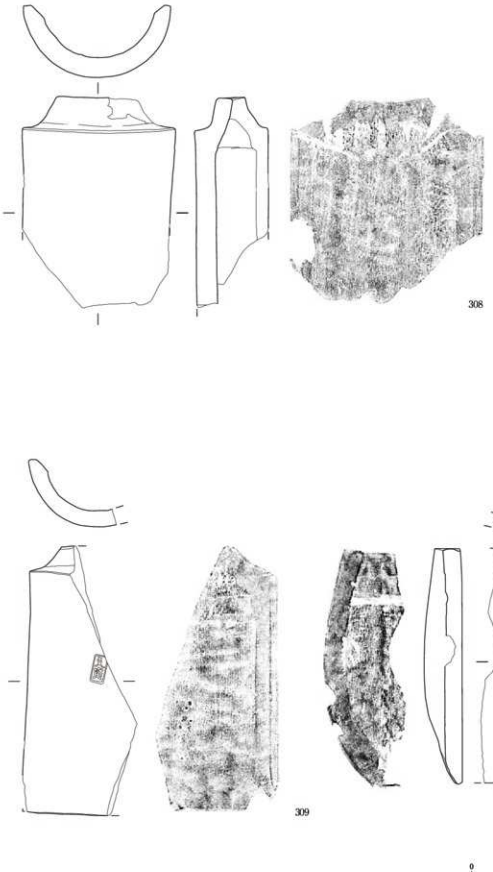
第73図　大溝出土遺物実測図14



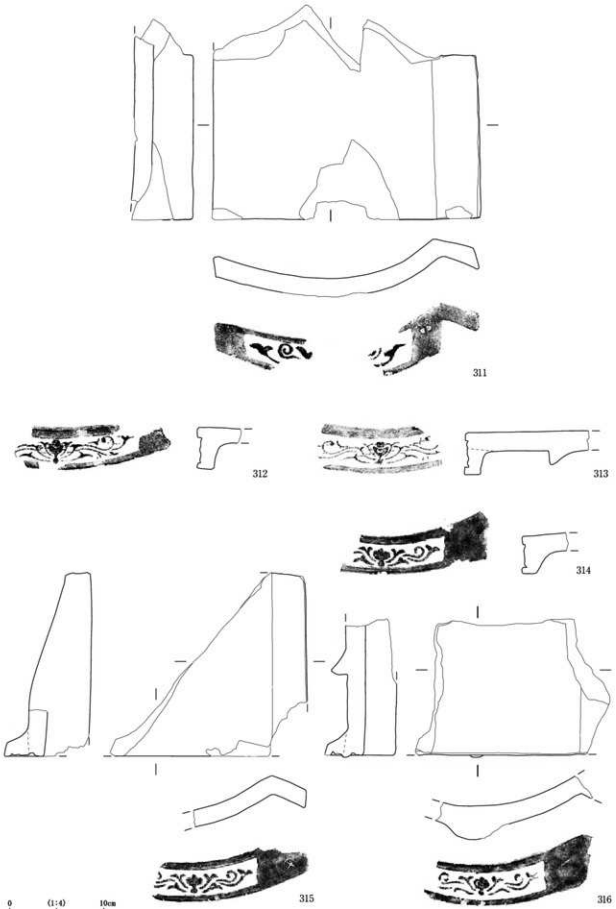
第74図　大溝出土遺物実測図15



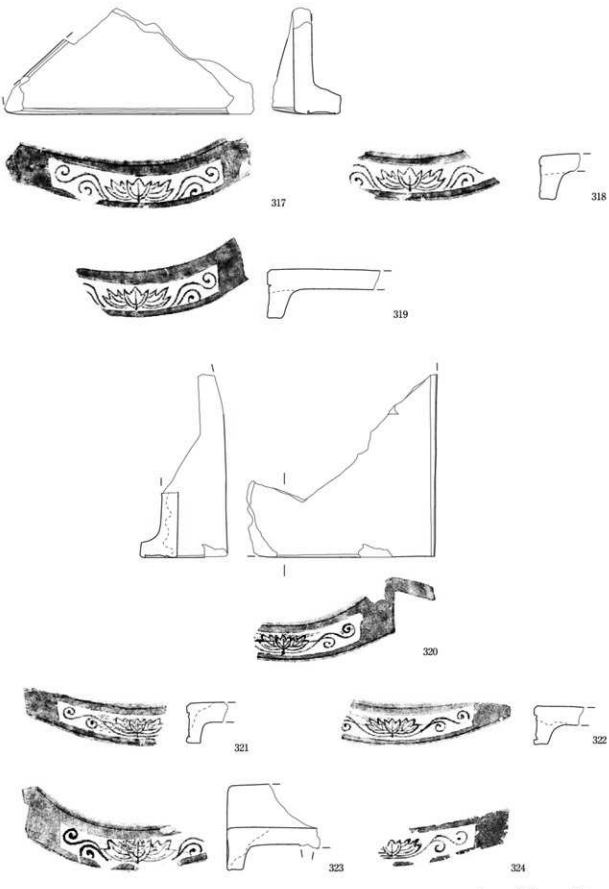
第75図　大溝出土遺物実測図16



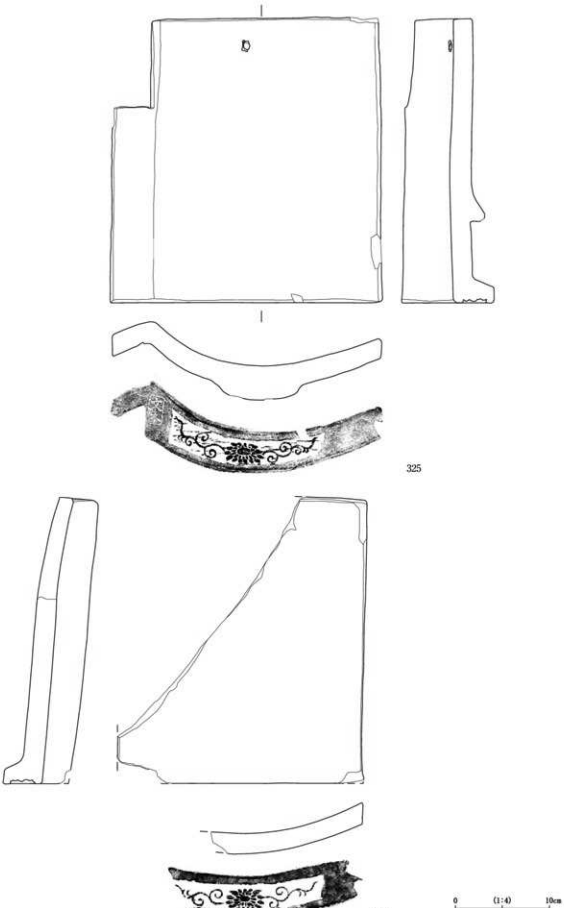
第76図　大溝出土遺物実測図17



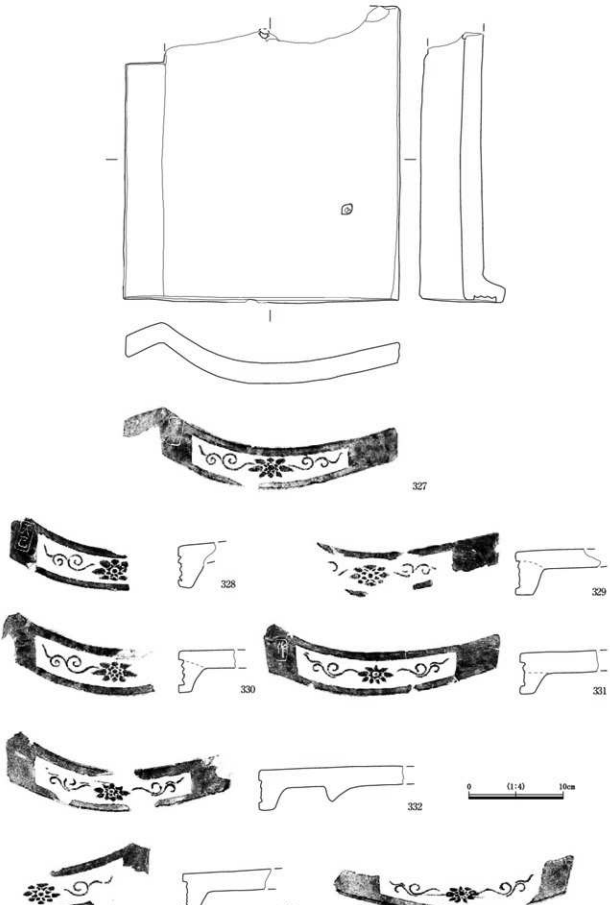
第77図　大溝出土遺物実測図18



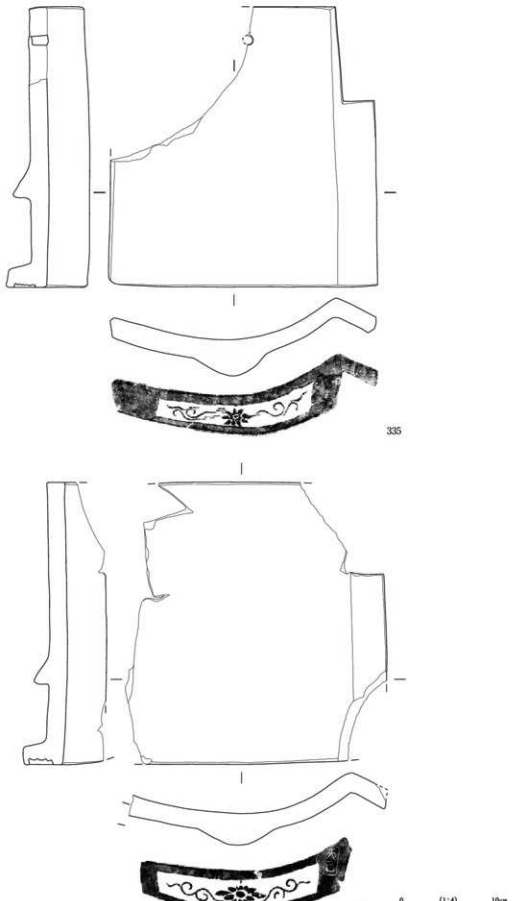
第78図　大溝出土遺物実測図19



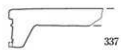
第79図　大溝出土遺物実測図20

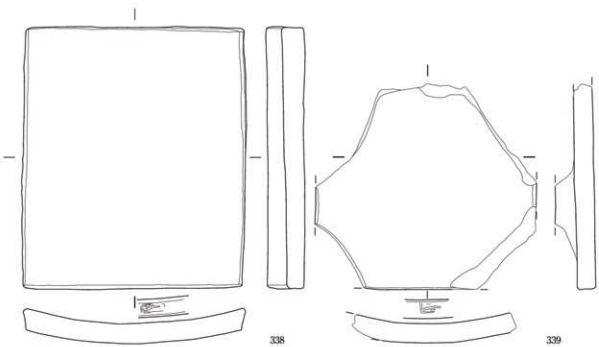


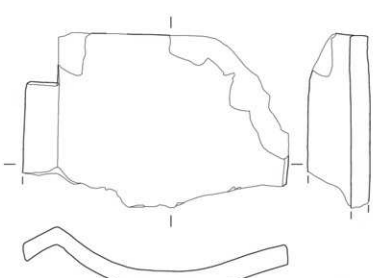
第80図　大溝出土遺物実測図21



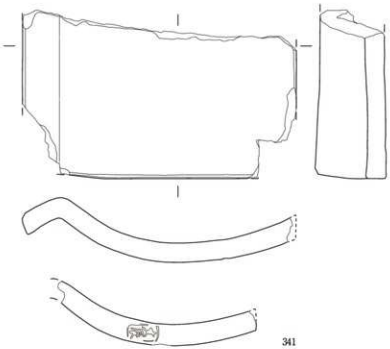
第81図　大溝出土遺物実測図22



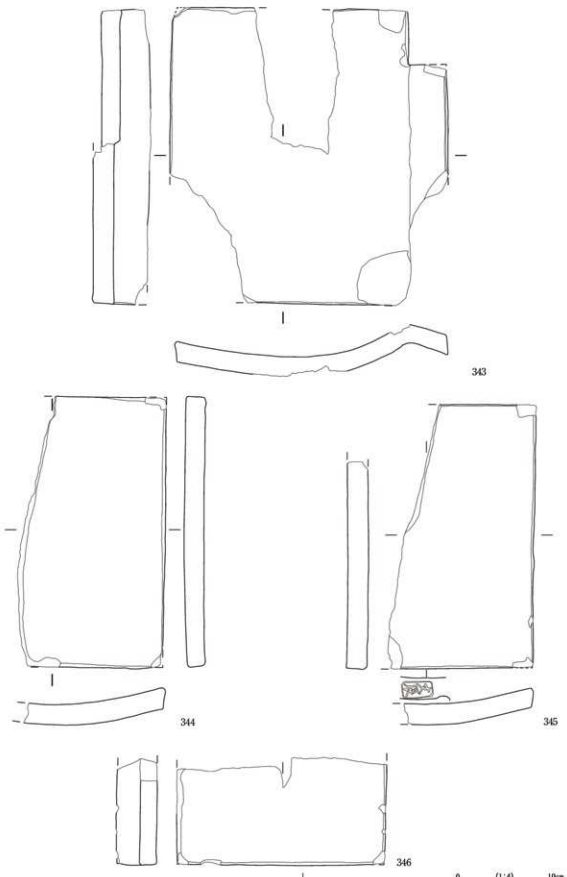




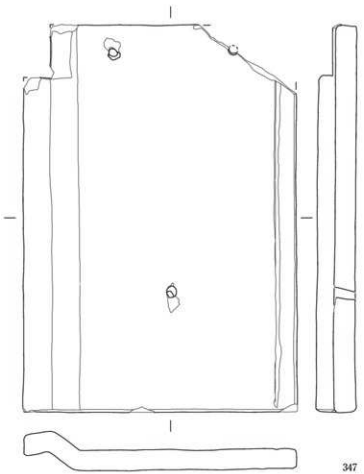
第82図　大溝出土遺物実測図23

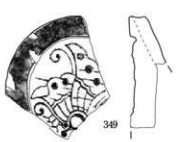


第83図　大溝出土遺物実測図24



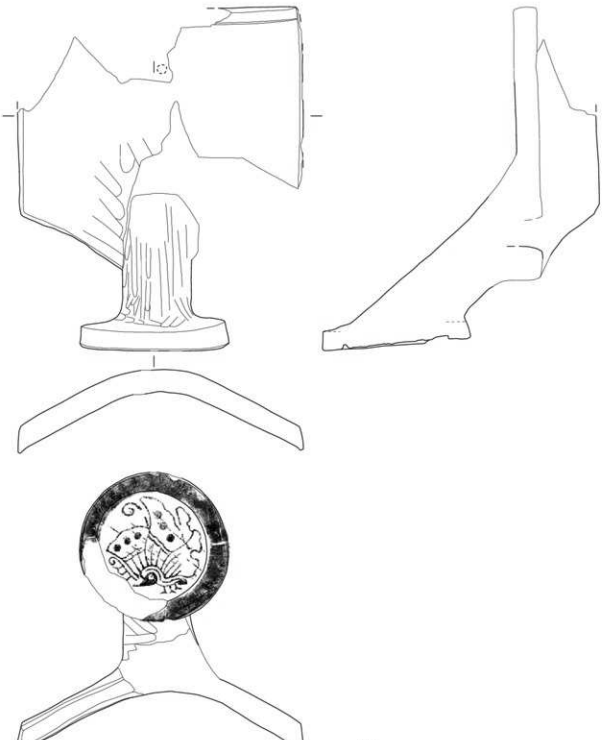
第84図　大溝出土遺物実測図25



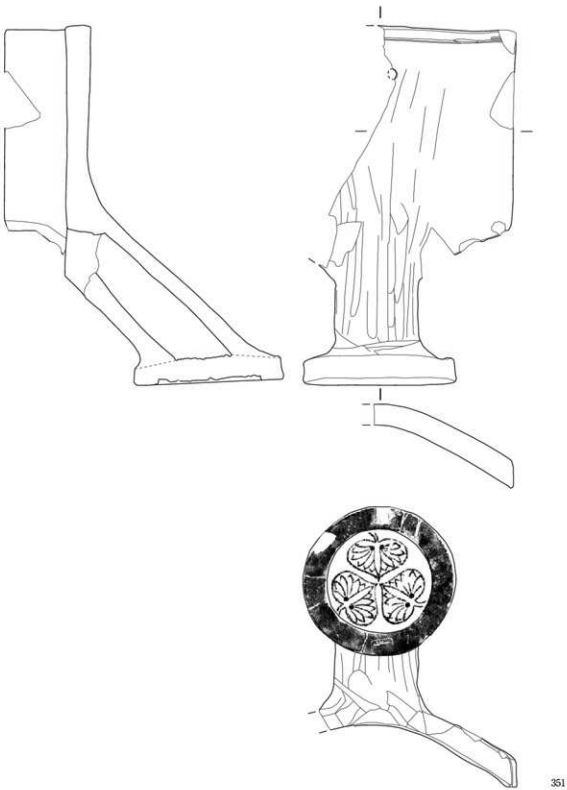


0　(1:4)　10cm

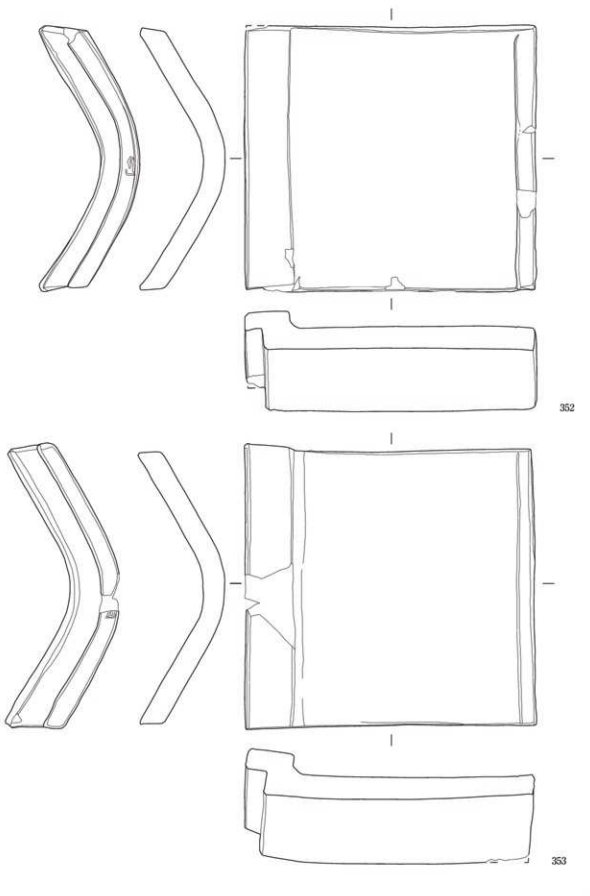
第85図　大溝出土遺物実測図26



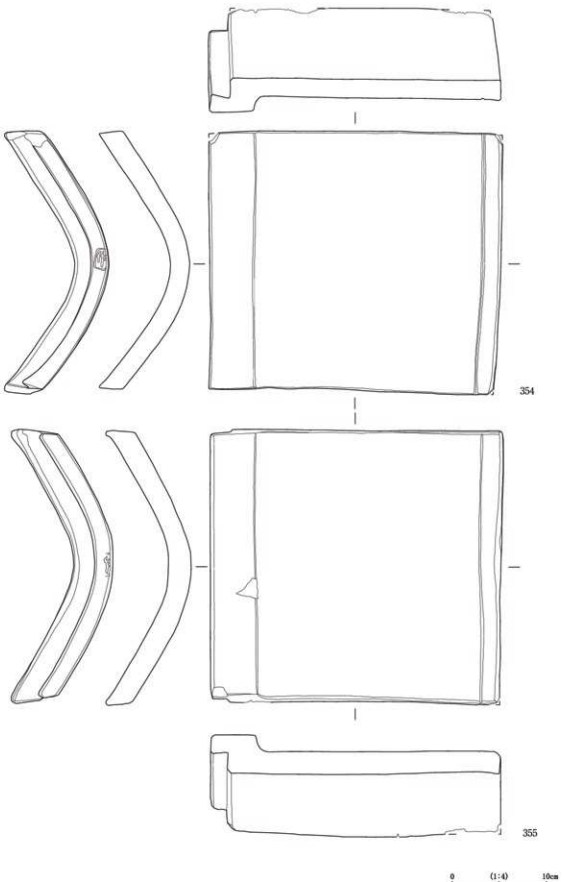
第86図　大溝出土遺物実測図27



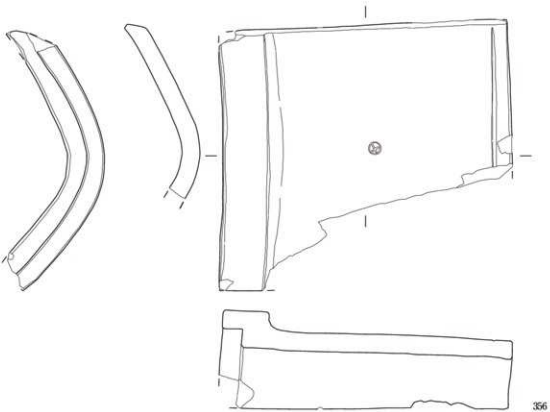
第87図　大溝出土遺物実測図28



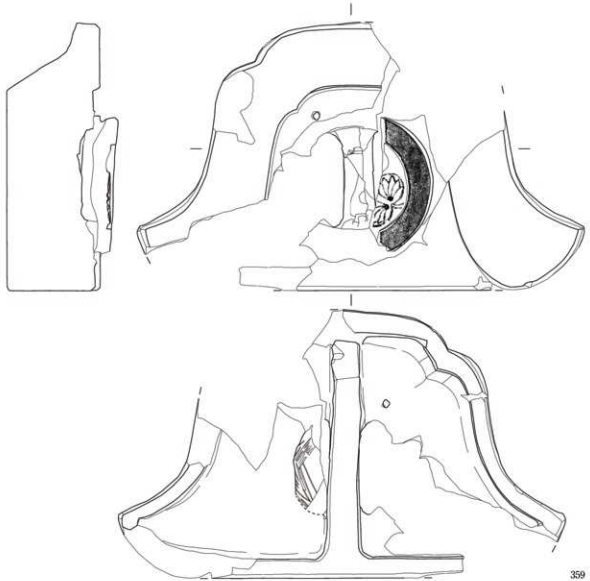
第88図　大溝出土遺物実測図29



第89図　大溝出土遺物実測図30

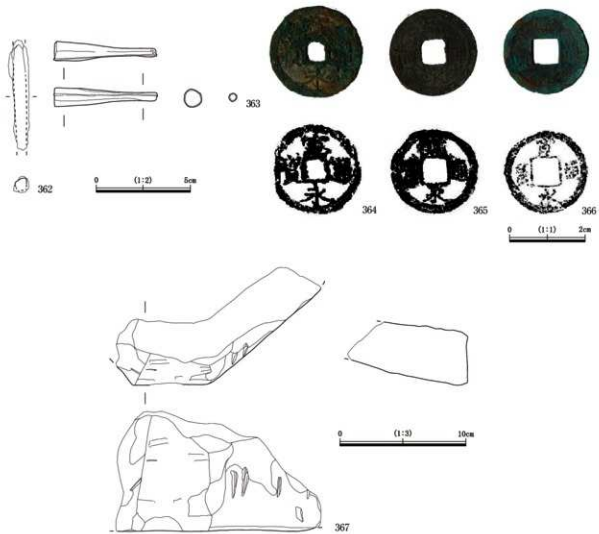


第90図　大溝出土遺物実測図31



0　(1:4)　10cm

第91図　大溝出土遺物実測図32



第92図　大溝出土遺物実測図33

が付くと想定される。314～316は平24型、左軒桟瓦で315の側区には㋕の刻印、316には滑り止めがみられる。317～319は上向き三葉文で左軒桟瓦の平51型、断面図を見ての通り、文様区が浅く、側区と段差が付かない。320～322は左軒桟瓦の平40型、同じく上向き三葉文であるが、左右の葉の脈が枝分かれする。323は右軒桟瓦の平50型、324は平54型、325～336は中心飾りが花文。325は全長30.1cm、幅28.8cm、笵傷の進んだ平63型の右軒桟瓦で側区に「文未」の刻印、滑り止めも付く。326は全長30.3cm、幅は現状で26.0cm、軒平瓦とみられ、平面長方形である。327～330は右軒桟瓦の平66型、327は幅29.3cmで側区に「文子」の刻印、２孔を穿ち328には「天巳」、330には「文亥」の刻印、331・332は右軒桟瓦の平69型で前者には側区に「作」の刻印。333は左軒桟瓦の平65型、334・335は左軒桟瓦となる平68型、後者は全長29.6cm、幅28.4cm、滑り止めを持つ。336は左軒桟瓦の平72型、側区に「天巳」の刻印、滑り止めを持つ、337は左軒桟瓦の平81型、338・339は平瓦、338は全長27.7cm、幅23.8cm、平面形は長方形で小口には「作」の刻印、340・341は右桟瓦、342は全長30.5cmの左桟瓦、343は全長31.5cm、幅29.4cmの左桟瓦で高さは低い。344は全長28.7cm、345は全長28.0cm、346は平瓦で幅31.1cm、347は全長40.9cm、幅27.9cmと緩長の種類で、３孔を穿つ。348～351は鳥衾瓦、348は笵傷が進んだ蝶23型で「作」の刻印、349は蝶20型、350は蝶23型、351とともに初めて全形が復元できた個体であり、高さ36.3cm、351は葵１型で高さ38.0cm、「作」の刻印がみられる。352～356は雁振瓦で桟の反対側に水切りの線が入り、桟の

中央付近に刻印を押すのが一般的である。352は全長28.1cm、幅31.0cm、353は全長30.9cm、幅29.6cm、354は全長27.8cm、幅31.1cm、355は全長31.0cm、幅29.0cm、ここまでの４点はほぼ完形で「作」の刻印を持つ。356は瓦の中央付近に⊕の刻印。357は輪違いの棟込瓦で全長13.9cm、358は不明瓦製品で、上面は平らで碁盤の目のような区画がみられる。359・360は葵１型を中心に据える鬼瓦で、高さ47.2cmを測る。362は銅鈕とみられ、363は煙管の吸口、364～366は銅銭「寛永通宝」、367は緑色凝灰岩製の柱根巻石であるが、内面も多角形(六角形か)になるとみられ、四角以外のものは初見である。

（５）桝および大溝吐水部

①遺構〔第93・94図、図版６～８〕

12m続く大溝３の下流に位置する石組の桝は、内寸3.8×２m、深さは1.3～1.6mで溝に対して横長の平面形を呈す。石の上面高を見ると、桝の左右で違いがあり、左(中ノ御門)側が標高5.3m付近にあるのに対し、右(グラウンド)側は標高5.6m付近にあり、周辺路盤ともつながることから、溝・桝を境に段差が付いていたと考えられる。この場合、大溝３と同様、蓋で覆うものではなく、絵図に描かれるとおり開渠であったと想定される。桝の流入口の左右には長辺が80～90cmを測る大型の石材が据えられており、出口側も同様に大型石材が確認できる。入口側の溝底の標高が4.9mであるのに対し、出口側は標高4.7mとなり僅かながら低い。桝の性格としては、堀への土砂流出を防ぐための沈砂桝とみられ、一旦桝内に水を溜め、上澄みを堀へ排水していたとみられる。近世当時、堀への土砂流入が問題となり、度々浚渫が行われた記録が残る。先の調査でも明らかな通り、中ノ御門内にも桝を設置するほど、土砂流出には気を使っていたようである。桝の内側を見ると、左右とも標高4.8m前後を上面として段が付く形となる。溝の出入口の標高に近く、立面をみても上面に目地が通るようにも見えることから、以前にあった一回り小さな桝との想定もできるが、明確ではない。段差での内寸を見ると丁度３mとなる。この段差より下は２～３段ほどの石積みがみられ、桝底となる。桝底は、石敷きであるが、きれいに面を揃える形ではなく、凡そ平らな石材を配置するもので、やや凹凸がみられる。

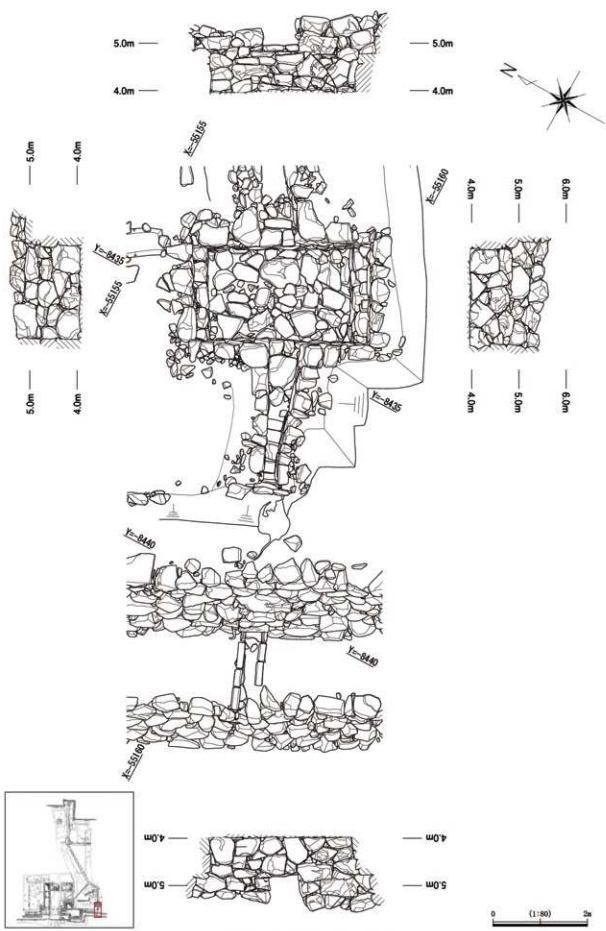
桝出口より堀へとつながる範囲を大溝吐水部と呼称する。桝入口側の幅が85cm程であるのに対し出口の幅は65cmとやや狭く、進むにつれ逆三角形状にさらに狭くなり、桝より３mの地点は、幅25cm、高さ30cmの暗渠となり石垣内へ進む。桝縁より1.7m付近より先には溝底には緑色凝灰岩を板状に切り出した石材が敷かれており、崩落した石垣内暗渠の修理のため石垣を解体したところ、石垣内は上下左右４つの石材共に同様の石材が利用されていたことが分かった。溝底の標高は暗渠入口で4.6m、出口で4.2mと石垣を比較的急な勾配で降り、犬走り部分へ出てくると幅35cmとやや広がり、そのまま堀へ吐水される。犬走り部分では暗渠部同様、緑色凝灰岩製の側壁が残り上部に蓋石を乗せるための加工がみられるも、遺存しない。溝底もまた洗掘防止のために敷石が並んでいたと考えるのが妥当であるがこちらも遺存しない。桝を出た先の溝は、直進して進む溝３に対して10°程の傾斜をつけて僅かに斜め方向へ流れる。

②土層堆積状況(第95図)

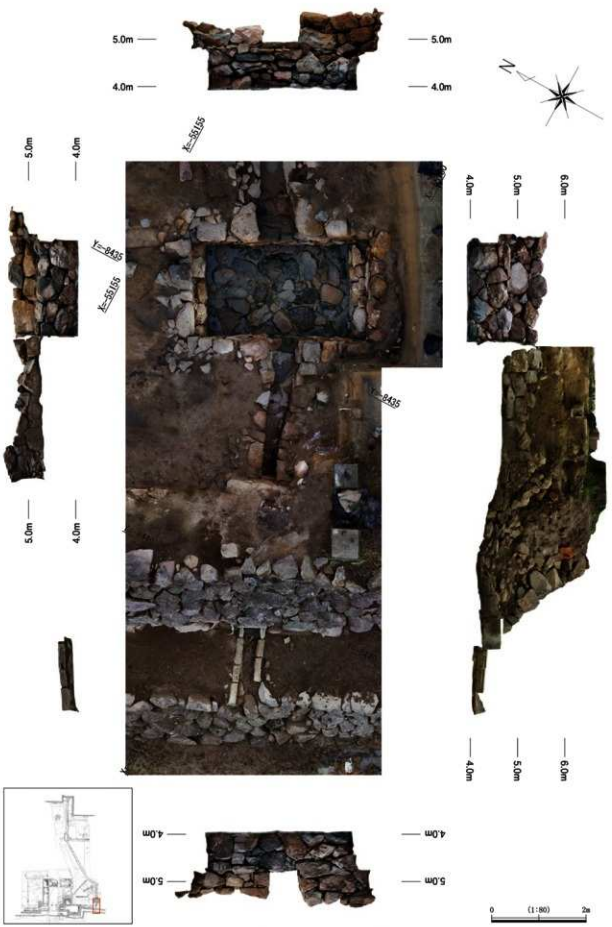
桝埋土の堆積状況はは出入り口よりやや下の標高4.6～4.7mを境に上下で大きく異なる。下層の２～６層は砂礫層であり、大溝と桝が機能していた頃の自然堆積とみられるが、上層の１層は人為的に埋めた層とみられ、大量の瓦片や拳～人頭大の石が廃棄されるような形で堆積する。堆積状況は大溝３区の下流側と同様で、溝と桝を同時に埋め立てることを目的としたと考えられる。１層中にはこの他多量の陶磁器も含まれており、最上層となる桝の縁辺りには特に多くの瓦が堆積していた。また下層の４層には遺物が多く包含されていたが、１層の内容と差は無く、堆積時期にそれほど差は無いとみられる。

③遺物(第96～113図)

368～405は陶器。368は肥前陶器碗、369は形は肥前ではあるが在地産とみられる。370は産地不明の碗、釉が厚く掛り、２次的な被熱のためか変色する。371の碗は薄く整美な形で在地産ともみられるが産地



第93図　枡平面・立面実測図



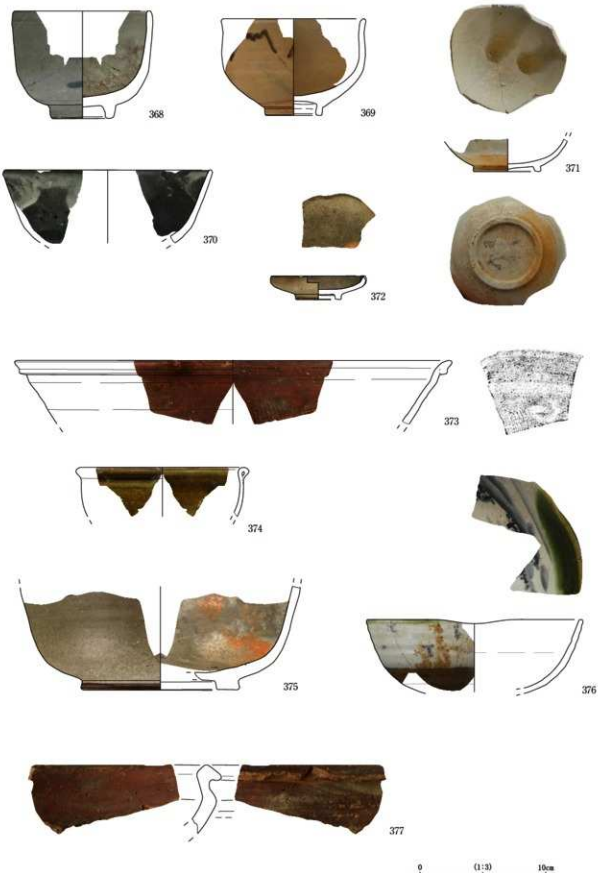
第94図　栃平面・立面オルソ図

写真24　土層堆積状況
※第40次発掘調査時

第95図　桝土層断面図・堆積状況

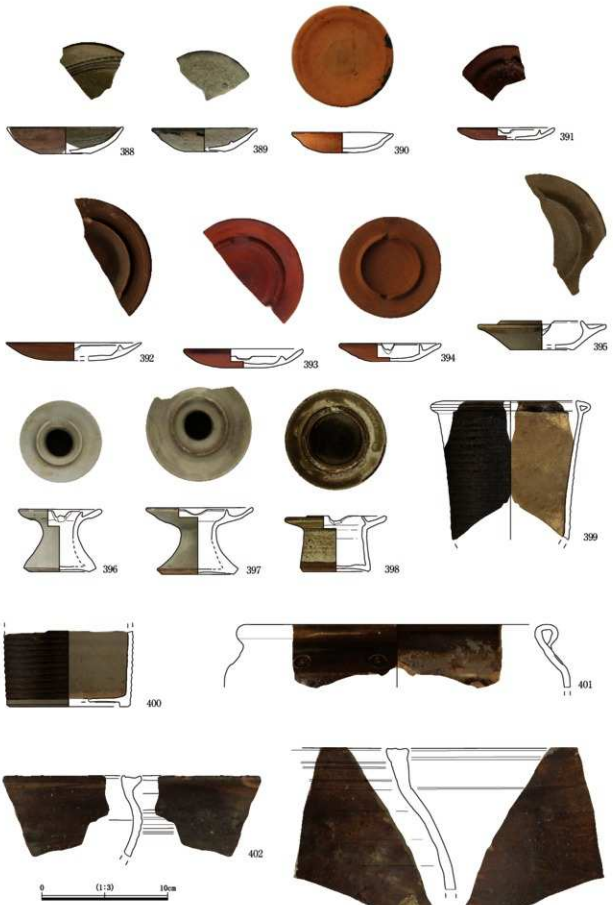
不明、高台内には墨書があるも読み取れず。372は在地産の皿、373は須佐擂鉢、374は在地の鉢で口縁内は中空、375も在地の鉢、376は釉を掛け、内面には山水を描く、産地は不明。377・378は越前鉢、379・380は別個体の鉢、内傾する口縁を持ち内外に鉄泥を掛ける、薄く整った形ながら産地は不明。381は在地の鉢、382・383も在地の片口鉢、384は水差し、上面には花文と文字が押されるも読み取れず。在地産ともみられるが産地不明、385・386は在地産の落し蓋、388・389は在地産の灯明皿上皿、390は土師皿、391～395は在地産の灯明皿下皿、391～393は鉄泥を塗る一般的なものであるが、394は素焼きで受部の切れ込みは２ヶ所となる、395は器高が2.3cmと高く、底部は若干上げ底となる点は、乗燭に近い形態である。396～398は乗燭、396・397は頸部が締まる形態、信楽焼に類例がみられる。396・397は頸が締まるの対し、398は締まらず器高が低くなる。399・400も在地産、筒形の器形は花器か。401は瀬戸・美濃系の鉢か、印花文を押す。402は越前鉢、403は越前の壺か、404は糸取り鍋、下部にはスチームようの小穴が一周しており下部から排水する仕組みである。底部外面には「蚕」とみられる墨書が残る。信楽焼に類例がみられるが産地不明。405は在地の徳利。406～431は磁器、406～408の小坏は肥前系の在地産か、409は肥前の掛け分け、411は肥前の広東碗、413は瀬戸・美濃碗か、415は在地の皮鯨釉碗、417は肥前系か、口縁部が釉剥ぎされるため蓋物とみられる。418は肥前の段重。419～421は蓋、420は蛸唐草、421は鳥と梅枝を描く。422は肥前型押し紅皿。423・424は輪花皿、425は皿、427は白磁の猪口、428は小坏、429は外山水文の灰吹き、430は仏飯器、431は胴が張る油壺。

432～487は瓦。432～439は軒丸瓦、432は蝶15型、433は蝶11型、434～436は最終形態とみられる蝶23型、437・438は巴８型で珠文は12個、439は全長29.2cm、幅15.6cmで瓦当面は剥落する。440～445は丸瓦、440は全長29.2cm、幅15.1cm、外面中央に✤の刻印。441は全長28.6cm、外面調整の痕跡が残り、中央には㊥の刻印、内面の布目跡は縦方向に明瞭に入る。442は全長27.7cm、内蔵きが残る、443は全長29.0cm、外面中央に「文寅」の刻印、445には孔がみられる。446は軒丸瓦の丸瓦部で全長29.8cm、幅16.6cm、細筋の内蔵き。447～471は軒桟瓦。447は左軒桟の平24型、側区に㊥の刻印、448・449は左軒桟の平15型、450は右軒桟の平20型、451・452は右軒桟の平33型、側区に㊉の刻印、451は片側に２孔あり、452には滑り止めが付く。453は左軒桟の平28型で滑り止めが付く。454は右軒桟の平17型で、中央の橘から直線が伸びる。現状この１点のみの出土である。455は左軒桟の平23型、側区に✤の刻印。456～459は左軒桟の平40型、457・459には孔があり、458には滑り止めが残る。461～464は左軒桟の平51型、465・466は右軒桟の平63型で、横方向の笵傷が顕著である。467は左軒桟の平68型で滑り止めが付く。468・469は右軒桟の平66型、468には滑り止めが付く。470は右軒桟瓦の平69型、471は左軒桟の平78型。472は全長29.8cmの右桟、473は全長が24.8cmと通常より５cm程短い平もしくは桟瓦。475は左桟で全長29.9cm。476～481は目板瓦。476は全長38.2cm、幅277cmの右桟で、板に桟を貼り付ける類例の少ない種類。２孔

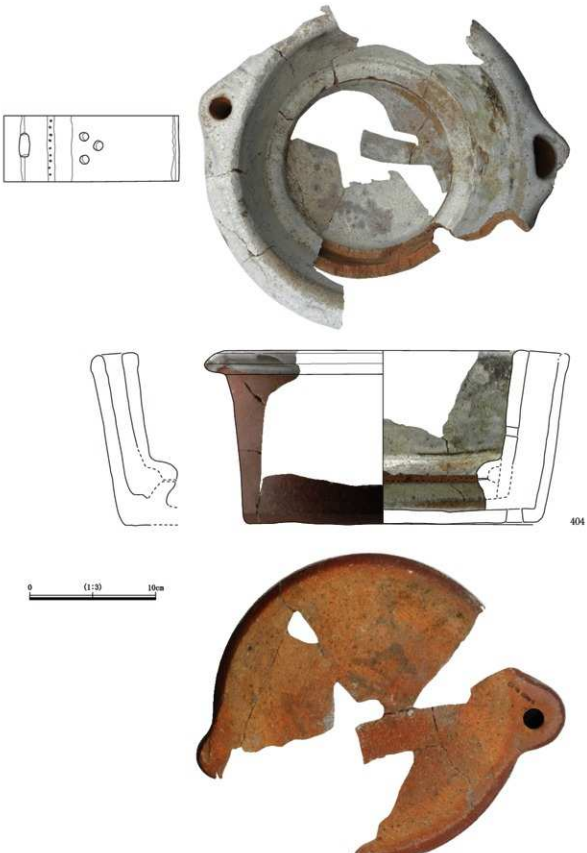


第96図　栃出土遺物実測図1

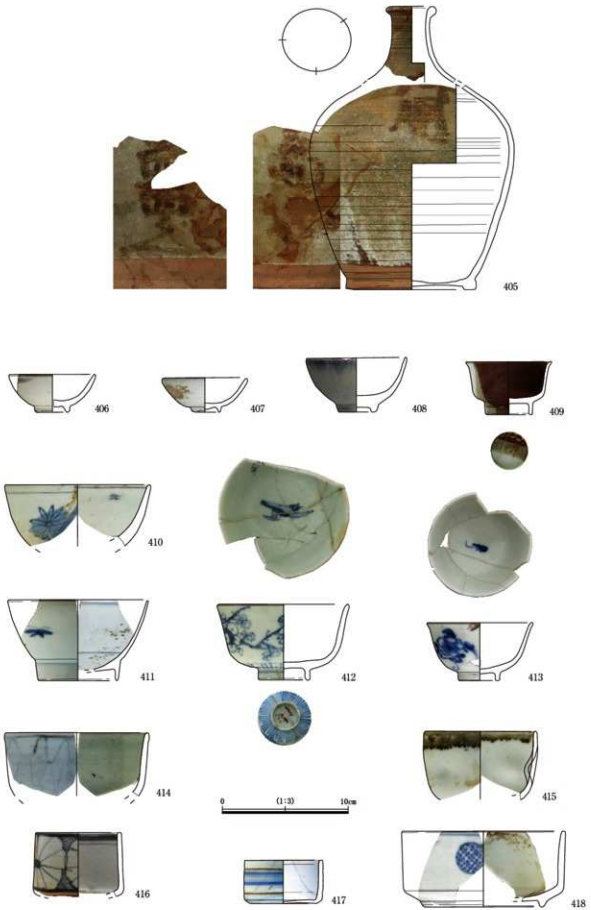
第97図　栃出土遺物実測図2



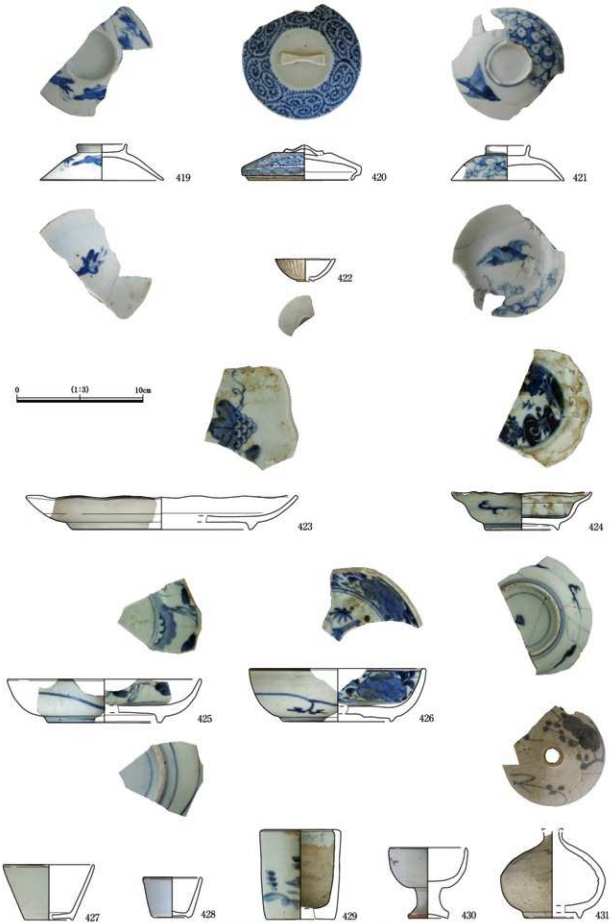
第98図　栃出土遺物実測図3



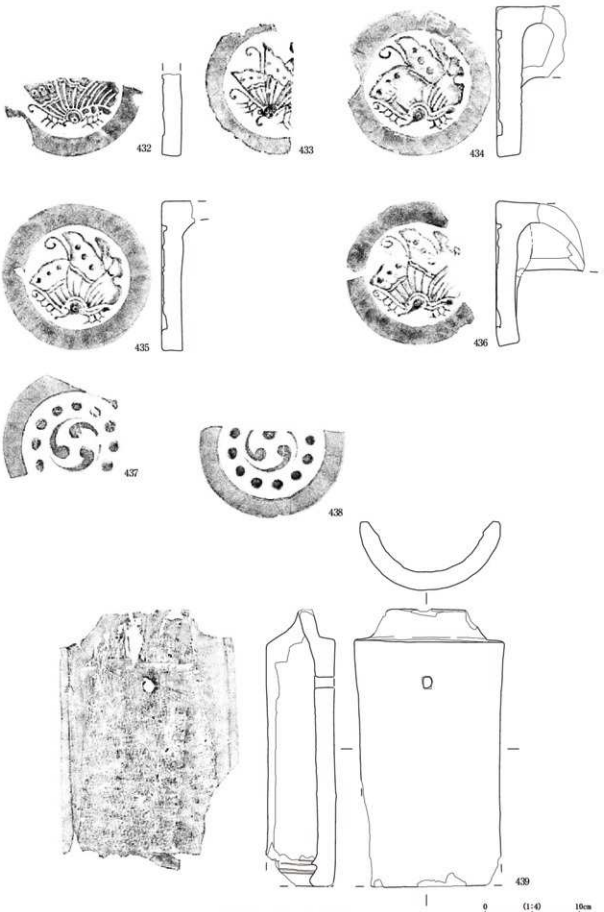
第99図　栃出土遺物実測図4



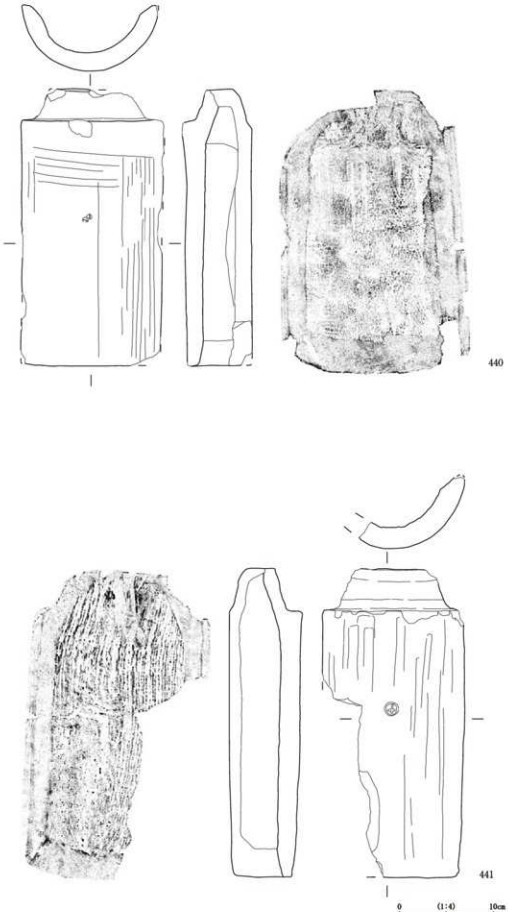
第100図　栃出土遺物実測図5



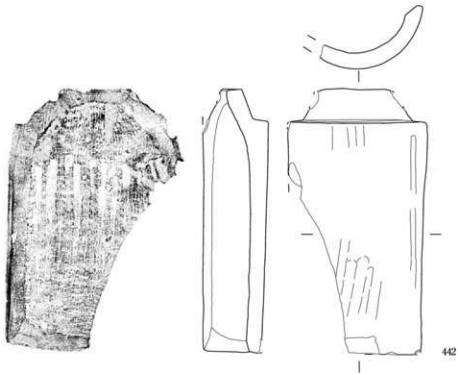
第101図　桝出土遺物実測図6

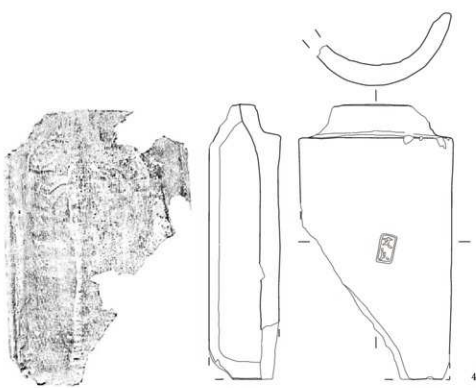


第102図　桝出土遺物実測図7



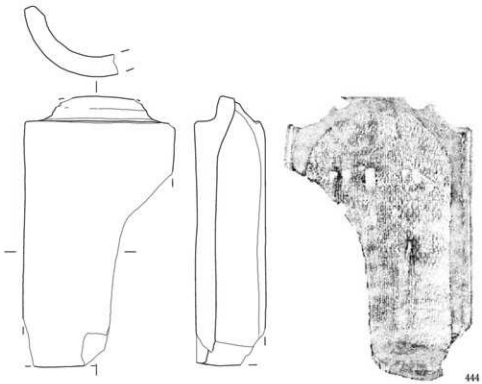
第103図　桝出土遺物実測図8

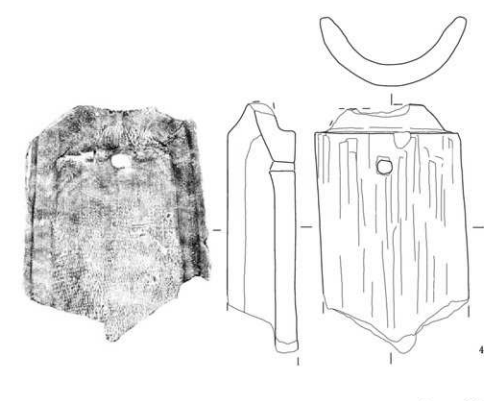




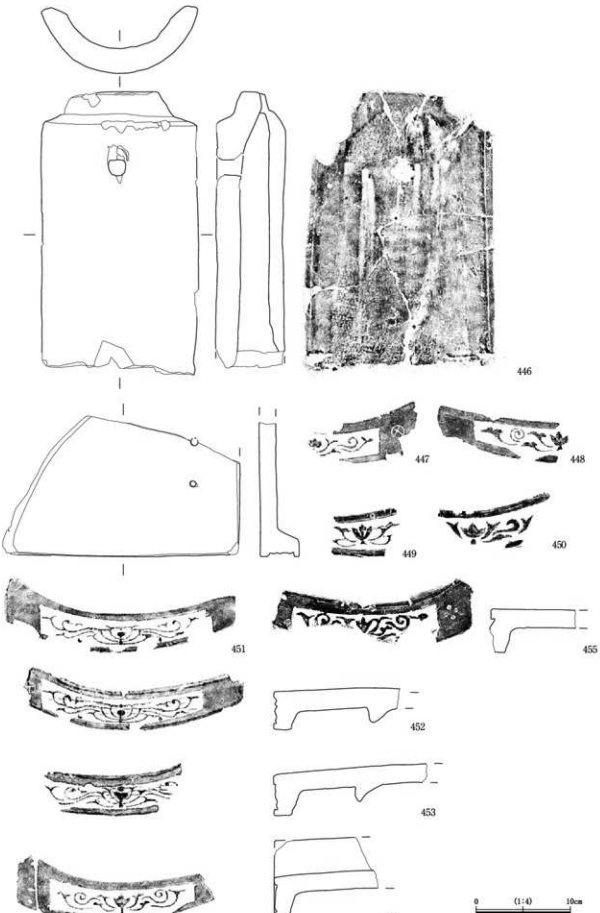
0　(1:4)　10cm

第104図　桝出土遺物実測図9

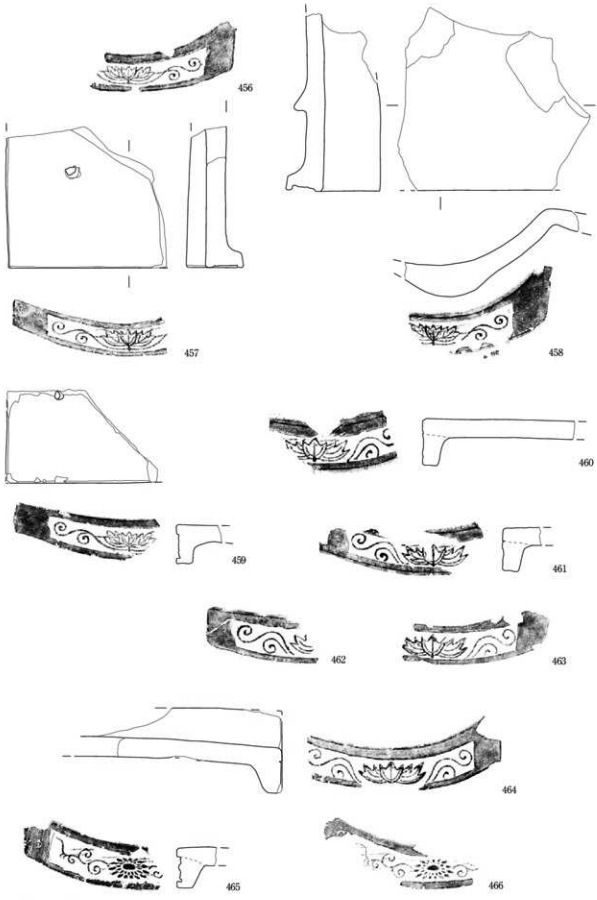




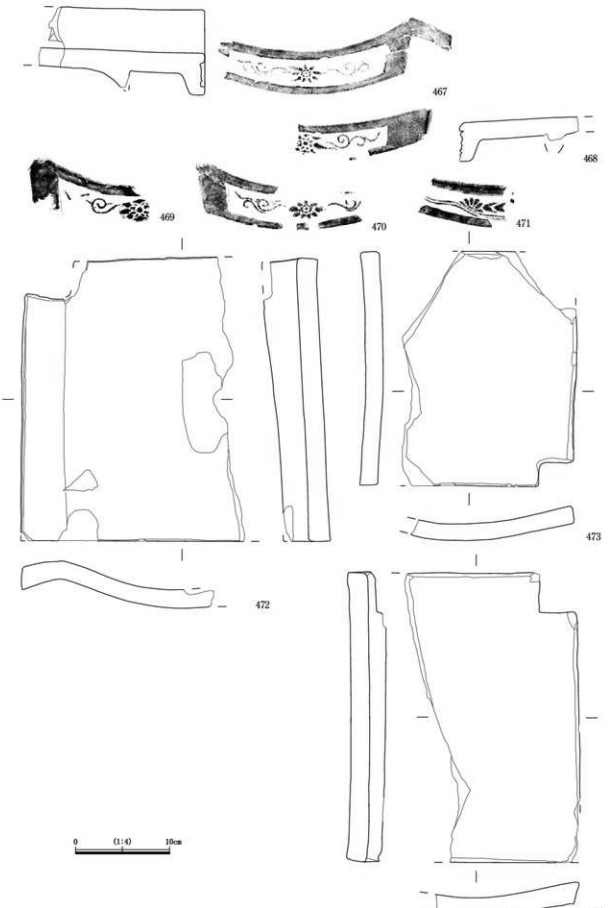
第105図　桝出土遺物実測図10



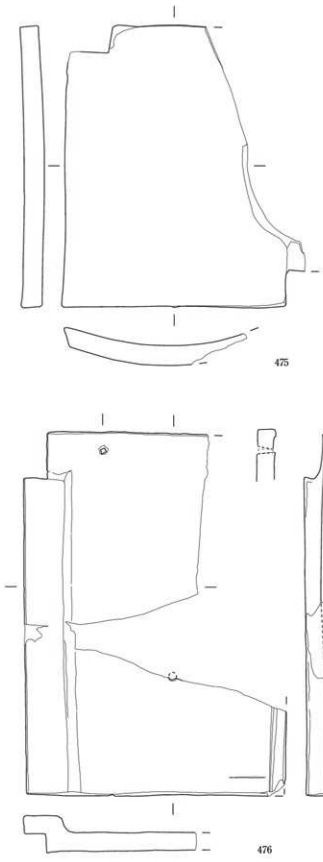
第106図　桝出土遺物実測図11



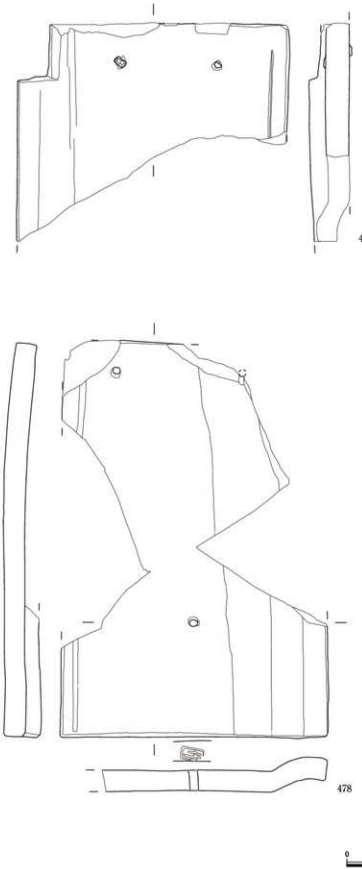
第107図　桝出土遺物実測図12



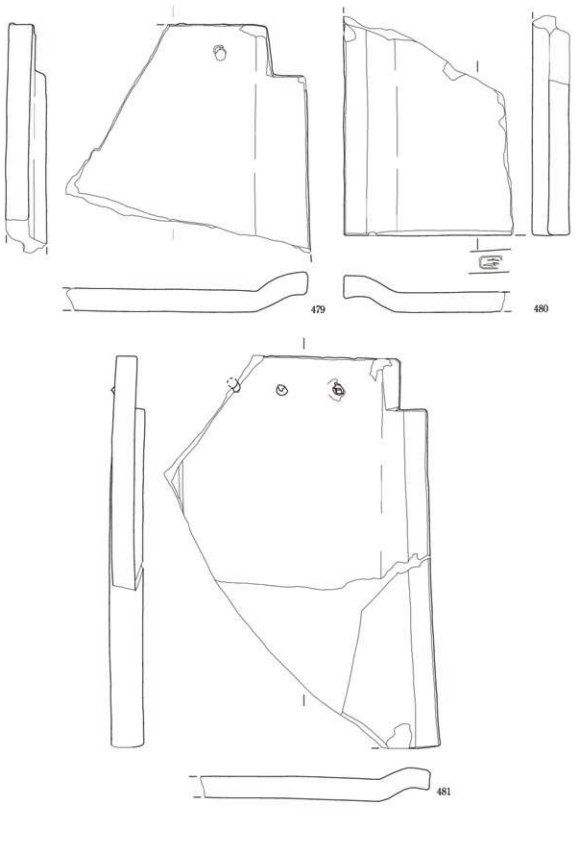
第108図　桝出土遺物実測図13



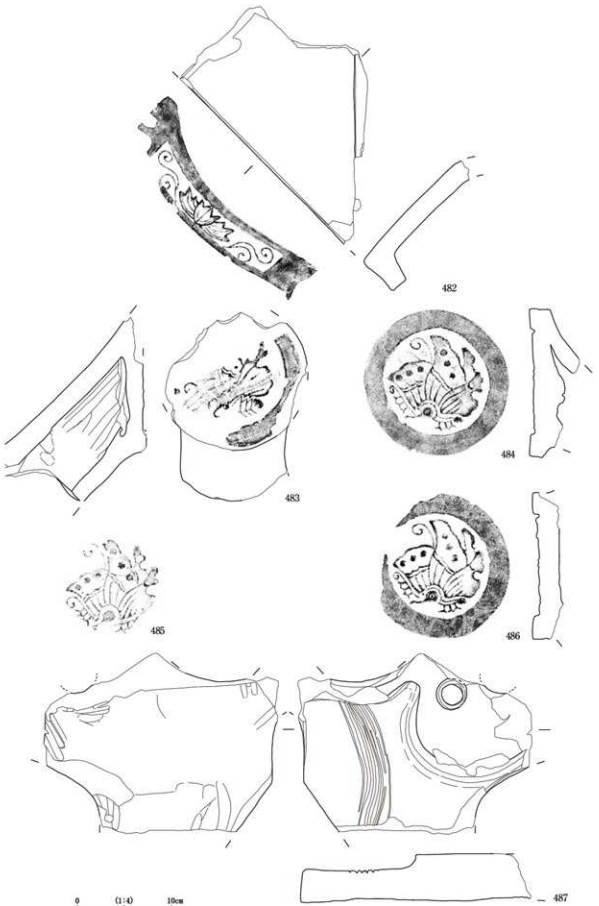
第109図　桝出土遺物実測図14



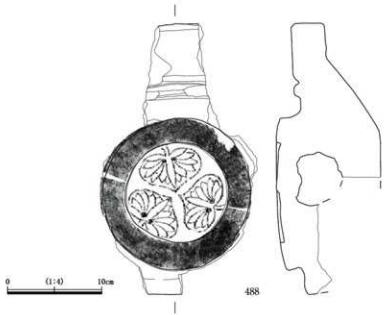
第110図　柄出土遺物実測図15

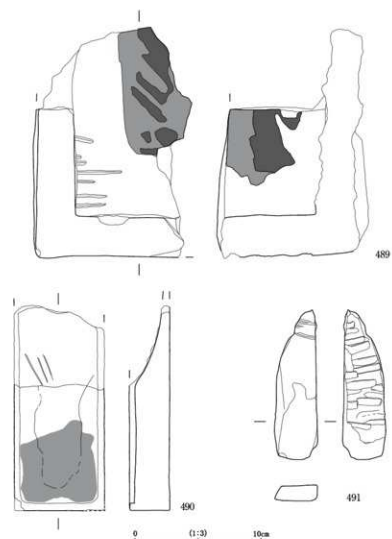


第111図　栃出土遺物実測図16

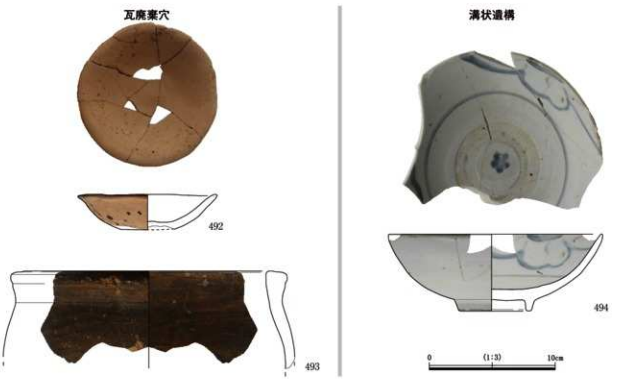


第112図　桝出土遺物実測図17





第113図　桝出土遺物実測図18



第114図　瓦廃棄穴・溝状遺構出土遺物実測図

が残るも本来は３孔とみられる。477～481は桟部分が一体的に作られる種類。477は右桟で孔内に釘が残る。478は左桟で全長41.7cm、幅28cmと縦長、小口に「作」の刻印。479は左桟、480は右桟、481は左桟で全長41.5cm、後ろに３孔みられる。482は右軒桟の平50型の廻隅瓦。483は蝶11型、484は蝶23型の鳥衾。485は蝶20型、486は蝶23型の鬼瓦。487は造り付けの鬼瓦とみられるも、向き、文様ともにはっきりしない。488は葵１型の鬼瓦。

489は緑色凝灰岩製の柱根巻石で煤が付着する、深さ８cm程度を測り、底面が付くのは初見である。490は硯、491は表面に削り込みの痕跡が多数残る。被熱により赤変することから温石か。

（６）瓦廃棄孔〔第114図〕

番所の北西側に位置する直径60cm程度の廃棄穴である。2006年の調査の際にも検出しており、幕末面より掘り込まれた穴の内部には瓦片が詰まっていた。瓦自体に実測できるものはなかったが、共に出土した492は土師皿で口径11.0cm、493は越前壺で復元口径22.0cm、内外に鉄泥を塗る。

（７）溝状遺構〔第114図〕

大溝３の南東側、生活面が一段高くなる地点に位置する。大腰掛が存在して場所に位置する。溝状遺構としたが、明確ではなく、対面して置かれる石間の距離は40cm、深さも40cmを測るが、大溝側へは続いてはいない。溝であったとしても最終段階までは機能していなかったとみられる。内部から出土した494は肥前系の碗で内面には半裁の花を描き、見込みには五弁化を押し、蛇の目釉剥ぎする。

（８）旧桝・旧溝

①概要

復元整備対象とならない旧段階の遺構であるが次項（９）番所と関連してくるため先に報告する。大溝や桝、番所礎石等を検出し終わった段階で、番所の正面付近に上面が平らな90×80cmの石材が、標高5.4m付近に広がる幕末路盤面と面を揃えて露出しており、その位置より、当初は番所出入口に関連する敷石と考えていた。しかし、建物配置とは若干の齟齬が認められたことから、別遺構の可能性を想定し、周辺を掘り下げたところ、対面する石を検出、この大石は溝蓋石であることが明らかとなったこと

から、全容の把握に努めた。大石より西側については調査区際までを検出、東側を追うと大型の桝と接続することが判明した。これらの遺構は近世のある時点で埋め立てられ機能を失った施設であるためこれを旧溝・旧桝と呼称した。旧桝周辺を精査したところ、側壁とみられる石が確認できたものの、当地には最終的に番所が建てられており、埋まった旧桝上には、その礎石らしき石もみられたことから全面検出は行わず出入り口付近に2.0×1.5m程の トレンチを設定して部分的な調査とした。

②旧溝〔第115～118図〕

旧桝より調査区際までの6.8mを検出した。周辺路盤面と同じ土で完全に埋められていたため、先の発掘調査時点でその存在を想定することはできなかった遺構である。内幅40cm、深さ30cm、２段積みの石は、上段に扁平な石材を用い、その上に蓋石を乗せる構造である。大石の横には、片側が溝内に落ち込んだ蓋石も２石程残存していた。桝より２mほど進んだ地点より溝底には木がみられ、かなり劣化が進むも、板材とみられることから、本来は板敷きであったとみられ、この場合の溝深は25cm程度となる。板の上面高が不明であるため、本来の溝底勾配は不明であり、現状ではほぼ平坦である。桝との接続部付近の溝中央には直径７～８cm程度の杭がみられる。溝側への通水を仕切るための堰を設置した痕跡であろうか。溝は、西側へ続いており、このまま直進すると中ノ御門櫓門背面、現在大溝から分岐した小溝が接続するあたりに達すると想定される。この付近には、埋没した古い階段が確認されていることから、下層に眠る旧段階の城遺構であることがわかる。

溝内の土層堆積状況を見ると、第118図旧溝内Ａ土層断面図の大石付近では、路盤面整地のために敷かれたとみられる１・２層で埋められるも、旧溝内Ｂ土層断面の、旧溝入口付近ではこれらの埋め立て層の下には４層となる焼けた木片を含む層を確認した。

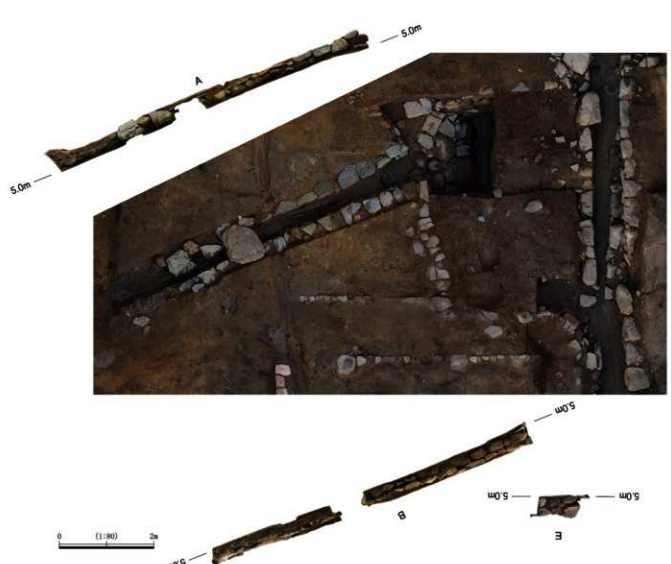
③旧桝〔第115～118図〕

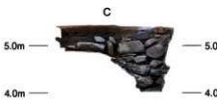
旧溝と旧桝はほぼ90°の角度で接続、この一辺のみが傾斜し、他三辺は堀に対し並・直交する四角形の平面形を呈する。内寸は斜辺の長さは4.4m、堀側の短辺が3.1m、その他二辺は4.8mを測る。接続部分に2.0×1.5mのトレンチを設定し掘り下げを行ったところ、桝隅は90cm程の開口部がみられ、桝の斜辺部と併せ、本来の大溝流路であることが判明した。大溝の不自然な屈折や、分岐１付近からの東側石垣の改修痕跡は、この旧桝へと続いていた流路を振り替えたことによると考えられる。大溝から旧桝までの５mは、旧溝同様、周辺路盤と同様の土で埋め立てられているため平面からその痕跡は看取ることはできない。斜辺部の天端石は良好に残るも、堀と並行する二辺については、抜けが目立ち、もう一辺については、大溝３の溝内に上段を取り外された状態で残存していた。桝の南隅に1.0×0.8mのトレンチを設定したところ、桝石垣が大溝３へ向け曲がることから、ここが桝の出口とみられ、大溝３の下流付近にはも元々、排水路があったと推定される。大溝の下流に位置することからも、機能としては、先述の桝同様、沈砂桝と考えるのが妥当であろう。

旧桝で特筆されることは、巻石垣の存在である。埋められた旧大溝の延長上、斜辺部に合わせ、球面状にカーブさせた石垣を積む。水辺に散見されるこの積み方は、流速を殺し、洗掘を防ぐ効果があるとされ、城内では享保期の築造された二ノ丸三階櫓脇や、幕末期に石垣補強で造られた、天球丸下などに例があるも、水際での検出は初である。流入口での旧桝石垣の最高点は標高5.0m付近にあり、標高4.1mまでは確認、石垣は下部へ続くようであるが、範囲の制約上、これ以上の掘削はできなかった。石垣の傾斜から推定しても、旧桝の対岸まで続くものではない。

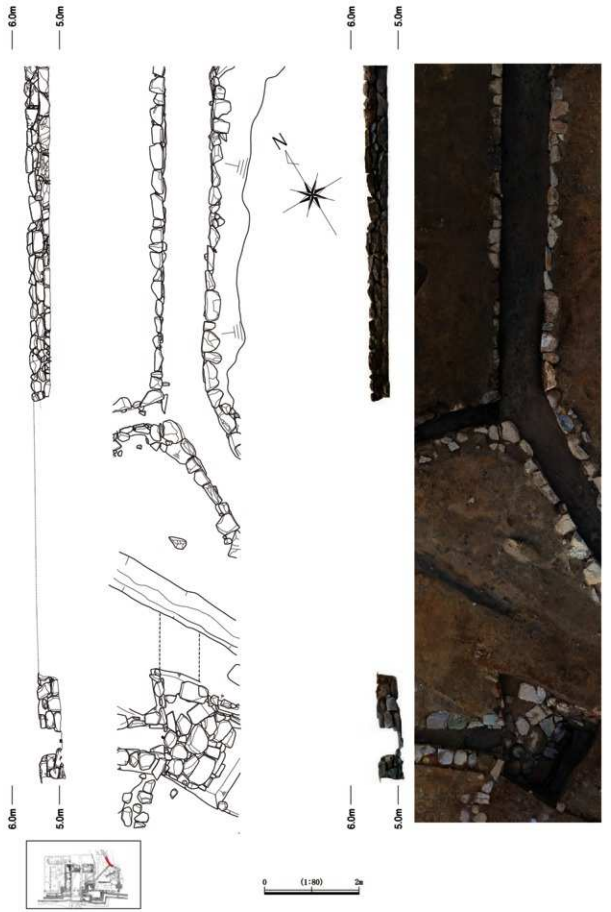
旧桝内の土層堆積状況は、検出時、上面には砂が敷かれており、これらを除去すると２層となる焼土層が広がり、その下３層以下は自然堆積とみられる砂層である。３層以下に直接焼けたような痕跡はないことからも、２層はこの場所で被熱したものではなく桝を埋め立てる目的で投入された土であるとみられ、その上に砂を敷き整地したようである。３層以下の砂層は整地した層ではなく、５層以下が巻石垣に沿い傾斜をつけて堆積することからも溝機能時の自然堆積とみられる。６層は焼炭片とみられる炭

第115図　旧水・旧溝平面・立面実測図

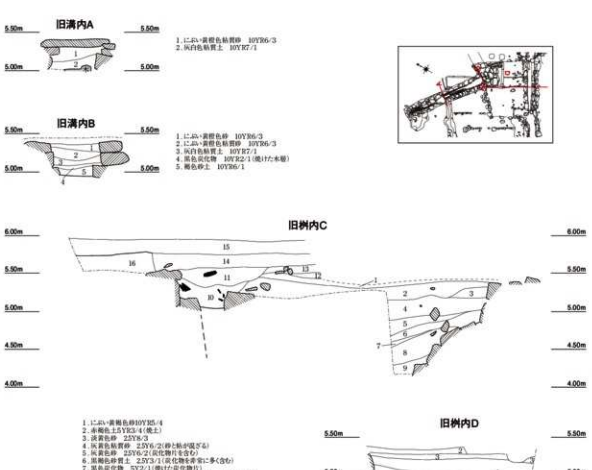




第116図　旧桝・旧溝平面・立面オルソ図



第117図　大溝旧流路平面・立面実測・オルソ図



第118図　旧溝・旧桝土層断面図

化物を非常に多く含み、7層には焼けた木片、8層には炭化物が目立つ。

④遺物〔第119・120図〕

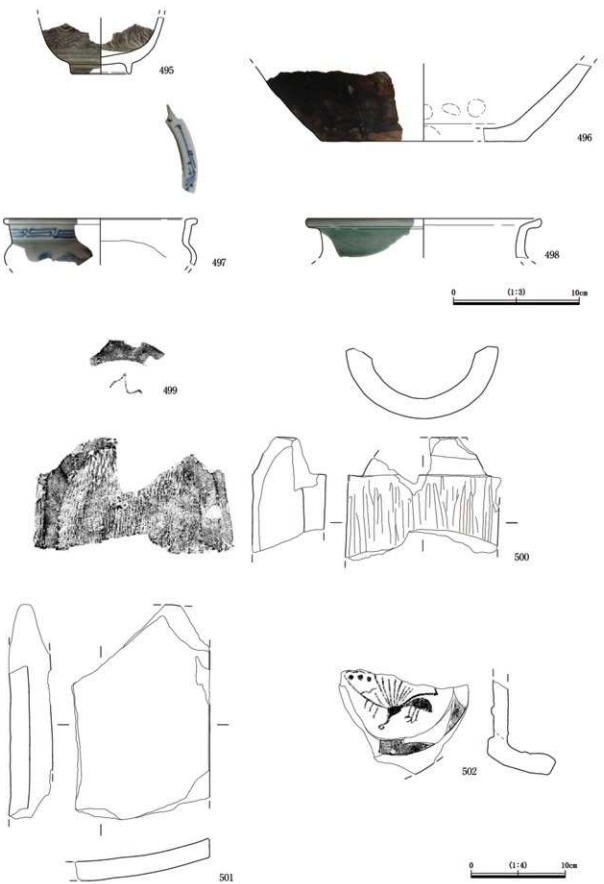
旧溝出土遺物は501・502・513である。495は肥前陶器の刷毛目碗、496は越前甕の底部で内面底部には指頭圧痕が残る。497・498は肥前の香炉とみられ、498は青磁。499は蝶6型とみられる軒丸瓦片、500は丸瓦。501は平瓦とみられる。502は蝶7型の鳥衾である。それ以外は旧桝出土で、そのうち496と508は2層の焼土層、残りは3層以下の砂層からである。503～506はいずれも不明木製品、503は2枚の板を釘で張り合わす、504は鍬先状の形態、505は側面に小穴を持つ、506は箆状。507は銅銭「寛永通宝」、508は煙管の吸口、509の鏃は幅9.5cmとやや小型、510～512の鉄釘は頭巻釘、513は動物の牙。

図化できた遺物は少数であるが、桝内を中心ととて、他にも陶磁器片が出土した。肥前産のものが多く、備前産も含み、時期としては18世紀初めを下限とし、17世紀代の遺物が中心であった。

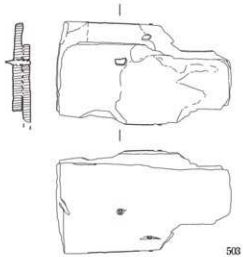
（9）　番所

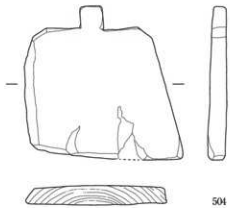
①概要

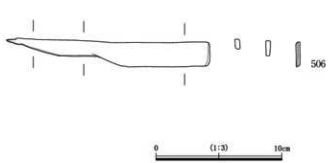
調査の結果、「御番所」は数世代の遺構が存在することが明らかとなった。第34次発掘調査までに、同じく復元整備対象である隣接する「御番人小屋」の礎石を検出し、第40次調査ではこれらと直交方向に続く石列を確認、番所跡と推定されるも絵図の位置とは大きく離れていることから、取扱いについて

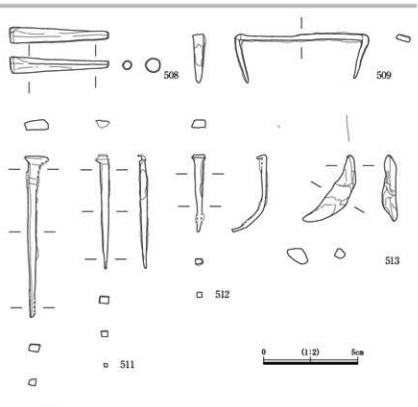


第119図　旧溝・旧柵出土遺物実測図1

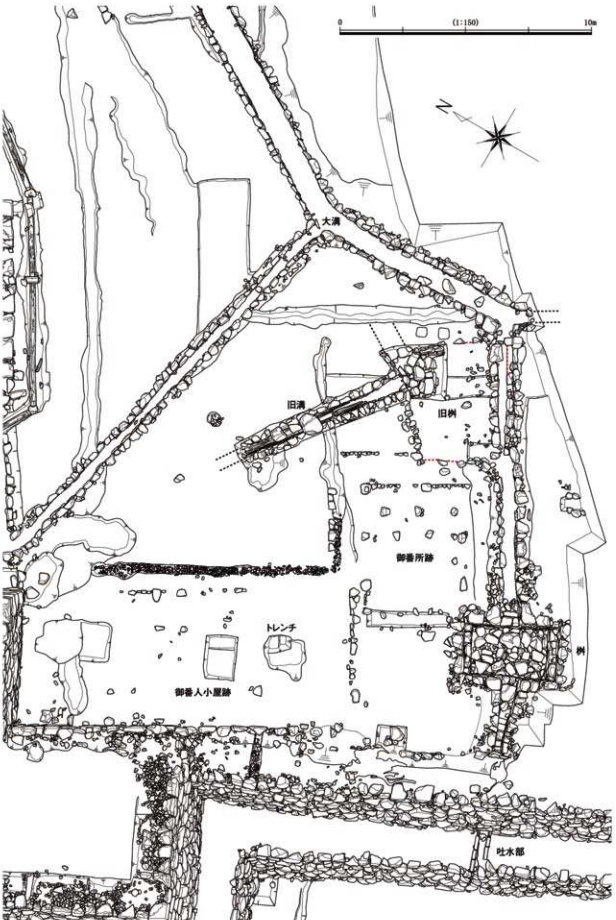






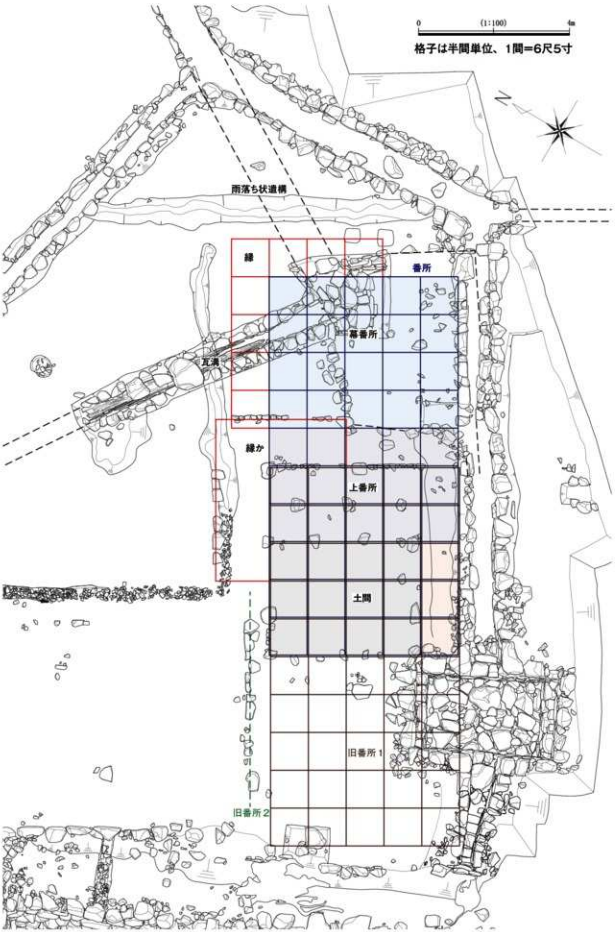


第120図　旧溝・旧柵出土遺物実測図2



第121図　番所周辺平面図

第122図　番所平面オルソ図



第123図　番所推定位置

は検討を要した。調査では、近代造成層を除去中より、礎石ともみられる石の上面が現れ初め、最終的にはほぼ同一面に複数の遺構があることを確認した。旧溝・旧桝の発見により当地の敷地範囲は大きく変更されたことが明らかとなり、大溝の流路を変えるような大工事の原因は番所位置の変更によると推定される。復元設計の根拠ともなる天保期の『鳥府久松山積間図』に描かれる番所や大溝、桝の位置関係は、流路変更後のものと相違ない。しかし、調査では旧桝上に明確な礎石は確認できなかったため、残存する遺構から検討した。

②幕末期の番所

絵図に残る番所は規模が「二間半ニ五間」であり一間＝六尺五寸に換算すると５×10mの建物となる。この番所に関係する遺構として、瓦溝と雨落ち上状遺構がある。瓦溝は建物の軒先下に敷かれたもので幅30～40cm程地面を掘り瓦片を充填する構造で、番人小屋側から伸び、番所前で折れて続く。北東側へ向い遺存状態が悪く、平面図では掘り方だけであるが、旧溝を切る形で存在しており、総延長は9.4mを測る。また、その北東側には瓦溝と直交する形で地面の凹みがみられた。幅70～80cm程度、長さ９mほどのこの凹みは、両端を大溝と分岐溝とに合わせており深さは10cm以内と浅く、人工的な溝というよりは自然に水が伝う流路のような印象を受けることから、雨落ち状遺構とした。付近には礎石の抜き跡とみられる痕跡を２ヶ所で確認した。ここに建物を配置すると、桝入口の角石から大溝３の北西側石垣上(石抜きのため、天端石は残存しない)を通り、次項で扱う旧番所跡の礎石を使用して、軒先を瓦溝と雨落ち状遺構に揃える建物が復元できる。詳細はⅤ章３で扱う。

③旧番所１

礎石とみられる30～40cmの石の間に小型の石を配置し、旧桝の角に一辺を合わせ、1.3mほど間隔をあけ２列が並列し、北西側には後の番所に伴う瓦溝に合う形で６石程残存する。幕末期と同規模の２間半×５間の建物を想定すると、外側の石列は縁部分の地覆石に相当し、北東辺の端部は旧桝に沿い天端石を兼ねることから古い段階の建物跡となる。内側の石列中に残る礎石は梁間２間半の中間に位置し、桁行方向をみると、１間・１間・半間の位置に礎石が残るもその先は遺存していないが、丁度５間で堀側の石垣と接する。また周辺には、扁平ではないが、柄杜のものとみられる礎石も存在する。これらの石列・礎石の多くは被熱し、表面が赤変しているのが特徴的である。

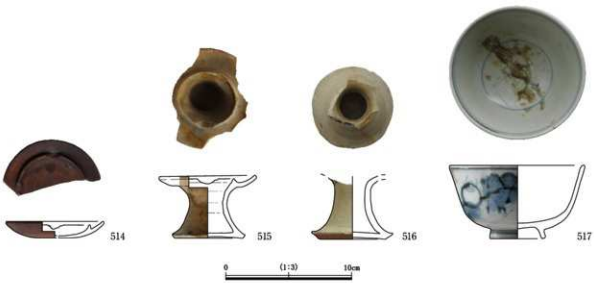
④旧番所２

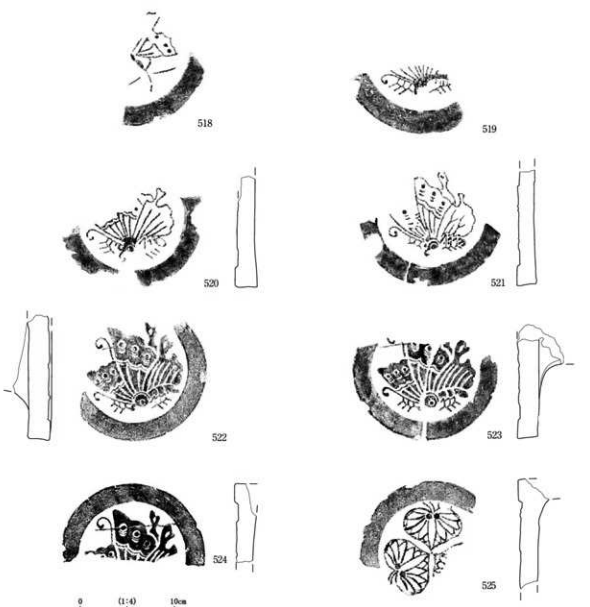
旧番所１と位置をほぼ同じくし、50～60cm程前に並ぶ長さ4.5mの石列である。旧番所１の地覆石や出入口付近の敷石、敷地境界とも考えられたが、南西側の石は丸みを帯びた石材を用いている点などから、更に一段階古い別遺構として扱った。なお南側の石列については旧番所同様、被熱し表面が赤変する。旧番所１と礎石を共有する可能性もあるが、現状で規模等は不明である。

⑤遺物〔第124～128図〕

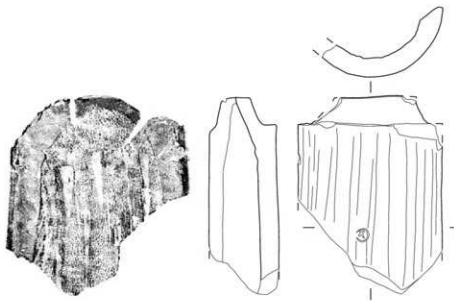
番所跡周辺からの出土であるが、番所に直接関係する遺物かどうかには検討を要する。多くの遺物は、幕末路盤面上での検出であるが、包含された層は、近代初頭頃とみられる焼土層である。514は在地の灯明皿下皿で、内外に鉄泥を塗る。515・516の乗燭は、信楽焼に類例がみられるも明確ではない。517は肥前磁器碗で外面に折枝松と宝珠を描く。

518～544は瓦。518～525は軒丸瓦、518は蝶６型、519は蝶８型、520は蝶11型、521は蝶14型、522～524は除刻の蝶15型、525は葵２型、526は丸瓦、外面に㋮の刻印を押し、内面敲きは部分的。527～537は軒平・軒桟瓦。527は平11型の軒平、528は平16型の右軒桟とみられ、529は平20型の右軒桟、530は平23型の左軒桟で側区には✤の刻印、531～537は平50型の右軒桟瓦で537には滑り止めが付く。538は全長32.0cm、539は右桟。540は蝶７型、541は葵１型の鬼瓦。542～544は輪違いの棟込瓦、543は全長13.7cm。545・546は煙管、547～549は銅銭「寛永通宝」、550は砥石。





第124図　番所周辺出土遺物実測図1


526

527

528

529

530

531

532

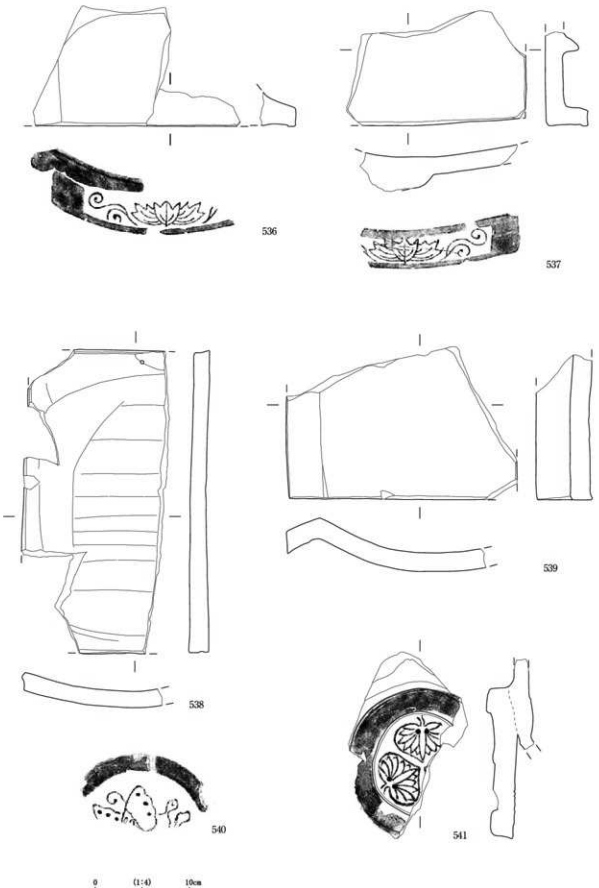
533

534

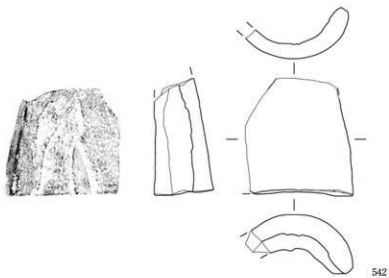
535

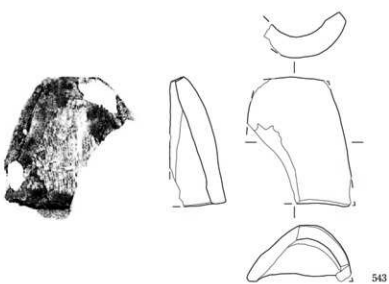
0　(1:4)　10cm

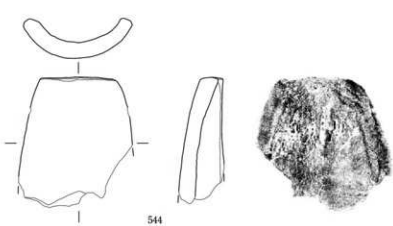
第125図　番所周辺出土遺物実測図2



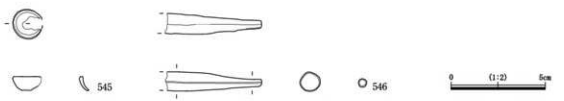
第126図　番所周辺出土遺物実測図3

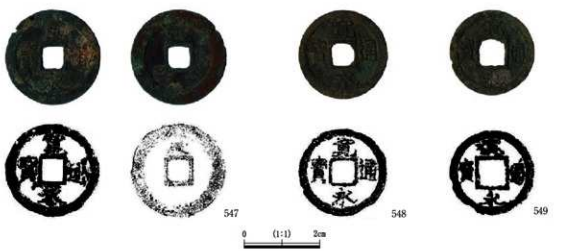


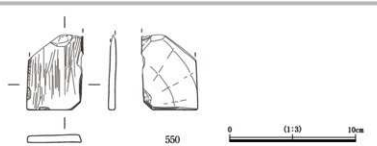




第127図　番所周辺出土遺物実測図4



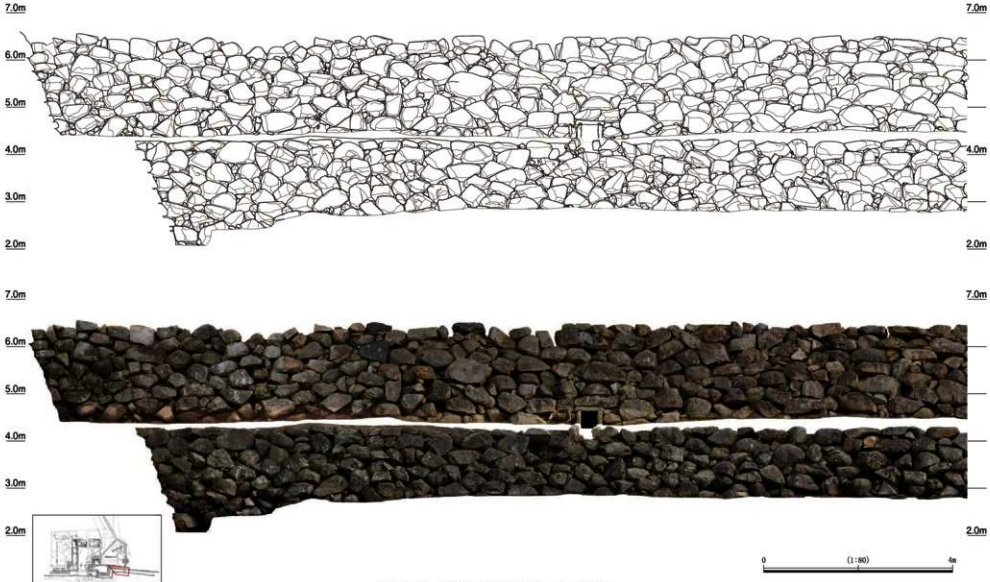




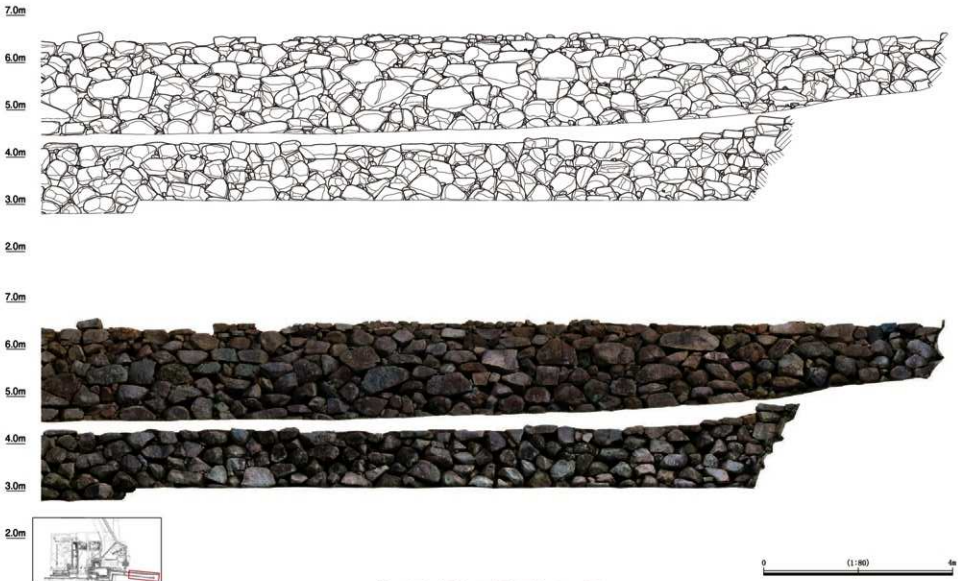
第128図　番所周辺出土遺物実測図５

(10)堀沿い石垣

中ノ御門側より続く石垣は、堀に面し２段で構成される。天端の長さは上段が40m、下段が33m、間にある犬走りは幅1.6m、高さはそれぞれ２mを測る。中ノ御門側の堀底、下段角部については第28次発掘調査の際にトレンチを設定したところ、標高2.0m、石垣の根石下には幅25cmのマツ角材を用いた胴木とそれを固定するための杭を確認した。上段石垣下部、犬走の端部から10.8mの地点の石垣内には緑色凝灰岩製の板材を組合せた排水水暗渠が設けられる。城内の主要排水路である大溝から沈砂桝を介した後に、通水するもので、犬走り上を抜け堀へと排水される。犬走り部分は側壁しか残らないものの、本来は、吐水部に舌状の張り出しが存在していた可能性もある。上段石垣には暗渠部を頂点として、V字状の石垣積み直し跡がみられることから、ある時期に溝が更新されたことがわかる。



第129図　堀沿い石垣立面図・オルソ図1



第130図　堀沿い石垣立面図・オルソ図2

表９　遺物観察表１（土器・陶磁器）

土器・陶磁器　※文様位置①外面②内面③口縁④見込⑤底部裏⑥断

図	番号	器種	器形	産地	出土地	層位	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
20	1	陶器	碗	肥前	芝横堀下中	ガラ	①②刷毛目	7.2	復10.6	復4.4	0.8	4.4	
20	2	陶器	碗	在地	芝横堀下中	ガラ		(3.2)		4.0	0.5	4.0	「関久山」刻印
20	3	陶器	碗	在地?	前列石垣抜跡			5.9	復10.4	復3.8	0.6	復3.8	
20	4	陶器	碗	在地?	芝横堀下中	ガラ		5.7	復8.6	復3.2	0.6	復3.2	
20	5	陶器	碗	肥前	石垣前斜面	表土	①②刷毛目	(5.1)		4.4	1.0	4.4	
20	6	陶器	灯明皿	在地	石垣前斜面	表土	①②鉄泥	1.9	復10.4	復3.0			
20	7	陶器	大皿		撹乱中	表土	②布目	(4.3)		復12.3	0.8	復12.3	陶胎施釉
20	8	陶器	皿	肥前	石垣前斜面	表土	④砂目跡	3.1	復11.9	4.2			二次的な被熱
20	9	陶器	皿	肥前	コンクリ溝下	撹乱	④砂目跡	(5.0)		3.7	0.3	3.7	
20	10	陶器	皿	肥前	撹乱中	表土	④胎土目積	(2.5)		4.7	0.2	4.7	
20	11	土器	焼塩壺	関西?	撹乱中	表土		9.2	復5.5	5.8			刻印
20	12	土器	焼塩壺	関西?	芝横堀下中	ガラ		(5.9)		復5.4			
20	13	土器	焼塩壺蓋	関西?	撹乱中	表土	②布目	1.9	7.7				
20	14	土器	焼塩壺蓋	関西?	前列石垣周辺	盛土	②布目	1.9	復7.3				
20	15	土器	焼塩壺蓋	関西?	撹乱中	表土	②布目	2.2	7.8				
20	16	土器	焼塩壺蓋	関西?	撹乱中	表土	②布目	1.8	7.3				
21	17	陶器	擂鉢	肥前	石垣前斜面	表土	10条／1単位⑤糸切り	6.2		8.4			40次№212と接合
21	18	陶器	皿	肥前	斜面	盛土中		(4.4)					
21	19	磁器	皿	肥前系	撹乱中	表土	④蛇の目釉剥ぎ	3.6	11.8	4.4	1.1	4.4	
21	20	磁器	猪口	肥前系	撹乱中	表土	①氷裂④二重圏線	1.4	8.1	5.4			
21	21	磁器	筆洗い	肥前系	撹乱中	表土		3.2	復8.8				
26	45	陶器	碗	肥前	Tr1	14層	①②刷毛目	(6.3)	復11.8				二次的な被熱
26	46	陶器	碗	肥前	Tr1	14層	①②刷毛目	(4.7)		復5.0	0.7	復5.0	
26	47	陶器	皿	肥前	Tr1	20層		4.3	復13.4	復6.2	4.5	6.2	
26	48	陶器	皿	瀬戸・美濃	Tr1	25層				6.2			
26	49	陶器	皿	肥前	Tr1	20層	④砂目跡	(2.8)		4.4	0.5	4.4	
26	50	陶器	向付	織部	Tr1			(1.9)					
26	51	陶器	甕	備前	Tr1	28層		(7.3)					二次的な被熱
26	52	土器	土師皿		Tr2	8～9層	⑤糸切り	1.4	復8.8	6.2			
26	53	磁器	碗	肥前	Tr1	盛土中9層	①網目	(3.5)					
26	54	磁器	碗	肥前	Tr1	14層		(4.6)		4.5	0.7	4.5	
26	55	磁器	小坏		Tr1	28層		3.9	復5.2	2.2			
26	56	磁器	皿	肥前	Tr1	9～10層	①圏線②山、松③圏線⑥三重圏線	(1.9)		復12.4	1.1	復12.4	
26	57	青磁	鉢	肥前	Tr1	9～10層		(5.7)		復5.8			
30	74	陶器	碗	肥前	Tr2	7層		(3.6)			(0.5)		
30	75	陶器	皿	瀬戸・美濃	トレンチ	21層	③釉着アリ	2.3	復10.0	復5.4	0.3	復5.4	
30	76	陶器	擂鉢	備前	Tr2	7層	②櫛目11条／単位	(8.5)					
30	77	磁器	碗	肥前	トレンチ	18層か	①唐草③二重圏線	(4.0)	復9.8				
30	78	磁器	小坏	肥前	Tr2	9層か	①花③⑥圏線	3.6	復6.4	復2.4	0.5	復2.4	
30	79	磁器	皿	肥前	Tr	8or10層	①圏線②波③圏線、菊⑥二重圏線						
30	80	磁器	皿	肥前	Tr2	7層	①圏線②波⑥二重圏線	(2.8)	復12.4				
30	81	磁器	皿	中国?	トレンチ	7層?	④圏線	(2.5)		復5.2	0.6	復5.2	
34	83	陶器	皿	肥前	撹乱中	学校塀直下	④砂目跡	3.5	復11.8	復4.6	0.5	復4.6	
34	84	磁器	蓋	肥前	馬場溝	埋土	①圏線、井桁	2.5	復9.6	復3.8	0.6	復3.8	コンニャク印判
38	112	陶器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①②刷毛目	6.3	復9.8	復4.0	0.7	復4.0	
38	113	陶器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①鉄絵	6.3	復8.8	3.6	0.5	3.6	
38	114	陶器	小碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①山水、鉄絵	3.8	6.8	2.5	0.4	2.5	二次的な被熱
38	115	陶器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①鉄絵	(5.5)	復11.4				
38	116	陶器	碗	在地?	撹乱中	路面直上	①鉄絵	(4.7)	復11.4				
38	117	陶器	碗		撹乱中	路面上		(6.5)	復11.0				
38	118	陶器	火入れ?	在地?	撹乱中	路面直上焼土層		(5.4)		5.2	0.8	5.2	
38	119	陶器	碗	肥前系	撹乱中	路面直上焼土層		4.0	復12.0	復4.1	0.3	復4.1	
38	120	陶器	小碗	肥前系	路面上	路面上		2.4	6.8	2.6	0.4	2.6	
38	121	陶器	小坏		撹乱中	路面直上	①色絵	(2.6)	復5.1	復4.8			
38	122	陶器	窯道具?		撹乱中	路面直上		1.8	復4.8				
38	123	陶器	碗		撹乱中	路面直上焼土層		(2.5)		4.2	0.7	4.2	
38	124	土器	土師皿		撹乱中	路面直上焼土層		(2.2)		復6.9			
38	125	土器	土師皿		撹乱中	路面直上		2.0	復10.0	復10.0			
38	126	陶器	鍋	在地	撹乱中	路面直上		(5.6)	復13.9				
38	127	陶器	落し蓋	在地	撹乱中	路面直上焼土層		2.0	9.6	5.5			
38	128	陶器	擂鉢	須佐	撹乱中	路面直上	①鉄泥②櫛目13条?／単位⑤カンナ痕	(6.3)		復10.9			
39	129	陶器	擂鉢	須佐	撹乱中	路面直上		(9.8)					
39	130	陶器	捏鉢	備前系	撹乱中	路面直上	①②鉄泥	(9.5)		復18.3			
39	131	陶器	火入れ	肥前	撹乱中	路面直上	①圏線	6.7	復10.6	復5.8	0.8	復5.8	二次的な被熱
39	132	陶器	八角鉢	在地	撹乱中	路面直上	①緑釉	5.4	13.6	6.1			39次77図4と接合
39	133	陶器	壺?	在地?	撹乱中	路面直上	①鉄泥	(30.2)		復11.4			
39	134	陶器	土瓶	在地	撹乱中	路面直上		(8.4)	復8.8				
39	135	土器	栓?	在地?	撹乱中	路面直上焼土層		4.2		2.0			
39	136	陶器	甕	備前系	撹乱中	路面直上焼土層	①③鉄泥	(13.1)	復54.6				
40	137	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上	①②鉄泥③煤付着⑤糸切り	1.8	復11.0				
40	138	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	②鉄泥③煤付着	1.6	復10.0				
40	139	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	②鉄泥	1.6	8.6				
40	140	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上	①②鉄泥③煤付着	1.5	復10.6				
40	141	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上	①②鉄泥	1.2	復10.2				
40	142	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	①②鉄泥	(1.4)	復10.0				
40	143	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上	①②鉄泥	1.4	9.9				
40	144	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	①②鉄泥	1.7	8.6				
40	145	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層		1.3	復8.2				
40	146	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	①②鉄泥	1.1	8.2				
40	147	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	①②鉄泥⑤糸切り	1.2	8.1				
40	148	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	②鉄泥	1.2	8.0				
40	149	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上	①②鉄泥	1.2	7.2				
40	150	陶器	灯明皿	在地	撹乱中	路面直上焼土層	①②鉄泥	1.1	復9.6				
40	151	陶器	急須	在地	路面精査	路面直上		(9.9)		5.7	0.8	5.7	
41	152	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①銀杏②四方襷	(4.2)	復11.5				
41	153	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①菊	(4.1)	10.1				
41	154	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①②菊花、氷裂	4.7	復10.6	復4.0	0.4	復4.0	
41	155	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①丸②四方襷④五弁花、二重圏線⑤角福、圏線⑥二重圏線	5.8	12.2	5.1	1.1	5.1	
41	156	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①寿字③二重圏線④花、圏線⑤角福⑥二重圏線	5.2	10.1	5.2	1.2	5.2	
41	157	磁器	小碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①若松	4.4	復9.4	復3.6	0.4	復3.6	
41	158	磁器	小碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①若松	(3.8)	復9.0				
41	159	磁器	小碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層		3.6	復8.0	復3.0	0.4	復3.0	
41	160	磁器	小碗	肥前	撹乱中	路面直上	①雪輪、蓮弁	(3.6)	8.6				
41	161	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①菊、青海波③四方襷④五弁花、二重圏線⑥二重圏線	6.3	復9.6	3.7	0.5	3.7	

表10　遺物観察表２（土器・陶磁器）

土器・陶磁器　※文様位置①外面②内面③口縁④見込⑤底部⑥高台

図	番号	種別	器種	産地	出土地	層位	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
41	162	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①雲、圏線②四方襷④雲、二重圏線⑥二重圏線	6.0	復11.2	4.4	0.6	4.4	
41	163	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上	①船唐草、圏線②四方襷④二重圏線、環状松竹梅⑤富貴、圏線⑥二重圏線	5.2	復9.8	復3.6	0.4	復3.6	
41	164	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①色絵草花、色絵唐草②四方襷④色絵花唐草、二重圏線⑥二重圏線	6.1	12.0	4.0	0.7	4.0	
41	165	磁器	碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①折枝花鳥③二重圏線④花唐草、圏線⑤圏線⑥三重圏線	5.3	復9.6	復4.4	0.6	復4.4	
42	166	磁器	蓋付碗	肥前	撹乱中	路面直上	①松竹梅、蓮弁⑥圏線	4.0	復7.0	復3.4	0.5	復3.4	
42	167	磁器	小碗	肥前	撹乱中	路面直上	①②菊花、氷裂	3.5	復7.4	復2.2	0.3	復2.2	
42	168	磁器	小碗	肥前	撹乱中	路面直上	①宝貴？	3.4	復7.4	復2.8	0.4	復2.8	
42	169	磁器	蓋付碗	肥前	撹乱中	路面直上	①松、松皮菱、圏線⑥圏線	1.8	復5.4	復3.0	0.4	復3.0	
42	170	磁器	蓋付碗	肥前	撹乱中	路面直上	①雪輪に色絵雪、色絵花、圏線⑥圏線	4.5	復8.6	復4.6	0.5	復4.6	
42	171	磁器	蓋付碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①斜め格子、井桁、圏線⑥二重圏線	5.2	復9.1	復4.9	0.5	復4.9	
42	172	磁器	筒形碗	肥前	馬場清周辺	幕末面直上	①雷③四方襷④⑤二重圏線⑥圏線	復4.6	(6.9)	復4.4	0.5	復4.4	
42	173	磁器	筒形碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①丸寿字、瑞雲、紅葉雲繋ぎ、圏線⑤蛇の目凹形⑥二重圏線	(4.8)		復8.6	0.5	復8.6	
42	174	磁器	筒形碗	肥前	撹乱中	路面直上	①花草、斜格子、幾何学、唐草③四方襷④五弁花、圏線⑤圏線	6.1	復7.0	復3.0	0.4	復3.0	コンニャク印判
42	175	磁器	筒形碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①松竹、圏線③二重圏線④五弁花、二重圏線⑥二重圏線	5.7	復8.0	復4.4	0.4	復4.4	
42	176	磁器	筒形碗	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①輪宝、二重圏線③輪宝④五弁花⑥二重圏線	5.9	7.7	3.6	0.5	3.6	
42	177	磁器	蓋	肥前	撹乱中	路面直上	①牡丹	3.5	復11.8				
42	178	磁器	蓋	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①梵字③二重圏線④太極、二重圏線⑤角青、二重圏線⑥二重圏線	2.5	復9.9				
42	179	磁器	蓋	肥前	撹乱中	路面直上	①梵字③二重圏線④太極、二重圏線⑥二重圏線	1.9	8.4				
42	180	磁器	蓋		排除中	路面上	①花丸、圏線	2.0	復6.4				
42	181	白磁	紅皿	肥前	撹乱中	グランド直下		1.6	復4.8	復2.2	0.1	復2.2	型押し
42	182	白磁	紅皿	肥前	撹乱中	路面直上	①菊花、帆掛け船	2.0	復4.4	1.5	0.1	1.5	型押し
42	183	白磁	紅皿	肥前	撹乱中	路面直上	①花	1.5	復2.5	復1.1	0.1	復1.1	型打ち
43	184	磁器	輪花皿	肥前	撹乱中	路面直上	①唐草、圏線②松竹梅③圏線④五弁花、二重圏線⑤角福、圏線⑥二重圏線	3.8	復14.6	復7.8	0.4	復7.8	
43	185	磁器	皿	肥前	撹乱中	路面直上	①唐草②鳥、手長花④二重圏線⑥二重圏線	3.5	復14.0	復8.6	0.6	復8.6	
43	186	磁器	皿	肥前	路面精査	路面直上	②花、唐草③五弁花、二重圏線、蛇の目釉剥ぎ	(3.2)		復7.8	0.5	復7.8	
43	187	磁器	皿	肥前系	撹乱中	路面より若干上	②藻④五弁花⑥圏線	2.3	復10.8	復6.2	0.3	復6.2	
43	188	磁器	皿	肥前系	撹乱中	路面直上焼土層	②藻④五弁花⑥圏線	1.8	復10.0	復5.2	0.3	復5.2	
43	189	磁器	蓋付鉢	肥前	路面上	路面中	①花、唐草、雲⑥二重圏線	8.8	復12.0	8.2	0.6	8.2	焼継
43	190	磁器	猪口	肥前	撹乱中	路面直上	①花草⑥二重圏線	5.9	復8.2	復5.4	0.2	復5.4	二次的な被熱
43	191	白磁	猪口	肥前	撹乱中	路面直上		6.3	復7.8	復5.0			
43	192	磁器	猪口		撹乱中	路面直上	①斜格子、格子、圏線	3.4	復6.0	復4.4	0.5	復4.4	
43	193	磁器	火入れ	肥前	撹乱中	路面直上	①遠山	3.2	4.0	3.7	0.2	3.7	
43	194	磁器	火入れ	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①手長菊花、斜格子	4.1	復6.8	復5.4	0.7	復5.4	
43	195	磁器	仏飯器	肥前	撹乱中	路面直上	①軒尾、山水	5.3	5.8	3.8	0.4	3.8	
43	196	磁器	瓶	肥前	撹乱中	路面直上焼土層	①花唐草	(8.4)	1.2				
43	197	磁器	油壺	肥前	撹乱中	路面直上	①折枝梅	(9.3)		4.5	0.7	4.5	
43	198	陶器	灰吹き	在地	撹乱中	路面直上	①折枝梅	6.7	復4.0	4.9	0.3	4.9	
48	225	陶器	鉢	在地？	撹乱中	焼土上付近	①鉄絵	(5.5)	復12.1				
48	226	陶器	灯明皿	在地	排除中	路面直上焼土層	②櫛目3条	1.3	復7.6				
48	227	青磁	灰吹き	肥前系	排除中			(7.3)	復10.8				
48	228	青磁	筒形碗	肥前系	撹乱中	焼土上付近		4.3	復10.0				
48	229	磁器	皿	肥前系	撹乱中	焼土上付近	①蛇目釉剥	3.3	11.6				
49	236	磁器	碗	肥前	石垣上	堆積土	①草花、圏線⑥二重圏線	(5.5)					二次的な被熱
49	237	陶器	蓋	在地	石垣上	堆積土	①梅、イッチン描き	0.9	復6.8				
49	238	陶器	皿	在地	犬走り上	表土		2.6	復12.6				
50	240	磁器	碗	中国	トレンチ撹乱下	灰色粘土	④二重圏線⑥圏線	(6.5)	復18.4				
51	241	陶器	碗	肥前	撹乱中		①②刷毛目	7.6	10.8	5.3	1.3	5.3	
51	242	陶器	碗	肥前		路面上		7.6	復11.4	復5.2	1.1	復5.2	
51	243	陶器	碗	肥前	ベルト中			6.7	復11.0	復4.4	0.7	復4.4	
51	244	陶器	火入れ	肥前	撹乱中		①圏線	7.0	復10.1	5.4	0.8	5.4	
51	245	陶器	灯明皿	在地	大溝周辺	路面直上	①②鉄泥	1.6	復9.4				
51	246	陶器	灯明皿	在地	撹乱中		①②鉄泥	1.6	10.1				
51	247	磁器	輪花皿	肥前	撹乱中	グランド直下		4.9	復14.2	復7.8	1.0	復7.8	
51	248	磁器	蓋	瀬戸・美濃	溝周辺	路面付近	①花、草花③四方襷⑤「大明年製」	2.7	復9.6				
60	256	陶器	碗	在地	水路石積部	埋土		7.7	復10.6	4.0	0.6	4.0	
60	259	陶器	落し蓋	在地	大溝	埋土		2.4	10.8	5.2			
60	260	陶器	落し蓋	在地	大溝	埋土		2.6	9.8				
60	261	陶器	鉢	瀬戸・美濃？	大溝	埋土	①印花	(3.0)	復25.4				
60	262	陶器	鉢	在地	溝	埋土	③墨書	15.5	27.0	15.0	1.4	15.0	
60	263	陶器	壺	肥前系	大溝	埋土	①②鉄						
60	264	陶器	壺	備前	大溝	埋土		(15.0)	12.0				
61	265	磁器	碗	瀬戸・美濃	大溝	埋土上層	⑥圏線	6.0	復11.0	復5.0	0.8	復5.0	
61	266	磁器	碗	瀬戸・美濃	大溝	底	①よろけ縞②圏線③圏線、工字繋ぎ⑥圏線	(5.0)	復10.4				
61	267	磁器	碗	瀬戸・美濃	大溝	埋土	①松②圏線④二重圏線⑤圏線	(4.6)	復10.0	復3.8	0.6	復3.8	
61	268	磁器	手塩皿	在地？	大溝	埋土	②山水、帆舟③ハリ	2.2	復9.3	5.6	0.4	5.6	
61	269	磁器	蓋	肥前	大溝	埋土	①松竹③二重圏線④圏線	2.8	10.0	6.2	0.7	6.2	
61	270	磁器	蓋	肥前	大溝	埋土上層	①色絵	4.2	11.2				
61	271	磁器	段重	肥前	大溝	埋土上層	①色絵花	(4.3)	復14.4				
96	368	陶器	碗	肥前	桝	埋土	①草③圏線	8.5	復11.2		1.1	復5.0	
96	369	陶器	碗	在地？	桝上部	撹乱中	①山、鉄絵	7.7	復11.5		0.7	復4.5	
96	370	陶器	碗		桝	砂層(瓦下)		(5.8)	復16.6				
96	371	陶器	碗		桝拡張	上半	⑤墨書	(2.6)		5.4	0.5	5.4	
96	372	陶器	皿	在地	桝	埋土		1.9	復7.6		0.4	復3.6	
96	373	陶器	擂鉢	須佐	桝	瓦層	②櫛目13条／単位	(5.0)	復34.8				
96	374	陶器	鉢	在地	桝	砂層(瓦下)		(3.9)	復13.7				
96	375	陶器	鉢	在地	桝	瓦層		(8.2)			0.8	復12.3	
96	376	陶器	鉢		桝拡張	上半	①文字②山水	(5.8)	復17.2				
96	377	陶器	鉢	越前	桝	埋土	①②鉄泥	(5.4)					
97	378	陶器	鉢	越前	桝	埋土	①②鉄泥	(7.5)	復23.8				
97	379	陶器			桝	瓦層	①②鉄泥	(10.4)	復26.1				
97	380	陶器	鉢				①②鉄泥	(11.4)	復34.6				
97	381	陶器	鉢	在地	桝拡張	上半		(7.6)	復34.4				
97	382	陶器	片口鉢	在地	桝	埋土		(11.7)	復26.0				
97	383	陶器	片口鉢	在地	桝拡張	上半		5.9	14.0	7.7	0.5	7.7	
97	384	陶器	水差し		桝	砂層(瓦下)	①花	4.3	7.0		0.5	4.4	刻印
97	385	陶器	落し蓋	在地	桝上部	撹乱中		2.3	復7.5	復7.1			
97	386	陶器	落し蓋	在地	桝	瓦層		2.3	復8.1	復6.3			
97	387	陶器	蓋		桝	埋土		3.2	復12.1				
98	388	陶器	灯明皿	在地	桝	埋土	②櫛目5条	2.1	復9.2	復4.0			

表11　遺物観察表３（土器・陶磁器）

土器・陶磁器　※文様位置①外面②内面③口縁④見込⑤底部裏⑥[illegible]

図	番号	器種	器形	産地	出土地	層位	文様	器高	口径	底径	高台高	高台径	備考
98	389	陶器	灯明皿	在地	桝	砂層(瓦下)		1.8	復8.4	復3.2			外面煤付着
98	390	土器	土師皿		桝	上半	①煤付着	1.6	8.0	3.0			素焼き
98	391	陶器	灯明皿	在地	桝	砂層(瓦下)	①②鉄泥	1.0	復7.8	復4.4			
98	392	陶器	灯明皿	在地	桝上部	撹乱中	①②鉄泥	(1.4)	復10.7				
98	393	陶器	灯明皿	在地	桝	上半	①②鉄泥	1.5	復9.6				
98	394	陶器	灯明皿	在地	桝	上半		5.9	14.0	7.7	0.5	7.7	素焼き
98	395	陶器	灯明皿	在地	桝	砂層(瓦下)		2.3	復10.2	復5.0			
98	396	陶器	秉燭	信楽?	桝	砂層(瓦下)		4.9	6.6	5.7			
98	397	陶器	秉燭	信楽?	桝	砂層(瓦下)		5.3	8.5	5.7			
98	398	陶器	秉燭		桝	砂層(瓦下)		4.4	8.1	5.5			
98	399	陶器	花器?	在地	桝	瓦層		(11.0)	復12.7				
98	400	陶器	花器?	在地	桝	砂層(瓦下)		(6.0)			0.4	復9.8	
98	401	陶器	鉢	瀬戸・美濃?	桝	埋土	①印花	(5.0)	復25.6				
98	402	陶器	鉢	越前	桝上部	撹乱中	①②鉄泥	(6.4)					
98	403	陶器	壺?	越前	桝	埋土	①②鉄泥	(13.3)					
99	404	陶器	糸取り鍋	信楽?	桝上部	撹乱中	①墨書「[illegible]」	13.3	27.9	22.7			
100	405	陶器	徳利	在地	桝	砂層(瓦下)	①「御用」、「●高や」、不明	(21.0以上)	4.0		0.9	10.3	
100	406	磁器	小坏	肥前系	桝	埋土		3.0	復6.8		0.5	復2.8	
100	407	磁器	小坏	肥前系	桝	埋土		2.7	復6.8		0.4	2.3	
100	408	磁器	小坏	肥前系	桝	上半	①⑥圏線	4.3	8.0	2.9	0.6	2.9	
100	409	磁器	碗	肥前	桝	瓦層		4.2	6.8		1.0	3.8	金継ぎ、鉄釉掛分け
100	410	磁器	碗		桝	埋土	①花②圏線③圏線	(4.8)	復11.6				
100	411	磁器	碗	肥前	桝上部	撹乱中	①蝶②二重圏線③圏線⑥圏線	6.4	復11.2		1.5	復6.4	
100	412	磁器	皿	肥前	桝	砂層(瓦下)	①梅枝、菊②菊⑥圏線	5.0	10.4		0.9	4.1	金継ぎ痕
100	413	磁器	碗	瀬戸・美濃	桝	埋土	①梅、蝶②蝶	4.6	8.4		0.7	3.3	金継ぎ、鉄釉掛分け
100	414	磁器	碗	肥前系	桝	砂層(瓦下)	①網目③圏線	(5.0)	復11.5				
100	415	磁器	碗	在地	桝	瓦層	①皮鯨	(5.4)	復9.0				
100	416	磁器	碗	肥前	桝		①菊花、斜格子③圏線⑤二重圏線	(5.0)	復6.8				
100	417	磁器	段重	肥前?	桝	瓦層	①染付、錆釉の圏線③圏線	3.4	6.2	5.2			
100	418	磁器	段重	肥前	桝	埋土	①雪見窓に草⑤二重圏線	6.0	復13.0		0.5	復9.8	
101	419	磁器	蓋	肥前	桝	埋土	①梅④梅	2.9	4.8				
101	420	磁器	段重蓋	瀬戸・美濃?	桝	埋土	①軸唐草、酒聖	2.8	8.2				
101	421	磁器	蓋	瀬戸・美濃?	桝拡張	上半	①②梅鳥	2.8	8.9				
101	422	磁器	耳形相皿	肥前	桝	瓦層		1.5	復4.7		0.1	復1.4	型押し
101	423	磁器	輪花皿	肥前	桝	埋土	④帆	2.7	復21.6		0.6	復14.4	
101	424	磁器	輪花皿	肥前	桝	埋土	①雲②花鳥、流水③圏線、山に満⑥二重圏線	3.0	復11.1		0.5	復5.7	
101	425	磁器	皿		桝	瓦層	①唐草、圏線②草花③二重圏線④圏線⑥二重圏線	3.4	復15.4		0.5	復9.6	
101	426	磁器	皿	肥前	桝	埋土	①唐草、圏線②牡丹③圏線④環状松竹梅、二重圏線⑤蛇ノ目凹形、二重圏線⑥圏線	4.2	復14.0		0.3	復8.8	
101	427	白磁	猪口	肥前	桝上部	撹乱中	①陽刻	4.4	復7.2		0.1	復3.8	
101	428	磁器	小坏	在地	桝	瓦層		3.2	4.7	2.9			
101	429	磁器	灰吹き	肥前	桝上部	撹乱中	①山水	(7.1)	復6.4	復5.5			底部に砂付着
101	430	磁器	仏飯器	肥前系	桝	瓦層	①雁	5.6	復6.2	3.2			
101	431	磁器	油壺	肥前	桝上部	撹乱中	①折枝梅	(6.8)			0.5	復4.6	
114	492	土器	土師皿		瓦焼窯穴	埋土		2.7	11.0	復4.2			
114	493	陶器	壺	越前	瓦焼窯穴	埋土	①②鉄泥	(7.7)	復22.0				
114	494	磁器	碗	肥前系	溝状遺構	埋土	①手描花②二重圏線、五弁花、蛇の目釉剥ぎ	6.1	復17.0	5.7	0.9	5.7	
119	495	陶器	碗	肥前	旧桝内	砂層	①②刷毛目	(4.5)		復4.8	0.9	復4.8	
119	496	陶器	甕	越前	旧桝	焼土上層	①②鉄泥②③指頭圧痕	(6.2)		復16.2			
119	497	磁器	香炉?	肥前	旧桝内	砂層	①山水?③雷文	(3.7)	復15.4				
119	498	青磁	香炉?	肥前	旧桝内	砂層	①唐草	3.1	復9.4				
124	514	陶器	灯明皿	在地	大溝周辺	幕末面直上付近	①②鉄泥	(1.3)	復7.8				
124	515	陶器	秉燭	信楽?	廃棄穴	埋土		5.0	7.5	5.7			
124	516	陶器	秉燭	信楽?	廃棄穴	埋土		(5.0)		5.3	0.6		
124	517	磁器	碗	肥前	路面直上	焼土層	①折枝松、宝珠、圏線②二重圏線④松葉、圏線⑤二重圏線	5.8	10.7	4.4	0.7	4.4	

表12　遺物観察表４（瓦）

瓦

図	番号	器種	分類	出土地	層位	備考	刻印	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
22	22	軒丸	蓮4	掘削中	表土																				
22	23	軒丸	蓮4	石垣前斜面	表土																				
22	24	軒丸	蓮6?	掘削中	表土																				
22	25	軒丸	巴16	Tr2	撹乱か	二次的な被熱		(3.8)									0.9	2.5							
22	26	軒丸	巴13?	Tr2	撹乱か																				
22	27	(左軒桟)	平24	掘削中	表土			(3.7)				(6.8)	2.2		4.4	2.7		1.5		2.4	6.3				
22	28	(左軒桟)	平42	掘削中	表土																				
22	29	(左軒桟)	平51	掘削中	表土	銀化		(1.6)				(6.9)	2.0		4.8	2.7		(1.5)		(3.5)	3.5				
22	30	(右軒桟)	平50	掘削中	表土																				
22	31	右軒桟	平64	掘削中	表土																				
22	32	右軒桟	平73	芝積層下中	ガラ	黒色粒		(14.5)	(21.3)			10.5	1.9		(3.5)	(2.4)	0.6	2.1		0.6		3.5			
22	33	平		芝積層下中	ガラ	二次的な被熱		(20.0)	27.0			5.5	2.2												
22	34	平?		石垣前斜面	表土			(20.7)	(19.6)			(5.7)	2.5												
23	35	平?		石垣前斜面	表土	二次的な被熱		(18.7)	(21.3)			3.8	1.6												
23	36	右桟		三ノ丸石垣前		銀化	[illegible]	(29.2)	(18.5)			5.4	1.7												3.6
23	37	棟込		石垣前斜面	表土	銀化		(9.3)	(11.2)			(5.2)	1.8												
23	38	棟込		石垣前斜面	表土			(8.3)	(8.7)					4.9											
26	58	軒丸	蓮4	Tr1	14層			(5.8)	(13.8)			(15.5)			15.1	11.7		2.1							
26	59	軒平		Tr1	9層																				
26	60	棟込		石垣前斜面盛土中	7〜10層	被熱、吊紐			(10.8)	(11.7)		(4.3)	1.6												
30	82	隅丸		Tr2	6層			(14.2)	(12.4)			(8.1)	2.2												
34	85	(右軒桟)	平50	掘削中	学校層直下			(7.8)	(15.4)			(5.5)	2.1		(4.5)	(2.9)	0.3	(1.7)		2.7					
34	86	(右軒桟)	平50	馬場溝	埋土																				
34	87	(右軒桟)	平50	馬場溝	埋土																				
34	88	左軒桟	平40	コンクリ溝周辺	撹乱	黒色粒、滑なし		(12.3)	(17.6)			8.1	2.1		(4.6)	(2.8)	0.4	(2.7)		2.3		4.3	3.7		
34	89	左軒桟	平51	馬場溝	埋土																				
34	90	鳥衾	蓮14	馬場石垣裏栗付近	解体層か			(12.0)	15.4			21.2	2.0		(14.0)	(9.6)	0.8								
34	91	鬼	蓮14	馬場溝	埋土										(16.6)	(12.4)	0.6								
44	199	軒丸	蓮8	掘削中	路面直上焼土層																				
44	200	軒丸	蓮14	路面上	路面上	黒色粒、内叩き		(7.7)	(15.5)			(13.2)	1.8		(15.4)	(10.6)	0.4								
44	201	軒丸	蓮14	馬場溝周辺	幕末面直上			(15.0)	(12.5)			(9.6)	1.8		(15.6)	(11.2)	(0.6)								
44	202	軒丸	蓮14	掘削中	路面直上焼土層			(3.0)	(15.2)			(8.8)						2.6							
44	203	鬼	蓮14	掘削中	路面直上焼土層																				
44	204	鬼	蓮14	掘削中	路面直上焼土層																				
44	205	軒丸	蓮11	掘削中	路面直上焼土層	黒色粒、銀化		(3.3)																	
44	206	軒平	平3	掘削中	路面直上焼土層																				
44	207	左軒桟	平24	掘削中	路面直上	黒色粒、銀化		(9.0)	(15.3)			(6.8)	1.8		4.2	2.1	0.4	(1.6)		2.3					
44	208	右軒桟	平50	掘削中	路面直上																				
44	209	左軒桟	平51	掘削中	路面直上			(5.8)	(13.6)				1.9		(4.1)	(3.2)	(0.1)								
44	210	左軒桟	平51	掘削中	路面直上																				
44	211	左軒桟	平51	掘削中	路面直上	黒色粒、銀化		(16.7)	(28.5)			8.9	1.8		4.5	2.8	0.2	(1.7)		2.8	(3.3)	2.8	3.7		
44	212	鳥衾	蓮14	掘削中	路面直上焼土層			(5.9)	(14.6)				1.8												
45	213	板?		掘削中	路面直上			(19.0)	(26.5)				1.7												
45	214	板?		掘削中	路面直上	黒色粒		(18.0)	(25.6)				1.9												
48	230	軒丸	蓮6	掘削中	焼土上付近			(6.2)	16.5			15.8			15.8	11.2		2.1							
48	231	軒平	平2	掃除中	路面直上			(3.0)	(9.0)						4.8	(3.0)		1.3							
48	232	右軒桟	平70	掘削中	焼土上付近	笵キズあり	「大」	(12.0)	(21.5)				2.2		(3.8)	2.2		(1.3)		1.5					
51	249	軒丸	蓮2	掘削中				(7.9)	(10.0)			16.3	2.6		16.2	12.0	0.5	(2.0)							
51	250	左軒桟	平28	掘削中	グランド直下	黒色粒、銀化	[illegible]	(10.5)	(15.8)			(8.2)	2.1		4.1	2.7	0.6	1.9		2.3					
51	251	軒平	平62	掘削中	グランド直下	銀化		(7.6)	(15.8)			13.3			4.3	2.7		1.8		1.0	5.0				
51	252	右軒桟	平66	溝周辺	路面付近	銀化、滑なし	「文寅」	(14.5)	(19.5)			(4.8)	1.9		4.2	2.4	0.6	0.8		2.6		(3.2)			
51	253	左軒桟	平72	掘削中			「天巳」	(5.0)	(18.2)			(7.7)			(4.4)	2.8	0.7	2.0		2.4					
62	272	軒丸	蓮11	大溝	埋土	銀化、外ミガキ、内叩き		(26.4)	15.0			15.0			14.7	11.0	0.3	2.3							
62	273	軒丸	蓮11	大溝	埋土	銀化、外ミガキ、内叩き		29.8	(15.8)	3.3	(9.0)	8.2	1.7	5.7											
63	274	軒丸	蓮15	大溝	埋土	銀化、外ミガキ		(4.7)									0.3								
63	275	軒丸	蓮20	大溝	埋土			(3.2)									0.4	2.1							
63	276	軒丸	蓮23	大溝	埋土			(4.2)				15.7			15.7	11.0	0.5	2.1							
63	277	軒丸	蓮23	大溝	埋土	銀化									13.2	10.8	0.6	2.3							
63	278	軒丸	蓮23	大溝	埋土	銀化、外ミガキ、内叩き		(22.6)	(16.1)			15.2						2.3							
64	279	軒丸	蓮23	大溝	埋土	銀化、外ミガキ、内叩き		29.7				15.6			15.6	11.3	0.6	2.5							
64	280	軒丸	蓮23	大溝	埋土	銀化		(11.1)				16.5	1.9		11.0	11.6	0.6	2.6							
64	281	軒丸	蓮23	大溝	埋土	銀化		(10.5)	15.5			15.3			14.9	10.9	0.7	2.4							
64	282	軒丸	蓮23	大溝	採集																				
64	283	軒丸	蓮23	大溝	埋土													1.9							
65	284	丸		大溝	埋土	外ミガキ、内叩き	「文寅」	(23.9)	(16.3)	2.8	9.6	7.5	1.8	4.8											
65	285	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き　吊紐		28.9	15.6	3.0		7.3	1.9	4.9											
66	286	丸		大溝	路面付近	内叩き		(13.9)	(15.1)	4.1	7.9	7.3	1.6	3.9											
66	287	丸		大溝	埋土	内叩き	[illegible]	27.5	14.8	2.7	8.9	7.5	1.8	5.1											
67	288	丸		大溝	埋土	内叩き		29.2	16.3	2.2	7.5	6.6	0.9	3.8											
67	289	丸		大溝	路面付近	内叩き、黒色粒		29.0	16.3	2.7		7.3	1.6												
68	290	丸		大溝	埋土	銀化、外ミガキ、内叩き		29.1	15.4	3.7	7.7	7.4	1.8	4.4											
68	291	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き		31.8	(11.4)	3.3		7.0	1.9	3.8											
69	292	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き	「作」	28.7	16.2	2.8	8.4	7.4	2.0	4.8											
69	293	丸		大溝	埋土	内叩き		25.3	15.3	2.9		6.9	1.1	4.5											
70	294	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き		29.2	15.5	3.8	7.1	7.6	1.7	4.7											
70	295	丸		大溝	埋土	内叩き	「文酉」	(21.7)	(15.3)	2.7	9.6														
71	296	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き	「作」	(23.5)	15.9	2.5	6.9	7.2	1.6	4.1											
71	297	丸		大溝	埋土			(21.8)	(15.8)				2.1												
71	298	丸		大溝	埋土	内叩き		(19.5)	15.0	2.4	9.4	7.1	2.0	5.2											
72	299	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き、黒色粒		28.6	15.8	3.6	(8.2)	7.1	1.0	4.9											
72	300	丸		大溝	埋土			(27.2)	(11.2)			(7.0)	1.6	4.7											
73	301	丸		大溝	埋土	銀化、外ミガキ、内叩き、黒色粒		28.2	15.4	2.9	9.6	7.4	6.0	1.6											
73	302	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き	「作」	28.9	16.2	2.5	6.6	7.4	2.2	4.6											
74	303	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き		28.9	15.8	2.7	9.6	7.6	2.0	5.3											
74	304	丸		大溝	埋土	吊紐痕、内叩き		28.2	15.4	2.2	7.8	7.4	2.1	5.0											
75	305	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き		28.3	15.9	2.9	9.1	6.7	1.5	5.2											
75	306	丸		大溝	埋土	内叩き		(19.6)	15.5	3.2	7.9	7.7	2.0	4.9											
75	307	丸		大溝	埋土			(19.4)	16.0	2.2		7.2	1.8	3.8											
76	308	丸		大溝	埋土	銀化、内叩き		(22.3)	16.2	2.7		7.3	2.1	5.5											
76	309	丸		大溝	埋土		「文寅」	(28.5)	(12.0)																
76	310			大溝	埋土			(24.8)	(8.6)			4.0		2.9											
77	311	左軒桟	平15?	大溝	埋土	銀化、黒色粒　滑止	❖	(22.7)	28.4																
77	312	(右軒桟)	平29	大溝	埋土	黒色粒		(4.8)	(17.0)						4.3	2.6	0.5	1.8		2.7					

表13　遺物観察表５（瓦）

瓦

図	番号	器種	分類	出土地	層位	備考	刻印	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
77	313	(右軒桟)	平29	大溝	埋土	黒色粒,滑止		(13.0)	(16.3)				1.9		4.4	2.8	0.4	1.7	2.9	2.4				1.5	
77	314	左軒桟	平24	大溝	埋土			(11.3)	(17.0)				1.9		3.9	2.4	0.5	1.5		2.1					
77	315	左軒桟	平24	大溝	埋土		[illegible]	(19.4)	(20.8)		3.7	13.0	2.0		4.2	2.6	0.4	1.4		2.5		6.0	3.6		
77	316	左軒桟	平24	大溝	埋土	滑止		(14.4)	(20.6)			7.6			4.0	2.8	0.4	1.2	1.7	2.5		4.3		2.8	
78	317	隅	平51	大溝	埋土			(11.2)	(26.3)				1.9		4.9	2.9	0.3	2.0							
78	318	左軒桟	平51	大溝	埋土	銀化		(8.8)	(20.6)				1.9		4.5	2.9	0.2	1.5		2.5					
78	319	左軒桟	平51	大溝	埋土	銀化		(12.3)	(16.2)				2.1		5.1	2.8	0.2	1.7		2.6					
78	320	左軒桟	平40	大溝	埋土	銀化,黒色粒		(19.3)	(20.1)		5.3	11.1	1.7		3.9	2.5	0.3	1.5		2.3		3.9	4.9		
78	321	左軒桟	平40	大溝	埋土			(13.2)	(15.4)						4.2	2.5	0.3	1.4		1.9					
78	322	左軒桟	平40	大溝	埋土	銀化,黒色粒		(9.8)	(18.8)				1.9		4.1	2.6	0.4	1.4		2.4					
78	323	右軒桟	平50	大溝	埋土	銀化,黒色粒,滑止		(10.5)	(19.8)			11.5	1.8		4.4	2.5	0.2	1.7		2.6		3.5			
78	324		平54	大溝	採集																				
79	325	右軒桟	平63	大溝	埋土	銀化,滑止	「文未」	30.1	28.8	9.1	(3.8)	9.8	2.2		4.3	2.4	0.4	1.7	1.5	2.3	6.3	2.1	4.5	3.5	
79	326	軒平	平62	大溝	埋土	銀化		30.3	(26.0)				2.2		4.1	2.6	0.4	1.6		2.6	4.3				
80	327	右軒桟	平66	大溝	埋土		「文子」	31.2	29.3			9.0	2.1		3.7	2.4	0.6	1.4		2.3	5.5	3.3	3.8		
80	328	右軒桟	平66	大溝	埋土	銀化	「天巳」	(10.4)	(12.7)							2.5	0.3	1.4							
80	329	右軒桟	平66	大溝	埋土			(11.5)	(19.7)				2.1		4.5	2.9	0.4	1.9		3.0	5.0				
80	330	右軒桟	平66	大溝	埋土	銀化	「文亥」	(7.0)	(17.0)				1.9		4.4	2.5	0.6	1.3		2.7					
80	331	右軒桟	平69	大溝	埋土	銀化	「作」	(9.1)	(25.2)				2.3		4.3	2.6	0.5	1.5		2.8	5.0				
80	332	右軒桟	平69	大溝	埋土	銀化,滑止		(15.9)	(24.2)				2.0		4.3	2.4	0.3	1.7	4.7	3.0	4.5				
80	333	左軒桟	平65	大溝	埋土			(10.2)	(13.8)				2.0		4.2	2.7	0.5	1.6		2.7					
80	334	左軒桟	平68	大溝	埋土																				
81	335	左軒桟	平68	大溝	埋土	滑止		29.6	28.4	10.9	4.2	10.9	1.9		4.3	2.2	0.4	1.9	4.2	2.6	5.0	3.0	4.2	1.8	
81	336	左軒桟	平72	大溝	埋土	銀化,滑止	「天巳」	29.8	(27.6)	9.4		11.5	1.9		4.1	2.5	0.7	1.9	3.8	2.7		4.0	3.8	1.6	
82	337	左軒桟	平81	水路石垣部	埋土	銀化		(13.9)	(24.0)			(8.1)	1.8		(4.0)	(2.5)	0.4	(1.6)		2.3	5.6	(3.1)			
82	338	平		大溝	埋土上層		「作」	27.7	23.8			4.2	2.5												
82	339	平		大溝	埋土上層		「作」	(21.7)	23.4			4.3	2.1												
82	340	右桟		大溝	埋土上層	銀化		(18.5)	(28.1)	5.4	3.3	6.6	2.0												4.8
83	341	右桟		大溝	埋土上層	銀化	「文辰」	(17.8)	28.9	4.1	4.0	6.9	2.1												4.9
83	342	左桟		大溝	埋土上層	銀化	「作」	30.5	(20.9)	5.5	3.8	6.7	2.1												4.5
84	343	左桟		大溝	埋土上層	銀化		31.5	29.4	6.2	(3.8)	6.1	2.1												4.1
84	344	平/桟		大溝	埋土	銀化		28.7	(15.7)			4.1	2.1												
84	345	平/桟		大溝	埋土		「文辰」	28.0	(15.7)			4.1	22.2												
84	346	平		大溝	底			(11.5)	22.2			4.3	1.8												
85	347	右目板		大溝	埋土			40.9	27.9			4.4	2.1												2.2
85	348	鳥衾	横23	大溝	底		「作」	(4.9)	15.8			16.9	1.5		16.9	11.1	0.8	2.1							
85	349	鳥衾	横20	大溝	底			(4.0)	(9.0)						(11.7)	(9.4)	0.8								
86	350	鳥衾	横23	大溝	底	銀化		(36.3)	30.3			28.3	2.4		15.6	11.4	0.4	2.0							
87	351	鳥衾	菊1	大溝	底	銀化	「作」	(38.0)	(18.9)			8.8	2.6		15.4	11.1	0.6	1.8							
88	352	雁振		大溝	底	銀化	「作」	28.1	31.0	4.7		10.5	2.0												
88	353	雁振		大溝	底		「作」	30.9	29.6	5.0		(10.0)	2.3												
89	354	雁振		大溝	底		「作」	(27.8)	31.1	4.8		10.9	1.7												
89	355	雁振		大溝	底		「作」	31.0	29.0	4.8		10.7	1.9												
90	356	雁振		大溝	底	銀化	[illegible]	31.0	(28.7)	5.0		10.4	2.0												
90	357	桟込		大溝	底			13.9	(13.9)			5.1	1.7												
90	358	不明		大溝	底			(18.6)	(5.4)			(10.0)													
91	359	鬼	菊1	大溝	底			(47.2)	(28.3)			11.8													
91	360	鬼	菊1	大溝	底										16.0	10.6	0.5								
91	361	軒丸		大溝	溝底付近										14.4	10.8		2.6							
102	432	軒丸	横15	桝	上手	銀化		(2.1)							8.3	6.1	0.3	2.0							
102	433	軒丸	横11	桝	埋土(上層)																				
102	434	軒丸	横23	桝	瓦層	工具キズあり	「作」	(7.4)	16.0			15.8			(15.8)	11.2	9.3	2.4							
102	435	軒丸	横23	桝	瓦層			(3.5)	16.1			15.8			15.7	11.1	9.2	2.1							
102	436	軒丸	横23	桝	瓦層	布目残る		(9.3)	(13.7)			15.1			15.3	10.7	9.1	2.1							
102	437	軒丸	巴8	桝	瓦層																				
102	438	軒丸	巴8	桝	瓦層																				
102	439	軒丸	不明	桝	埋土(上層)			29.2	15.6	3.1	(8.6)	7.3	2.0	4.9											
103	440	丸		桝	瓦層	外ミガキ,布目痕 工具痕	❖	29.2	15.1	3.1		(7.3)	1.9	(5.0)											
103	441	丸		桝	瓦層	外ミガキ,布目痕	[illegible]	28.6	15.0	4.4	(7.1)	7.7	2.2	4.9											
104	442	丸		桝	瓦層	外ミガキ,布目痕 工具痕,内叩き		27.7	14.1	3.2	(7.1)	6.0	1.9	4.2											
104	443	丸		桝	瓦層		「文寅」	29.0	16.4	3.5	(8.2)	7.6	2.2	4.9											
105	444	丸		桝	瓦層	布目痕,内叩き		(27.0)	(9.4)	2.4	(6.5)	7.5	2.1												
105	445	丸		桝	瓦層			(26.2)	16.3	3.0	8.1	7.5	2.2	(3.8)											
106	446	軒丸		桝	上手	内叩き		(29.8)	(16.6)	2.5	9.2	7.4	2.6	4.7											
106	447	左軒桟	平24	桝	埋土		[illegible]																		
106	448	左軒桟	平15	桝	砂層(瓦下)																				
106	449	左軒桟	平15	桝	埋土																				
106	450	右軒桟	平20	桝	上手																				
106	451	右軒桟	平33	桝	砂層(瓦下)		[illegible]	(14.9)	(24.8)				1.9		(4.1)	(2.7)		(1.9)		(2.2)	3.0	(3.8)			
106	452	右軒桟	平33	桝	瓦層	滑止	[illegible]	(13.3)					2.1		3.0	2.8		1.9	1.6	2.0	(4.3)			2.6	
106	453	左軒桟	平28	桝	埋土	滑止		(19.2)	(21.9)				1.9		4.4	2.6		1.9	1.5	2.6				2.6	
106	454	右軒桟	平17	桝	砂層(瓦下)			(11.6)	(25.3)			(8.5)	1.9		4.2	2.9		1.6		2.5	(2.1)	(3.6)	4.1		
106	455	左軒桟	平23	桝拡張	上手	銀化	❖	(8.9)												2.3					
107	456	左軒桟	平40	桝	埋土(上層)																				
107	457	左軒桟	平40	桝	瓦層			(14.9)	(17.0)			2.0			4.0	2.6		1.6		1.6	4.0				
107	458	左軒桟	平40	桝拡張	上手	黒色粒,銀化,滑止		(19.4)				12.0	1.1		3.7	2.5	0.4	1.3	3.1			4.0		1.3	
107	459	左軒桟	平40	桝		黒色粒,銀化		(10.0)					1.7		4.1	2.5	0.4	1.7		2.0	4.4				
107	460	(左軒桟)	平51	桝	上手	銀化		(16.1)					1.9		4.9	3.0	0.1	1.6		2.4					
107	461	左軒桟	平51	桝	上手	黒色粒,銀化		(3.9)				(5.3)	1.9		(4.2)	2.5		(1.7)		2.7	(2.8)				
107	462	左軒桟	平51	桝拡張	上手																				
107	463	左軒桟	平51	桝	瓦層																				
107	464	左軒桟	平51	桝	瓦層			(22.1)	(26.0)			(7.8)	2.1	2.1	(4.7)			(1.5)		3.0		(3.1)	(4.0)		
107	465	右軒桟	平63	桝拡張	上手		□	(4.2)				(8.2)	(2.0)		4.2	2.7		1.7		2.6		(2.4)			
107	466	右軒桟	平63	桝	埋土		□																		
108	467	左軒桟	平68	桝	砂層(瓦下)	滑止		(17.5)	(25.6)			9.0	2.2		4.4	2.3		1.6	(1.8)	2.3		2.5	4.2	3.4	
108	468	右軒桟	平66	桝	砂層(瓦下)	滑止		(16.6)	(14.5)			7.2	1.9		(4.1)	(2.4)		(1.4)	(0.6)	(2.3)	(4.5)				
108	469	右軒桟	平66	桝拡張	上手																				
108	470	右軒桟	平69	桝拡張	上手																				
108	471	左軒桟	平78	桝拡張	上手																				
108	472	右桟		桝	埋土			29.8	(23.5)	(3.5)	(4.2)	3.9	1.9												3.0
108	473	平/桟		桝拡張	上手			24.8	(18.4)	2.5	3.7	(3.7)	1.8												
108	474	桟		桝	瓦層			30.6	(18.6)	(3.9)	3.8	(4.1)	2.0												

表14　遺物観察表６(瓦・金属製品)

瓦

図	番号	器種	分類	出土地	層位	備考	刻印	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
109	475	左桟		興	砂層(瓦下)	桟の切れ込み2		29.9	(19.4)	(2.8)	(4.0)		2.1												
109	476	右日板	複合型	興	瓦層	溝あり		38.2	27.7			4.1	1.9												2.1
110	477	右日板	一体型	興	上半			28.8	(23.0)			4.2	2.4												1.6
110	478	左日板	一体型	興	瓦層	溝あり	「作」	41.7	28.3			3.7	2.2												1.4
111	479	左日板	一体型	興	上半	銀化		(24.2)	(25.8)			4.4	2.3												1.9
111	480	右日板	一体型	興拡張	上半		「作」	(23.1)	(17.9)			4.0							2.1						1.8
111	481	左日板	一体型	興拡張	上半	銀化		41.5	(29.2)			3.5	2.3												1.5
112	482	廻隅	平50	興	砂層(瓦下)			(15.3)	(25.1)			9.0	20.5		4.5	2.7		1.9		2.8		3.5			
112	483	鳥衾	巴11	興	瓦層																				
112	484	鳥衾	巴23	興	砂層(瓦下)			(5.3)	(15.8)			15.8	1.8		15.7	1.3		1.5							
112	485	鬼	巴20	興	埋土(上層)																				
112	486	鬼	巴21	興	埋土(上層)											10.7									
112	487	鬼		興	石組中																				
113	488	鬼	梵1	興拡張	上半	銀化		28.6	(16.3)										11.0						
119	499	軒丸	巴67	旧堀	砂層																				
119	500	丸		旧堀	砂層	外ミガキ		(12.2)	(16.5)	4.0			7.8	2.4											
119	501	平?		旧溝	埋土			(22.7)	(14.6)			4.5	2.1												
119	502	鳥衾	巴7	旧溝	埋土			(7.2)	(13.7)						(12.2)	(9.0)	(0.7)								
124	518	軒丸	巴6	路面直上	焼土層																				
124	519	軒丸	巴8	路面上	焼土																				
124	520	軒丸	巴11	路面直上	焼土層			(2.3)										2.3							
124	521	軒丸	巴14	路面上	焼土			(2.1)										2.1							
124	522	軒丸	巴15	路面直上	焼土層	黒色粒、銀化			(14.4)						(15.2)	(10.8)	0.4								
124	523	軒丸	巴15	廃棄穴	埋土												0.2	2.2							
124	524	軒丸	巴15	路面上		黒色粒									(15.2)	(11.2)	0.4								
124	525	軒丸	巴2	路面直上	焼土層										(15.2)	(10.6)	0.4								
125	526	丸		路面上	焼土	銀化,外ミガキ内縮き	㊥	(20.9)	(15.3)		(8.0)	(7.4)	2.0	4.4											
125	527	軒平	平11	路面上	焼土																				
125	528	右軒桟	平16	路面上	焼土	黒色粒、滑止、銀化		(11.0)	(15.9)			(6.0)	2.1		4.3	2.8	0.4	1.6		2.3	(3.9)				
125	529	右軒桟	平20	廃棄穴	埋土	砂粒多、粘土、焼成異質		(7.1)	(12.8)			(5.0)	2.0		4.2	2.8	0.4	2.3		2.7					
125	530	左軒桟	平23	廃棄穴	埋土		❖	(7.4)	(17.0)			(8.1)	1.8		4.2	3.1	0.3	2.0		2.4		(4.3)			
125	531	右軒桟	平50	路面直上	焼土層			(13.0)	(15.0)			(7.7)	1.8		4.7	2.3	0.4	1.7		2.6					
125	532	(右軒桟)	平50	路面上	焼土	黒色粒		(3.5)					1.8		4.5	2.9	0.2	1.6		2.5					
125	533	(右軒桟)	平50	路面直上	焼土層																				
125	534	(右軒桟)	平50	路面直上	焼土層			(3.3)				(6.3)						1.6		3.0					
125	535	(右軒桟)	平50	路面上	焼土																				
126	536	右軒桟	平50	路面直上	焼土層	黒色粒		(12.7)	(21.9)			9.4	1.8		(3.7)	(2.3)	0.3	2.0				3.1	(2.7)		
126	537	(右軒桟)	平50	路面直上	焼土層	滑止、銀化		(12.2)	(14.0)				1.9		4.1	2.6	0.2	1.6			(3.0)				
126	538	平/桟		路面直上	焼土層			32.0	(15.6)				1.7												
126	539	右桟		路面上	焼土	黒色粒、銀化		(16.2)	(24.4)			6.0	2.0												3.4
126	540	鬼	巴7	路面直上	焼土層																				
126	541	鬼	梵1	路面直上	焼土層			(4.9)				(14.0)			(15.4)	(10.2)									
127	542	棟込		路面直上				(12.4)	(11.4)			6.3	1.5												
127	543	棟込		路面上	焼土	黒色粒、銀化		13.7	(11.0)			(5.9)	2.2												
127	544	棟込		路面直上				(13.8)	(12.1)			(4.8)	1.7												

金属製品

図	番号	器種	器種	分類	出土地	層位	幅	長	高	厚	a	b	c	d	e	f	g	h	i
24	39	鉄製品	釘	頭巻	芝横堀下中	ガラ					9.5	1.7	0.6	8.4			0.6	0.6	1.1
24	40	銅製品	煙管		スタンド下撹乱中	表土					7.1	1.5			2.8	1.0			
24	41	銅製品	煙管		スタンド下撹乱中	表土					6.7	1.7			2.6	1.0			
24	42	銅製品	銅銭	寛永通宝	コンクリ溝周辺	撹乱	径2.4												
28	72		不明		Tr1	8~9層					11.4	1.3				0.3			
28	73	鉄製品	釘	頭巻	Tr1	20層					(3.9)	1.1	0.8	(3.4)			0.8	0.6	
35	92	鉄製品	釘	頭巻	溝堀中	黒褐色土					14.3	1.9	0.6	13.9			0.5	0.5	
35	93	鉄製品	刀子		溝堀中	黒褐色土					(9.7)	1.0					1.0	0.4	
35	94	銅製品	煙管		堀内	埋土					6.0	1.6					0.7	0.6	
45	215	銅製品	釘		撹乱中	路面直上					(3.4)	1.2				0.4			
45	216	銅製品	煙管		撹乱中	路面直上					(5.5)				1.9	0.7			
45	217	銅製品	煙管		撹乱中	路面直上					(2.1)	0.6			1.9	0.7			
45	218	銅製品	煙管		撹乱中	路面直上					6.3	0.9			1.5	1.0			
45	219	銅製品	銅銭	寛永通宝	撹乱中		径2.4												
45	220	銅製品	銅銭	寛永通宝	撹乱中		径2.3												
45	221	銅製品	銅銭	宋銭?、景□□宝	撹乱中		径(2.5)												
48	233	銅製品	煙管		撹乱中	近代層					5.2	1.7							
48	234	銅製品	銅銭	寛永通宝	撹乱中	焼土上付近	径2.6												
49	239	銅製品	銅銭	寛永通宝	大走り上	表土	径2.8												
52	254	鉄製品	鎹		撹乱中						14.4	4.5				0.8			
52	255	銅製品	銅銭	宋銭、宋元通宝	表採		径2.4												
92	362	銅製品	釘		大溝	埋土					(5.8)	(0.7)				0.4			
92	363	銅製品	煙管吸口		大溝	底					5.4	1.0				1.0			
92	364	銅製品	銅銭	寛永通宝	大溝	底	径2.4												
92	365	銅製品	銅銭	寛永通宝	水路石積部	埋土	径2.3												
92	366	銅製品	銅銭	寛永通宝	水路石積部	埋土	径2.2												
120	507	銅製品	銅銭	寛永通宝	旧堀	砂層	径2.4												
120	508	銅製品	煙管吸口		旧堀	焼土上層					5.2	0.8				0.8			
120	509	鉄製品	鎹		旧堀	砂層					9.5	5.4			2.9	2.2	0.3	0.8	
120	510	鉄製品	釘	頭巻	旧堀	砂層					8.5	1.2	0.6	8.1			0.6	0.4	
120	511	鉄製品	釘	頭巻	大溝	底					6.0	(0.8)	0.8	5.5			0.5	0.4	
120	512	鉄製品	釘	頭巻	旧堀	砂層上層部					4.1	0.8	0.5	3.7			0.4	0.3	
128	545	銅製品	煙管		番所周辺	路面上					(0.7)	1.5				0.5			
128	546	銅製品	煙管		番所周辺	路面上					(5.1)	1.0				1.1			
128	547	銅製品	銅銭	寛永通宝	撹乱中	路面直上	径2.5												
128	548	銅製品	銅銭	寛永通宝	撹乱中	路面直上	径2.3												
128	549	銅製品	銅銭	寛永通宝	撹乱中	路面直上	径2.2												

表15　遺物観察表７（木製品・石製品・土製品・その他）

木製品

図	番号	分類	出土地	層序	備考	幅	長さ	厚み	a	b	t	備考
27	61	屋根材	Tr1	20層					(12.2)	8.2	0.4	
27	62	屋根材	Tr1	20層					(9.5)	7.2	0.4	
27	63	屋根材	Tr1	20層					(11.9)	4.7	0.2	
27	64	屋根材	Tr1	23層					(27.7)	5.0	0.3	
27	65	屋根材	Tr1	20層					(18.8)	3.7	0.2	
27	66	屋根材	Tr1	20層					(41.3)	3.5	0.3	
27	67	器物	Tr1	28層					7.7	7.4	0.8	
27	68	杭	Tr1	28層	全面焼ける				(39.2)	4.2	3.6	
27	69		Tr1	28層					9.5	6.7	1.7	
27	70	楔?	Tr1	23層					22.1	6.8	2.3	
27	71	箸	Tr1	28層					(23.4)	0.8	0.6	
36	100	箸	溝堀中	黒褐色土					(26.7)	1.0	0.6	
36	101	箸	溝堀中	黒褐色土					(25.0)	0.9	0.7	
36	102	箸	溝堀中	黒褐色土					(23.7)	0.8	0.5	
36	103	箸	溝堀中	黒褐色土					(23.6)	0.9	1.0	
36	104	箸	溝堀中	黒褐色土					(22.3)	0.8	0.7	
36	105	箸	溝堀中	黒褐色土					(16.6)	0.7	0.6	
36	106	箸	溝堀中	黒褐色土					(15.7)	0.9	0.6	
36	107	板状	溝堀中	黒褐色土					3.0	(13.4)	0.4	
36	108	箱?	溝堀中	黒褐色土					6.1	10.8	0.9	
36	109	下駄	溝堀中	黒褐色土					(31.4)	5.5	2.0	
36	110	板状	溝堀中	黒褐色土					26.0	3.1	0.4	
36	111		溝堀中	黒褐色土					7.7	(6.0)	0.4	
120	503		旧桝	砂層	被熱				6.6＋7.2	13.6＋13.8	0.6＋0.7	
120	504		旧桝	砂層					12.2	12.5	1.5	
120	505		旧桝	砂層					(11.5)	3.7	1.0	
120	506	板状	旧溝	埋土					2.3	16.1	0.4	

石製品

図	番号	分類	調査区	出土地	層序	幅	長さ	高さ	厚み	a	b	備考
24	43	不明		スタンド掘削中	表土	0.6	3.0					
24	44	軽石		スタンド下掘削中	表土	10.2	14.5					
45	222			掘削中	グランド直下	0.7	(2.7)		0.7			
45	223			掘削中	路盤直上焼土層	0.4	(2.8)		0.4			
45	224			掘削中	路盤直上	0.7	(8.6)		0.6			
48	235	石臼		掘削中	焼土層より若干上	12.5	23.5	11.5				
52	256	砥石		掘削中		5.1	(4.8)		0.8			
52	257	不明		掘削中		0.5	(3.4)		0.4			
92	367	軽石		大溝	埋土	(16.2)	(9.3)	9.5	4.3			
113	489	軽石		桝	瓦層	(12.5)	(18.8)	12.0	(3.1)			
113	490	硯		桝	上半	(7.2)	(16.2)	3.2	2.8			
113	491	砥石?		桝	上半	(3.3)	(11.8)		1.2			
128	550	砥石		路盤直上	焼土層	4.4	(5.9)		0.6			

土製品

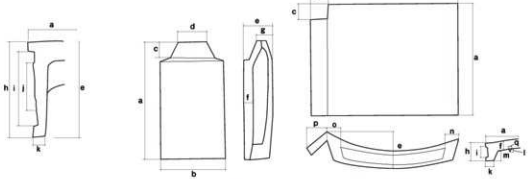
図	番号	器種	出土地	層序	幅	長さ	高さ	厚み	a	b	備考
35	95	土錘	側内	埋土	3.7	5.9		3.2			
35	96	土錘	掘削中	表土層	1.2	3.7		1.2			
35	97	土錘	掘削中	表土層	1.3	(4.3)		1.3			
35	98	土錘	掘削中	学校層直下	1.3	(4.8)		1.1			
35	99	土錘	掘削中	学校層直下	1.3	(4.2)		1.0			

その他

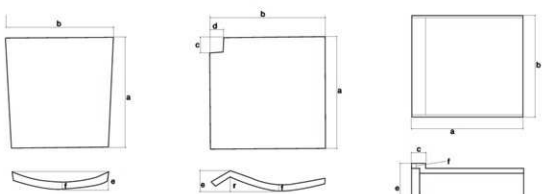
図	番号	器種	分類	出土地	層序	備考	幅	長	高	厚	a	b	c	d	e	f	g	h
120	513	歯		旧桝	砂層						3.0	2.8		0.8	0.6			

a：全長、　b：全幅、　c：本体幅、　d：胴長
e：釘長1、　f：釘長2、　g：胴幅、　h：胴厚、　i：釘頭

釘・鎹の計測方法



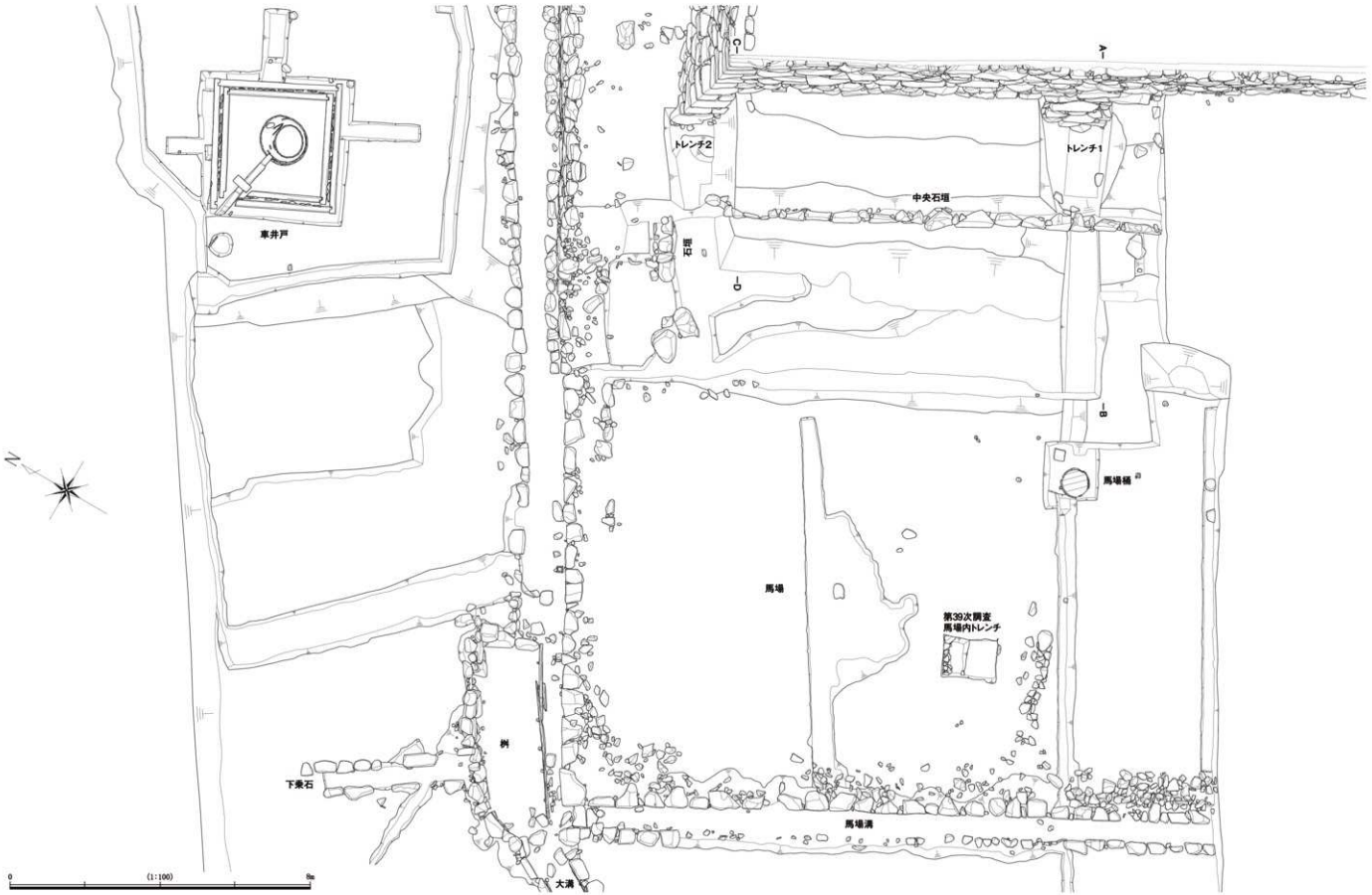
軒丸瓦　　丸瓦　　軒平瓦



平瓦　　桟瓦　　雁振瓦

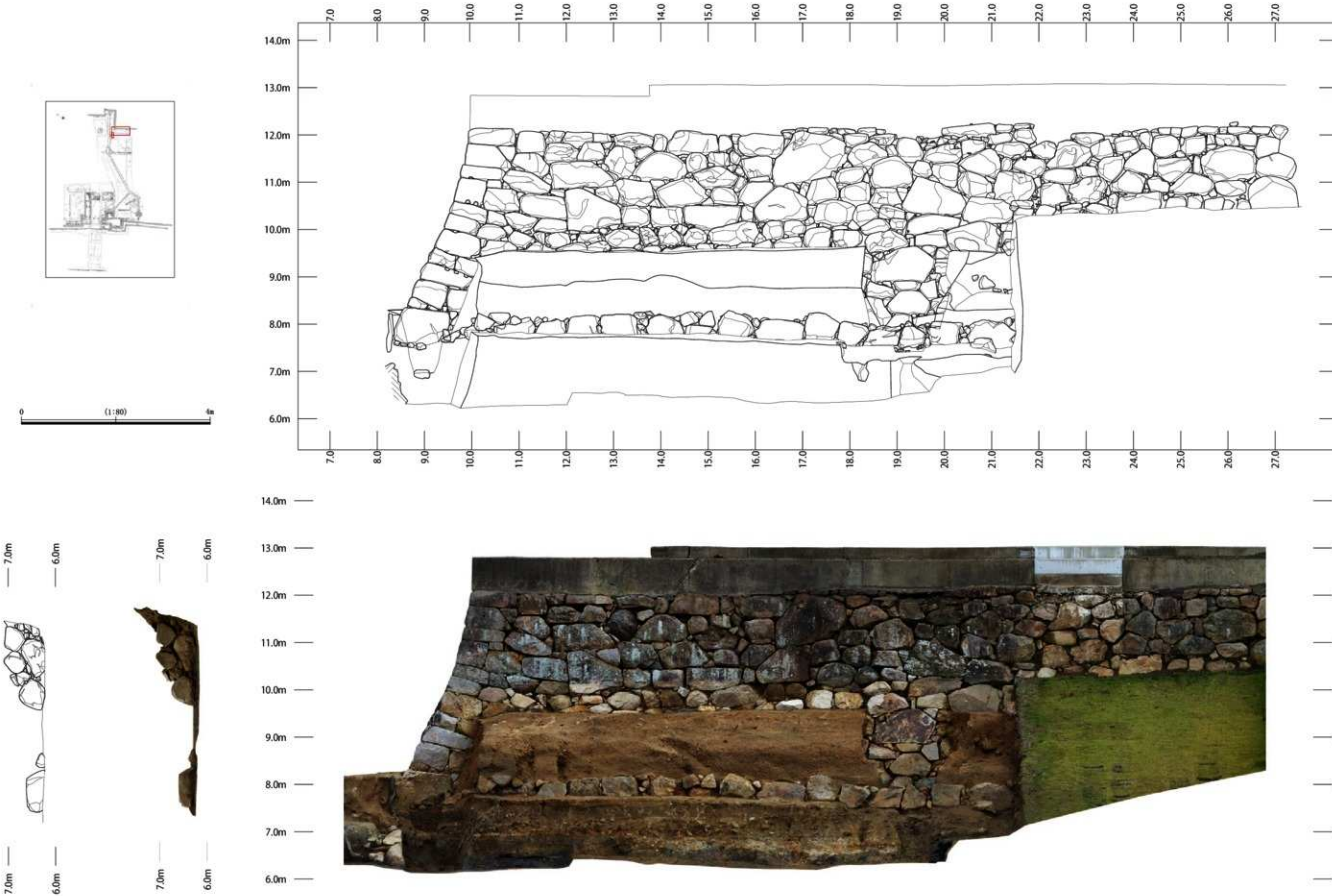
瓦の計測方法

第131図　遺物計測方法



第17図　①区平面実測図

第18図　①区平面オルソ図



第19図　石垣斜面立面図

第Ⅴ章　まとめ

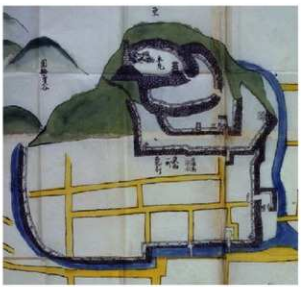
1　復元整備範囲の歴史的変遷

第34次発掘調査以降の全面調査により、擬宝珠橋から中ノ御門、その先に広がる広場部分(最下段の曲輪、現グラウンド)の整備範囲の調査が完了したことになる。この先、太鼓御門へ向かう上り坂部分の調査を残すものの、凡その様子が判明してきたことから、中ノ御門から先、この広場部分について現状をまとめることとする。上段の二ノ丸・三ノ丸については、詳細な建物配置図が残るものの、この付近の詳細な様子がわかるものとしては、天保15年(1844)に描かれた『鳥府久松山御城積間図』があるのみで、建物変遷を追うことはできないため、ここではまず絵図比較からわかる曲輪自体の変遷を見ることとする。17世紀の初頭、池田長吉期の様子を描いた最も古い絵図である第132図『因州鳥取之城之図』をみると、石垣の表現がデフォルメされているため単純比較はできないものの、外桝形の南ノ御門と内桝形の中ノ御門があり、前者が石垣を持ち内門・外門の２門を持つのに対し、後者に石垣は描かれず外門のみの構成である。実態をどれだけ反映しているかについては検討の余地があるものの、南ノ御門が中心的な門であるように映る。また、太鼓御門らしき門とそこから前面へ延びる桝形石垣も確認できる。当時の因幡地方は、鳥取城に池田長吉、鹿野城の亀井茲矩、若桜鬼ヶ城の荒木重堅と３氏により分割統治されており、６万石の長吉が中心的な存在であるものの、突出した存在とまでは言えず、城郭の基礎を整えたと言われるが、現存する32万石の城郭よりは規模は小さかったとみられる。

続いて第133図、元和５年(1619)幕府へ提出された池田光政期を描いた『因幡国鳥取絵図』ではより詳細に描かれており、二ノ丸の三階櫓や走櫓等その後につながる建物も確認できる。擬宝珠橋も描かれ、中ノ御門は石垣積みとなり表門・櫓門が確認できる。渡櫓門である太鼓御門も見ることができ、この門を通り二ノ丸へ続く導線が大手登城路であることがわかる。前段とあわせ広場部分の詳細は不明である。池田光政の入国により諸侯により分割統治されていた因幡・伯耆の両国は32万石の鳥取藩として統合され、藩都を鳥取に、藩庁として鳥取城を選定し直し以降政治の中心地となった。姫路城主から10万石を減じての入国であったが、それまで６万石の居城であった鳥取城および城下はあまりに手狭であり、供に連れた配下の者達は屋敷を構える土地に苦慮したとされ、結果内堀の内側、城内にも所狭しと屋敷が並ぶ状況となり、城郭・城下整備は急を要した。この状況は寛永９年(1632)光政が岡山城主となった池田光仲と国替えとなった以降も続き、17世紀半ばまでの様子を描いた第135図『鳥取城下之図』に確認することができ、17世紀後半代にかけ徐々に城外移転が進んだとみられる。曲輪自体の改造も併せて進み、第134図、正保元年(1644)の『因幡国鳥取城廻絵図』をみると、第133図とは異なり天球丸が以降と同じ姿で整備されていることがわかり、その後に通じる城の骨格部分の大枠が整うこととなる。

一方整備範囲内の様子を見ると、17世紀の後半代になると登城路のルートに変更が認められ、中ノ御門から太鼓御門へのルートのに並列する形で、平地部分から三ノ丸へ上る路が２本現れる(第136図)。広場には横方向に石垣が築かれ、新路の出入口には門が備わっているが、この場所自体が先の絵図の通り光政期以来侍屋敷地となっていたため、これらがあるうちに整備はできず、三ノ丸をみても元々は何も描かれいない場所であり、後に整備され藩主の隠居所が置かれる曲輪となるため、侍屋敷移動の後に曲輪の改造が進んだと考えるのが自然である。広場と三ノ丸との比高差は７m、距離は凡そ50mの直線的な登城路とすると、勾配14%の急な坂が想定できる。下段の門を抜け、斜面を上がった先にも門が描かれるも、上段部分の姿は絵図によって差がある。門の屋根をみると瓦葺きではなく、山上の天守同様、檜皮葺などを用いた格式の高い門であったとみられる。

18世紀に入ると三ノ丸側は曲輪の大改修が行われる。３代藩主池田吉泰期には、それまで二ノ丸に



第132図　因州鳥取之城之図（部分）岡山大学付属図書館

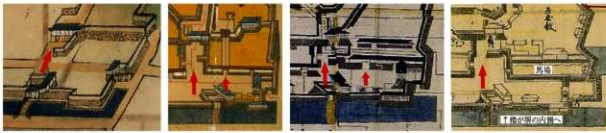
第133図　因幡国鳥取絵図（部分）岡山大学付属図書館

第134図　因幡国鳥取城廻絵図（部分）東京大学総合図書館

第135図　鳥取城下之図（部分）鳥取県立博物館

第136図　鳥取城破損御修覆願絵図（部分）鳥取県立博物館

第137図　鳥取城修覆願絵図（部分）鳥取県立博物館



①元和５年(1619)　②天和３年(1683)　③享保６年(1721)　④宝暦12年(1762)

①因州鳥取之城之図(岡山大学付属図書館)②鳥取城破損御修覆願絵図(鳥取県立博物館)
③鳥取城修覆願絵図(鳥取県立博物館)④鳥取城修覆願絵図(鳥取県立博物館)すべて部分、加筆

第138図　登城路変遷図

あった本丸を、中ノ丸(完成後二ノ丸と称す。後の三ノ丸)へ移す大改修は享保元年(1715)に始まり、２年の歳月をかけようやく完成、豪華を極めた建物群が建てられたと伝わるも、そのわずか２年後の享保５年(1720)４月１日、城下にて発生した火事は折からの強風に煽られ燃え広がり、城も延焼、山上ノ丸までを焼き尽くした。櫓蔵など数棟を残し城のほぼすべてが灰燼に帰すこととなった。火事後に三ノ丸周辺は大規模な普請があり、三ノ丸の曲輪自体が堀側へ大拡張され、これに伴い下段より上る２つの路は廃止、下段部分は独立し、４代藩主宗泰の時代に青木の馬場となる。このため登城路は太鼓御門を抜けるルートへ一本化される点は重要である。発掘調査の結果太鼓御門では旧礎石の上に80㎝もの整地土が敷かれ新礎石が据えられていることとが明らかとなっており、三ノ丸の拡張により整地された新たな地盤面に対応するための嵩上げとみられる。下段付近では、石垣で囲われた馬場を確認しており、この石垣は２つの登城路が設けられた際に築かれたものが転用されている可能性もある。

石黒火事によりその機能をほぼ失った鳥取城の被害は、建物焼失だけに留まらず、翌年の享保６年(1721)幕府へ提出された『鳥取城修覆願絵図』(第135図)には各所で石垣が崩落している様子が記されている。建物が焼け落ちる際に土台となっていた石垣もろとも崩れたもので、中ノ御門、太鼓御門にあった渡櫓付近に顕著である。火事による被熱により赤変した石垣や、焼土の堆積跡は現在も各所に残る。その後積み直された石垣は写真26・27のとおり積み方に特徴があり、平面を比較的平滑に仕上げ、周縁部に変化をつけ隣石を嵌め込むような形となる。火事よりほぼ１年後の享保６年(1716)３月19日に始まった再建へむけた城普請により、３年のうちに塀・石垣は修理が完了したものの、建物再建については暫くの期間を要し、天守相当施設である現二ノ丸三階櫓の再建は、火事より15年後の享保20年(1735)のことであった。鳥府志によるとまず正門である中ノ御門の表門が同年中に再建されたとあり、櫓門についてはその４年後であった。火事後、櫓門は大きくその姿を変えており、堀まで続いていた渡櫓の幅が縮小、古写真に残る復興門の写真解析を基にした検討からも渡櫓ではなく、石垣間に立つ櫓門へ変更されたとみられる。石垣や建物の更新だけではなく、先述の太鼓御門同様、地盤面自体の嵩上げが認められる。中ノ御門付近では、表門で確認できないものの、櫓門については、焼土層を埋め立てた上に新門が築かれており、厚いところでは50㎝を超える嵩上げが認められる。また、門を抜けた先、大溝の石積みに現れているように、２～３段積みのうち最下段石は大きめの石材を用い、その上面には横方向の目地が通ることから、上段は積み足しと考えられる。が、火事後の造成であるか、17世紀後半代の周辺整備に伴う造成であるかは明確でないものの、地盤面の嵩上げが行われ

写真25　嵩上げされた中ノ御門櫓門

写真26　火事後の積み替え

写真27　城内唯一の切石積み石垣

たことは明らかである。

火事後の大造成について先述のとおり二ノ丸(後の三ノ丸)の拡張がある。石黒火事直前に本丸とするべく大改修を行った中ノ丸を堀側へ向い拡張するための工事であり、現在みられる高校講堂の下部の石垣はこの時期に築かれたもので、石垣前面には本報告の通り、地山由来の真砂土を大量に使用した大規模な補強が行われ、この盛土はそのまま馬場内側面の土手として利用された。再建開始２年後の享保８年(1723)10月２日には本丸が完成、同月中に太鼓御門での"時打ち"と、馬場内土手の普請開始の記録があることから、一連の工事が短期間で実施されたことが分かる。馬場の竣工は元文５年(1740)４代藩主池田宗泰の時であり、土手普請の着手からしばらく経ってのことである。この他、時期が明確でない大溝の振替並びに桝設置などの工事もあるが、火事からの復興にあわせ復元整備範囲の景観は凡そ整ったとみられる。

次に大きく手が加わるのは、幕末に近づいた嘉永３年(1850)のことであり、地震により太鼓御門前面の石垣が大きく崩れたため、修理を実施、新造の石垣は城内唯一の切り石積みである。この石垣は中ノ御門を抜けた正面に位置することから視覚的な効果を狙ったと考えられる。万延元年(1860)に始まる三ノ丸の大拡張である。弘化３年(1846)に本丸を再び二ノ丸へ移動したものの、手狭であったことから、改めて三ノ丸へ戻すこととなり、曲輪を南東側へ大きく拡張したもので、併せて登城路の変更が行われ、それまで太鼓御門を抜け三ノ丸内を通り、上層へ進んでいたものが、門通過後すぐに左へ折れる三ノ丸内を通らないルート(現在の園路)へと変更された。さらに、登城路沿い、現仁風閣付近には文久３年(1863)12代藩主池田慶徳が、若くして未亡人となった先代藩主慶栄夫人宝隆院のため屋御殿とその池庭(現宝扇庵・宝隆院庭園)が築かれた。近世期における大造成はここに完了し、幕末を迎える。しかし、城郭工事としての最終は明治元年(1868)の擬宝珠橋の架け替えがある。明治に入ってはいるものの、城郭は機能していたため、以前より予定されていたであろう工事が実施されたとみられ、古写真にみられるのはこの橋と考えられる。

明治４年(1871)に城の機能を失うと、明治８年(1875)には、陸軍により71棟もの建物が解体された。中ノ御門を含めた周辺施設もこの際に撤去されたとみられる。４年後の明治12年(1879)の二ノ丸三階櫓解体をもって解体工事は完了した。大半の建物はなくなったものの、近年の研究により、小規模な建物や塀、門等は残存していた事が明らかとなっている。復元整備範囲内においては、切り石積み石垣上の土塀が挙げられ、この後も大正期頃までは残存していたことが、絵葉書(写真28)などからも明らかである。城内に駐屯した陸軍は、明治17年(1884)には登城路内にある御前井と車井戸に木樋を設置し、城下へ送水を行い、その樋の全容は、発掘調査で明らかとなった。明治22年(1889)三ノ丸後に尋常中学校が開学する頃には、桝形を形成する中ノ御門石垣は一部が解体され、

写真28　残存する土塀(写真27の石垣上)

橋を越え直線的な進入路へと変更された。城郭遺構として残った石垣は、学校用地となってからは改造が繰り返され、昭和18年(1943)の鳥取大地震では、各所で崩落の被害を受けた。震災からの復旧工事の過程は第Ⅰ章６で述べた通りであるが、様々な改変を受けて現在に至る。

２　馬場の成り立ち

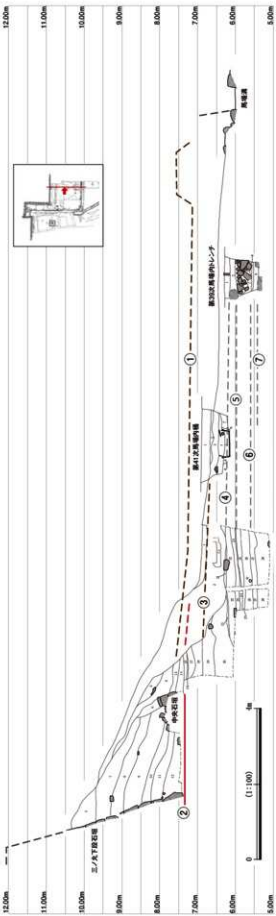
青木の馬場は、大きく３段階の造成を経て、形成されたと考えられる。青木の馬場としての成立は、先述の通り、享保５年(1720)石黒火事からの復興に合わせたもので、その竣工は、火事より20年後の元文５年(1740)４代藩主池田宗泰の時である。曲輪そのものを大きく改造することとなった一連の復興造成では、まず、本丸となる現三ノ丸が享保８年(1723)10月２日に完成、同月中に太鼓御門での時打ちの記録が残る。第137図の絵図を比べると、②の17世紀後半に出現した三ノ丸への直登ルート(右方の矢印)は④の火事後には廃止されて現在の姿となっている。太鼓御門脇にあった石垣は20m程も前方へと迫り出す形となり、三ノ丸の敷地面積は拡張、太鼓御門では、旧門礎石の上に70cmもの土を敷き新門を設置していることからも、復旧工事以上の大造成と言え、工期もが僅か３年間である。また、馬場については、新三ノ丸の竣工に合わせて土手普請が開始されたとあり、その土手は今回の調査対象である三ノ丸下段石垣前の斜面とみられる。高さ4.5mほどの三ノ丸下段石垣の下半は盛土であり、設置のための掘り込みを供わないこの石垣は、盛土と一体的に造られたと考えられる。盛土自体をみると、周辺でみられる地山由来の砂礫土で、混ざり気のない均一な土質であることからも、近くで採土されすぐに敷かれたもと考えられ、旧太鼓御門上に敷かれた整地土も全く同様の土質であることから、一連の工事とみられ、採土地は三ノ丸の山側であった可能性がある。

実際の馬場面については、ほぼ残存しないが、標高7.6m程から続く13・14層が直接関連してくるとみられ、現在の標高6.3m付近より高所にあった推定される。第139図トレンチ１の土層図をみると15層以下の層は水平堆積を見せ、トレンチ２の土層(８～10層)で明らかな通り、これらの層は三ノ丸下段石垣下奥へと続く。下段石垣は15層上置かれ、中央石垣はさらに14層を盛りながら据えられていることからも、この15層がそのベースにあることがわかる。石垣に伴う14層やその上層の13層(後の整地の可能性もある)は、緩やかに傾斜しているが、その性格上、馬場面が傾斜していたとは考えにくく、ある程度下降した後、水平となると仮定し、第138図①の推定線を入れた。三ノ丸下段石垣の据から馬場溝までの距離は18m、中央石垣からは15.5mとなる。

中央石垣の基盤となる、薄く重なるこの15及び16層(トレンチ２での８～10層)は石垣設置のために敷かれた層とは言い難く、以前の路盤面の様相を呈す。両層は、現状で中央石垣前に幅１mほどしか残存せず、この状況で、中央石垣の上に数段積み足すと非常に不安定なことから、本来はさらに前方へ続いてある程度安定的な地盤を形成していたとみられる。また、16層は焼土層であり、トレンチ２の同位置にある14層もまた焼土層である。これを石黒火事の痕跡と仮定すると、15層以下の遺物が、15層以上の石垣構築層に伴う遺物より、一段階古い様相を呈することと矛盾しない。

17～20層は、この位置に路盤面を設けるための整地層とみられ、まず20層を厚く敷き、その上に地山由来とみられる軟岩を多く含む白色気味のブロック土である19層を敷く。19層は非常に特徴的な層であり、馬場桶の上にも同様のブロック土が確認(第139図破線③)できることから、両者は一連の層である可能性がある。その上の17・18層を合わせ、それぞれが別時期の整地ではなく、一体的な造成工

写真29　嵩上げされた太鼓御門
旧門礎石に土盛りし、栗石を敷き新礎石を据える



第139図　馬場周辺土層堆積状況

事の様相を呈する。

21層以下は、全く別単位の堆積とみられる。21層の砂礫、25・27層の砂層の間に黒色の土が入る堆積で、一見して土質の異なる堆積である。これらの層と若干位置は異なるが第39次馬場内トレンチの土層を比べると、黒色土の始まりの破線④、砂層の破線⑤・⑥とはほぼ同じ高さで繋がっている。馬場内トレンチからみると、破線⑦とした一番深い位置に礎石とみられる石があり、それを埋めて砂を敷き破線⑥となり、その上に裏栗石状の石を敷き、上面を整地する(破線⑤)。この面上には礎石らしき石もみられ、これらを黒色土でパックする(破線④)。21・25・27層がそれぞれある時期の路面となるのであれば最下層と合わせ4面が存在していたことなる。破線⑦の礎石に対応するトレンチ1中の層は最下層の28層となるが、当層は木製品片などを含む廃棄層のような様相を呈することから、両者が一連となるかは不明であり、礎石自体についても城に関連するものか、或いはそれ以前に遡るものかを含め今後の検討を要する。また、これらの出土遺物をみると、陶器が多く、国産磁器をそれほど含まず17世紀前半までの層とみられる。

以上のように、青木の馬場は、大きく分けて3段階(第1段階：21～28層、第2段階：15～20層、第3段階：7～14層)の造成を経て、区画が形成されたとみられる。第1段階については、先述の通り、細かい単位での造成に分かれるとみられるが、検出範囲が狭いため一括りとした。さらにこれらを一気に埋め立てたのが第2段階である。高い位置に路盤面を造ることを目的にした造成とみられ、地山由来とみられる土を多く使用しているのが特徴である。第3段階は、三ノ丸及び、その後の馬場造成を目的としたものである。第138図の変遷と合わせて考えるならば、第1段階は①の頃、17世紀前半代、池田光政の入府に伴う、敷地不足のため、城内に家臣団屋敷が多数存在した時期とみられる。第135図の慶安年間以前の絵図に明らかな通り、当該地にも屋敷が並んで描かれている。続いて第2段階は②・③の頃、屋敷の城外移転後、石垣によって囲われた区画内に三ノ丸へと上る登城路が整備された時期とみられる。馬場

「鳥取城三ノ丸絵図」　鳥取県立博物館蔵

第140図　馬場周辺状況

外周の石垣が、この石垣を引き継いでいるならば、馬場の外側、大溝周辺路盤の標高は現在とそれほど違わない標高6.0m前後にあったこととなる。いずれにせよ三ノ丸との比高差は６mほどもあることから、ここへ路を整備するとなれば、相応の地盤嵩上げを行う必要があり、それが第２段階ではないかと推定される。第３段階については、石黒火事後の復興整備であることは明らかである。出土遺物をみても齟齬はなく説明できるが、一単位での造成である第２・３段階と、段階的に嵩上げされた、第１段階とでは、性格が異なるため、今後は第１段階内での詳細な検討が必要である。

3　番所及び大溝の変遷

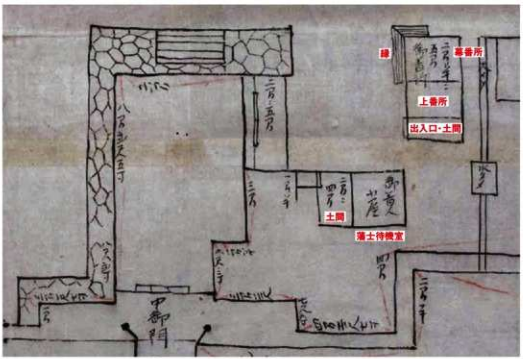
番所跡には２或いは３時期の建物跡が存在し、新旧で大きく位置を変えることが明らかとなった。３時期目とした旧番所２は全容が不明ながら、その他については検出遺構より復元が可能であった。

（１）幕末期番所〔第143図〕

天保15年(1845)に描かれた、第141図となる「鳥府久松山積間図」は、城内各施設の詳細な建物規模が書かれた貴重な資料となり、復元対象となるこの中ノ御門の「御番所」は、桁行５間に梁間２間半、内部を３室に区分していたことがわかる。矩折れの縁を伴う室が幕番所に相当する居室と考えられ、その南西側が上番所に相当する居室、南西端の出入口を伴う室は土間等であったと考えられる。もう一つの復元対象である「番人小屋」は、桁行４間、梁間２間であり、北側妻面に半間の出入口を設ける。内部は２室に区分し、南側の居室が②に相当する藩士が待機する居室で、北側の室は入口がある土間であったと考えられる。

また、御番所の裏手には、大溝とした「大メソ」、桝とした「水タメ」が描かれているが、大溝は、番所の北東辺と位置を合わせ、上流が描かれていないことから、暗渠であったことが分かる。番所と溝を挟んだ対面側には、「大腰掛」が描かれており、北東辺を揃える状況は、調査で検出した大溝から分岐する溝でも明らかなとおり同様の区画が確認できる。

この番所に伴う遺構としてはまず、瓦溝が挙げられる。軒下に位置する雨落ちであるこの溝は、西側の番人小屋より続き、番所側へ折れて２m程続くが、その先は上面の削平が著しく、瓦を敷き詰めた溝としての検出はできなかったが、設置するための溝と散在する瓦を検出、これらは、旧桝から続く旧溝を切る形で存在していたため、旧流路を埋め立ててたてて敷地を拡張した後に建てられた、新番所に伴う溝であることがわかり、南東側にある雨落ち状遺構と南側の桝を合わせると、建物敷地が明らかとなる。開渠となる大溝が雨落ち溝を兼ねるとすると、建物の長辺は大溝側壁上に位置することとなり、天端石が礎石を兼ねたと考えられるが、建物南端にあたる、桝への流入口と、東端となる大溝内へ倒れた２石の大型石材以外、天端石は残存しない。この２石を基準とし、２間半に５間（１間＝６尺５寸≒197cm、図中の格子は半間単位）を当てはめたものが第143図であり、建物の南西半は旧番所の礎石を再利用しているとみられる。再利用礎石をみると、一部に空白がみられることから、３室のうち、ここを土間とした。規模は２間半に１間半とみられ、溝側の半間には礎石がみられることから、別区画が存在する可能



「鳥府久松山御城積間図」鳥取県立博物館蔵

第141図　御番所周辺状況

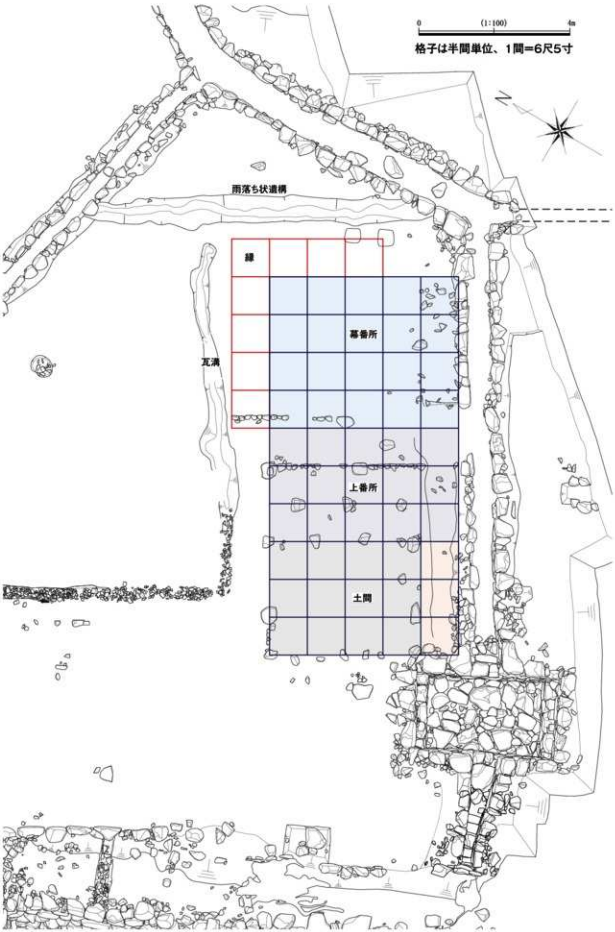
「ニノ丸惣御絵図」西坂下御門脇番所部分
鳥取県立博物館蔵

「ニノ丸并御三階下通り御絵図面」
西坂下御門脇番所部分　鳥取県立博物館蔵

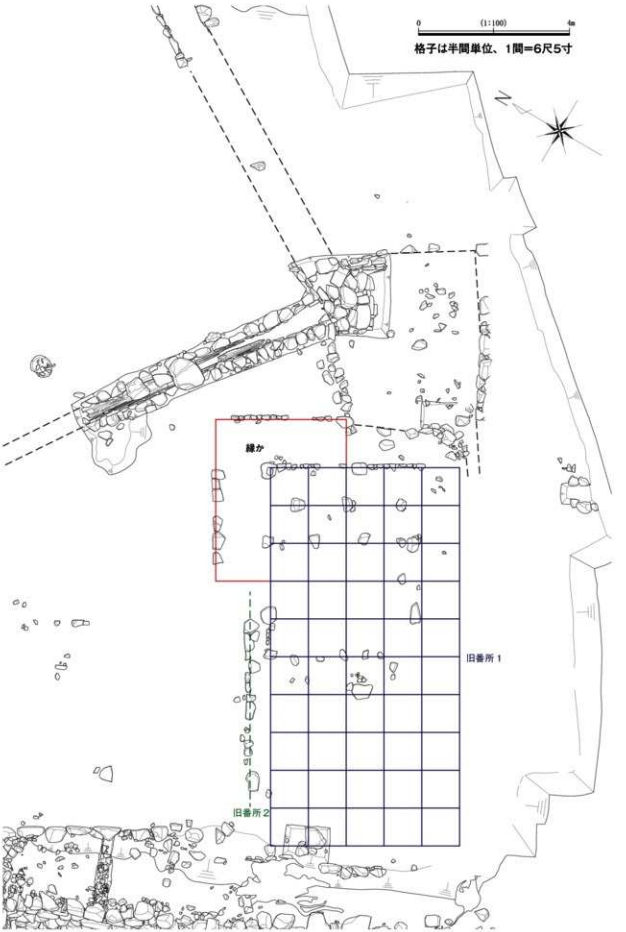
第142図　西坂下御門脇番所の状況

性があり、二ノ丸下に位置する坂下御門脇の番所の図(第142図)をみると、土間の横には「押入」と便所らしき施設が描かれることから、同様の区画が想定される。さらに残り３間半の長さを２室に割り振ると、上番所相当の中室が１間半、幕番所相当が２間となる。幕番所下には礎石が残存しないが、雨落ち状遺構との間には２ヶ所に礎石抜き取り跡とみられる方形の痕跡が残ることから、ここを縁の端部とすると長さ２間半、幅２間、縁幅半間程度の縁が復元できる。

旧桝・溝を埋め、大溝の流路を変更して設置された新番所は、旧礎石を再利用し、新たに造成された範囲には新たな礎石が使用されたものの、残存していない理由としては、近代の建物撤去後に再利用しやすい形状であった可能性がある。大溝側壁上にあったとみられる礎石も残っておらず、新造のうち僅かに残った南端の石は大型で、東端については、石抜きを試みたのか、石材が溝内へ倒れ込んでいることからも意図的に抜き取られたと推定される。



第143図　番所推定位置１（幕末期番所）



第144図　番所推定位置２（旧番所）

（2）旧番所と旧桝、旧溝〔第144図〕

旧番所の規模が書かれた資料は存在しないが、大きく機能を変える施設でもないことから、幕末期の番所と同規模、2間半に5間と仮定して復元を行った。礎石間に地覆とみられる小型の石を並べる造りは北東側に、比較的良好に残存し、旧桝と旧溝が機能していることから立地場所はある程度限られることとなる。北東側の石列をみると、1つの礎石と小型石列が並んでおり、途中に空間があることから、本来ここには礎石が位置するとみられ、残存する礎石は、桝角の天端石を兼ねている。桝南西側壁はやや開きながら続くことから、建物北東辺がこのまま側壁上を走るとは考えられず、角石までとし、その場合、この石列は縁を構成するものとみられる。礎石中央より、建物正面側へ3.5m程進み直角に折れた先には、長さ30～50cm程度の石材が北西側に面を揃え6石ほど並ぶ。位置から考えると、同じく縁を構成するとみられるが、北東側とは石の使い方が異なり、縁幅も北東側は1.2mであるのに対し、北西側は1.4mと同等とならない問題点も残る。このことから、建物の北東辺はもう一列南東側の列となり、北端の礎石を基準とすると、梁行2間半は両端と中間の3石、桁行5間は1間・1間・半間先まで遺存するがその先は失われ、石垣と接する位置にある1石が西端となる可能性を残す。南東辺は後の大溝および桝の付け替えにより失われているが、5間で堀側石垣と接する点と、中ノ御門側より続く石垣自体が、建物付近で折れることなどから考えても、桁行5間であったと推定される。

旧番所2とした石列は不明瞭な部分が大きく、或いは旧番所1と関連する可能性も否定できないが、別と捉えるならば同規模程度の建物であったと考えられる。

旧桝は、後の桝と大きく構造が異なる。馬場脇の桝から暗渠となった大溝の長さは旧桝の取水口までで40mを測る。大溝と直結する構造から、大雨時にはかなりの流速の水が直接流れ込むことになるため、流速を殺す目的で、桝内に巻石垣を構築したとみられる。機能としては、後の桝同様沈砂桝とみられ、北側より流入した水は対角の南側より吐水する。吐水部の状況から、後の大溝と同位置に排水路が続いていたとみられる。取水口の溝底にある敷石上の標高が5.1m、吐水口付近の石上の標高は5.0m、その差は10cm程で、これは後の桝と同様である。旧桝内の土層堆積状況をみると、最上層の焼土層以外、取水口付近まで自然堆積とみられる砂層であり、機能を停止する際に一方的に埋められたものではなく、自然に埋まった土を埋め立てたものである。

旧桝から分岐する旧溝は、後の大溝から分岐する溝と平面的には類似するも、構造が異なる。後の溝は大溝と溝底の標高が同じであることから常時通水可能であるのに対し、旧溝は、旧桝の取水部脇にあり、溝底標高は同じであるも、流水は旧桝内へ流れ込むことから、排水容量を超えて水位が上がった際に機能すると考えられる。旧桝内の出土遺物をみると下限は18世紀始め頃にあり、旧溝とともにその堆積土中には、焼土や焼炭を含む層がみられることから、その廃絶には石黒火事が関係している可能性が高いと考えられる。

4　瓦について

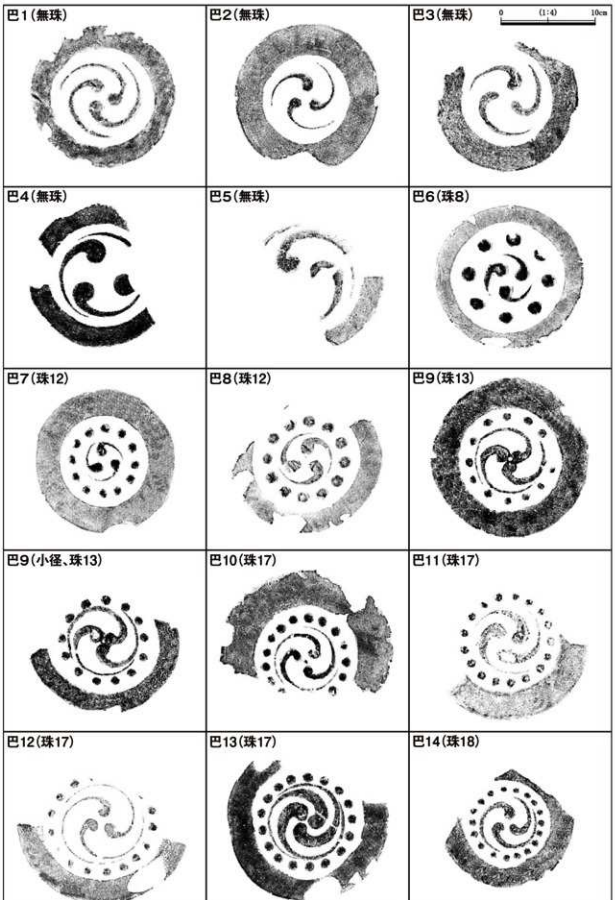
これまでに出土した瓦について笵毎に再編集したものが2019『鳥取城調査研究年報』第12号である。そこでは享保5年(1720)の石黒火事以前までの瓦を対象としたがここではそれ以降、現在までに確認できたすべての笵型を掲載した。詳細な検討は別稿に譲ることとし、今回は笵型の把握に努めた。軒丸瓦については、巴文・龍文・蝶文・葵文の文様別に"巴○"と番号を振った。なお、鬼瓦や鳥衾瓦にも軒丸と同じ笵を使用することから、これらも含めている。軒平瓦については、中心飾りが分類しがたい文様のものがあることから、文様別にすることは諦め、"平○"とした。18世紀の半ばには、桟瓦が出現し、大部分を占めるようになるが、これらを含めて平○とするものである。

巴・龍・～蝶11・～平11までは、研究年報に掲載したが、巴文は、巴6～8（6・8は19世紀）を除き多くは17世紀台に使用されていたとみられ、なかでも巴10・14・16・18などの直径が17cmを超える大型

のものは蝶文出現以前の16世紀台へ遡る瓦である可能性がある。17世紀に入り蝶文が出現した後は、これが大部分を占めるようになり、他城郭とは異なり巴文などがみられない特殊な状況となる。蝶２～６は顔が向かって右を向く形で、蝶２については宍粟市の山崎城と同笵関係にあり、唯一、他城郭につながりを見せる文様である。蝶７になると、形にやや変化がみられ、その後の蝶文の基本となる文様配置となる。18世紀の初めころには出現した蝶10に対し、18世紀の末頃に存在した蝶11は極めて似た作りである。蝶14・15はかなりの出土数をみており、蝶14については石黒火事からの復興の過程で使用されたのではないかとみられる。蝶16～19は出土数が少ないが、18世紀の後半頃に使用されたものか。蝶20～24は19世紀の笵、城内での蝶の形態は次第に崩れ始める。中でも蝶20・23の出土数は多く、蝶20には文化・文政年間製作の刻印が多くみられ、蝶23には天保や嘉永の記念銘を持つものがある。また、葵文は文政８年(1825)に瓦への使用が認められたもので４笵が存在する。

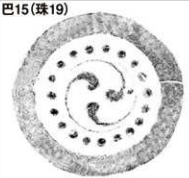
軒平をみると平１～３の桐文などが最初期とみられ、その後17世紀前半代には、平５～９などの山陰地方の特徴である下向き三葉文が流行る。石黒火事層に含まれる、平１～11までのものは18世紀初頭までの瓦であることは言えるが、新しい遺物とともに見つかる軒平瓦については、明確に時期を決定する根拠に欠けるも、平12・13・58・92などは、その形態から17世紀代に遡る可能性がある。石黒火事により城のほぼすべてが焼失、火事からの復興は新たな城造りであり、焼け残った瓦は当然再利用した上で、新たな瓦も相当の数を要したと考えらえる。このような中で導入されたとみられる桟瓦は主流となり大多数を占めるようになる。平15・16・18などは、その導入期のものとみられ、大坂式の影響を受けたとみられる橘文がみられる。山陰全体で流行るこの文様であるが、平19～26のような唐草が繁がったものや、切り離れたものなど様々な形態のものが出現するようになる。また、平27～35のような唐草配置こそ似るも、細線で、中心飾りはもはや橘文ではない独特な形態が現れ流行する。平36・37に至ってはさらに形を変える。平38～49、平50～57は上向きの三葉文で唐草はシンプルに２転し、59も同様で葉は下向きとなる。上向きについてはかなりの出土数が確認されており、釉瓦にも存在することから、最もバリエーションに富んだ文様と言える。60・61は中心の花？文の横に小さな葉が３枚連なり、唐草も３転する、かなり細かい文様となる。花文もまた、様々が形態があり、平62～65、平66～69、平70～73、平74・75などがあり、これらには、文化或いは文政年間作製を意味する「文○」、天保年間作製を意味する「天○」(○には干支)の刻印を持つものが多く、19世紀の前半代に使用された笵であると考えられる。平77～80は菊水文で、このほかにも数笵存在する様である。平81～84は、下向き五葉文、平85は無文、平86～90はそれぞれ独特な形態をしており、現在のところ城下での採取品のみに存在するが、左桟であるために掲載するものである。

鳥取城の特徴としては左右両桟瓦がみられることが挙げられる。割合としては右桟が優越するが、古写真などをみると、門の正面側が右桟、裏側は左桟が利用されており、同じ建物内で並存する状況が明らかとなっている。笵型をみると１つの文様につき左右一対の笵が存在するものが多く、種類によっては軒平を含めた３笵存在するもの(平27～29、平38・40・41、平67～69)がある。


巴1（無珠）
巴2（無珠）
巴3（無珠）
0
(1:4)
10cm
巴4（無珠）
巴5（無珠）
巴6（珠8）
巴7（珠12）
巴8（珠12）
巴9（珠13）
巴9（小径、珠13）
巴10（珠17）
巴11（珠17）
巴12（珠17）
巴13（珠17）
巴14（珠18）

第145図　瓦一覧１

巴15(珠19)



巴16(珠22)

巴16(珠22)

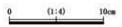
巴17(珠17か)

巴18(珠17か)

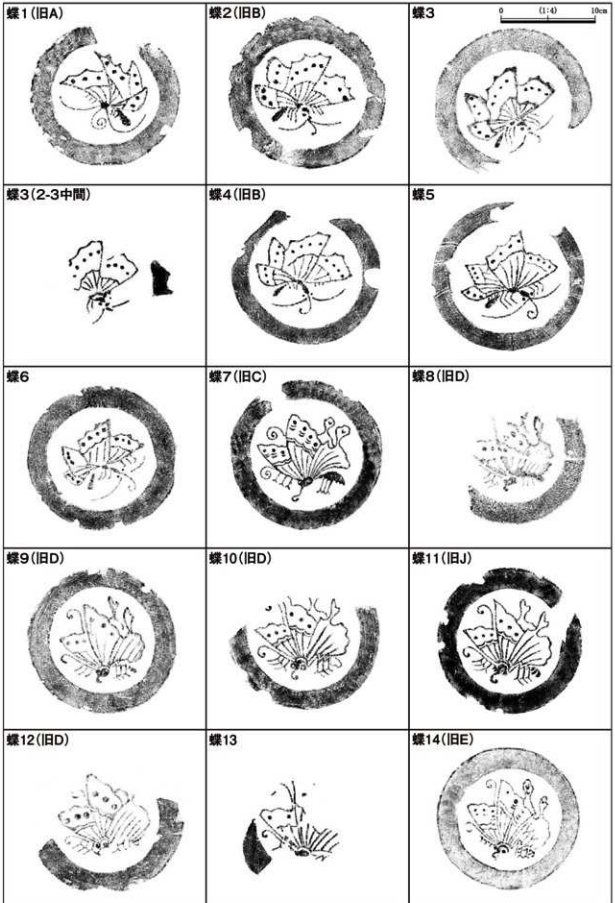
巴19(珠17か)

龍

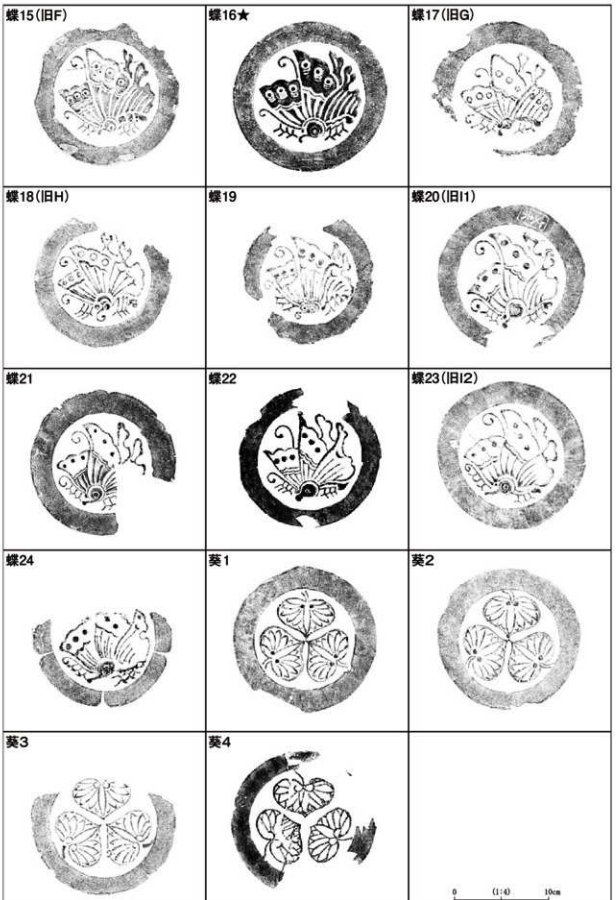
菊(棟込瓦)



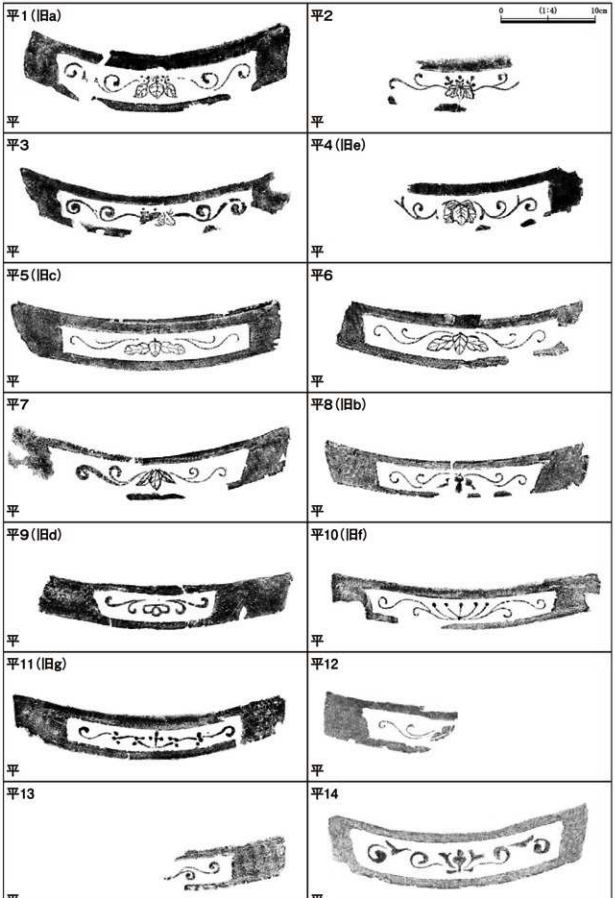
第146図　瓦一覧２


蝶1（旧A）
蝶2（旧B）
蝶3
0　(1:4)　10cm
蝶3（2-3中間）
蝶4（旧B）
蝶5
蝶6
蝶7（旧C）
蝶8（旧D）
蝶9（旧D）
蝶10（旧D）
蝶11（旧J）
蝶12（旧D）
蝶13
蝶14（旧E）

第147図　瓦一覧３


蝶15(旧F)
蝶16★
蝶17(旧G)
蝶18(旧H)
蝶19
蝶20(旧I1)
蝶21
蝶22
蝶23(旧I2)
蝶24
葵1
葵2
葵3
葵4
0
(1:4)
10cm

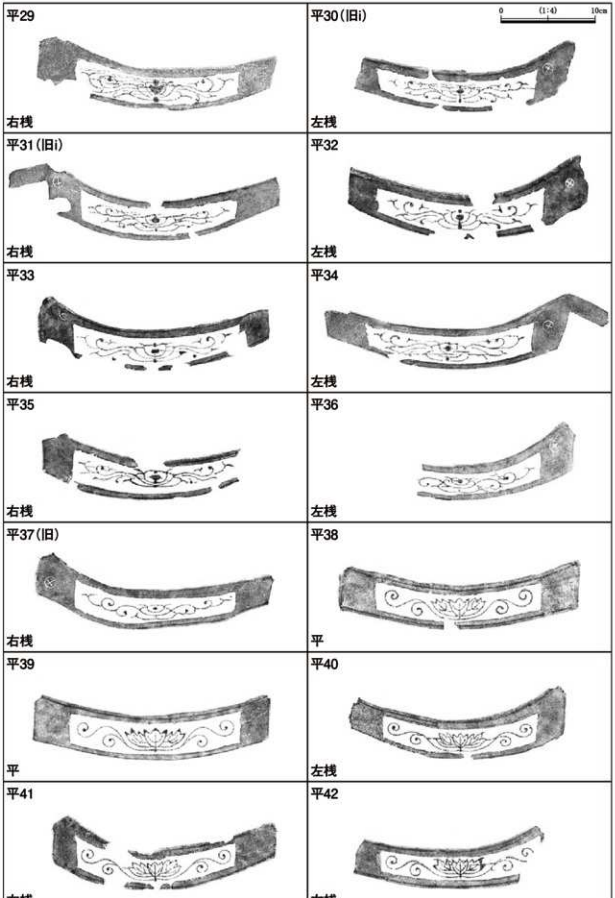
第148図　瓦一覧４


平1(旧a)
平
平2
0　(1:4)　10cm
平
平3
平
平4(旧e)
平
平5(旧c)
平
平6
平
平7
平
平8(旧b)
平
平9(旧d)
平
平10(旧f)
平
平11(旧g)
平
平12
平
平13
平
平14
平

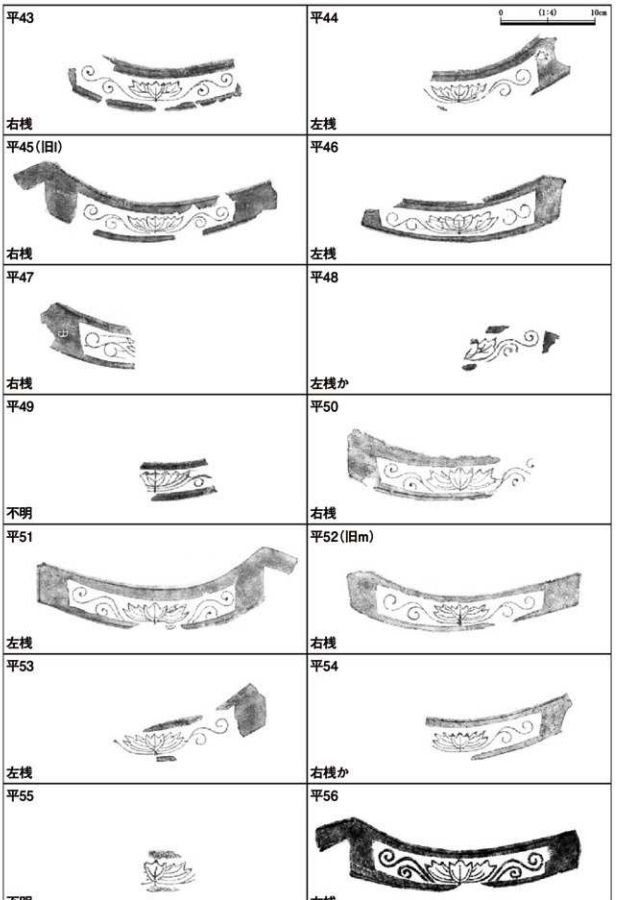
第149図　瓦一覧5

平15
左桟
平16(旧k)
0　(1:4)　10cm
右桟
平17
右桟
平18
右桟
平19
平？
平20
右桟
平21
平
平22
不明
平23
左桟
平24
左桟
平25
右桟
平26(旧j)
平
平27(旧h)
平
平28
左桟

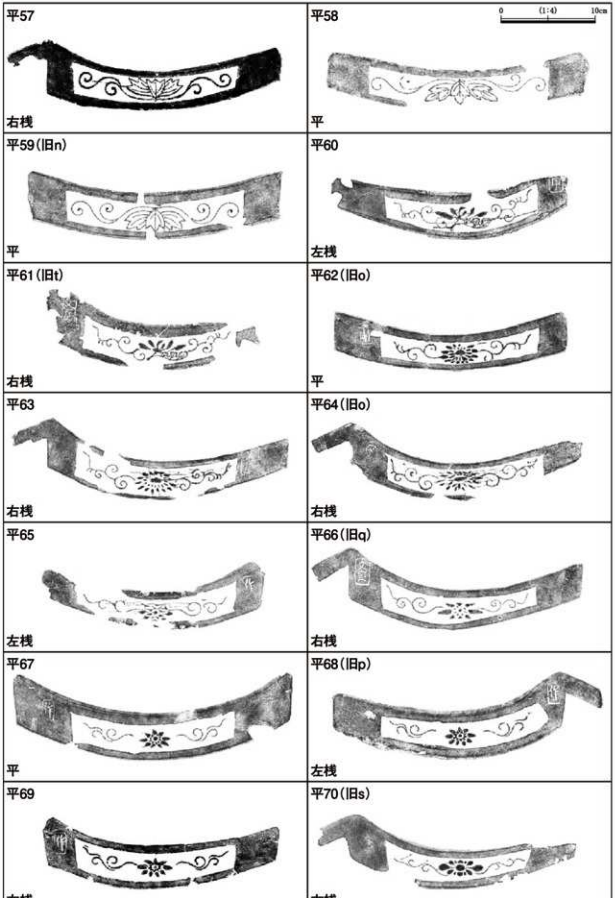
第150図　瓦一覧６


平29
右桟
平30(旧i)
0　(1:4)　10cm
左桟
平31(旧i)
右桟
平32
左桟
平33
右桟
平34
左桟
平35
右桟
平36
左桟
平37(旧)
右桟
平38
平
平39
平
平40
左桟
平41
右桟
平42
左桟

第151図　瓦一覧7


平43
右桟
平44
0　(1:4)　10cm
左桟
平45(旧l)
右桟
平46
左桟
平47
右桟
平48
左桟か
平49
不明
平50
右桟
平51
左桟
平52(旧m)
右桟
平53
左桟
平54
右桟か
平55
不明
平56
右桟

第152図　瓦一覧８


平57
右桟
平58
0　(1:4)　10cm
平
平59(旧n)
平
平60
左桟
平61(旧t)
右桟
平62(旧o)
平
平63
右桟
平64(旧o)
右桟
平65
左桟
平66(旧q)
右桟
平67
平
平68(旧p)
左桟
平69
右桟
平70(旧s)
右桟

第153図　瓦一覧９

平71

右桟

平72(旧s)

左桟

平73

右桟

平74(旧r)

左桟

平75★

右桟

平76

不明

平77(旧近代)

右桟

平78

左桟

平79

右桟

平80

左桟

平81

左桟

平82

右桟

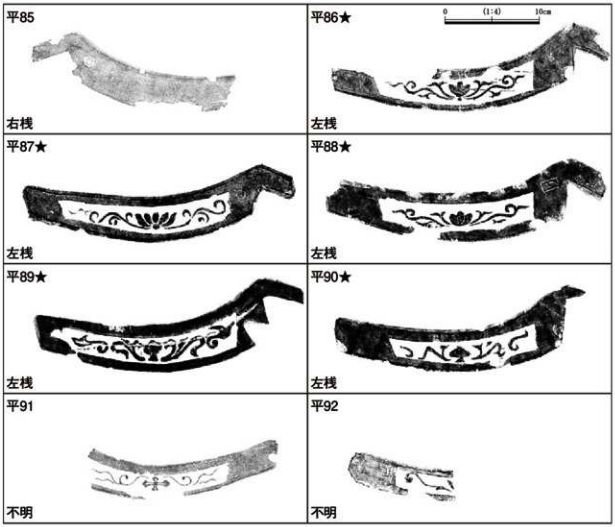
平83

右桟

平84

不明

第154図　瓦一覧10



第155図　瓦一覧11

表16　瓦一覧使用資料

分類	調査次数	出土地	出土位置	整理番号
巴1	8次	楯蔵跡	石段下位～前庭部	24(3)
巴2	4次	天球丸跡	瓦溜り	327(2)
巴3	表採		西坂山奉行所跡	神1
巴4	表採	天球丸跡	南東側堅堀斜面	神14
巴5	4次	天球丸跡	瓦溜り	327(11)
巴6	池田家墓所県保管			1
巴7	20次	樫蔵跡		153(6)
巴8	20次	樫蔵跡	3区A4G	153(5)
巴9	2005石垣修理工事	天球丸跡	A面石垣裏栗	2(11)
巴9	8次	楯蔵跡	楯蔵跡北面石垣前面	3(2)
巴10	2005石垣修理工事	天球丸跡	A面石垣裏栗	2(23)
巴11	8次	楯蔵跡	石段下位～前庭部	25(2)
巴12	4次	天球丸跡	TrⅡ	174(1)
巴13	表採	山上ノ丸	本丸北東隅下	神8
巴14	表採		西坂下の曲輪	神6
巴15	28次	擬宝珠橋跡	1区溝	25(1)
巴16	22次	太鼓御門跡周辺	Tr1	3(1)
巴16	34次	中ノ御門跡	2区B5路面直上	378(2)
巴17	2005石垣修理工事	天球丸跡	A面石垣裏栗	2(15)
巴18	表採	山上ノ丸	本丸天守櫓台北側隅下	2(7)
巴19	表採	天球丸の櫓巻	石垣下工事現場	神10
龍	2013鳥取城下町		A区C3S3G	824(1)
菊	表採	山上ノ丸	本丸南東面石垣隅下	神15
蝶1	8次	楯蔵跡	石段右壁下下位～中位	6(1)
蝶2	8次	楯蔵跡	石段左壁東側走櫓上部平坦部	41(1)
蝶3	4次	天球丸跡	瓦溜り	327(1)
蝶3(2-3中間)	4次	天球丸跡	瓦溜り	327(60)
蝶4	8次	楯蔵跡	楯蔵跡北面石垣前面	8(1)
蝶5	8次	楯蔵跡	石段下位～前庭部	25(3)
蝶6	8次	楯蔵跡	石段下位	5(2)
蝶7	2005石垣修理工事	天球丸跡	A面石垣裏栗	1(12)
蝶8	5次	天球丸跡	焼失櫓跡	12(3)
蝶9	8次	楯蔵跡	石段前庭部～北面石垣前面	31(1)
蝶10	4次	天球丸跡	瓦溜り	327(3)
蝶11	34次	中ノ御門跡	2区B4～5犬走上	415(1)
蝶12	8次	楯蔵跡	石段下位～中位	19(4)
蝶13	26次	中ノ御門跡	栗石がのる粘土層～幕末上面	21(2)
蝶14	26次	中ノ御門跡	下層瓦層	38(3)
蝶15	8次	楯蔵跡	石段東側走櫓平坦部	40(1)
蝶16			個人宅伝世品	
蝶17	12次	中ノ御門周辺	Tr3(拡張部)	10(1)
蝶18	表採		詳細不明	1(15)
蝶19	40次 6次 27次	大手登城路跡 太鼓御門跡 中ノ御門跡	掘り下げ中 A区石列上層 1区Tr1	129(3) 1(1) 55(3)
蝶20	2015池田家墓所		4T3層	3(2)
蝶21	2016池田家墓所 27次	 中ノ御門跡(櫓門跡)	Tr9第5層 3区20層	6(1) 45(8)
蝶22	41次	大手登城路跡	大溝(縦)溝底付近	242(1)
蝶23	40次	大手登城路跡	2区桝瓦層	185(2)
蝶24	2016池田家墓所		Tr9第5層	10(1)
桐1	表採			5(5)
桐2	表採			5(3)
桐3	2次	二ノ丸走櫓跡		1(2)
桐4	表採	山上ノ丸	本丸単門左上石垣の上	神17
平1	8次 8次	楯蔵跡 楯蔵跡	石段下位～中位 石段右壁下下位～中位	19(7) 6(3)
平2	表採	天球丸跡	堅堀	神13
平3	32次 4次	天球丸跡 天球丸跡	便所小便器天球丸側 瓦溜り	15(1) 328(29)
平4	5次	天球丸跡	焼失櫓跡焼土中	3(1)
平5	8次	楯蔵跡	石段前庭部～北面石垣前面	26(2)
平6	8次 34次	楯蔵跡 中ノ御門跡	石段右壁下下位～中位 1区B-1Tr1A区	6(13) 67(2)
平7	表採 2005石垣修理工事	山上ノ丸 天球丸跡	裏手付近 A面石垣裏栗下場	3(8) 4(11)
平8	4次	天球丸跡	瓦溜り	328(1)
平9	4次	天球丸跡	瓦溜り	328(8)
平10	5次	天球丸跡		50(1)
平11	4次 4次	天球丸跡 天球丸跡	瓦溜り 瓦溜り	328(2) 328(43)
平12	8次 30次	楯蔵跡 中ノ御門跡	石段下位～中位 2区Tr3	19(9) 88(2)
平13	表採		西坂道(御山奉行所の曲輪か)	1(17)
平14	32次	天球丸跡	第1調査区便所付近	9(4)
平15			個人宅伝世品	立三(21)
平16	7次	中ノ御門跡	石段	6(1)
平17	40次	大手登城路跡	2区桝	184(3)
平18	41次	大手登城路跡	路面上堆土	213(4)
平19	34次 26次	中ノ御門跡 中ノ御門跡	2区奥塀前 Tr2瓦層	257(3) 33(2)
平20	20次 20次	樫蔵跡 樫蔵跡	 C4区	155(8) 136(41)
平21	34次 27次	中ノ御門跡 中ノ御門跡(櫓門跡)	2区桝内 1区Tr1	421(4) 55(7)
平22	20次	樫蔵跡	Ⅳ区第1面より下層	155(7)
平23	41次	大手登城路跡	ハイキ穴	244(4)
平24	41次	大手登城路跡	大溝下流	131(8)
平25	34次	中ノ御門跡	瓦溜り	11(1)
平26	34次	中ノ御門跡	2区桝内	421(3)
平27	8次	楯蔵跡	石段上位	42(2)
平28	34次 39次	中ノ御門跡 大手登城路跡	2区D5溝1埋土 馬場沿いの溝	338(1) 184(1)
平29	34次 20次	中ノ御門跡 樫蔵跡	1区鯱拂穴 No.143G	37(1) 155(3)
平30	40次 2016池田家墓所	大手登城路跡	掘り下げ中 Tr9瓦層	129(13) 17(2)
平31	20次	樫蔵跡		135(4)
平32	39次	大手登城路跡	桝(北半)	124(3)
平33	40次	大手登城路跡	2区桝	188(2)
平34	8次 6次	楯蔵跡 太鼓御門跡	石垣前面 C区	52(3) 32(1)
平35	40次 20次	大手登城路跡 樫蔵跡	掘り下げ中	51(1) 135(23)
平36	20次 20次	樫蔵跡 樫蔵跡	 Ⅱ区SD-06	135(17) 135(18)
平37	20次 20次	樫蔵跡 樫蔵跡	Ⅲ区カマド部分 Ⅲ区A4G	155(5) 135(19)
平38	34次	中ノ御門跡	瓦廃棄土壙	29(2)
平39	34次	中ノ御門跡	2区櫓門石列前	448(18)
平40	40次 34次	大手登城路跡 中ノ御門跡	2区桝 瓦廃棄土壙	170(4) 29(35)
平41	20次 30次	樫蔵跡 中ノ御門跡	Ⅳ区拡張区C6G瓦溜り 1区Tr3～4間	155(9) 63(8)
平42	34次	中ノ御門跡	1区瓦廃棄土壙	29(3)
平43	40次	大手登城路跡	大溝	91(1)
平44	31次	登城路周辺	1区B区	16(2)
平45	3次	天球丸跡	表土	1(5)
平46	29次 32次	天球丸跡　八幡宮跡 天球丸跡	第2調査区Tr4北区 天球丸腰石垣Tr1	24(1) 2(2)
平47	20次	樫蔵跡	不明	136(2)
平48	31次	登城路周辺	1区F·G区石列前	101(4)
平49	表採	山上ノ丸	北斜面	3(12)
平50	39次	大手登城路跡	34次拡張区溝直上～溝中	12(3)
平51	39次	大手登城路跡	桝(北半)	124(2)
平52	4次	天球丸跡	瓦溜り	328(4)
平53	31次 40次	登城路周辺 大手登城路跡	Tr1 掘り下げ中	1(1) 35(1)
平54	40次	大手登城路跡	大溝	65(1)
平55	40次	大手登城路跡	大溝	91(2)
平56			個人宅伝世品	小7
平57			個人宅伝世品	小6
平58	34次	中ノ御門跡	1区近代カクラン	15(1)
平59	30次	中ノ御門跡	2区Tr7	104(1) 101(3)
平60	18次 34次	太鼓御門跡 中ノ御門跡	1区溝1 瓦廃棄土壙	27(3) 29(39)
平61	表採		久松山山頂	5(8)
平62	34次	中ノ御門跡	2区櫓門石列前	448(17)
平63	2015池田家墓所		4T3層	3(7)
平64	20次	樫蔵跡	Ⅱ区SD-03	155(12)
平65	31次 28次	登城路周辺 擬宝珠橋跡	1区B区 石垣間詰	111(4) 20(1)
平66	2008池田家墓所			25(1)
平67	表採			5(6)
平68	3次	天球丸跡	表土	1(1)
平69	41次	大手登城路跡	大溝下流	138(3)
平70	20次	樫蔵跡	Ⅱ区拡張区a·2GSK-30	156(1)
平71	20次	樫蔵跡	不明	138(15)
平72	34次	中ノ御門跡	2区桝内	429(2)
平73	34次 37次	中ノ御門跡 三ノ丸跡	2区掘り下げ中 1Tr	315(3) 2(1)
平74			個人宅伝世品	立三23
平75			個人宅伝世品	立三32
平76	37次 40次	三ノ丸跡 大手登城路跡	芝田Tr1 掘り下げ中	14(1) 113(2)
平77	40次	大手登城路跡	深掘りTr2	42(1)
平78	2015池田家墓所 2008池田家墓所		Tr4 経堂北西区	1-1(1) 5(2)(3)
平79	40次	大手登城路跡	掘り下げ中	25(7)
平80	2016池田家墓所		Tr9瓦溜り	17(4)
平81	41次	大手登城路跡	水路石抜部	189(1)
平82	表採	山上ノ丸	本丸北東隅下	3(10)
平83	9次	樫蔵跡周辺	Tr4	6(1)
平84	40次	大手登城路跡	犬走りそうじ中	162(2)
平85	31次	登城路周辺	1区A区	98(3)
平86			個人宅伝世品	立三20
平87			個人宅伝世品	立三19
平88			個人宅伝世品	立三29
平89			個人宅伝世品	立三30
平90			個人宅伝世品	立三17
平91	30次	中ノ御門跡	3区Tr2	114(2)
平92	40次	大手登城路跡	井戸枠内	278(1)

写 真 図 版

①区全景(南西から)

①区全景(北西から)

①区全景(南東から)

①区トレンチ１全景(北西から)

図版 2

①区トレンチ１上層土層（北西から）

①区トレンチ１中層土層（北西から）

①区トレンチ１下層土層（北西から）

①区トレンチ２全景（南西から）

①区トレンチ２全景（西から）

①区トレンチ２土層（北西から）

①区トレンチ２石垣（南から）

②区全景(北から)

①区馬場内桶(北西から)

①区馬場溝(北西から)

②区全景(南西から)

図版 4

大溝１・２全景（西から）

大溝２東側側壁１（西から）

大溝２東側側壁２（西から）

大溝２西側側壁（東から）

大溝分岐２（北から）

大溝３南東側壁１（北西から）

大溝３南東側壁２（北西から）

大溝３北西側壁１（南東から）

大溝３北西側壁２および旧桝吐水部（南東から）

大溝３北西側壁３および分岐２（南から）

大溝３全景（北東から）

図版 6

桝全景（北から）

桝北東側壁および取水部（南西から）

桝南東側壁（北西から）

桝南西側壁および吐水部（北東から）

桝内堆積状況（北西から）

吐水部石垣内暗渠蓋石検出状況１（南から）

吐水部石垣内暗渠出口付近１（南西から）

吐水部石垣内暗渠蓋石検出状況２（北から）

吐水部石垣内暗渠出口付近２（南西から）

図版 8

大溝全景（南西から）

旧桝・旧溝全景（南東から）

旧桝内巻石垣（南東から）

旧溝全景（北西から）

旧桝内巻石垣および取水部（南西から）

旧桝内堆積状況（北西から）

図版10

旧桝内堆積状況（北東から）

旧溝蓋石検出状況（南西から）

旧溝北東側壁１（南西から）

旧溝北東石垣２（南西から）

旧溝南西側壁１（北東から）

旧溝南西側壁２（北東から）

旧桝南東側壁（北西から）

旧桝南西側壁（北東から）

③区全景１（東から）

③区全景２（北から）

図版12

番所雨落ち状遺構(北西から)

番所雨落ち状遺構土層断面(南東から)

番所礎石抜き跡(北東から)

番所前瓦溝および旧番所石列(北西から)

番人小屋前瓦溝(北東から)

旧番所全景（北西から）

旧番所全景（北東から）

図版14

旧番所北東側石列１（北東から）

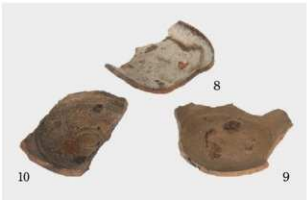
旧番所北東側石列２（北東から）

番所北西側石列（北西から）

旧番所北西側石列（北西から）

旧番所オルソ図

第20図７



第20図８・９・10

第20図11・15

第21図21

第26図50

第26図55

第26図57

第30図75

図版16

第30図79

第38図122

第40図151

第41図156

第41図161

第41図164

第42図170

第42図176

第43図193

第43図195

第43図197

第43図198

第60図258

第60図263

第60図264

第96図369

図版18

第97図383

第97図384

第97図387

第98図396

第98図397

第98図398

第99図404

第100図405

第124図517

第79図325、第80図327

第81図335・336

第85図347、第110図478

第86図350、第88図352

第87図351

第86図350、第89図355、第88図353

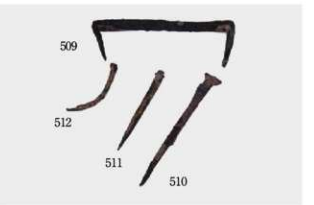
図版20

第51図251、第64図279、第68図290、第79図326、第82図338・339

第90図357

第90図358

第91図359



第120図509~512

報告書抄録

ふりがな	しせきとっとりじょうあとつけたりたいこうがなるはっくつちょうさほうこくしょⅤ
書名	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅴ
副書名	第40・41次発掘調査
巻次	Ⅴ
シリーズ名	鳥取市文化財調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	坂田邦彦
編集機関	鳥取市教育委員会文化財課
所在地	〒680-8571　鳥取県鳥取市幸町71番地　　電話(0857)30-8421
発行年月日	令和２年(2020)３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
とっとりじょうあと 鳥取城跡 つけたたいこうがなる 附太閤ヶ平	とっとりしひがしまち 鳥取市東町 にちょうめなない ２丁目地内	31201	2-0211	35° 30′ 22″	134° 14′ 14″	20160711 ～1212	40次：808㎡	史跡鳥取城跡 復元整備事業
						20170612 ～1220	41次：610㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡鳥取城跡 附太閤ヶ平	城郭	江戸	石垣 水路 馬場 桝	陶器 磁器 瓦 木製品 石製品	

要約

手登城路復元整備計画では、城の正面入口から本丸へ至る間に位置する主要施設である擬宝珠橋・中ノ御門・太鼓御門という３つの建物復元を目的とし、付随する番人小屋、車井戸等の周辺施設と登城路面を旧状に復することを目的としている。平成26年(2014)より翌年に掛けて実施した第34次発掘調査以降、全面調査へ移行した。今回報告する第40・41次調査では、本丸である三ノ丸の造成過程、青木の馬場成立過程が明らかとなった。また、大型排水路である大溝の流路を堀に至るまで完全な形で検出、城の上層部分よりつながる排水経路が判明した。合わせて、復元対象となる番所と、それに先行する建物も検出、番所設置にあたっては、それまでの大溝の一部とそれまでの桝を埋め立てて、敷地を確保、流路は大きく変更され桝は下流側へと移転され19世紀の絵図面通りであることを確認した。大溝下流および桝内より、城解体時の廃棄とみられる多量の瓦や陶磁器類の出土をみた。

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅴ
― 第40・41次発掘調査 ―

発　行　令和２年(2020) ３月31日

編　集　鳥取市教育委員会文化財課
〒680-8571　鳥取県鳥取市幸町71番地
電話　(0857)30-8421

印　刷　綜合印刷出版株式会社